福岡市南区

三宅廃寺

発掘調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第50集

1979

福岡市教育委員会

福岡市南区

三宅廃寺

発掘調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第50集

1979

福岡市教育委員会

序　　文

福岡市教育委員会では、国庫補助事業により市街地化著しい地域の発掘調査を実施しております。

この報告書は、昭和52年度における福岡市南区大字三宅字コクフ地内の三宅廃寺跡調査の報告書ですが、調査区周辺の民家の屋敷内に三宅廃寺の礎石と思われる大石の存在を確認するなど、予期以上の成果を収めることができました。

今後、三宅廃寺跡の推定や、その保護・保存を進める上で、大いに寄与するところがあろうと思います。

調査に際しまして、土地所有者を始め多くの方々の深いご理解とご協力をいただきましたことに対し、深甚の敬意を表するものであります。

本報告書が学術・研究上の貴重な記録として、更に市民の文化財保護思想育成のために広く活用されることを願ってやみません。

昭和54年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　戸　田　成　一

例　　言

1．本書は福岡市南区三宅字コクフの住宅建設に伴い昭和52年度国庫補助事業として福岡市教育委員会文化課が昭和52年11月24日から翌53年３月27日までの約４ケ月間にわたって発掘調査を実施した三宅廃寺の発掘調査報告書である。

2．事業は福岡市教育委員会文化課が行なった。発掘調査は柳田純孝・力武卓治・飛高憲雄・二宮忠司が担当し、事務は三宅安吉・国武勝利が担当した。調査補助員として渡辺和子が参加した。

3．本書の執筆は土器を力武・横山邦継が、石器を渡辺が行ない他は二宮が行なった。また木簡については九州歴史資料館の倉住靖彦氏に執筆をお願いした。

4．挿図の内、遺構の実測は二宮・渡辺が行なった。遺物の実測は二宮のほか塩屋勝利・力武・横山・渡辺が行なった。トレースは全体的にわたって二宮が行ない一部を塩屋・力武・横山・渡辺・山崎由実子・雪吉良子の協力を得た。

5．写真撮影の内、木簡の写真は九州歴史資料館技師石丸洋氏の撮影による。他の遺構・遺物の写真は二宮の撮影による。航空写真は飛高の撮影による。

6．拓影は二宮と深見まさ代が行なった。

7．遺跡の調査・遺物に関して賀川光夫・西谷正・川添昭二・岡藤良敬諸先生ならびに藤井功・渡辺正気・宮小路賀宏・石松好雄・横田義章・森田勉・高倉洋彰・新原正典・倉住靖彦・高橋章・田坂大蔵・吉良国光・佐伯強治諸氏の助言・協力を得た。

8．挿図内のＮ方位はすべて真北を示す。

9．本書は二宮が編集した。

10．出土遺物・実測図・写真は文化課に保管している。

11．藤良祐氏・藤野志ヅ恵氏には貴重な資料を心良く借用させていただき、また橋本友美・花村徳男・境武夫氏には多大な協力を得た。

12．木簡３片に関しては財団法人・元興寺文化財研究所に保存処理を依頼し、現在保存処理が終了したため文化課に保管している。

本　文　目　次

第１章　はじめに……1
1　発掘調査に至るまで……1
2　調査の組織と構成……2
第２章　発掘調査の概要……4
1　遺跡の立地と環境……4
2　歴史的環境……4
3　周辺遺跡の採集資料……7
第３章　調査の記録……9
1　遺跡の概観……9
土層……9
2　遺構……11
（1）　瓦溜……11
（2）　瓦溜土層図……11
（3）　掘立柱建築物　①　1号掘立柱建物……14
②　2号掘立柱建物……14
（4）　溝……17
（5）　土坑……17
（6）　ピット群……17
第４章　遺物……19
1　瓦類……19
2　土器……39
3　木簡・木器……59
4　ガラス製品・鞴羽口……62
5　柱根……63
6　金属器……65
7　石器……67
第５章　まとめ……71
古代史文献史料……79

挿　図　目　次

Fig. 1　三宅周辺遺跡分布図……（縮尺1/25000）……3
Fig. 2　三宅周辺図（明治33年）トレペ……（縮尺1/5000）……5
Fig. 3　三宅周辺現況図……（縮尺1/5000）……5
Fig. 4　三宅廃寺周辺図と推定線……（縮尺1/2000）……6
Fig. 5　周辺遺跡採集資料実測図・拓影……（縮尺1/3）……8
Fig. 6　土層図……（縮尺1/40）……10
Fig. 7　瓦溜・1号掘立柱建物平面図……（縮尺1/80）……12
Fig. 8　瓦溜平面図・土層図……（縮尺1/20）……13
Fig. 9　1号掘立柱建物実測図……（縮尺1/80）……15
Fig. 10　1号掘立柱建物第9柱穴瓦出土状態実測図…（縮尺1/20）……15
Fig. 11　2号掘立柱建物実測図……（縮尺1/120）……16
Fig. 12　溝・土坑・ピット平面図……（縮尺1/200）……18
Fig. 13　軒丸瓦実測図・拓影……（縮尺1/3）……20
Fig. 14　軒平瓦実測図・拓影……（縮尺1/3）……22
Fig. 15　平瓦実測図・拓影（1）……（縮尺1/5）……24
Fig. 16　平瓦実測図・拓影（2）……（縮尺1/5）……25
Fig. 17　平瓦実測図・拓影（3）……（縮尺1/5）……26
Fig. 18　丸瓦実測図・拓影（1）……（縮尺1/5）……28
Fig. 19　丸瓦実測図・拓影（2）……（縮尺1/5）……30
Fig. 20　丸瓦実測図・拓影（3）……（縮尺1/5）……31
Fig. 21　塼実測図……（縮尺1/4）……32
Fig. 22　隅切瓦・熨斗瓦実測図・拓影……（縮尺1/4）……33
Fig. 23　叩文集成図（1）……（縮尺1/3）……36
Fig. 24　叩文集成図（2）……（縮尺1/4）……37
Fig. 25　叩文集成図（3）……（縮尺1/4）……38
Fig. 26　須恵器実測図（1）……（縮尺1/3）……40
Fig. 27　須恵器実測図（2）……（縮尺1/3）……42
Fig. 28　須恵器実測図（3）……（縮尺1/3）……43
Fig. 29　須恵器実測図（4）……（縮尺1/3）……44
Fig. 30　土師器実測図（1）……（縮尺1/3）……48
Fig. 31　土師器実測図（2）……（縮尺1/3）……49

Fig. 32　土師器実測図　(3)　……(縮尺1/4)……50
Fig. 33　土師器実測図　(4)　……(縮尺1/4)……51
Fig. 34　土師器実測図　(5)　……(縮尺1/3)……52
Fig. 35　陶・磁器実測図……(縮尺1/3)……56
Fig. 36　墨書土器・ヘラ書土器実測図……(縮尺1/3)……58
Fig. 37　木簡実測図……(縮尺1/1)……60
Fig. 38　木器実測図……(縮尺1/1・1/2)……61
Fig. 39　ガラス製品実測図……(縮尺3/4)……62
Fig. 40　鞴羽口実測図……(縮尺1/2)……62
Fig. 41　1号掘立柱建物柱根実測図　(1)　……(縮尺1/10)……63
Fig. 42　2号掘立柱建物柱根実測図　(2)　……(縮尺1/10)……64
Fig. 43　金属器実測図……(縮尺1/1・1/2)……66
Fig. 44　石器実測図　(1)　……(縮尺1/2)……68
Fig. 45　石器実測図　(2)　……(縮尺1/4)……69
Fig. 46　石帯実測図……(縮尺2/3)……70

表　目　次

Tab. 1　須恵器一覧表……45
Tab. 2　土師器一覧表……53
Tab. 3　遺構出土の須恵器・土師器……74
Tab. 4　平瓦・丸瓦一覧表……76
Tab. 5　平瓦・丸瓦一覧表……77

付　図

1　遺構配置図……(縮尺1/100)

写真図版目次

PL. 1 （1） 三宅周辺遠景（航空写真・東から望む）
（2） 遺跡全景（航空写真・北東から望む）
PL. 2 （1） 調査終了後の瓦溜（西から望む）
（2） 三宅廃寺周辺（西から東を望む）
PL. 3 （1） 三宅廃寺周辺（北から南西部を望む）
（2） 三宅廃寺中心部（南から北を望む）
PL. 4 （1） 現存する礎石
（2） 三宅瓦窯址（南から望む）
PL. 5 （1） 三宅周辺遠景（南東から望む・航空写真）
（2） 調査終了後の遺跡全景
PL. 6 （1） 瓦溜と１号掘立柱建物（北から望む）
（2） 瓦溜の瓦類出土状態（北から望む）
PL. 7 （1） 瓦溜の土層近景（北から望む）
（2） 土層（東から望む）
PL. 8 （1） １号掘立柱建物全景（北から望む）
（2） １号掘立柱建物近景（北から望む）
PL. 9 （1） １号掘立柱建物７・８・９柱穴の柱根出土状態（西から望む）
（2） １号掘立柱建物４・５・６柱穴の柱根出土状態（西から望む）
PL. 10 （1） １号掘立柱建物・柱根出土状態（南から望む）
（2） １号掘立柱建物９号柱穴内瓦出土状態（南から望む）
PL. 11 （1） ２号掘立柱建物遠景（北から望む）
（2） 溝内出土の瓦類（南から望む）
PL. 12 （1） 溝検出状態（北から望む）
（2） 溝内出土の土器類（南から望む）
PL. 13 （1） ピットと土層状態（北から望む）
（2） 溝と土層（東から望む）
PL. 14 （1） ２号掘立柱建物13柱穴内の柱根
（2） ２号掘立柱建物８柱穴内の柱根と瓦出土状態
PL. 15 （1） 溝検出状態（西から望む）
（2） １号溝と８号溝との切合い関係（東から望む）

PL. 16 （1） 溝内出土の匙・箸出土状態（西から望む）
（2） 溝(10号溝)出土　匙・箸近景（北から望む）
PL. 17 （1） 溝内出土の土師器（11号溝）
（2） 遺物出土状態
PL. 18 軒丸瓦・部分写真（縮尺½）
PL. 19 表採資料・軒丸瓦と須恵器・土師器（縮尺½・⅓）
PL. 20 軒丸瓦・軒平瓦（縮尺⅓）
PL. 21 平瓦（縮尺⅕）
PL. 22 平瓦（縮尺⅕）
PL. 23 玉縁付・行基葺丸瓦（縮尺⅕）
PL. 24 行基葺丸瓦（縮尺⅕）
PL. 25 塼・隅切瓦（縮尺⅖）
PL. 26 熨斗瓦（縮尺⅖）
PL. 27 叩文集成・斜格子叩き目文（縮尺不統一）
PL. 28 叩文集成・斜格子・縄叩き目文（縮尺不統一）
PL. 29 須恵器（1）（縮尺⅖）
PL. 30 須恵器（2）（縮尺⅖）
PL. 31 須恵器（3）（縮尺⅖）
PL. 32 土師器（1）（縮尺⅖）
PL. 33 土師器（2）（縮尺約¼）
PL. 34 陶・磁器（縮尺⅖）
PL. 35 磁器（縮尺⅖）
PL. 36 墨書土器・ヘラ書文字（縮尺不統一）
PL. 37 木簡（縮尺⅟1）
PL. 38 木簡・赤外線写真（縮尺⅘）
PL. 39 木器（櫛ほか）（縮尺⅟1・½）
PL. 40 鞴羽口・スラッグ・ガラス製品・石帯（縮尺⅟1・⅓）
PL. 41 1・2掘立柱建物内柱根（縮尺⅟10）
PL. 42 金属器・匙・箸・宮寿神宝・鉄環・壺金（縮尺½・⅟1）
PL. 43 石器（縮尺⅖）

第1章　はじめに

1．発掘調査に至るまで

古代史の中で三宅に関する歴史的背景を取り上げてみるならばまず日本書紀の中に宣化元年（536年）那津官家を置くとの記録がみられる。しかしながらこの那津官家の所在地は明確に把握されておらず候補地として二ケ所挙げられている。1つの候補地として住吉神社を中心とした博多駅周辺、もう1つの候補地として三宅周辺が挙げられている。次に醍醐雑事記等に三宅の名や三宅寺の名称が認められる。その後江戸時代末期の青柳種信は筑前国続風土記拾遺の中で「三宅の西北部に都府楼や観世音寺などの古瓦に類似したものが田畑に散布している。近年、礎石を溝池の修理や若八幡宮・地縁神社に寄進した（享保12年）」との記録がみられ三宅周辺に礎石を持ち古瓦を葺いた建造物の存在を彷彿させる。注①

近年になって中山平次郎氏が「考古学雑誌第16巻第6号、大正15年、古代の博多(一)」の中で三宅廃寺に関する論説を書かれている。その部分を引用すると「此三宅の山際に一ケ所布目瓦を出す地点があるが何かの書物で三宅に昔観音寺という寺があったという記載を読んだことがあるから此古瓦は或は此寺址のものでは無いかと推察する。位置は三宅の丘角を廻って少し入り込んだ貯水池の傍の小山であって官家の正廟址とも亦屯倉址とも思い難く、古寺址と見るのが一番適当のように思われる地点である。」と報告されている。報告された場所からして調査した地点のすぐそばにある台地であろうと考えられる。注②昭和8年には玉泉大梁氏が福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書（第8集・昭和8年）で筑紫郡三宅廃寺址・瓦窯址について調査・報告をされた。これによれば筑紫の官家の故地としてまた廃寺址として注意すべき場所であり最初に三宅廃寺として注目された。氏の結語の文章の一部を引用してみると「若八幡宮の境内の礎石を此の遺蹟より運ばれしものと認むる以上、この地に上代一伽藍の建立あったものと見ねばならぬ。而して遺蹟出土の古瓦の年代観に誤りなくばその建立は奈良朝前期にあり、間も無く跡を絶った事は前後の遺物の皆無なるによって知られる礎石特に若八幡宮内の心礎もほぼ古瓦と年代の等しき時代の様式に従っている（考古学雑誌二十二巻第2号　石田茂作論文『塔の中心礎石に就いて』参照）。この寺と宣化帝の時この地に設けられた官家との関係も考察すべきであるが、只此処では官衙の後に寺院が設けられたという推定説を挙ぐるに止めて置こう。」と報告され、宣化元年の那津官家がこの地に存在しその後三宅廃寺が設けられたと推定されている。注③

第１章　はじめに

この礎石の本来の所在地を考えてみると字コクフから字古野、字宇多町、字岩野にかけて存在した可能性を推定できる。また古老の話によると昭和初年まではコクフの一部に礎石らしき石が畑のアゼに存在していたこと、その礎石が門柱の下になっていることなどが判明した。次に字名について多少ふれてみると、三宅周辺には字コクフをはじめとして字小路、字田蔵、字大屋敷、字銭通等がある。これらの字名の中で「コクフ」「小路」等は古代をものがたる字名として注目されるであろう。また三宅の名称がどの時代まで溯るかも問題になるところである。これに関してはまとめの章で若干ふれてみたいと思っている。

注①筑前国続風土記拾遺第１巻Ｐ308

注②考古学雑誌第16巻第６号Ｐ21

注③福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第８集Ｐ35

２．調査の組織と構成

１．発掘調査の組織

調査地点　　福岡市南区三宅字コクフ1170～2

調査期間　　昭和52年11月24日～昭和53年３月27日

調査委託者　上野開治

調査主体　　福岡市教育委員会

２．発掘調査の構成

調査担当　　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財係

事務担当　　三宅安吉　国武勝利

発掘担当　　二宮忠司　力武卓治　飛高憲雄　柳田純孝

補助員　　渡辺和子　他

資料整理　　花畑照子　深見まさ代　山崎由実子　大江和代　原田順子　隅田友子　江田絹代　雪吉良子

調査協力者　　松隈建次　林己代治　境武夫　渕上政喜　橋本友美　境勝子　麻生輝子　大神シズ子　上野暢子　吉村れい子　渕上文子　竹内喜子　井上勝子　樋口松次郎　熊谷トメ子　坂本曜之助　松尾林　藤丈夫　内田義明　田尻シゲ　原由紀子　大曲和彦　萩尾龍守　浜宏明　他

凡　例

× 先土器時代遺跡

△ 縄文時代遺跡

○ 弥生時代遺跡

● 古墳・古墳時代遺跡

□ 歴史時代遺跡

主な遺跡

1. 剣塚古墳
2. 宮園遺跡
3. 那珂八幡古墳
4. 妙楽寺遺跡
5. 五十川高木遺跡
6. 井尻栄町遺跡
7. 地禄神社遺跡
8. 諸岡遺跡
9. 三宅瓦窯址
10. 和田遺跡
11. 野多目池遺跡
12. 野多目公園遺跡
13. 老司古墳
14. 老司瓦窯址
15. 老司池遺跡
16. 老司観音山遺跡

Fig. 1　三宅周辺遺跡布図（縮尺1/25000）

500m　0　500　1000　1500

第２章　　発掘調査の概要

１．遺跡の立地と環境

福岡平野と早良平野を二分する油山山塊は数多くの低丘陵を発達させながら鴻巣山(100.5m)の平尾丘陵を形成しその後大濠から西公園へとつづき博多湾に面する。油山山麓から波及した低丘陵、特に平尾周辺から若久・桧原・老司にかけては縄文時代の遺跡から奈良・平安時代にかけての遺跡の分布が知られている。特に古墳時代初期の古墳で鏡10面、埴輪を出土した老司古墳をはじめとして野田目の縄文後期の遺跡、奈良・平安時代の遺跡には老司瓦窯址、三宅瓦窯址、三宅廃寺址、岩野瓦窯址等の遺跡のほか多数分布しているが、これらの遺跡は急激な開発、大規模な開発等によりその全貌を明らかにすることなく消滅した遺跡も数多く挙げられる。

福岡平野は那珂川と御笠川の二つの大きな河川とそれに流れ込む小河川を持ち、これら河川の周辺にも台地と同様に数多くの遺跡が分布している。特に昨年縄文晩期から弥生前期にかけての水田址が発見された板付遺跡をはじめとして須玖岡本遺跡等の大規模な遺跡が分布している。

このような立地と環境の中で福岡市の副都心としての役目を持つ大橋・三宅周辺は現在宅地化が進み旧地形を彷彿させるものはまったくと言っていいほど姿を消している。明治33年の地図（Fig. 2）によると三宅周辺には北・西側に標高20～30m の台地がある。東側は標高12m の平野部が広がりながら国道 385 号線に達しそこから比高差約１～２m を持ちながら那珂川に達する。南側は老司古墳、老司瓦窯址等の遺跡が立地する低丘陵に達する12～13m の標高を保つ平野が広がっている。

２．歴史的環境

三宅・和田・老司周辺の台地、平野部には歴史的にみて数多くの遺跡が分布している。

先土器・縄文・弥生時代

先土器時代の遺物、遺構は現段階までは知られていない。縄文時代になると台地上に遺跡が立地してくる。若久遺跡（中期）や八田池遺跡、少しはなれているが早期の時期の中尾遺跡がある。和田周辺では中期と晩期の遺跡で知られている野田目池遺跡、田蔵池遺跡、浦ノ池遺跡（後期）がある。老司周辺では老司池の周辺から前期の遺物が散布している。三宅周辺では南大橋遺跡が知られている。弥生時代になると数多くの遺跡が分布する。代表的な遺跡を上げてみると若久周辺では箱式石棺・甕棺で知られている若久団地遺跡、若久小学校校庭遺跡。東若

1．遺跡の立地と環境

Fig. 3　三宅周辺現況図（縮尺1/5000）

1．甕棺出土地　5．礎石所在地　9．岩野瓦窯址(B)
2．三宅瓦窯址　6．古瓦類出土地　10．礎石所在地
3．甕棺出土地　7．古瓦類出土地　11．掘立柱建物出土地
4．甕棺出土地　8．岩野瓦窯址(A)　12．掘立柱建物出土地

Fig. 2　三宅周辺図(明治33年)（縮尺1/5000）

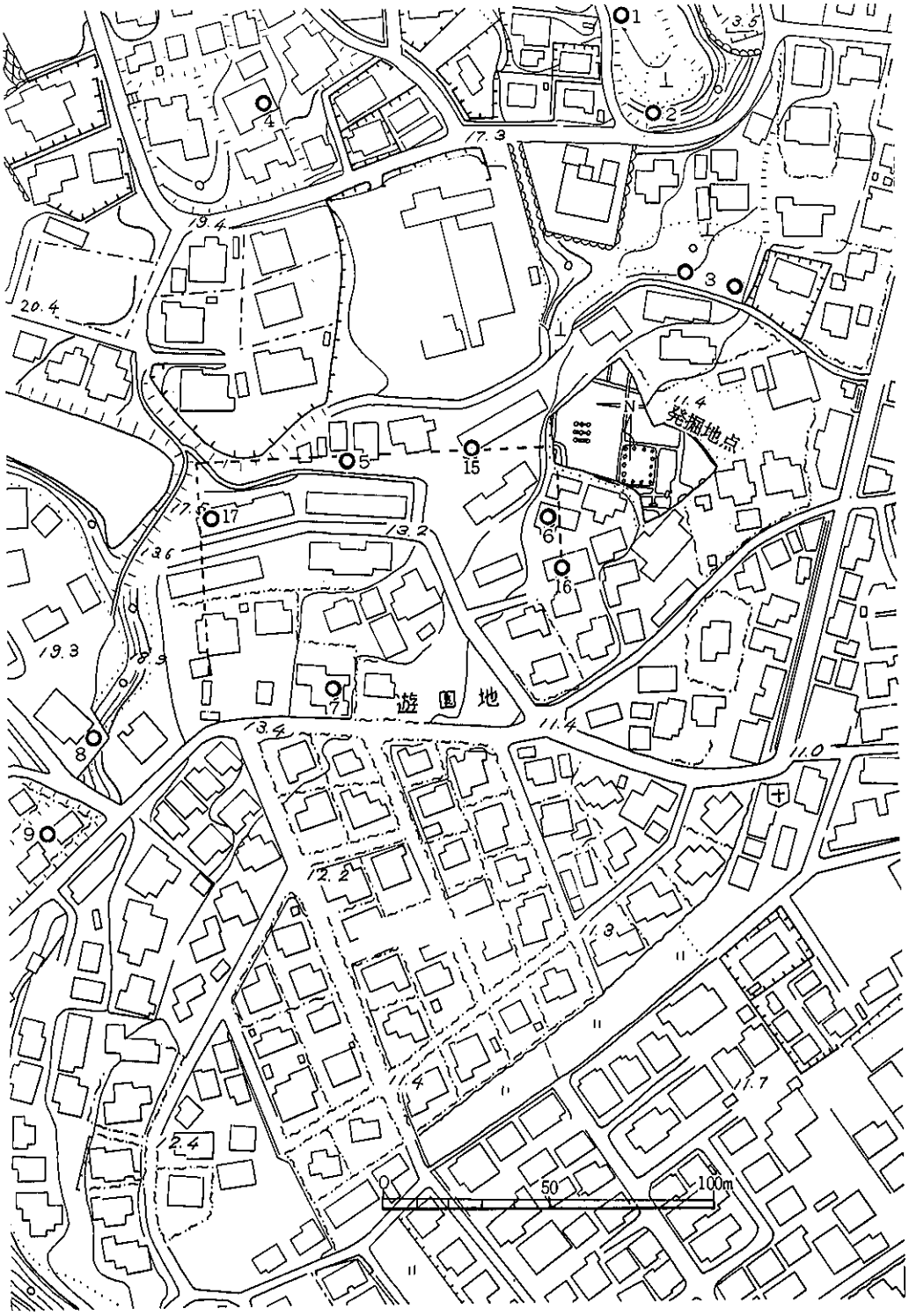


Fig.　4　　三宅廃寺周辺と推定線(1～9はFig. 2の番号と一致、15～17は古瓦類出土地)　(縮尺1/2000)

久遺跡、三宅周辺では細形銅矛を出土した岩野遺跡をはじめ筑紫丘中学校校庭遺跡等が数多く分布し、和田周辺では和田天満宮、野田目池遺跡が知られている。

古墳時代　歴史時代

三宅周辺では古墳時代の遺構はあまり知られていないが老司周辺では鏡10面、埴輪等を出土した老司古墳がある。この他にも老司周辺には数多く分布している。歴史時代特に奈良・平安時代になると三宅周辺に遺跡が多く分布しはじめる。三宅廃寺への瓦の供給地である三宅瓦窯址をはじめとして岩野第１・２号瓦窯址（平安）も発見されている。平野部には古野池遺跡や南大橋団地遺跡（奈良時代の瓦等散布地、遺跡の西側に位置する）や字小路附近に掘立柱建物の柱穴と思われる遺構が規則正しく検出（排水施設工事の際、昭和45年）された例や、三宅小学校校庭遺跡（ピット群と土師器片出土）がある。また南大橋団地の南側で瓦や土器等の発見がある。老司周辺には老司瓦窯址（老司Ⅰ式の窯、三宅廃寺への瓦の供給地か？）や野田目池遺跡がある。このように遺跡の周辺には縄文時代から歴史時代までの遺跡の分布が密で、歴史的にも数多くの遺跡が位置した環境にあり、また立地的にも風をさえぎる西北部を台地に囲まれ東西部は開けた平野、水路の便は那珂川を持つ南側斜面に位置する環境である。

３．周辺遺跡の採集資料

Fig. 5の遺物は三宅廃寺、その周辺から採集されたものである。昭和28年南大橋団地造成時に藤良祐氏、藤野志ヅ恵氏が採集された遺物（３・４）と藤野氏が周辺遺跡（１は岩野第１瓦窯址周辺、２は三宅瓦窯址周辺）にて採集されたものである。

土師器（Fig. 5－1、PL. 19）

高台椀で平坦にヘラ切りされた平坦な底部に直線的に立ち上がる体部がつき、口縁端部はやや外反する。底部の器肉は厚く、体部との境に外広する高台を付す。体部は内外とも横ナデ調整されている。胎土は精良であるが、焼成はやや悪く、器面は赤味の強い茶色を呈す。口径は12.2cm、器高4.3cmを測る。

須恵器（Fig. 5－2、PL. 19）

長頸の小壺で、口径 5.6cm、器高 9.0cmを測る。体部は丸底の底部から肩が大きく張ってすぼまり、直線的に外広して立ち上がる口頸部を付す。体部下半はヘラ削り、上半部から口頸部は横ナデ調整を施し、肩部には２条の沈線をめぐらしており、その間に刻目を連続して配している。胎土は精良で、焼成も堅緻、器面は灰色を呈す。

老司Ⅰ式軒丸瓦（Fig. 5－3・4、PL. 18・19）

３・４は複弁八葉蓮華文で瓦当径は17.2cm、内区中房に１＋５＋10の蓮子を配している。３の各蓮子には圏線がめぐるのでおそらく４にもめぐっていたものであろう。外区内線には31個の珠文、外区外縁にも31個の凸鋸歯文を配する。他の特徴は遺跡出土の軒丸瓦と共に述べる。

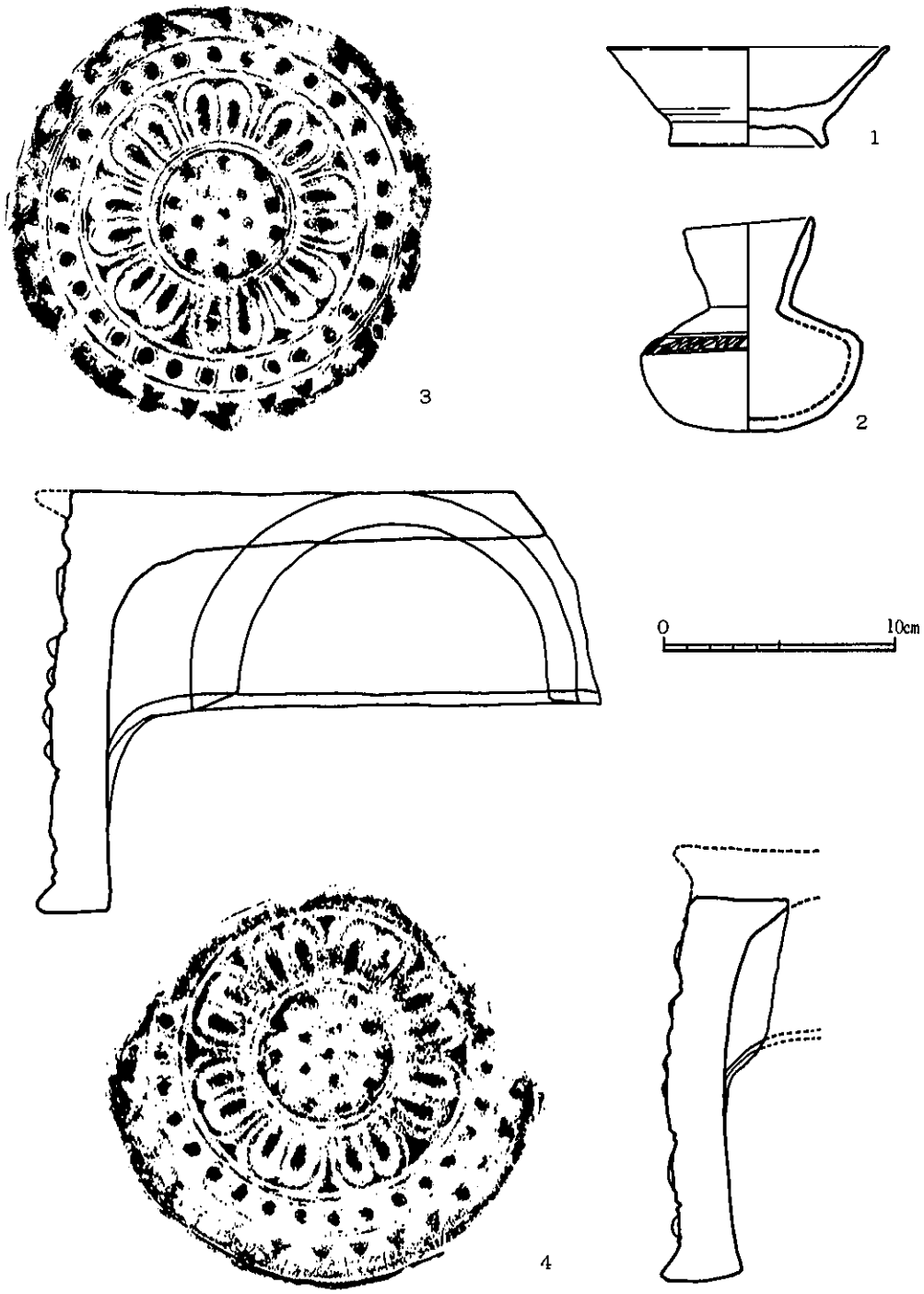


Fig.　5　　周辺遺跡の採集資料実測図・拓影（縮尺1/3）

第3章　調査の記録

1．遺跡の概観

油山山麓から波及した低丘陵は桧原・屋形原・若久にかけて標高20m から40m の高さを持って遺跡の北西部を通り、鴻巣山の平尾丘陵を形成している。遺跡は丘陵の南西斜面から沖積層に移行する場所に立地している。遺跡の東側は平野が広がり11m から12m の標高を保ちながら国道 385 号線に達しそこから約１m から２m の比高差を持ちながら那珂川に達する。南側は12m から13m の標高を保ちながら老司瓦窯址、老司古墳等の立地する低丘陵に達する。西側は120m ほどの平野を形成したのち標高30m の低丘陵と接する。北側は約10mで低丘陵の斜面となる。遺跡は約1800㎡の面積が発掘対象面積である。福岡市南区大字三宅字コクフ1170～２番地に位置している。

調査地区は従来湧水が豊富な所で地主も客土し水田として利用されておりそのためか遺物、遺構が良好な状態で検出された。遺構は現在の水田表土下（北西側0.9m、南東側1.4m）で検出した。その上面に包含層（Ⅳ層・Ⅴ層）の堆積が認められこの包含層には多量の細片された瓦・土器等の遺物を含んでいた。この層は北西部では薄く南東部に行くほど厚い堆積状態を示していた。これは遺構面のベースとなった赤褐色粘質土等の傾斜に基づくものであろう。包含層を排除した後溝や柱穴群が検出した。このため真北を基準として３m×３m のグリットを組み北側から１～17、南側からＡ～Ｑとしそれぞれグリットに番号を振り分けた。(付図１参照)

土層

全面を遺構面まで排除したために周辺の土層の中で変化のある部分を図示した。Fig. 6のａからab、ｂ等は付図に記したａ～ｆの記号に一致し図示した場所である。他の土層はｃ～ｄにみられるごとく、変化はそれほどなく堆積している。土層としては大別すると４つに区別される。(1) Ⅰ層からⅢ層までを含む耕作土層である。Ⅰ層は現代の水田層と客土層である。Ⅱ層は客土する以前の水田面でⅢ層がその床土（褐色土）である。(2) Ⅳ層からⅤ層は包含層である。Ⅳ層は暗褐色土層でわずかに遺物を包含する。Ⅴ層は茶褐色粘質土層で細片の瓦等が多く出土した層である。Ⅵ層は遺構面に接するところから大きな瓦や土器片が多量に検出され、図示した包含層中の土器・石器・瓦等はほとんどこの層からである。褐色粘質土である。(3) 瓦溜内の土層で黄褐色粘質土層とⅧ層の黄褐色シルト層である。(4) 溝・ピット内の土層でⅨ層は黒褐色粘質土層と暗褐色シルト層。遺構面は赤褐色粘質土と白味が強い褐色シルト層である。

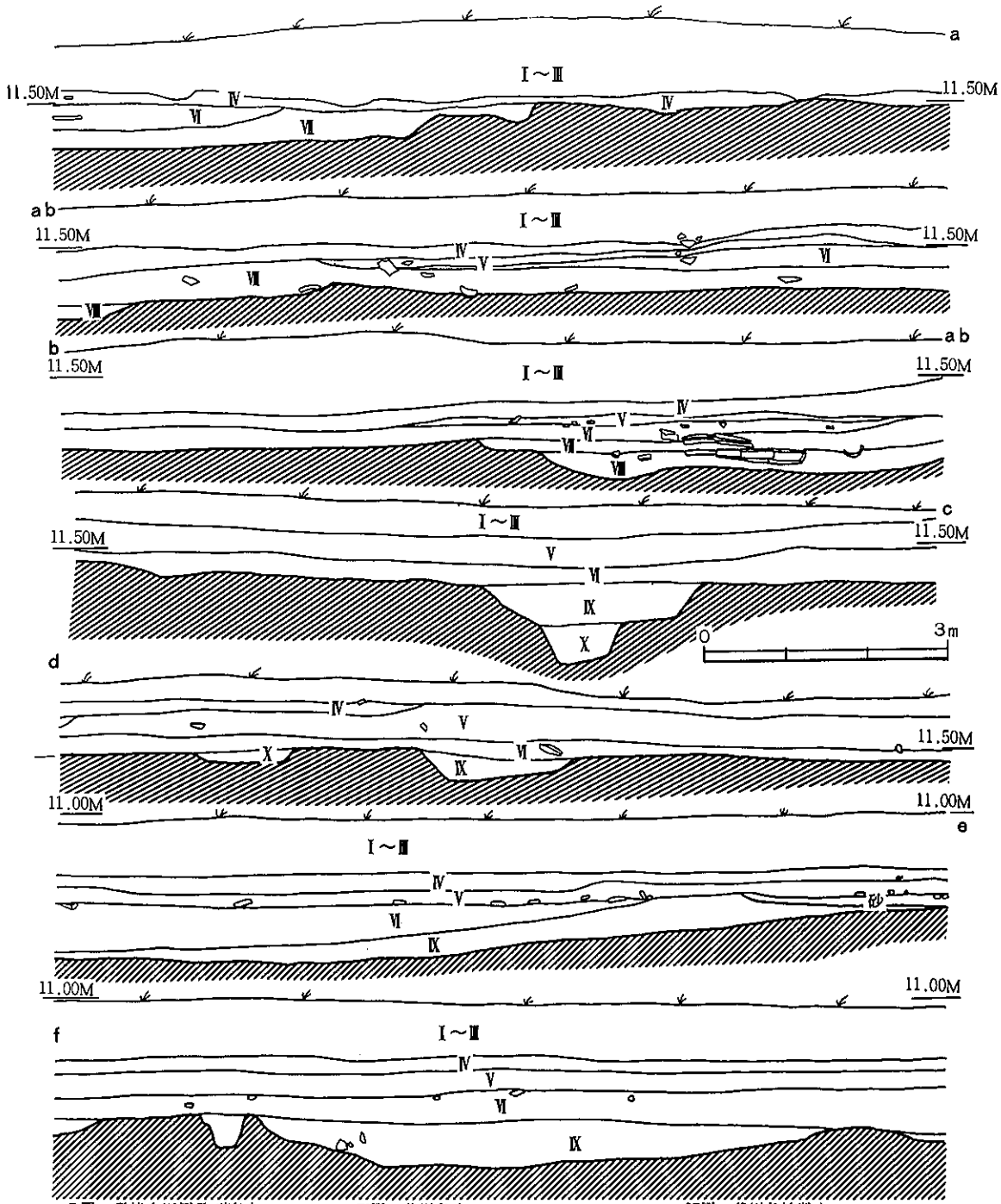


Fig.　6　　土層図（縮尺1/60）

2．遺　　構

遺構の検出状態は西南部（A・B－10～12グリット）から瓦溜（老司Ⅰ式が主体）が、南西部中央（C・D－8～10グリット）から東西2間×南北2間の総柱掘立柱建物（以下第1号建物と呼ぶ）が、東南部中央（H～K－9～14グリット）から東西3間×南北4間の掘立柱建物（以下第2号建物と呼ぶ）を検出した。そのほかに東西・南北に溝22条と多数のピットを検出。

(1). 瓦溜（雨落溝）（Fig. 7・8、PL. 6）

遺跡の調査部分の西南部隅に瓦溜（雨落溝）のコーナー部分が検出された。Fig. 7のごとく掘立柱建築物2間×2間の建物と接する配置を持ち、方向はほぼ真北の位置を示しているものと思われ、検出された溝は2段に形成され、南北では7m、東西では3mでおのおの南・西に伸びている状態を示している。遺物の状態からみると南側に多数の完形品が認められ、西側では量的には豊富であったが、完形に近い瓦類は老司Ⅰ式の軒丸瓦程度である。

三宅廃寺の寺院内遺構として検出されたものは瓦溜（雨落溝）だけであり、それも北東隅のコーナー部分だけである。三宅廃寺の内容等を明確に把握出来ない点や規模等についてこの溝だけで論ずることは避けなければならないであろう。しかしながら昭和の初期までこの附近に礎石が存在したこと、また昭和28年南大橋団地造成時ならびに民家の造成時に多量の土器・瓦類が出土し特に瓦溜の延長上に推定される部分に多量に検出されたことを古老からの話しにより推定するならば遊園地の東西まではその範囲をつかむことができる。その南側は不明である。つまり西・北側には標高約20～30mの台地があるためその台地の線ぎりぎりに西・北側は考えてよいものとされ、東側は今回調査した瓦溜の線を東の境界と考えられる。この推定からすると東西約100m～110mの範囲の中におさまり、南側は遊園地までは把握できそうである。しかしながらこれらはあくまで推定線でありその規模内容は調査により明確にする必要がある。

(2). 瓦溜土層図（Fig. 8、PL. 7.）

瓦溜の土層は9層に区分され大別して3つに区別される。1はⅠ層からⅢ層までの客土ならびに耕作土と砂を多く含む褐色土層であり遺物の混入はほとんど認められない。本来Ⅲ層が水田面及び畑のとこ土及び基礎となったものであろう。2はⅣ層とⅥ層にみられる暗褐色の土層と茶褐色粘質土層の包含層と呼んだ土層である。Ⅵ層は褐色粘質土層でこの層に多量の土器・瓦類・石器等が混入している。この包含層は北西に行くほど薄く東南に行くほど厚い堆積状態を示しており南東部では約30～40cmの堆積をみた。これは北西部の台地から傾斜している遺構の基盤となった赤褐色粘質土層と白味の強い褐色シルト層が北西に行くほど高く南東に行くほど低くなっている現象としてとらえられる。3はⅦ層からⅧ層の瓦溜部分の土層状態である。瓦類が集中しているのはⅦ層とⅧ層の境で底面には遺物は包まれていない。

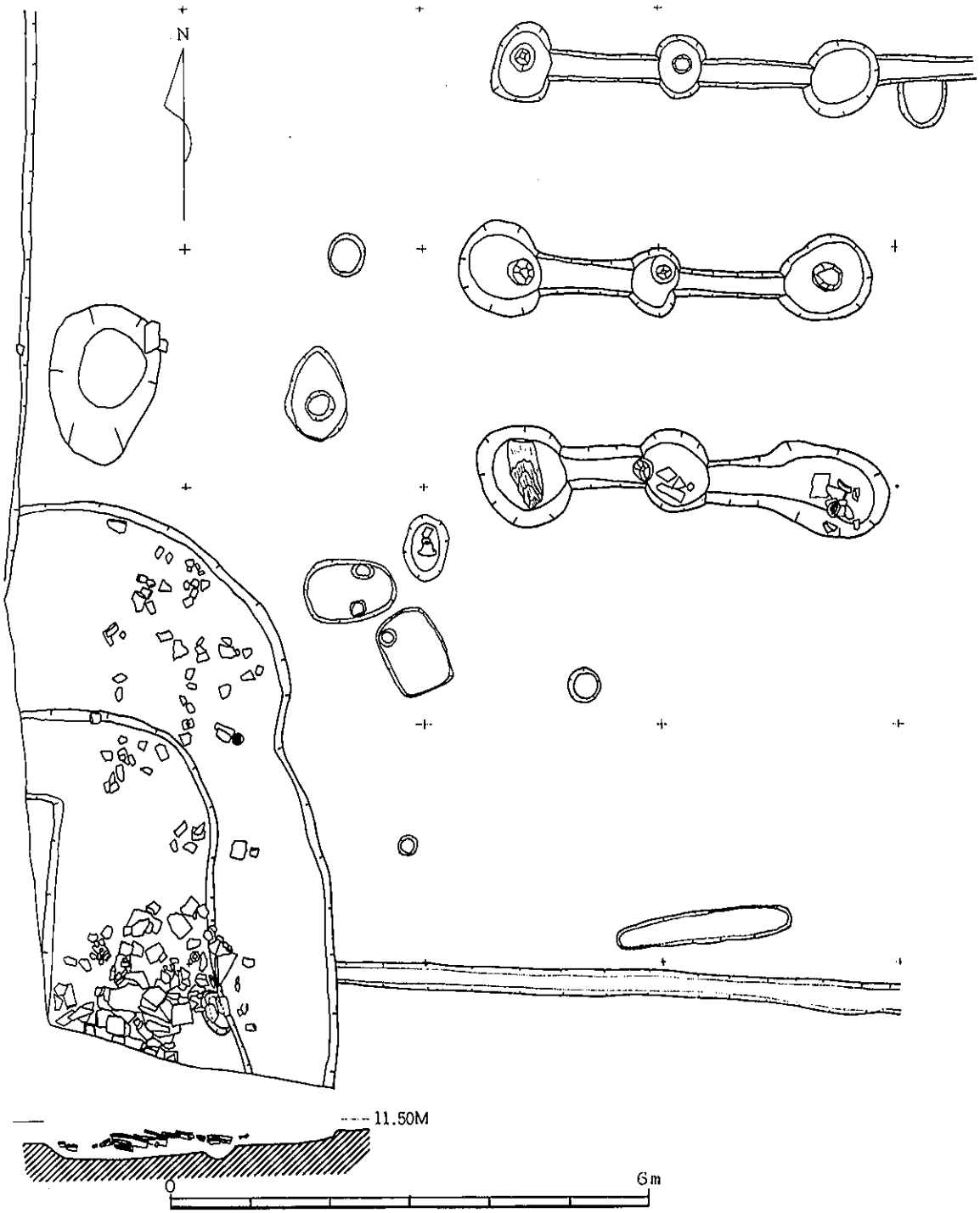


Fig.　7　　瓦溜・１号掘立柱建物平面図（縮尺1/80）

2．遺　　構

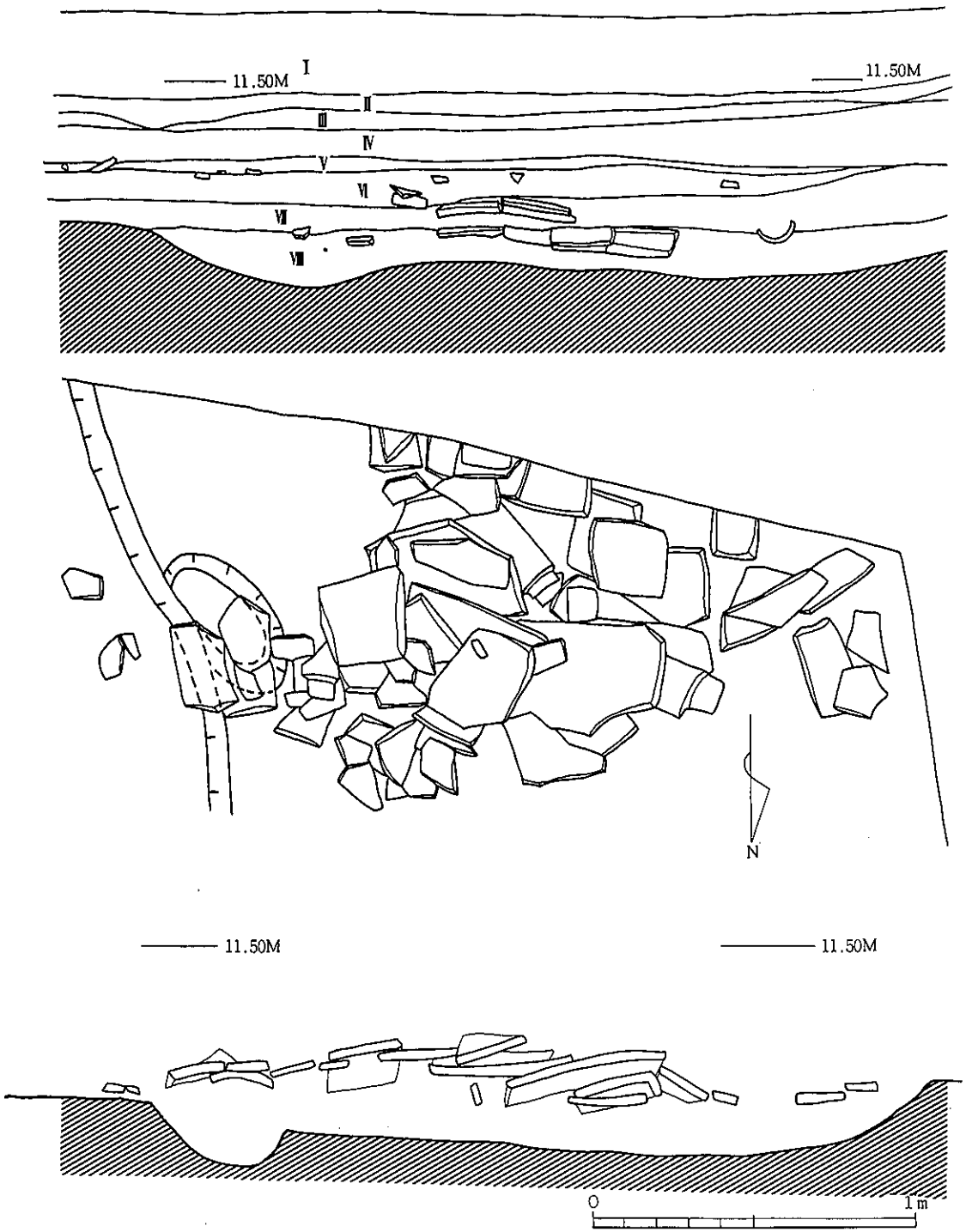


Fig.　8　　瓦溜平面図・土層図（縮尺1/20）

３．掘立柱建物

今回の調査で発見された掘立柱建物は調査地域の南西部で発見された２間×２間の掘立柱建物（１号掘立柱建物）１棟と南東部中央で四方を溝に囲まれた３間×４間の掘立柱建物（２号掘立柱建物）１棟の計２棟である。

（1）１号掘立柱（Fig. 9・10、PL. 8～10、付図－1）

調査地域の南西部（C・D－8～10グリットに跨がる範囲）に位置し東西２間（3.9m）×南北２間（5.1m）の総柱掘立柱建物である。柱穴は円形・楕円形で径0.6mから1.1m、深さ0.6mから0.8mを測る。第３・９柱穴以外すべての柱穴に柱根が残っており柱の直径も36cmから47cmを測る。建物の方向は真北より東に約１度ふれている。しかしながら中央の東西の柱（第５柱穴）と南側の中央の柱（第８柱穴）の柱筋は真北から東に約５度もふれた位置を示し南北に中央を通る柱のみが方向を異にしている。これは中央部第５柱穴の位置が西側にずれているために南側の柱筋（第８柱穴の柱根）もずれを生じ柱根が柱穴と溝との接点に位置したものと思われる。第１・２・３柱穴の桁行は2.0mの間隔を持って並ぶ。これに対して第１・４・７柱穴の梁間は2.6mから2.7mの間隔でまとまるが、第５・８柱穴の柱根は1.75m、1.5mと狭くなり中央・南側の梁行は不揃いである。ただ柱穴の中心部で計測すると桁行2.0m、梁行2.7mの掘立柱建物である。

この建物で特記されることは①東西の柱穴が溝によって結ばれている点であろう。第１・２３柱穴の溝、第４・５・６柱穴の溝、第７・８・９柱穴の溝によって東西の柱穴は結ばれその深さ0.7mを測ることは柱穴と溝が意識的に同時に掘り込まれた可能性が非常に強い。このことは第８柱穴の柱根が柱穴と溝の接点に位置していることがこれを証明していると思われる。
②２間×２間の総柱で柱根の直径が平均40cmを持つ建物でありながら瓦の存在を見ない点、建物の意味付け、性格付けが問題となろう。

Fig.10は第９柱穴内上部の瓦等を排除した時の瓦出土状態である。他の柱穴の遺物は細片された瓦等が数点出土した程度である。ただ第８柱穴から瓦・土師器（Fig. 31：H－21）が柱穴上部から出土している。下層から瓦等が出土したのは第９柱穴内からだけで底面から25cmの所から平瓦（Fig.－17）、中層部から軒平瓦・軒丸瓦（Fig.14－1・5・6、Fig.13－5）等が出土している。このことは第３柱穴ならびに第９柱穴に柱根が認められない点と第７柱穴の柱根が横位の状態で検出された点と第９柱穴内だけに軒先瓦の破片が４点出土していることと考え合せて考察する必要がある。

（2）２号掘立柱建物（Fig. 11－(1)、PL. 14－(1)・(2)）

東南部中央（H・I・J・K－9～14グリットに跨がる範囲）に位置し東西３間（8.5m）×南北４間（10.05m）の掘立柱建物である。柱の総数は14柱で第３柱穴と第11柱穴に柱根がなく

2．遺　　構

他の12柱穴はすべて柱根を持ち柱根の直径は約20cmを測る。柱穴は円形もしくは楕円形で径0.8mから1.4mを測り深さ0.4mから0.9mである。建物の方位は桁行を基準にするとN－3°.30′－Wを示しこれは溝の方位とほぼ同じである。しかし東側の梁行の柱筋からみると桁行とは直交せず多少ゆがみがある。また西側の梁行も柱筋が通らず特に第5柱穴の柱根は西側にはずれた位置にある。この建物は四方（3号・4号・8号・9号溝）を溝にかこまれている。これらの溝は東西・南北に延び2号掘立柱建物内には西側に見られる小溝さえなく溝によって区割された部分に建物が張付けられた感が強く溝は排水の目的を持っている様に思える。梁行部

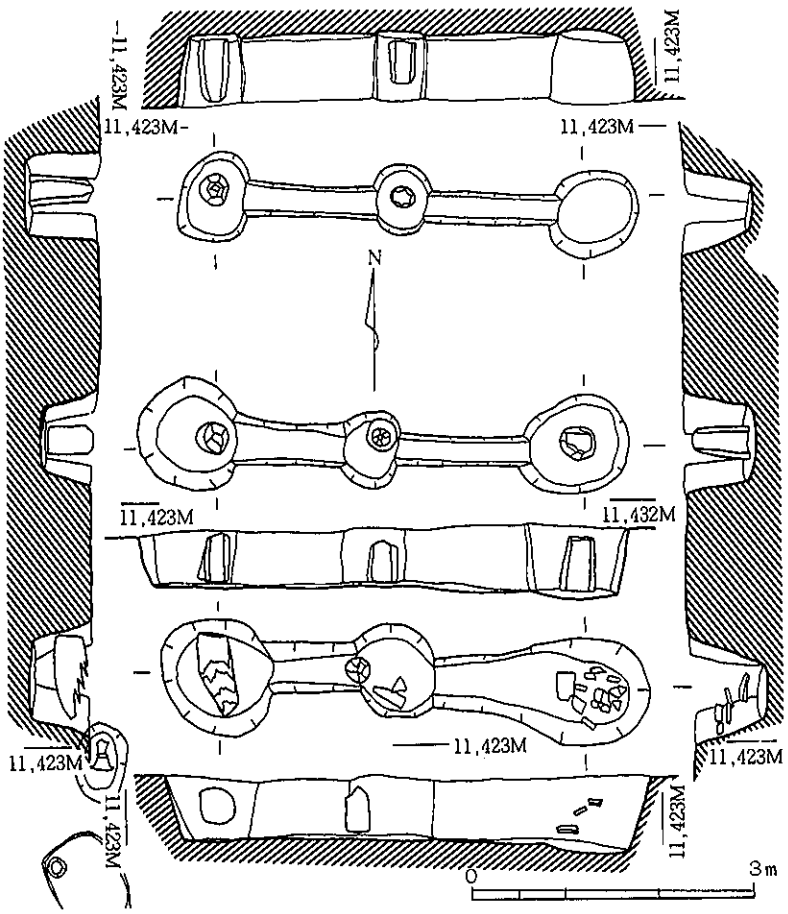


Fig.　9　　1号掘立柱建物実測図（縮尺1/80）

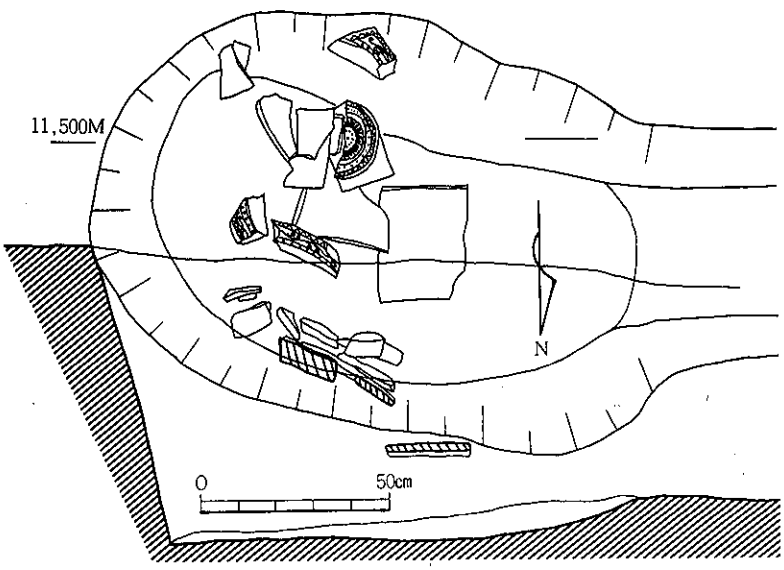


Fig.　10　　1号掘立柱建物第9柱穴瓦出土状態実測図（縮尺1/20）

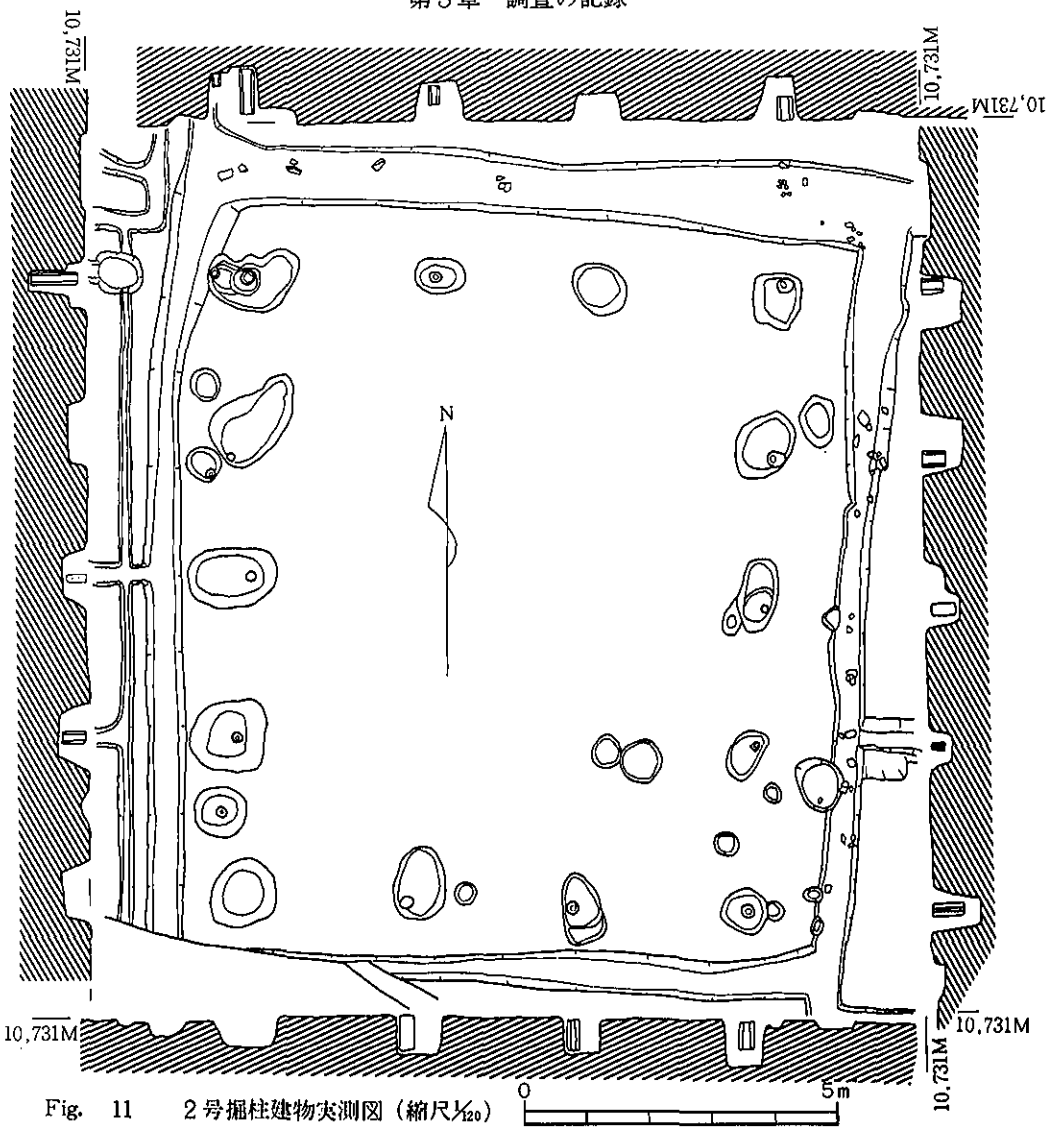


Fig.　11　　２号掘柱建物実測図（縮尺1/120）

の溝（雨落溝）の８･９号溝は理解できるとしても桁行部の３・４号溝の意味・性格付は困難である。これらの溝は真北から東に約4°振った方位を示し東西・南北の溝はほぼ直交する区画性を持った溝といえる。溝の深さは北西側の第１柱穴附近では10cmから15cm、西南側の第11柱穴附近では25cm、北東の第４柱穴附近では10cm、南東の第14柱穴附近では南北溝で15cm、東西溝では15cmとなる。つまり東西の溝による水の流れは南北の溝に流れ込む状態を示している。これらのことや小溝が走っていない状態ならびに溝と柱穴の切合いが考えられないところからほぼ同時期かもしくは同時に作られた溝と建物と考えられる。また第６柱穴、第８柱穴（PL. 14―(2)）、第13柱穴の覆土から瓦類が出土している。この２号掘立柱建物の柱間は桁行2.7m等間隔で梁行は不揃いであるが平均2.5m等間隔と考えられる。

2．遺　　構

(4) 溝（Fig.12、PL. 15・16・17）

溝は瓦溜を別にして大小合せて22条の溝を検出した。ここでは小溝に関しては必要な場合をのぞき取上げないこととし大溝に関して記述することにした。大溝と称したものに1号溝から11号溝まである（Fig.12）。1号溝と11号溝を除く9条の溝は真北に対し4°東に振った方向を持ち南北溝と東西溝は直交している。これは小溝に関しても同様で大溝を基点として小溝が形成されている。それは台地の形成から考えて、またレベル的に観察すると北・西側が高く南・東側が低い様相を示しており溝も同様である。ちなみに8号溝に関して記述するとH－4グリットの底面標高11.18mに対しH－13グリットの底面標高10.70mで比高差48cmである。3号溝ではH－10グリット底面標高10.63m、N－10グリットでは底面標高10.25mで比高差38cmであり7号溝を除くとすべての溝が繋り一つの排水施設等の役割を持った可能性を彷彿させる。方向の異なる11号溝は10号溝から別れる大溝で同一の溝と考えてよい。これに対して1号溝は他の溝の深さが10～30cm内外であるのに対して深さ100cmあり時期的に差があるものと思われる。出土遺物は小皿の須恵器を除くと平瓦だけであるため明確な時期を判断する材料はないが第8号溝は1号溝が埋まった後に作られたもので、これは土層の状態とこの部分に2本の杭が打ち込まれた状態から判断できる。（Fig. 6－c～dの土層参照）

これら9条の溝（2～11号溝）は条里の方向とはまったく異なりその原因となったと推定できるのは瓦溜の溝の方向とほぼ同一である点が挙げられる。また12号溝から22号溝に関しても2号溝から11号溝の支茎の溝と考えられる。つまり大溝（2号～11号溝を示す）から発するものでその切合関係はなく、ほぼ同一時期に比定できる。この溝の深さは約10cm内外と浅く大溝へ流れ込むと考えられる。

(5) 土坑（Fig.12・32・33）

4基の土坑が検出された。土坑1はP－13グリットからで2.7m×2mの楕円形の形状を示し深さ21cmである。横位の木材と土師器（Fig.33：H－56）が出土している。土坑2はK－16グリットから検出された2.5m×0.4mの細長い楕円形、深さ21cmである。これは9号溝に接する土坑で多数の土師器が出土した（Fig. 32H－47）。土坑3はL・M－15グリットから検出されたもので5号溝を切り時期的にも5号溝より新しい時期と考えられる。1.8m×1.3mの隅丸方形で深さ55cmを測る。土坑4はF・Gグリットから検出され2.5m×1.0mの不整形な土坑で深さ32cmである。

(6) ピット群（Fig.12・32・33）

土器片が出土したピットは82基出土している。形状は円形・楕円形・方形などがあり深さもほとんどが20cm程度である。ピット内に柱根を持つものがあるがまとまる可能性は他のピット同様少ない。Fig.32：H－33、Fig.33：H－57はPit.31・33からの出土で、瓦等と共伴している例もめずらしくなく時期的にも溝・掘立柱建物等と前後する時期に位置付けられるかもしれない。これらのピットの性格等は不明である。

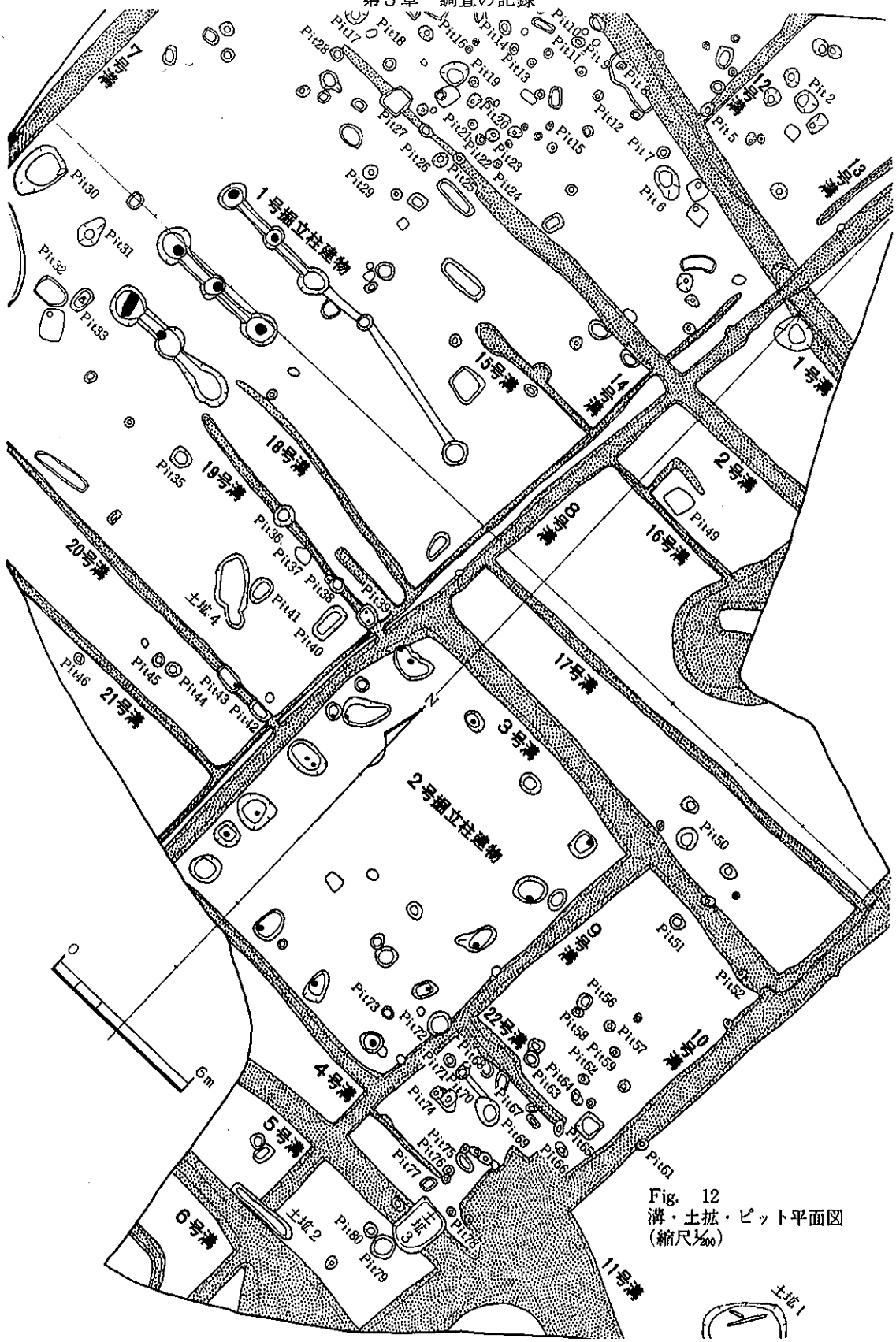


Fig.　12
溝・土拡・ピット平面図
（縮尺1/200）

第4章　遺　　物

出土遺物

今回の調査で出土した遺物には瓦・塼・須恵器・土師器・陶磁器・木器・木簡・ガラス製品・金属器・銅銭・柱根・石器など多種多様の器種が出土した。これらの出土遺物は包含層・瓦溜・掘立柱建物柱穴内・溝・土坑・ピット群などから出土している。包含層からは須恵器・土師器・陶・磁器等が多量に出土している。図示した以外にも破片ではあるが同一器形・時期に属する資料であるため割愛し、また遺構内特に溝内からも多量の遺物が出土したがいずれも細片のため各溝からの遺物を図示できなかった。溝内からの出土土器はほとんど時期・器形に変化はない。包含層内出土の土器等は磁器を数点除いてほぼ同一時期を示すため遺構等ならびに包含層の区別をせず図示した。

1．瓦　類

瓦は軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・玉縁付丸瓦・行基葺丸瓦・熨斗瓦・隅切瓦が出土した。特に行基葺丸瓦において竹状模骨を使用した瓦が検出され現在まで、小田富士雄氏が指摘しているように豊前地方の百済系単弁瓦との関係の中で考えられていた竹状模骨が複弁瓦[注①]、それも老司Ⅰ式との共伴関係を示している。この事から考えて老司Ⅰ式の軒丸瓦と竹状模骨の関係は問題提起の材料となりうる資料で瓦溜の瓦と共に保存状態の良い一括資料であろう。

瓦類は包含層・瓦溜・掘立柱建物柱穴内（第1掘立柱8・9号柱穴内、第2掘立柱7・8号柱穴内）・溝から多量に出土した。しかし瓦溜・掘立柱建物柱穴内以外は破片が多く図示できるものはほとんど出土していない。瓦溜は図示した以外にも多数の完形品が出土している。特に丸瓦・平瓦は遺存状態が良好な一括資料で丸瓦など重なり合った状態で出土している。やはり量的には平瓦・丸瓦の出土量がその大部分を占め、ついで熨斗瓦へとつづき軒丸瓦・軒平瓦・隅切瓦が少数ある。今回は平瓦・丸瓦等は瓦溜の一括資料を報告し、出土量の少ない熨斗瓦・軒平瓦・軒丸瓦・隅切瓦はできるだけ図示し報告する。

軒　丸　瓦（Fig. 5・13、PL. 18・19・20）

軒丸瓦は藤良祐、藤野志ヅ恵氏採集を含めて8個体出土した。他にも軒丸瓦の破片があるが細片のため不明。形態的、時期的に大別して2型式に分類できる。第1型式には中房に1＋5＋10の蓮子を配する複弁八弁蓮華文の老司Ⅰ式と第2型式には中房に1＋8の蓮子を配する複弁（くずれ）八弁蓮華文である。第1型式には破片を含めて7個体、第2型式は1個体検出。

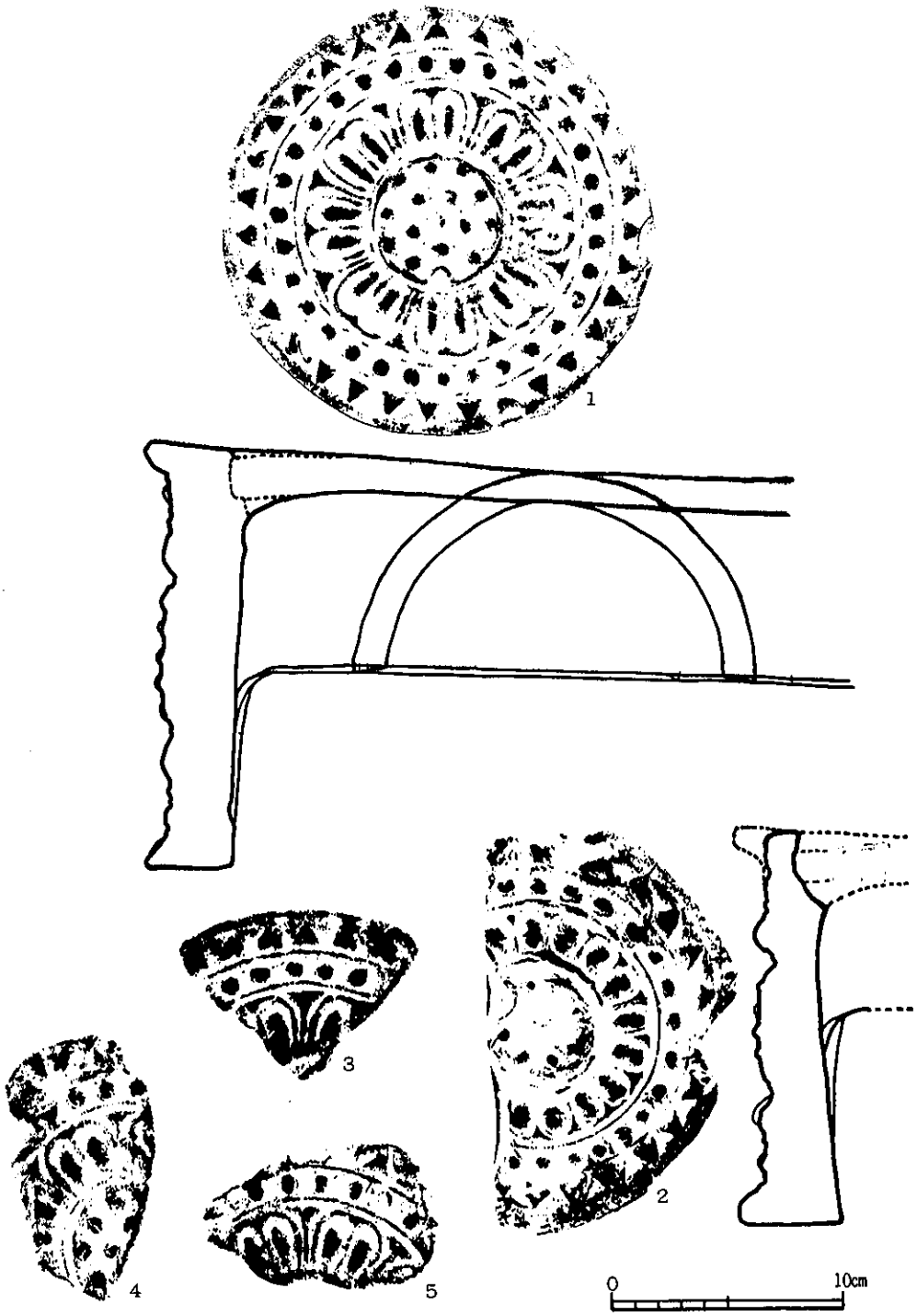


Fig.　13　　軒丸瓦実測図・拓影（縮尺⅓）

1．瓦　　類

Fig. 5－3・4、Fig. 13－1～4は瓦当径が17.2cm、中房に1＋5＋10の蓮子を配する。この蓮子には圏線がめぐり複弁八弁蓮華文の老司Ⅰ式である。外区内縁には31個の珠文を配し、珠文は半球形状を呈している。外区外縁にも31個の正三角形に近い陽起(凸)鋸歯文を配している。外区内縁と外区外縁の周縁間に2本の橋がかかり（Fig. 5－3、Fig. 13－1、PL. 18）同笵の可能性がある。丸瓦の取り付けは印籠つぎで珠文帯よりやや中心近くに丸瓦を接合する。接合部内外面の粘土張り付けは薄く丁寧なナデにより成形している。瓦当側面はヘラ削りし、丸瓦側面部の接合面は薄い粘土を張りつけ、ナデにより曲線成形を持つ。顎部裏面は同縁にそって僅かに段を持つもの（Fig. 13－1）と持たないもの（Fig. 5－3・4）がある。丸瓦部凸面は横方向からのナデと縦方向のナデを施す。凹面は不調整のもの（Fig. 13－1）と柾目によるハケメ調整を施す(Fig. 5－3)。Fig. 5－3の胎土は砂粒を含み、焼成は堅緻、色調は灰褐色を呈する。4は砂粒を多量に含み、焼成はやや軟質、色調は褐色を呈する。Fig. 13－1の胎土は緻密で、焼成は軟質、色調は白色を呈する。Fig. 13－1は瓦溜、2～4は包含層出土。

Fig. 13－5は単弁瓦的ではあるが複弁八弁蓮華文の文様形態がくずれたもの。太宰府史跡の中に同様な文様形態を持つものがある(第45次調査P 77の4)。瓦当径が15.2cm、中房に1＋8の蓮子を配する。外区内縁には25個か26個の珠文を配し、珠文[注②]は老司Ⅰ式ほどではないが半球形状を呈する。外区外縁にも25個か26個の正三角形に近い凸鋸歯文を配する。丸瓦の取り付けは印籠つぎで珠文帯よりやや中心に近く丸瓦を接合する点は老司Ⅰ式と同様であるが印籠部の深さは老司Ⅰ式より深い。接合部内外面の粘土張付けは厚く成形は丁寧なナデによる。顎部裏面は段を持たずナデにより成形している。胎土は砂粒を含み、焼成は軟質、色調は黒色を呈す。1号掘立柱建物第9柱穴内より出土。

軒平瓦（Fig. 14、PL. 20）

軒平瓦は14個体出土した。形態的に大別して2種類に分類できる。

1種は1～4にみられる老司Ⅰ式の形態・特徴を持ち、2種は5にみられる型式と6・7の老司Ⅱ式の型式。1～4は瓦当面の内区に1本の波文の主軸を入れ、その上下に2個の唐草を配した右から左へ流れる扁行唐草文である。外区上縁には大きな珠文を、下縁及び両脇区に外向した陽起鋸歯文を配している。顎は段顎で丁寧なナデによる成形を施し深さ6～7cmを示す。3の瓦当面には縄叩き目があり、4の瓦当面は平瓦面との接合部が観察される。この面には柾目のハケメ調整が認められる。この顎は藤原宮報告Ⅱの中で平瓦部凸面に粘土を張りつけ段を削り出して作る段顎と呼称されているものであろう。[注③] 1は側縁部に縄叩き目を持ち凹凸両面とも丁寧なナデによる成形を施す。胎土は砂粒を含み、焼成は堅緻、色調は灰色を呈する。1号掘立柱建物第9柱穴内出土。2の胎土は砂粒を少量含み、焼成はやや軟質、色調は黒色を呈する。Pit. 8出土。3も2と同様で1号掘立柱建物第9柱穴内出土。4は凹凸両面とも横ナデを

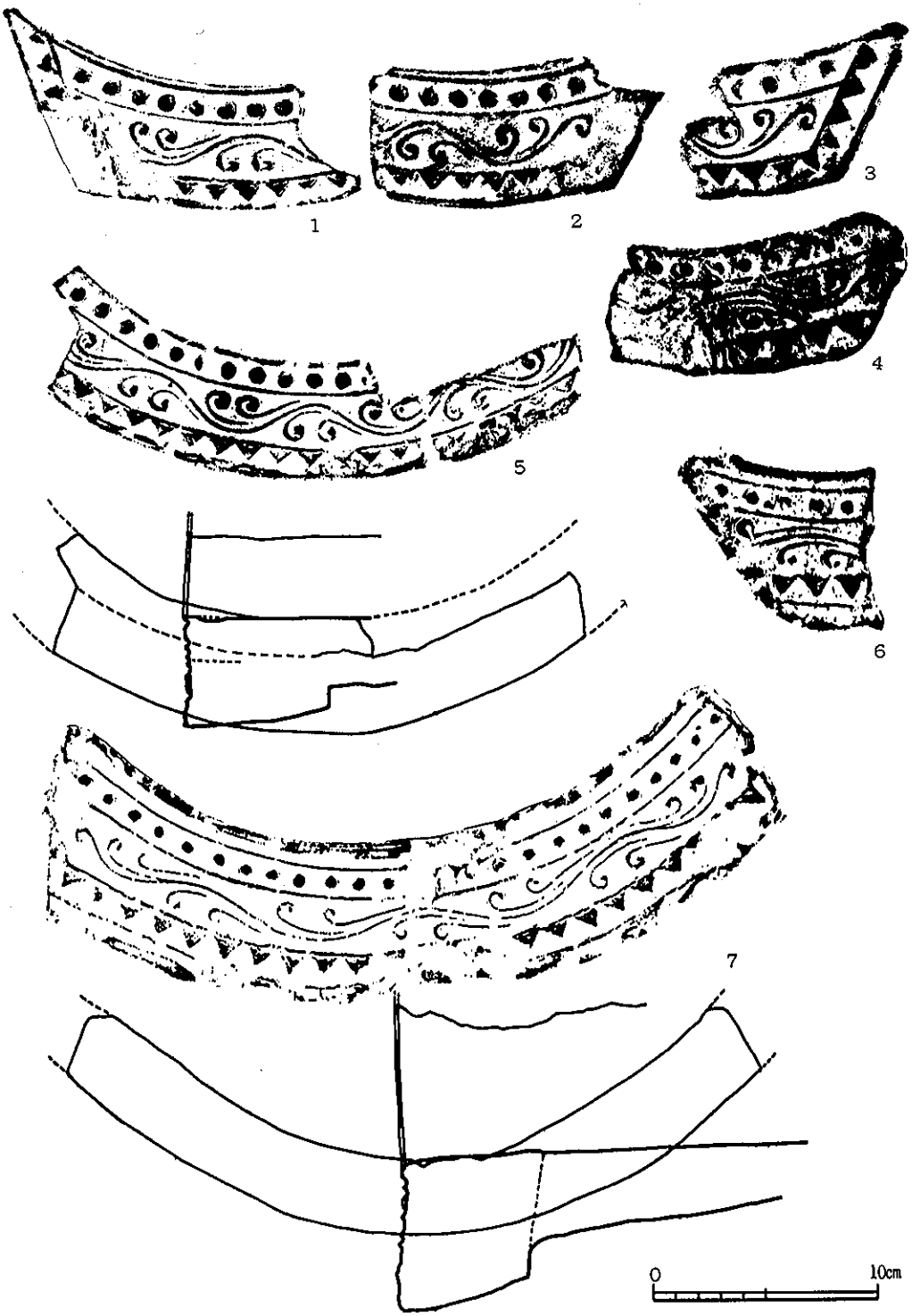


Fig.　14　　軒平瓦実測図・拓影（縮尺1/3）

施す。胎土は砂粒を含み、焼成は堅緻、色調は灰色を呈す。瓦溜より出土した。5は珠文が半球形状を示し、老司Ⅰ式の珠文とは異なる。5も老司Ⅰ式と同様に右から左へ流れる扁行唐草文であり、外区上縁には珠文、下縁・両脇区に外向した陽起鋸歯文を配している。しかし鋸歯文が老司Ⅰ式より大きく唐草文・珠文より深く段を持つ。6・7は右から左へ流れる扁行唐草文である。肉細で繊細な感じは老司Ⅱ式であるが太宰府出土の老司Ⅱ式とは異なり周縁にある界線が老司Ⅰ式等では凹面すれすれにあるのに対して、6・7では珠文上部界線の上に段を施しておりこれは下縁の鋸歯文下においても同様な形態を施す。これは瓦当面作出しの際に作り出されたものである。界線（凸線）上部の凸面は丁寧なヘラ削りを施している。珠文は半球形状を呈し凸面鋸歯文は正三角形に近い型式を示す。内区の波状の茎と各支葉は肉細で繊細な感じがあり、支葉自体も老司Ⅰ式より支葉の茎が長く唐草自体も小さくなる。珠文25個を配し凸面鋸歯文（下線・両脇区）数は31個を配する。鋸歯文は外向している。顎は有顎で断面から見ると瓦当面の形成後平瓦部と接合する方法を用いている。7の瓦当部凹面は横ナデと縦ナデ、凸面は横ナデを施す。平瓦部の凹面は横ナデと縦ナデで丁寧に仕上げ、凸面は縄叩き目を横ナデで消している。6は瓦当部凹凸両面とも横ナデで、平瓦凸面には横からの左撚り縄叩き目を施す。胎土は緻密で、焼成はやや軟質、色調は暗灰色を呈す。1号掘立柱建物第9柱穴内より出土。7の胎土は砂粒を含み、焼成は堅緻、色調は白灰色を呈す。土坑1より出土。

平　瓦（Fig.15・16・17、PL.21・22）

平瓦は南西部瓦溜の一括資料ならびにピット・溝・包含層から出土した。全出土瓦の中で平瓦が大半をしめるが、完形及び計測可能な資料は出土した総数からして少数しかない。資料としては瓦溜の一括資料ならびに1号掘立柱建物第9柱穴・溝等から出土したものを図示した。

個別の記述の前に平瓦の分類基準について述べる。分類基準については飛鳥・藤原宮発掘調査報告の中で明確な分類を行なっている。ここではその基準に基づいて分類を行なう事にする。まず平瓦の凹面に於ける痕跡[注④]を残す例は全て桶巻き作りの特徴を持ち、第1成形技法（粘土板巻き付けか粘土紐巻き付け、成形技法不明）に関しては粘土紐巻き付け技法（藤原Ⅱで言うB）と僅かに粘土板巻き付け技法が見られる。第2成形技法、凸面調整手法は叩き目の区分であるがこれはTab.4・5に示す。第2成形技法の中で今回出土の叩き目は斜格子、縄叩き目、平行線の三種に分類できる。詳細には叩文様の項でふれる事にして斜格子・縄叩き目等を概観しておこう。

斜格子叩き目の中でもいくつかに細分できる。叩き板の掘り方が浅いもの、深いもの、形態的に辺の長さが同じもの、一辺が長いもの、格子の大きさ方向の違い等に分けられる。また平瓦の中心部では側縁に平行するのに対して両側縁は外弯する円弧を描くもの（いわゆる叩き締めの円弧）と両側縁叩き文が平行もしくは全体的に傾斜するものがある。縄叩き目は主に左撚り縄叩き目で叩き板を明確に示すものと連続的に叩き目を行なうもの及び無彫刻叩き板と縄叩

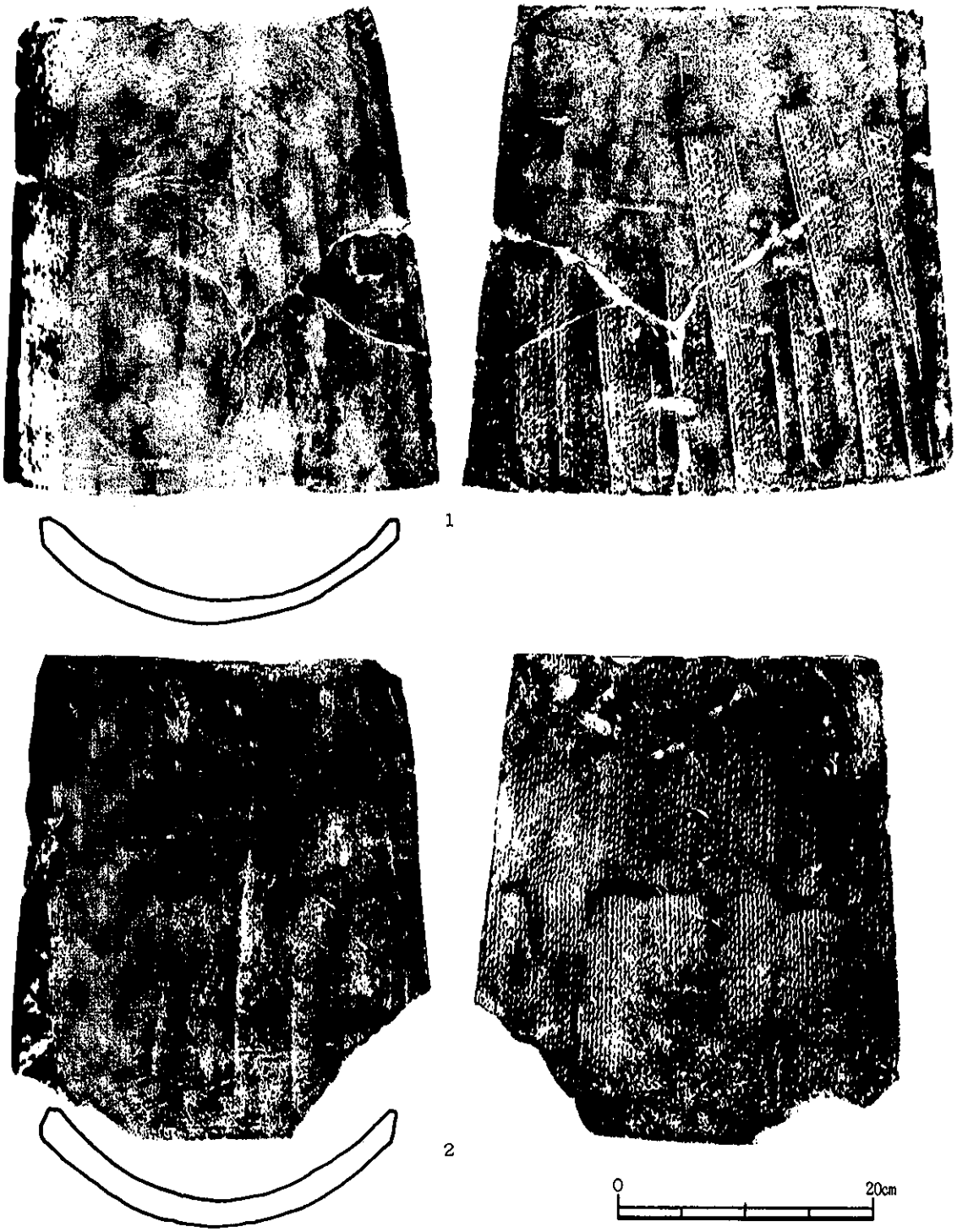


Fig. 15　平瓦実測図・拓影(1)（縮尺1/5）

1．瓦　　類

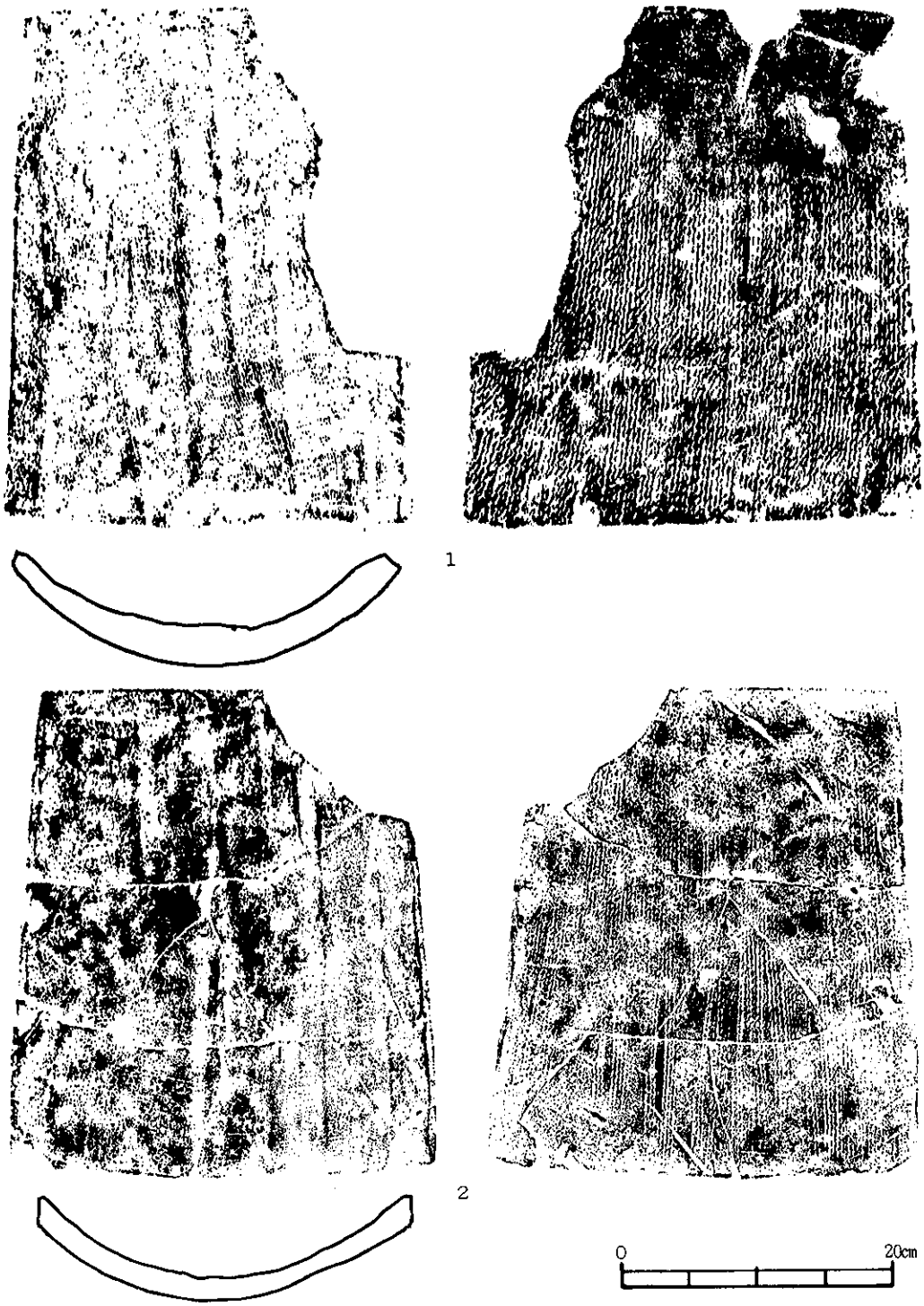


Fig.　16　　平瓦実測図・拓影(２)（縮尺⅕）

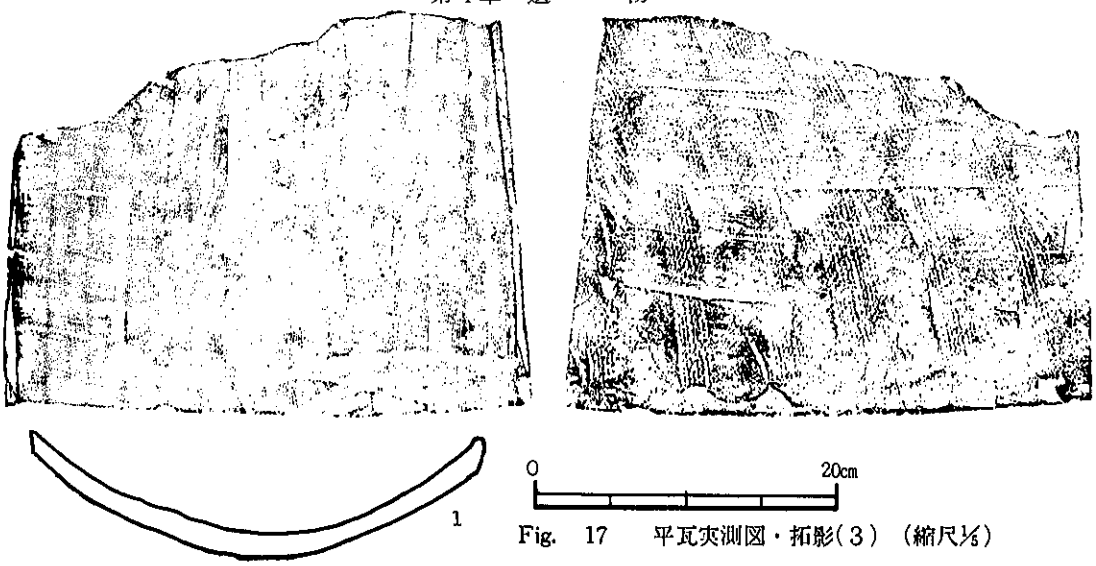


Fig. 17　平瓦実測図・拓影(3)（縮尺1/6）

き目を交互に打つもの、縄叩き目を僅かにずらす手法、縄目の撚りの大小等がある。凹面調整手法はヘラ削り、柾目によるハケメ、ナデ、無調整に分けられる。また全面に手法を施すもの、部分的に手法を施すものがある。叩き板掘り方が浅いものは無調整が多い（Fig 23B－1～7）。これに対して他の格子目、縄叩き目には何らかの調整を施している。中には全面に丁寧なヘラ削りを施し凸凹面に赤味の附着物が見られる。側面調整ならびに面取りは主に斜めに「く」の字側面調整を行ないその後凹面から1面の面取りを行なう手法と面取りを行なわない手法がある。また数点ではあるが斜めに側面調整「1」の字と僅かな面取りを行なう手法がある。

Fig 15－1の凸面にみられる第2成形技法は左撚り縄叩き目による手法と無彫刻叩き目手法を並用し、前後関係は無彫刻後に縄叩き目を施している。叩き板の長さ18cm、巾4.5cmが計測できる。また横ナデにより部分的な擦り消しを施す。凹面はナデによる擦り消しを施す。側面調整は「く」の字で面取りはない。胎土は砂粒を含む、焼成は堅緻、色調は灰色を呈す。2は凸面全面に左撚り縄叩き目を施し、横ナデにより縄目を擦り消す。凹面は縦・横方向のナデを施す。胎土・焼成・色調は1と同じ。Fig 16－1は左撚りの縄叩き目を連続的に施す。凸面にはナデ等はない。凹面の調整は僅かにハケメ調整を施す。側面調整は1面、面取り調整は1面を施す。2は1と同様左撚りの縄叩き目を施しその後に縦・横ナデにより擦り消す手法を持つ。凹面は部分的に擦り消すが桶板巾（5cm）は残す。1の胎土は砂粒を僅かに含む、焼成はやや軟質、色調は黒色を呈す。2の胎土は砂粒を多く含み、焼成は堅緻、色調は赤褐色を呈す。以上が瓦溜出土。Fig 17は1号掘立柱建物第9柱穴内出土の平瓦である。左撚り縄叩き目で叩き板巾は3.7cmを測る。縄目の後をヘラ削りにより擦り消す。凹面は縦にヘラで擦り消すが桶巾は2.5cmを測る。側面調整は「く」の字形で面取りはない。胎土は砂粒を含み、焼成は堅緻、色調は灰白色を呈す。

1．瓦　類

丸　瓦

丸瓦の資料はほとんどが瓦溜出土の一括資料である。Fig.８の瓦溜及び断面図から認められる事実として逆転し皿なった状態で出土、及び一部分に固まった状態で出土している良好な資料である。丸瓦には玉縁付丸瓦と行基葺丸瓦とがある。量的には行基葺丸瓦の方が多く１：２の割合を示す。個々の記述に先立って丸瓦の特徴について述べておこう。なお分類基準等は飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱの記述に基づいて行なうが記号は計測可能な出土量が藤原宮ほど多くないため使用せず記述する[注⑤]ことにした。今回出土の丸瓦は成形台となる円筒状を形成する材料に２種類ある。１つは従来の円筒状（木製の円柱or桶状）(A)のものと竹状の材料を紐で組み円筒状(B)にした成形台である。Ａは玉縁付と行基葺の一部に使用され、Ｂは玉縁付にはまったく使用されておらず行基葺のみに使用されている。根本的な相違がここで認められる。第１成形技法である粘土の板・紐の関係はすべて粘土紐によるもので、識別できるものでは右まわりと左まわりの巻きつけ成形がある。第２成形技法の凸面調整は玉縁付のものに対し左・右撚り縄叩き目と斜格子目文（Fig.23）であり他の行基葺に関しては左撚り縄叩き目が一般的である。しかし竹状模骨(B)に関しては叩き目はなく横ナデ＋横のハケメによる調整をしている。

分割截線を入れて２分割した後の側面調整には飛鳥・藤原宮報告書Ⅱによるとａｂｃ３つの手法が考えられている。玉縁付丸瓦の側面調整は分割後の破面を一部残し、後は縦の１回のヘラ削りによる手法（藤原宮でいうｂ手法か）と全面を縦のヘラ削りによる手法（ｃ手法）がある。これに対し行基葺丸瓦は全体に丁寧なヘラ削りを施し分割截線面をまったくとどめず（ｃ手法）凹凸両面の側縁に面取りを持つ。凹面は調整を施すものと施さないものがある。施した例（Fig.18－１、19－３）は柾目板の先端を利用したハケメ調整を施す。方向は広端部から右まわりに扇形に施している。他は調整を施さないため布の圧痕が明確に残り重複部分を残す部分が認められる。凸の部分を残すところから藤原宮Ⅱで言うつまみ縫いの可能性がある。また粘土のつなぎを残す例（Fig.18－１・２・３）のほか数点認められる。Fig.18－２はつぎあての部分も観察される。

玉縁付丸瓦（Fig.18、PL.23）

完形もしくは計測可能な丸瓦が８点出土している。すべて粘土紐巻きつけ技法で右撚りと左撚りの縄叩き目を横方向のナデにより擦り消している。

１は全長39.5cmで断面が薄手の丸瓦である。側面調整は分割後の破面を部分的に残し内面からの縦のヘラ削りを施す。面取りは施さない。凹面には広端部からの柾目板と思われるハケメ調整がある。胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや軟質、色調は灰褐色を呈する。２は側面調整は一面の縦ヘラ削りを施すタイプで面取りは施さない。玉縁下に布のつなぎ目がある。胎土は砂粒を含み焼成、色調は１と同じ。３は全長41.5cmを測る。側面調整は一部破面を残し他は縦

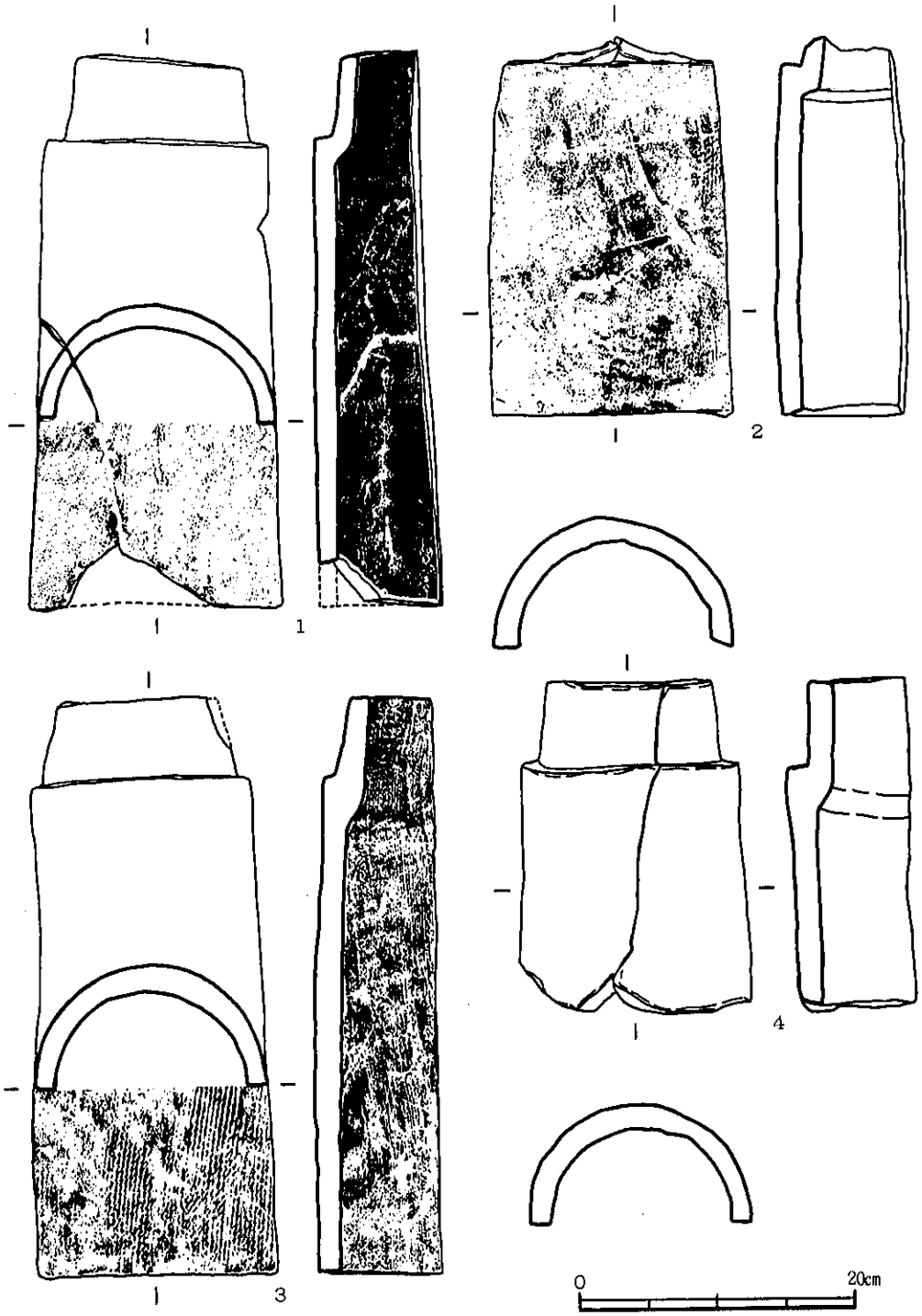


Fig. 18　丸瓦実測図・拓影(1)（縮尺1/6）

ヘラ削りで面取りは施さない。胎土・焼成・色調は1と同じ。4は1～3と同じ手法によって作られている。胎土・焼成は同じであるが色調は黒色を呈する。粘土紐の巻きつけは右まわりである。

行基葺丸瓦（Fig.19・20、PL.23）

1は全長41.5cmで文様による叩き目の痕跡はなく横ナデを行なっている。側面調整は丁寧なヘラ削りを施し凹凸両面から面取りを施している。粘土紐の巻きつけは左まわりを示す。胎土は砂粒を多く含み焼成はやや軟質で色調は黒色を呈する。2は1とほとんど同じ手法・技法である。3は凹面の調整に柾目によると思われるハケメ調整を広端部から狭端部へ右まわりの方向で扇形に施している。面取りは両面に僅かに施されている。3も1・2と同様に叩き目の痕跡はなく横ナデを行なっている。胎土は砂粒を多く含み、焼成は堅緻、色調は灰色を呈する。

行基葺丸瓦で竹状模骨によって製作された丸瓦（Fig.20、PL.24）

行基葺丸瓦の中に径1cm長さ38cm程度の竹状のものを筒状に組み合せる製作技法がある。この手の丸瓦は行基葺丸瓦の中で約⅓程度検出された。竹状模骨による丸瓦の凹面に残された痕跡から判断すると広端部で25本、狭端部で18本認められる。この数から側縁部を考慮すると模骨の数は54～58本を使用した筒状の形態を示すものであろう。竹状をつなぐ紐の間隔は7cmから9cmの間隔で6ケ所の紐を観察される。第1成形技法は粘土紐巻きつけ技法が主である。第2成形技法の叩き目痕は無文とした方が良いかもしれない。凸面の調整手法は横方向のナデと縦方向のナデの2種みられる。中には（Fig.21－1）縦に分割截線の基準となったヘラ痕が認められる。分割後の側面調整は丁寧な縦からのヘラ削りが施されている。側縁部には凹凸両面からの面取り調整が施されている。凹面は広端部と狭端部の縁部にヘラ削りを施している以外は調整を施していない。胎土はわずかに砂粒を含み、焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。Fig.20－1は全長40cmで竹状のつなぎ紐の間隔が広端部より8－9－8－7.5－6cmの6本の紐でつないでいる。2は全長40cmで、紐の間隔は7－8.5－9－7－6cmの6本である。その他の手法・技法等は他の竹状模骨の行基葺と同様である。

注

注①　小田富士雄 1975「百済系単弁軒丸瓦考・二－九州発見朝鮮系古瓦の研究(三)」『九州文化史研究所紀要』20

注②　太宰府史跡　昭和52年度発掘調査概報

注③　飛鳥・藤原宮発掘調査報告(Ⅱ) 1978

注④　飛鳥・藤原宮発掘調査報告(Ⅱ) 1978　P41、Tab.丸・平瓦分類表

注⑤　P23 注①と同じ

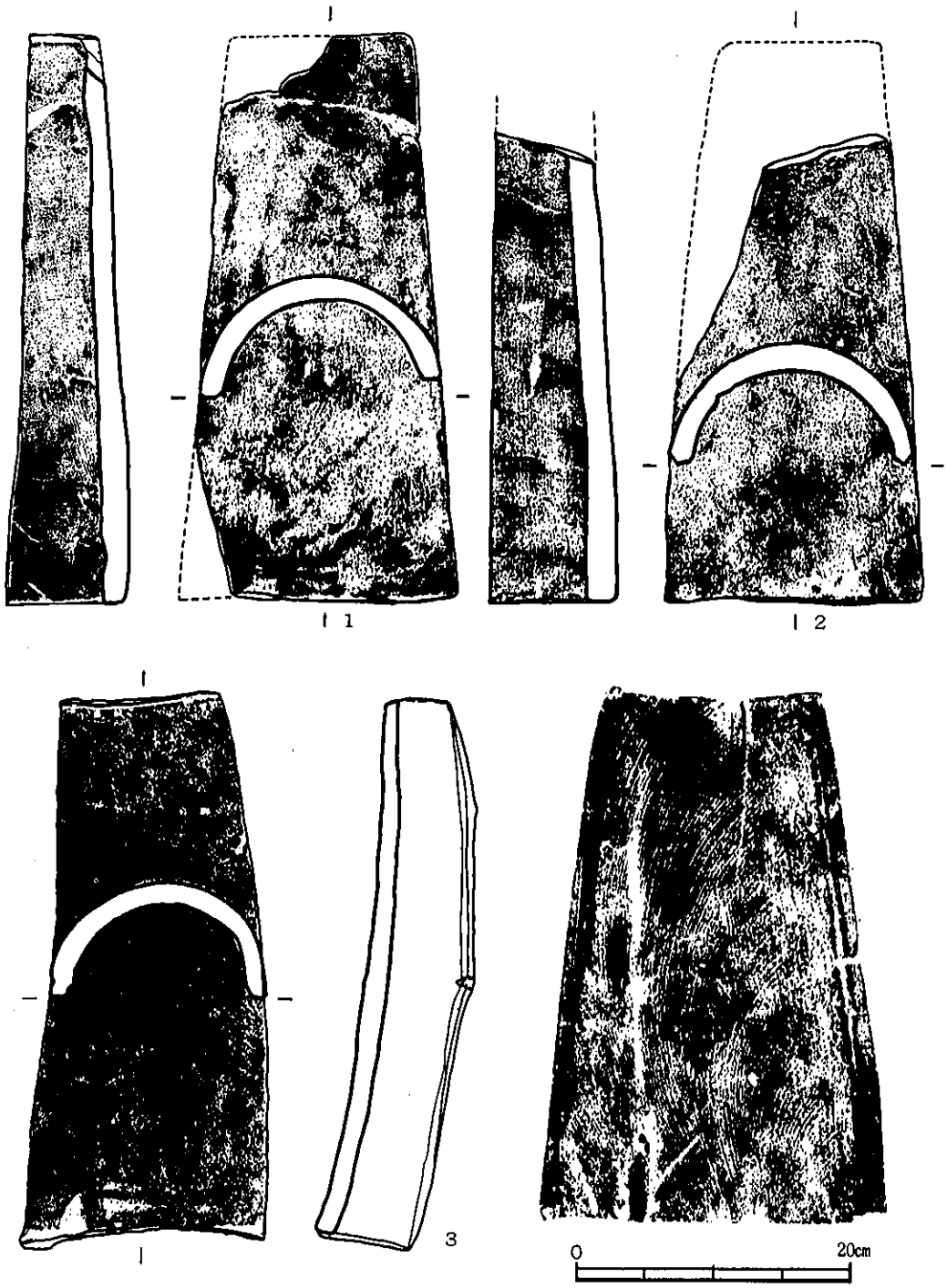


Fig. 19　丸瓦実測図・拓影(2)（縮尺⅕）

1. 瓦　　類

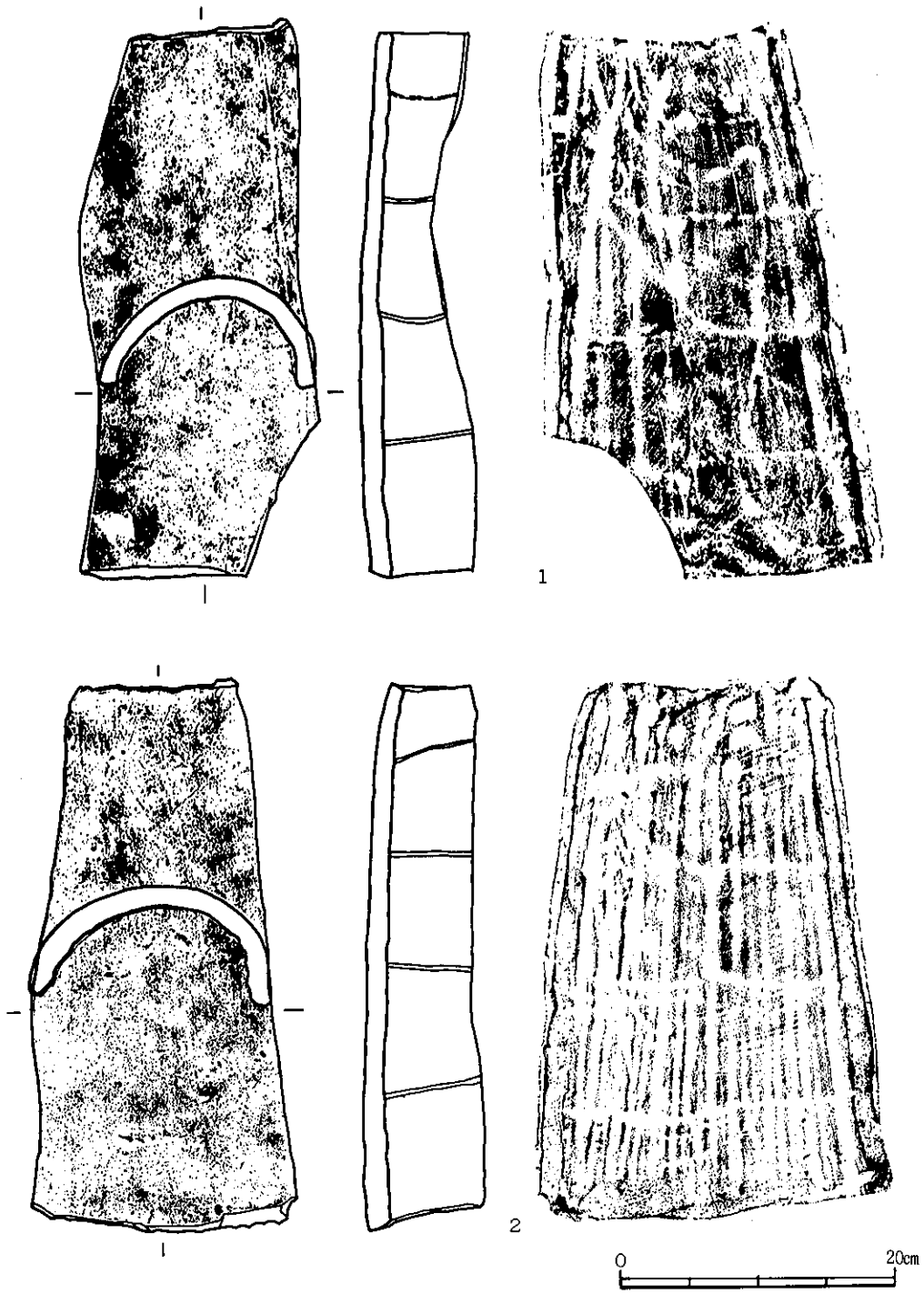


Fig. 20　丸瓦実測図・拓影（3）（縮尺1/5）

第4章　遺　　物

塼（Fig.21、PL.25）

出土した塼はすべて無文塼である。いづれも破片で15点出土した。形態的には正方形と長方形で両方とも平均の厚さ6㎝程度の2種類に分けられる。

1は正方形の形態で一辺が13.5㎝、厚さ6㎝を測る。色調は白色で胎土には砂粒を含む軟質の焼成である。1号溝内より出土。

2は1と同様に正方形で一辺が13㎝厚さ5.5㎝を測る。色調は黒灰色で胎土には砂と小石を含み焼成は軟質である。Pit.11から出土している。

3は形態的に長方形を示すと思われるが破片であるため明確ではない。色調は黒色で胎土には砂を含み焼成は硬質の方である。表面・側面・裏面ともナデによる調整を施している。L−14グリットの包含層より出土。

4から7は小破片であるためその形態等は不明である。4・5は焼成が硬質で色調は灰色を呈し胎土は砂粒・小石を多く含む。4はM−10グリットの包含層、5はM−11グリットの包含層より出土した。6・7は色調は黒色を呈し、胎土は少量の砂粒を含む程度で精良のぶるいに入り焼成は硬質の方である。6・7とも3と同様ナデによる調整を行なっている。

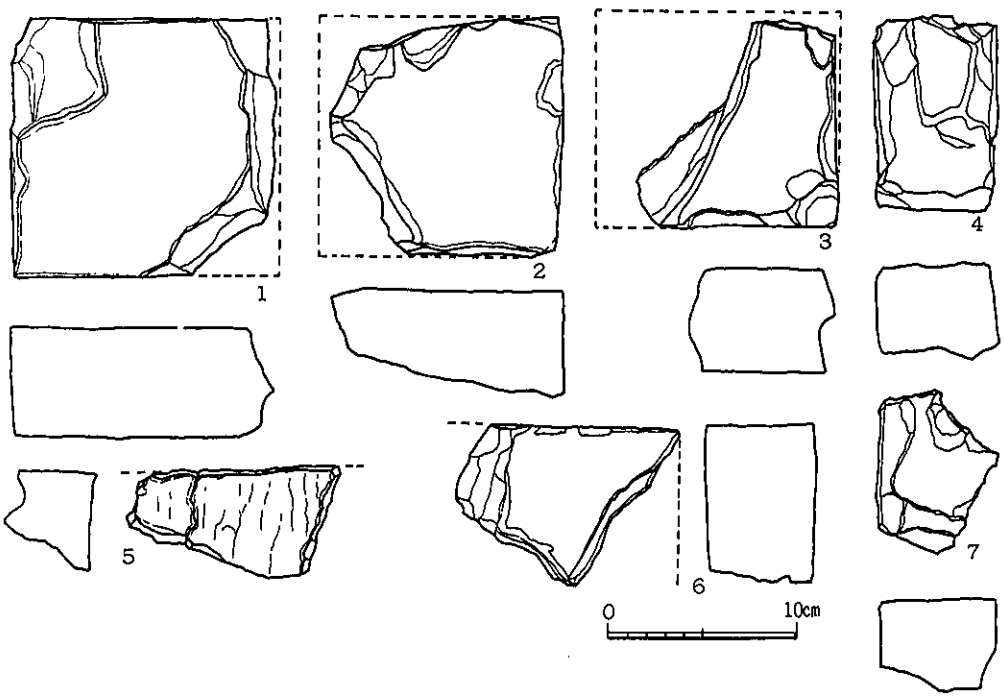


Fig.　21　　塼実測図（縮尺¼）

1．瓦　　類

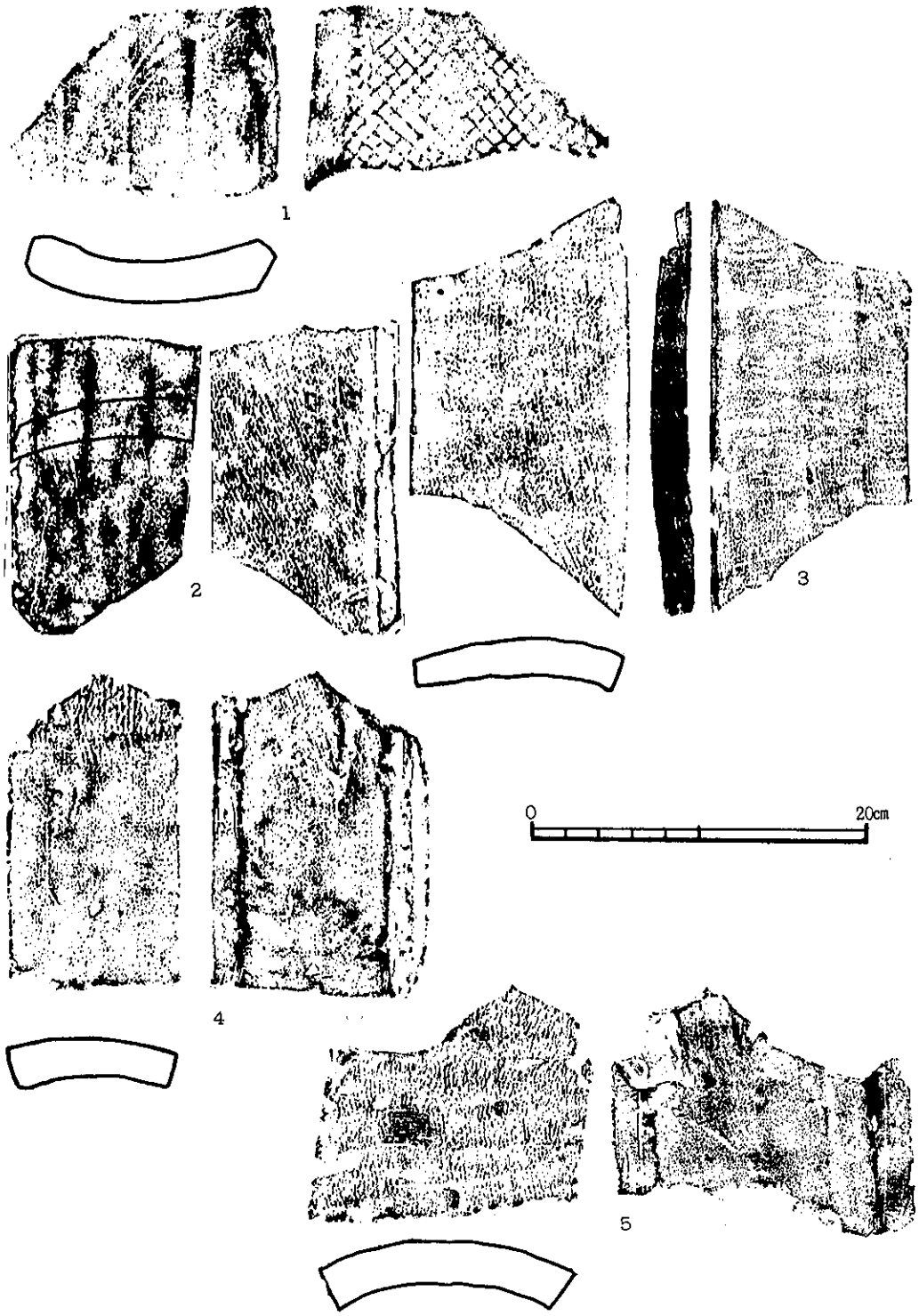


Fig.　22　　隅切瓦・熨斗瓦実測図・拓影（縮尺¼）

道　具　瓦

道具瓦は熨斗瓦10個体、隅切瓦２個体が包含層とPit.・溝から出土した。

隅切瓦（Fig.22、PL.25）

１は斜格子目文平瓦の隅を切って転用したもので角度は約141度である。残存部分では凸面凹面とも擦り消しはなく側面調整と面取りを施す。隅切の調整はヘラ削りを施す。胎土には砂粒を含まず精良で焼成はやや軟質、色調は灰白色を呈する。第10号溝より出土。２は縄目文平瓦の隅をわずかに切りとっているものでその角度は130度を測る。凸面の表面を軽く擦り消している。側面調整は２面のヘラ削りと凸面に面取りを施す。破片なので不確実ではあるが、凸面に有段を有する点と、凹面にヘラ削りによる全面整形の点から考えて一枚づくりの可能性のある隅切瓦かもしれない。凹面は布目を全て擦り消している。焼成はやや堅緻で胎土に細かな砂を含む。色調は灰白色を呈する。Ｊ－17グリット包含層より出土。

熨斗瓦（Fig.22、PL.26）

10点出土した中でいずれも平瓦を焼成前に２ないし３分割して作っているが製作技法の差異によりこれを分類すると３種類に区分される。(1)側面調整が１面のヘラ削りで内に入るもの、(2)側面調整が２面のヘラ削りでわずかに外に出るもの、(3)側面調整は行なわれず両方からヘラで分割截線を入れて割りとる割熨斗瓦である。

１は５個体出土している。Fig.22－３・４に代表され叩目文様はすべて縄目文で焼成は堅緻、胎土は砂粒を含み、色調は赤褐色を呈す。３は両側面とも内側に0.4cmから0.8cm入るヘラ削り調整が行なわれている。凸面は縄目文様の叩き目で擦り消しがあり凹面にはまったく擦り消し等は行なっていない。縄目は左撚りの叩き目で粘土紐巻きつけ技法である。２分割している。４は３と同様（縄目・焼成・胎土・色調等）である。３はPit.32出土。４は包含層である。

２は４個体出土している。叩目文様は縄目文と正格子目文の２種類ある。細片であるため図示しなかった。

３は１個体出土している。Fig.22－５。両側面に両方からヘラで分割截線を入れ一方の側面では凸面から約１cm、凹面から約0.5cmのヘラ分割截線を入れ、他方では凸面、凹面とも約0.5cmの分割截線を入れ一部ヘラにより調整を行なっている。凸面には左撚りの縄目文叩き目を入れ縦方向、横方向のナデを加えている。凹面はヘラ削りにより布目を完全に消している。粘土紐巻きつけ技法によるものでこの１点だけが３分割されている。色調は黒色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土は細かな砂粒を含む。Pit.45出土。

1．瓦　　類

叩　文　様（Fig.23～25、PL.27・28）

三宅廃寺出土の瓦の叩文様は多種の叩き板を使用している。分類する中で破片によって分類したためと叩き板の叩き文がはっきりしないために同種のものを区別した可能性も強いが一応分類した。叩文様を分類すると平行線文、格子目文、縄目文の３種に大別できる。これらを細別すると平行線文－１種、格子目文－17種、縄目文－10種の28種となる。これらを分類上平行線文をＡ、格子目文の中で叩き板の文様彫込みが浅いものをＢ、深いものをＣとした。縄目文はＤの記号をつけた。細別番号を１～10のごとく記号で示した。Fig.23の１・２は竹状模骨によって作られた丸瓦で文様とは異なるが竹状模骨の瓦が多量に出土しているため一応図示した。

Ａはハケメ調整とも思われるが凹面のハケメと異なり太い刻線が数ケ所認められる。

Ｂの格子目文は７種に区分できる。Ｂの特徴は格子自体が細く文様の彫り込みも浅いため叩き板の板目の痕跡がある。長方形の斜格子目文が主体をしめ５・６のように叩き板の巾(3.5cm前後）を明確に残すものもある。１の格子は1.3×0.6cm、２は0.8×0.3cm、３は0.8×0.6cmと0.5×0.5cmの長方形と正方形斜格子の組合せ、４は0.8×0.7cmと0.8×0.4cmの組合せ、５は格子の中央部を縦に区分する線状の痕跡を持ち0.8×0.8cmの正方形斜格子目文である。６の格子は1.0×0.7cmで叩き板巾3.5cmを測り、７は1.2×0.6cmの長方形格子である。２・５～７が主に玉縁付丸瓦に使用されている。

Ｃの格子目文は10種に区分したがこのほかにも３～４種の格子目文がある。特徴としてすべて斜格子目文であり叩き目自体にずれが生じている。全面に叩き目があるため叩き板の長さ・巾を計測することは困難であった。Ｃ－１・２の格子目は正方形の斜格子で格子自体も0.5cm×0.5cm、0.7cm×0.7cmと小さく格子を囲む線も細い。Ｃ－３・４は正方形は１・２と同様であるが囲む線は0.5cm、0.8cmと太い。Ｃ－５・６・８は大小２種類の組合せで大きい方は１cmをこえる。Ｃ－７はほぼ叩き板の巾がわかる資料で８cmの巾を持つ。線は細いのに対して格子は大きい。Ｃ－９は格子を囲む線が0.7cmと太いが所々でとぎれ大きな長方形を作る。Ｃ－10は格子を囲む太い線のほかに細い線がはしりほとんどの格子がずれを生じている。Ｂ・Ｃの格子目文はすべて斜格子目文で他の格子目の瓦をみてもすべてが斜格子目文である。形は長方形と正方形の格子であり叩き目のある出土瓦の内縄目と格子と約半々の割合であろう。

Ｄの縄目文の特徴は、太い縄目と細い縄目がありそのため叩き板の巾が観察できた点と各々縄目の大きさ・太さが異なる点である。また縄目はすべて左撚りの縄叩き目である点である。Ｄ－10などは縄目が完全につぶれ線を引くものもある。また擦り消しを行なっているものや同じ面に２回程度叩き目を持つものなどがある。叩き板巾は3.42cmから６cm程度の板巾である。図示しなかったがこのほかにも３～４種はある。板巾約1.6cm、長さ6.6cmのものや、縄目をずらす技法や、縄目と無文の叩き板を交互に打って行く技法（Fig.15－１）などがある。

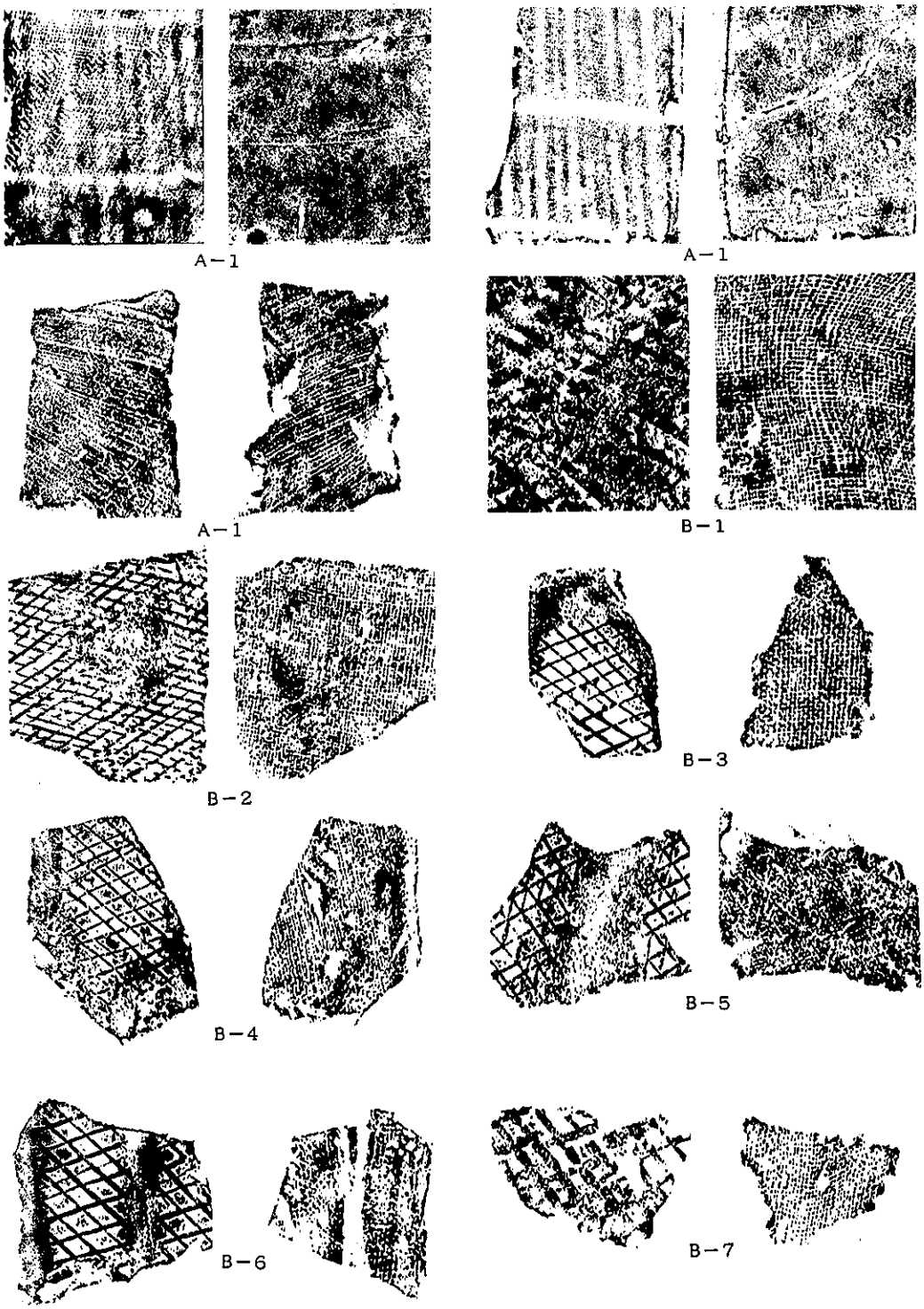


Fig. 23　叩文集成図(1)（縮尺⅓）

1．瓦　　類

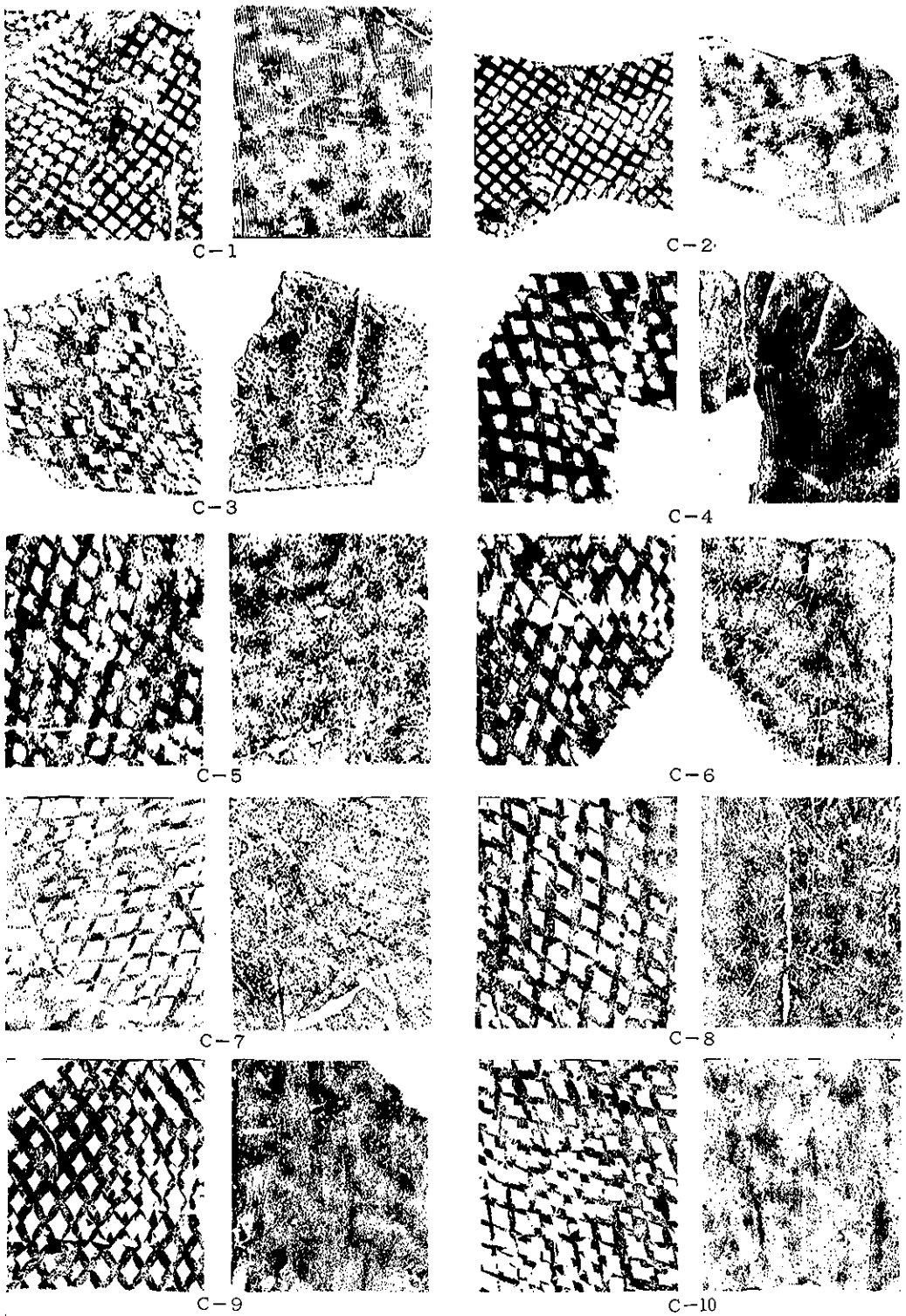
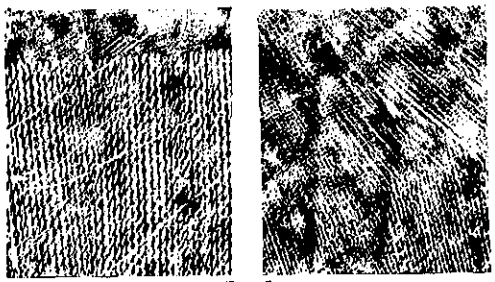
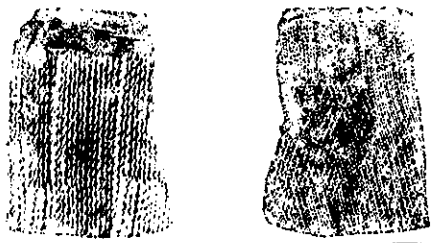
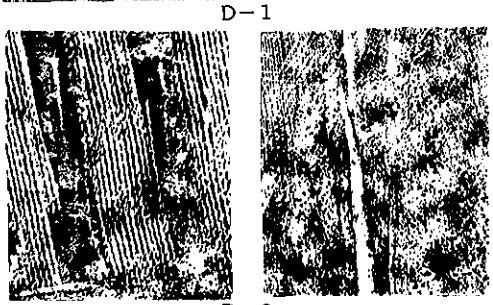
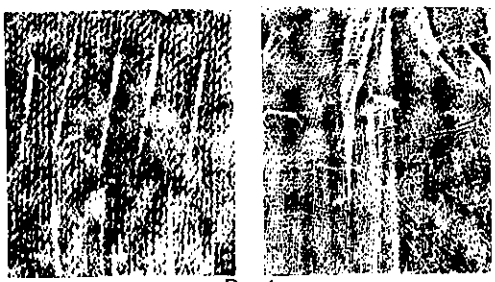


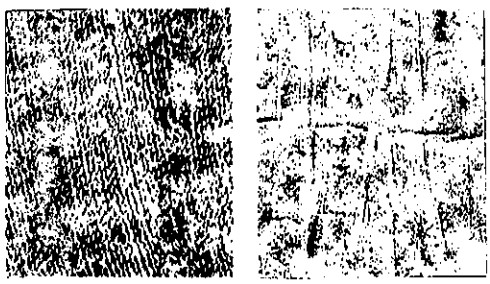
Fig.　24　　叩文集成図(2)（縮尺1/4）

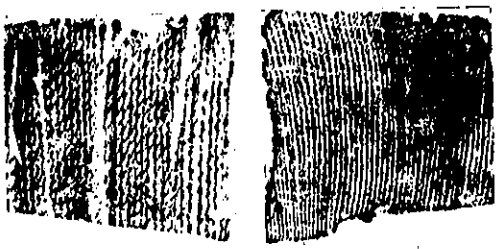

D－1

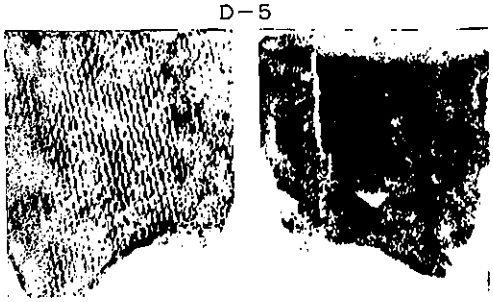

D－2

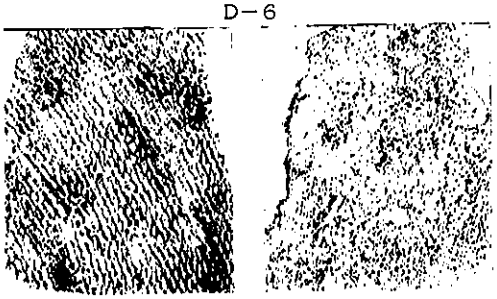

D－3

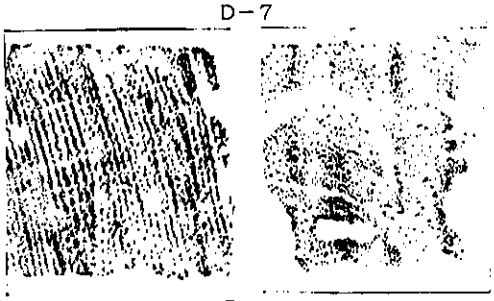

D－4


D－5


D－6


D－7


D－8


D－9

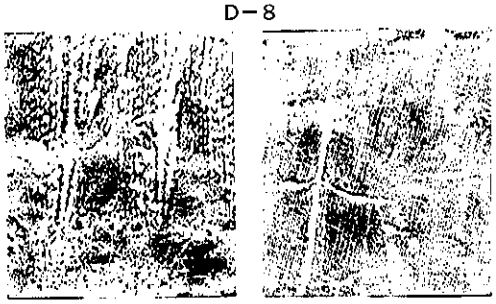

D－10

Fig.　25　　叩文集成図(3)　(縮尺¼)

2．土　　器

須恵器（Fig.26～29、Tab.1・2、PL.29～30）

本遺跡の須恵器は他の遺物と同じように遺構から検出されたものはきわめて少なく、そのほとんどが包含層より出土しているために、遺物相互の時期差やセット関係などについては言及できないという性格を有している。このため形態的分類や相対年代についてはこれまでの研究成果を参考、援用して器種（特に出土数も多く形態的に変化のある蓋類、坏、皿）ごとに分類しての時期を考えてみたい。

蓋類　蓋は身とセットをなして出土したものはなく、したがって身との関係を明確にしえるものがないがＳ１～26は坏蓋、Ｓ27～30は壺蓋と考えられる。坏蓋のうちつまみ（鈕）を持つものをⅠ類、ないものをⅡ類とした。Ⅰ類には口縁内にかえりを持つもの、折り曲げたもの、折り曲げのないものがあり、それぞれＡ、Ｂ、Ｃとし、口縁を折り曲げているＢは口縁のつくりで４つに小分類した。同じようにつまみを持たないⅡ類も口縁を折り曲げたものをＡとし、口縁内に沈線をめぐらすものをＢとし、さらにＡは口縁のつくりで、Ｂは器高の高低で２つに小分類した。なお須恵器は250点実測したがここに図示できたのは88点にすぎない。

坏蓋　ⅠＡ類（Ｓ１～３）　かえりの先端が口縁の下方に出るもの、同じもの、出ないものの３様がある。かえりの先端が出ないＳ３は、他に比べ天井部ヘラ削りで平坦となり口径もやや大きくなっている。天井部を欠いているか擬宝珠形のつまみを持つのであろう。

ⅠＢ１類（Ｓ４～６）　口縁の折り曲げは垂直で背が高く、長三角形の断面をなしている。天井部は丸みを持つものもあるがほとんどが平坦ぎみとなり、偏平な釦状のつまみを持っている。

ⅠＢ２類（Ｓ７～９）　口縁の高さが１類に比べわずかに低いだけで、著しい相違点はない。

ⅠＢ３類（Ｓ10～13）　口縁が垂直でなくやや鈍角に折り曲げられており、口径は14.6～17cmと大きく、器高は低くなり偏平度を増している。Ｓ12は擬宝珠形のつまみをつけている。

ⅠＢ４類（Ｓ14～16）　蓋のなかではもっとも大きい口径である。Ｓ16は嘴状の特異な口縁をなし、器高は２cmに満たない。このような特徴を持つ蓋はほとんどが器高低く偏平である。

ⅠＣ類（Ｓ17・18）　口縁内にかえしもなく折り曲げもされていず、わずかに内面が窪んでいるにすぎない。口径も大きく偏平であることからかえりの消失した形態というよりはむしろ折り曲げ口縁の退化形態と考えた方がより妥当であろう。天井部は粗いヘラ削りかナデ調整。

ⅡＡ１類（Ｓ19・20）　小形坏の蓋で、口縁の折り曲げが垂直で断面三角形をしている。

ⅡＡ２類（Ｓ21・22）　口縁の折り曲げは顕著でなく小さく屈曲しているにすぎない。

ⅡＢ１類（Ｓ23・24）　きわめて偏平で、口縁内に浅い沈線がめぐる。体部は雑な横ナデ調整。

ⅡＢ２類（Ｓ25・26）　口縁内面に１条の浅い沈線がめぐる。１類に比べ器高が高い。

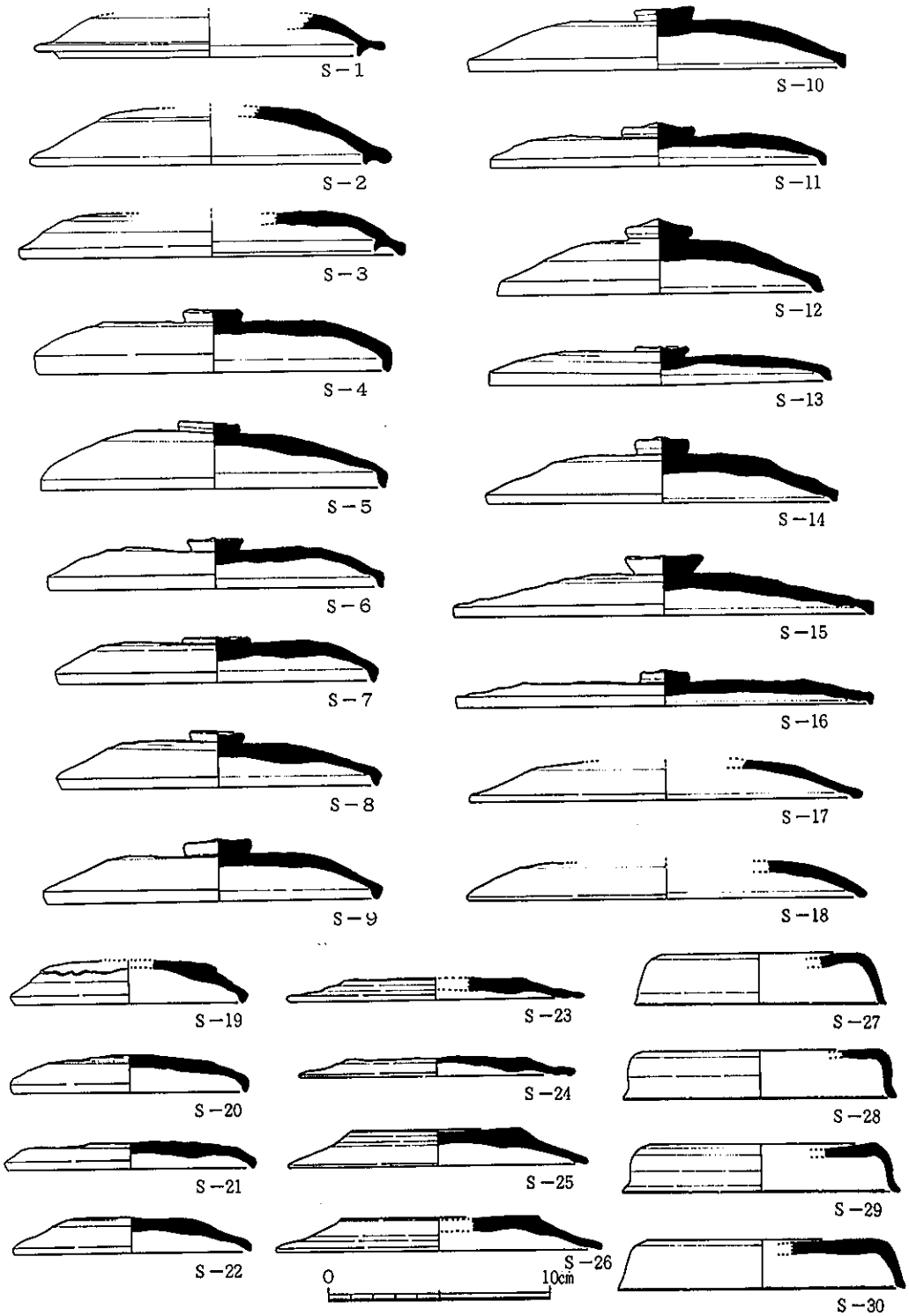


Fig.　26　　須恵器実測図(1)（縮尺1/3）

2．土　　器

壺蓋（S27～30）　天井部は一様にヘラ削りで平坦であるが、口縁端のつくりにやや違いがある。天井部にはつまみがつき、短頸壺の蓋であろう。

有高台坏　分類は主に底部における高台の貼付された位置とそのつくりに注意し行なった。

Ⅰ類（S31～34）　高台の断面は方形で背が低く、貼付は底部端より内側にめぐらしている。このため底部と体部とは明瞭な境をなしており、体部はやや外弯ぎみにのびている。

Ⅱ類（S35・36）　高台の断面は方形でなく接地面の先端が丸みを持っている。貼付は底部端に近く「ハ」の字に内傾している。体部は内弯ぎみにのびており、薄手のつくりである。

Ⅲ類（S37～39）　同じように「ハ」の字形に貼付された高台で断面方形、接地面は平坦である。

Ⅳ類（S40～42）　底部端近く貼付された高台は、その中位で屈曲し先端は上方を向いている。

Ⅴ類（S43～45）　高台は外端か底面が外傾しており、体部は口縁近くで小さく外反している。

Ⅵ類（S46・47）　高台は底部端に貼付されており、底部と体部とは明瞭な境をなさない。

無高台坏　蓋の受部を持つ坏以外は底部のつくりと体部の立ちあがり（外傾度）で分類した。

Ⅰ類（S48）　蓋の受部はほぼ水平で、たちあがりは内傾しながら直線的にのびている。

Ⅱ類（S49）　底部はヘラ削りしており平坦でなく丸みがある。口縁端は丸くおさめている。

Ⅲ類（S50）　底部は丸みを失ない平坦に近くなる。体部の立ちあがりは急でない。

Ⅳ類（S51～54）　底部は平坦で、体部との境は丸みがある。体部の外傾度は大きい。

Ⅴ類（S55～57）　底部は平坦かやや上げ底で、体部との境は丸みがなく直線的にのびている。

Ⅲ　体部の外傾度とつくりに3類あり、それぞれ口径に14cm前後と18cm前後の大小がある。

ⅠA類（S58～61）　底部と体部の境は丸みがあり、体部の立ちあがりは急である。

ⅠB類（S62～64）　形態的にはA類とまったく同一である。体部は内弯ぎみにのびる。

ⅡA類（S65）　底部と体部の境は丸みがなくなり、体部の外傾度は小さい。

ⅡB類（S66～67）　形態的にはA類と同じ。体部は直線的にのび口縁端は丸くおさめる。

ⅢA類（S68・69）　体部が内弯ぎみに長くのびており、深みがある。底部と体部の境は丸い。

ⅢB類（S70）　Ⅰ・Ⅱ類とも口径が大きくなっても器高はほとんど差がなかったのに対して、S70はA類に比べて口径が大きくなっているばかりでなく深さも著しく増している。

北部九州の須恵器について小田富士雄氏は八女古窯跡群の調査をもとに編年を提示されたのであるが筑後という特定の地域であり、7世紀後半からの資料[注①]が不足していた。その後筑前においても窯跡や歴史時代遺跡の調査例が増加するとともに亀井明徳氏は太宰府の資料を中心にして編年を試みられている。それによるとⅠ期は7世紀後半、Ⅱ期は8世紀、Ⅲ期は9世紀という年代を考えられている。[注②]その編年で本遺跡の須恵器を見ると坏蓋ⅠA類はⅠ期直前。坏蓋ⅠB1・2類・ⅡA1類、無高台坏Ⅱ・Ⅲ類はⅠ期。坏蓋ⅠC類、有高台坏Ⅵ類はⅢ期。他はⅡ期の特徴を持っており、7世紀から9世紀までの年代が考えられるが圧倒的にⅡ期が多い。

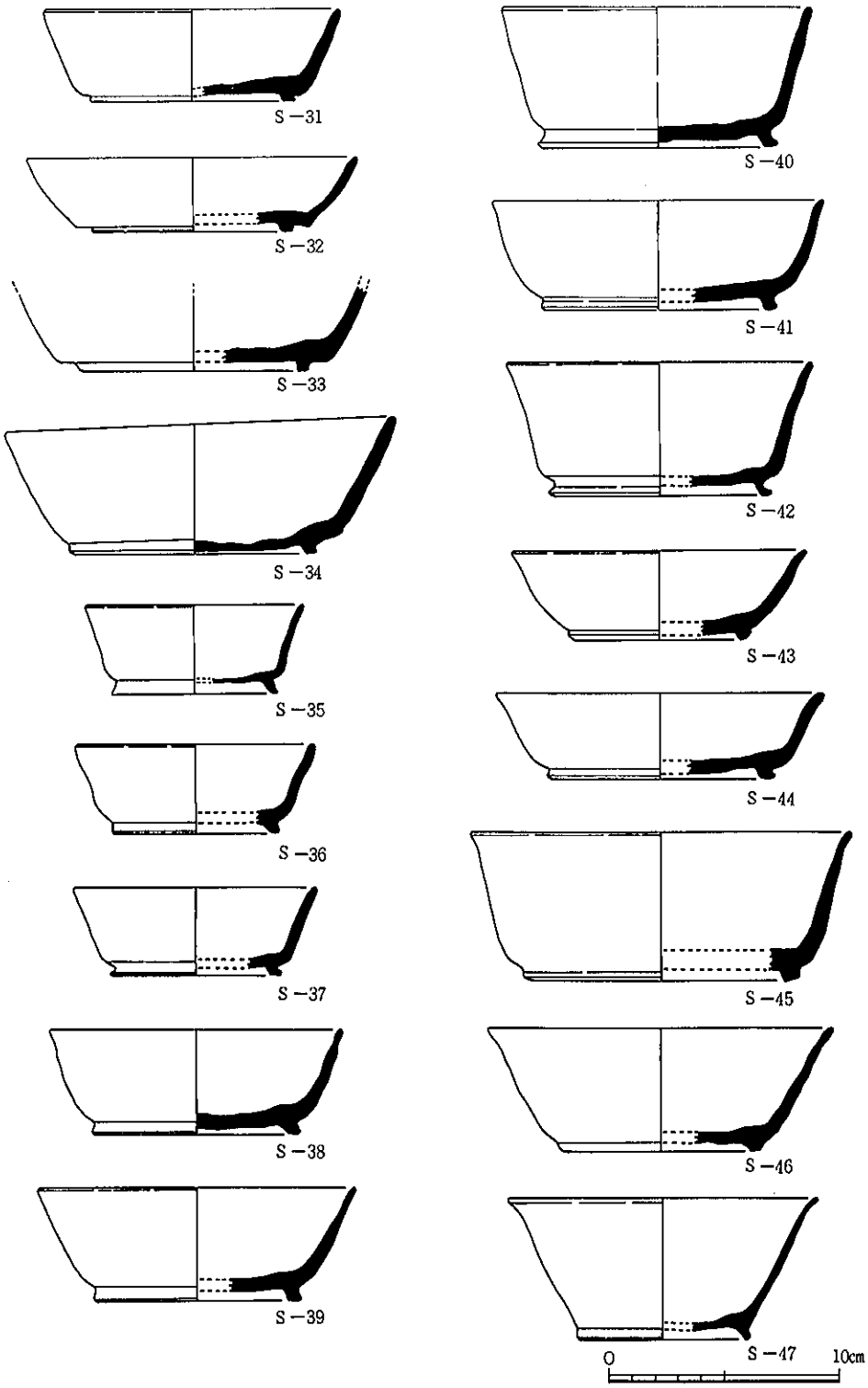


Fig. 27　須恵器実測図(2)（縮尺1/3）

2．土　　器

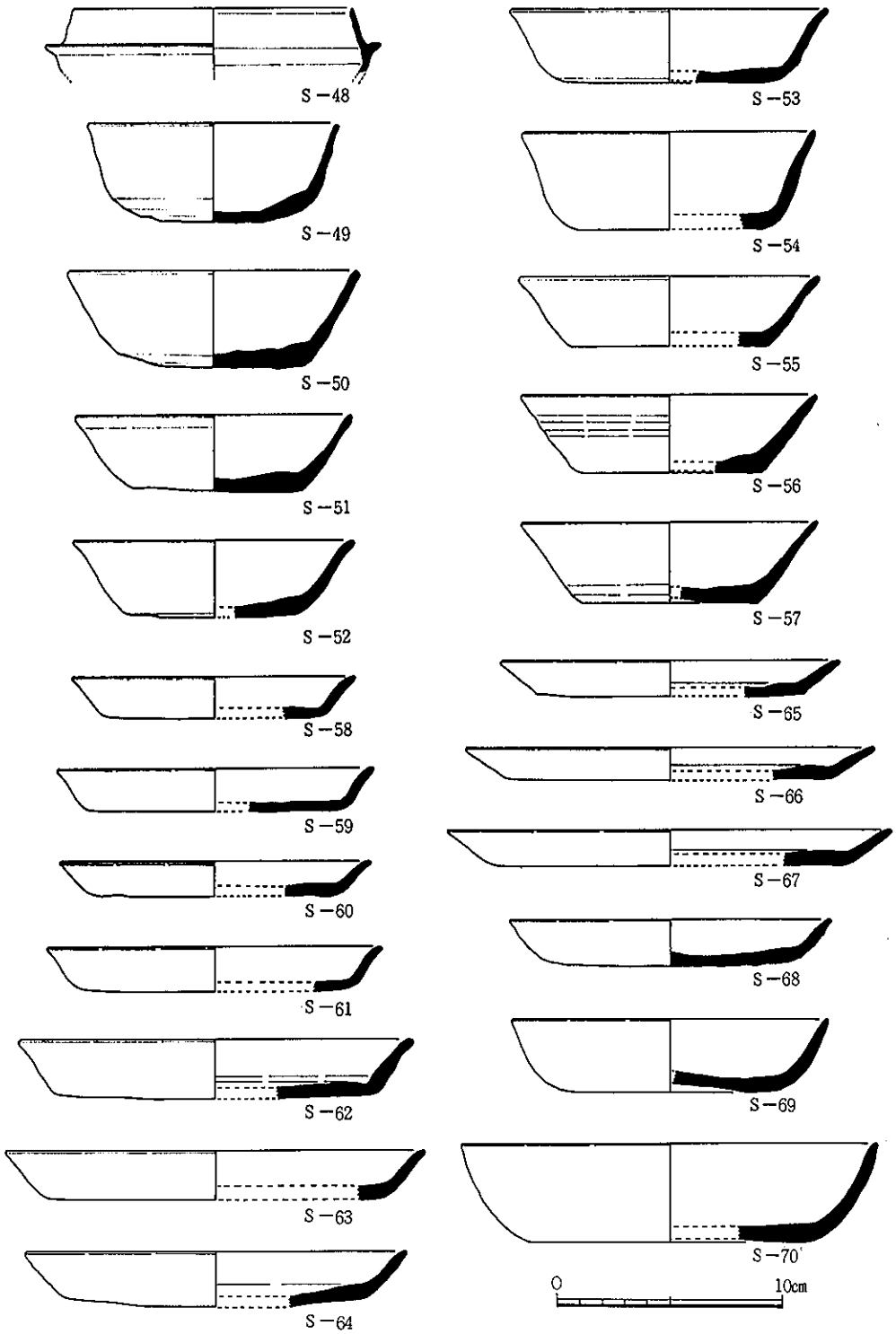


Fig.　28　　須恵器実測図(3)（縮尺1/3）

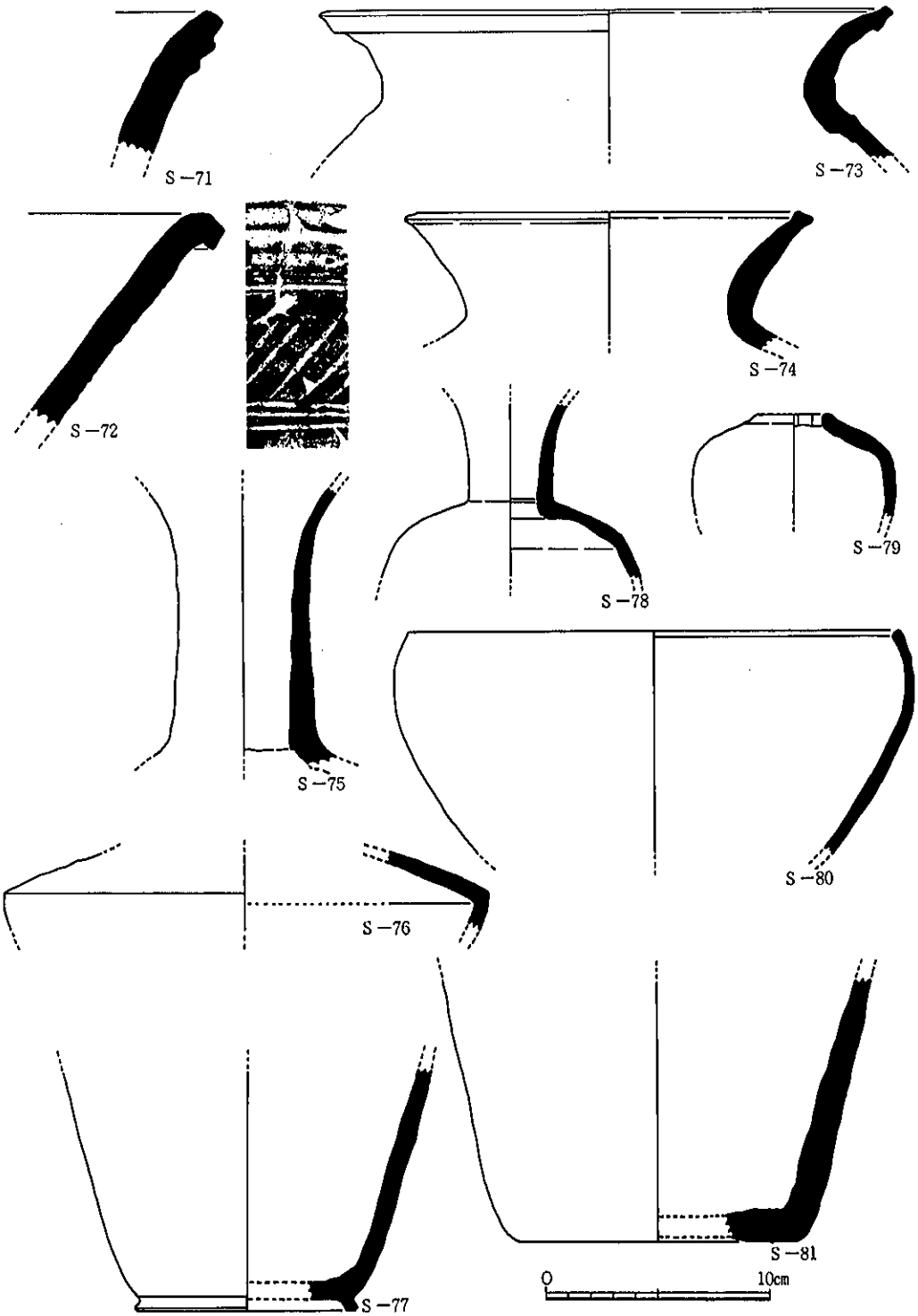


Fig.　29　　須恵器実測図(4)（縮尺1/3）

Tab. 1　須恵器一覧表　　(単位　cm)

No.	遺構；グリット	器種	法量		分類	手法の特徴	胎土	焼成	色調	Fig.	PL.
			口径	器高							
S－1	包含層；E－9	坏蓋	13.4	*1.9	ⅠA	口縁部の内面にかえりを持つ蓋で，その先端が口縁より出るものと出ないものがある。	砂粒少	良	灰色	26 (S－1～30)	
S－2	〃；G－11	坏蓋	14.0	2.6	〃		砂粒多	不良	淡茶色		
S－3	9号溝；K－13	坏蓋	17.0	2.0	〃		粗砂粒少	普通	暗灰色		
S－4	22号溝；M－13	坏蓋	15.9	2.8	ⅠB1	口縁部の折り曲げは直立し背が高い。天井部は1/4程をヘラ削りし平坦となる。	砂粒少	良	黒灰色		29
S－5	9号溝；K－11	坏蓋	15.4	3.0	〃		砂粒多	不良	灰白色		
S－6	8号溝；H－10	坏蓋	15.0	2.3	〃		〃	普通	紫灰色		29
S－7	包含層；M－13	坏蓋	14.2	2.1	ⅠB2	口縁部の折り曲げは直立するが背は低くく断面は三角形をなす。	〃	良	灰色		
S－8	〃；〃	坏蓋	14.4	2.6	〃		砂粒多	〃	茶灰色		29 (S－8～16)
S－9	〃；M－14	坏蓋	15.0	2.9	〃		砂粒多	不良	淡灰色		
S－10	10号溝；M－14	坏蓋	17.0	2.7	ⅠB3	口縁部の折り曲げは断面三角形をなし，直立せず外方に突出ぎみとなる。S 12・13は天井部の1/4程をヘラ削りしている。	精良	普通	黒灰色		
S－11	包含層；O－13	坏蓋	15.0	2.0	〃		精良	軟調	灰色		
S－12	包含層；	坏蓋	14.6	3.4	〃		砂粒多	良	白灰色		
S－13	22号溝；M－13	坏蓋	15.4	1.8	〃		粗砂粒	普通	灰色		
S－14	11号溝；O－14	坏蓋	15.8	3.0	ⅠB4	口縁部の折り曲げは嘴状をなすものでS 15・16は器高低く，口径大きい。	精良	普通	灰色		
S－15	10号溝；N－12	坏蓋	18.8	2.7	〃		精良	不良	灰白色		
S－16	包含層；	坏蓋	18.7	1.65	〃		精良	普通	灰色		
S－17	6号溝；K－16	坏蓋	15.4	1.8	ⅠC	口縁部の折り曲げは消失し，わずかに稜みとして残る。	砂粒少	良	濃灰色		
S－18	8号溝；H－10	坏蓋	18.0	1.7	〃		砂粒	良	灰色		
S－19	10号溝；N－13	坏蓋	10.4	2.0	ⅡA1	天井部につまみを持たない小形の蓋で，口縁端は小さく直立する。天井部は1/4程をヘラ削りしている。	砂粒	不良	黒灰色		
S－20	包含層；N－11	坏蓋	10.5	1.7	〃		粗砂粒少	堅緻	暗灰色		
S－21	22号溝；M－13	坏蓋	11.1	1.2	ⅡA2		粗砂粒	良	灰色		
S－22	4号溝；K－14	坏蓋	10.7	1.6	〃		細砂粒	普通	暗灰色		
S－23	包含層；G－8	坏蓋？	13.2	1.0	ⅡB1	口径はほぼ等しいが高さに2種ある。いずれも天井部は平坦にヘラ削りし，口縁端内面に浅い沈線がめぐる。天井部にはつまみを持たない。	砂粒	良	灰色		
S－24	〃；J－6	坏蓋？	13.4	8.0	〃		砂粒少	堅緻	濃灰色		
S－25	〃；E－4	坏蓋？	13.5	1.7	ⅡB2		砂粒	普通	灰色		29
S－26	〃；C－10	坏蓋？	14.7	1.5	〃		粗砂粒	良	灰色		
S－27	〃；G－10	壺蓋	11.3	2.3		口縁端部のつくりに違いがみられるが一様に天井部はヘラ削りで平坦となる。天井部にはつまみがつき，短頸壺の蓋をなすのであろう。	精良	良	灰色		
S－28	〃；F－7	壺蓋	12.3	2.2			細砂粒	良	黒灰色		29
S－29	〃；D－7	壺蓋	13.5	2.2			砂粒	良	灰色		
S－30	〃；F－11	壺蓋	13.0	2.3			砂粒少	良	灰色		
S－31	包含層；I－13	高台坏身	13.2	4.0	Ⅰ	体部と底部との境に稜を持つもので体部はやや内湾ぎみにのびる。高台は断面長方形をなす。	精良	普通	灰色	27 (S－31～47)	
S－32	〃；G－12	高台坏身	14.2	3.2	〃		砂粒多	良	灰色		30
S－33	瓦溜；B－11	高台坏身	*15.0	4.0	〃		砂粒少	良	灰白色		30
S－34	11号溝；N－14	高台坏身	16.8	6.6	〃		砂粒少	軟調	淡肌色		30
S－35	包含層；O－14	高台坏身	9.4	3.9	Ⅱ	体部と底部との境は丸みがあり高台は断面長方形でない。	精良	堅緻	濃灰色		30
S－36	〃；O－12	高台坏身	10.2	3.9	〃		砂粒多	普通	灰色		30
S－37	10号溝；N－10	高台坏身	10.4	3.8	Ⅲ	体部はわずかに外反し，高台は背が高く，その中位でやや屈曲する。	精良	堅緻	灰色		30
S－38	包含層；C－7	高台坏身	12.6	4.6	〃		細砂粒多	普通	暗灰色		30
S－39	10号溝；N－14	高台坏身	13.6	4.9	〃		細砂粒多	良	黒灰色		30

No.	遺構；グリット	器種	法量 口径	法量 器高	分類	手法の特徴	胎土	焼成	色調	Fig.	PL.
S－40	2号溝；G－6	高台坏身	13.3	6.1	Ⅳ	体部はわずかに外反し，高台は屈曲しており，高台底面は上方に傾く。	細砂粒	堅緻	明茶色	27 (S－31～47)	30
S－41	10号溝；N－12	高台坏身	14.3	4.8	〃		細砂粒多	良	灰白色		
S－42	5号溝；L－15	高台坏身	14.2	5.9	〃		砂粒少	良	黒灰色		30
S－43	10号溝；M－12	高台坏身	12.6	3.9	Ⅴ	高台底面が上方に傾いたもので，S43は高台端を面取りしているようである。	精良	堅緻	灰色		
S－44	〃；〃	高台坏身	14.2	3.7	〃		砂粒少	良	黒灰色		30
S－45	〃；〃	高台坏身	16.5	6.5	〃		砂粒少	堅緻	灰色		30
S－46	包含層；B－14	高台坏身	14.9	5.4	Ⅵ	体部と底部との境は認められない。	砂粒少	良	灰色		30
S－47	3号土坑；M－15	高台坏身	13.4	6.2	〃		精良	普通	灰色		30
S－48	包含層；C－9	坏身	12.4		Ⅰ	受部を持つ坏身で受部は水平で先端は細い。	砂粒少	良	灰色	28 (S－48～70)	
S－49	11号溝；N－14	坏身	11.0	4.4	Ⅱ	底部はヘラ削りされているが平坦でなく丸みがある。	精良	普通	淡灰色		31
S－50	10号溝；M－12	坏身	12.8	4.3	Ⅲ	底部は丸みを失い平坦に近くなる。	粗砂粒少	不良	淡灰色		31
S－51	瓦溜；B－10	坏身	12.2	3.4	Ⅳ	口縁への立ちあがりは急でわずかに内弯しながらのびる。底部は平坦をなす。	細砂粒多	不良	灰色		31
S－52	包含層；L－16	坏身	12.4	3.4	〃		砂粒少	良	灰白色		31
S－53	〃；〃	坏身	14.0	3.3	〃		粗砂粒	普通	濃灰色		31
S－54	〃；G－5	坏身	13.0	4.5	〃		砂粒多	良	灰色		
S－55	〃；G－3	坏身	13.3	3.0	Ⅴ	底部は平坦で口縁への立ちあがりはゆるやかで直線的にのびる。	砂粒少	良	淡灰色		
S－56	10号溝；M－15	坏身	13.1	3.5	〃		粗砂粒少	良	灰色		
S－57	21号溝；F－13	坏身	13.1	3.6	〃		砂粒少	良	淡灰色		
S－58	5号溝；L－15	皿	12.5	*1.8	ⅠA	口縁への立ちあがりは急で，体部中位よりやや内弯しながらのびる。	砂粒多	良	濃灰色		
S－59	10号溝；M－15	皿	14.1	1.9	〃		砂粒少	良	灰色		
S－60	包含層；M－15	皿	13.7	1.6	〃		粗砂粒多	良	灰色		
S－61	包含層；	皿	14.8	2.0	〃	S62～64は同じ器制で口径の大きいもの。	砂粒少	良	濃灰色		
S－62	10号溝；M－15	皿	17.4	2.7	ⅠB		砂粒少	良	淡灰色		31
S－63	〃；M－13	皿	18.6	2.2	〃		粗砂粒少	不良	黒灰色		
S－64	包含層；	皿	16.8	2.5	〃		砂粒少	良	灰色		31
S－65	〃；G－5	皿	15.0	1.6	ⅡA	口縁への立ちあがりはゆるやかで，体部は内弯せず直線的にのびる。S67は同じ器制で口径の大きいもの。	砂粒多	良	灰色		
S－66	〃；G－13	皿	18.0	1.4	ⅡB		砂粒多	良	濃灰色		
S－67	瓦溜；A－12	皿	19.6	1.6	〃		砂粒多	良	灰色		
S－68	包含層；		14.2	2.0	ⅢA	底部と体部との境が丸みがあり，体部はわずかながら外弯している。	精良	普通	灰色		31
S－69	Pit 82；K－17		14.0	3.3	〃		砂粒多	良	灰色		
S－70	11号溝；N－14		18.4	4.4	ⅢB		砂粒少	良	濃灰色		31
S－71	包含層；J－4	甕				口頸部は直線的にのびる。S71は口縁下に2条の凸線がめぐる。	砂粒多	良	灰色	29 (S－71～81)	31
S－72	〃；D－6						砂粒多	良	灰色		31
S－73	〃；O－14		25.0			口頸部は短く口縁は外反する。S73の口縁端は肥厚し帯状をなす。	精良	普通	灰色		
S－74	Pit 77；L－14	長頸壺	17.0				砂粒少	良	淡灰色		
S－75	10号溝；M－12		径 6.0	現長 12.0		3片とも同一個体ではない。S76は大きく屈曲し稜がつく。S77は底部からの立ちあがり急で長めの高台がつく。	精良	普通	灰色		
S－76	包含層；						精良	普通	黒灰色		
S－77	〃；G－3		底径 9.8	高台高 0.5			砂粒少	良	淡灰色		
S－78	〃；	瓶				全面丁寧な横ナデしている。	砂粒少	良	灰色		31
S－79	〃；H－4		2.6			口縁はヘラ様のもので切る。	砂粒少	良	灰色		
S－80	10号溝；M－15	鉢形土器	22.0			体部上位より内弯し，口縁端は内傾する。	砂粒	良	濃灰色		31
S－81	Pit 82；K－17		底径 12.4			高台はない。甕の底部か？	粗砂粒	良	淡灰色		31

2．土　　器

土師器（Fig.30～34、PL.32・33、Tab.3・4）

土師器は他の遺物とともに溝・掘立柱建物・土坑・瓦溜の各遺構から出土している。他には多量に包含層から殆ど出土しているが多くは細片で器面の磨滅が著しく、成形法を明らかにし得るものは少なく図に供したものが殆ど全てである。

坏蓋（H－1）　頂部の窪む摘みを有し、口縁端部は小さくおれる。天井部は篦削り、他は内外面ともに横ナデ調整を施す。器色は淡黄褐色を呈する。3号溝出土。

高台付坏（H－2～20）　高台を有する坏類の完器はない。高台はH19・20を除けば低くて外方に開く形態で基本的には底部端より若干内側に付けられる。全体的に器色は内外面ともに淡い褐色を呈するものが多く胎土は精選されているが、H4～6、H12、H15では粗砂粒の混入が著しい。また焼成はH4、H6、H20を除き良好である。器面調整はH11、H16が内外面ともに篦横ナデである。他は磨滅が著しく比較的残りの良いものに横ナデ或はナデ調整が認められる。各々はH2が6号溝、H4が5号溝、H9・20が8号溝、H11・13が10号溝、H16が土坑2、H19が1号掘立柱建物、他は包含層の出土である。

坏（H21～35）　坏類も完器がないが形態の上で(1)口縁が外方に直線的にのびる大型坏（H21）、(2)底部端が肥厚し、体部との境に段を有する坏（H22～24）、(3)丸味をもつ体部から直線的にのびる口縁を有する坏（H25～28、30）、(4)(3)の口縁部が外反した坏（H29・31～33）(5)端部が折れ、内面が沈線状となる口縁を有する坏（H34・35）の5類に区別されよう。なお器面調整では1類（H21）－外面篦ナデ、2類（H22）－外面篦ナデ・内面ナデ調整、4類(H32・33）－内外面ともに横ナデ調整、5類（H35）－外底部篦みがき調整などが観察できる。また法量は2類－口径15.53cm・器高3.5cm、3類－同15～17cm・同3.1～4.1cm、4類－同13.2～17.0cm・同2.5～4.1cmとなる。各々はH21が1号掘立柱建物、H23・32がPit.31、H23が8号溝、H26がPit.69・H33が1号溝、H35が2号溝、他は包含層の出土である。

皿（H36～40）　皿類はH37のみ完器である。器色は外面黄褐～赤褐色を呈し、胎土は精選されており、焼成は全て良好である。H37・39は外面横ナデ調整がみられる。また法量では口径13.2～16.8cm、器高1.4～2.5cmを測る。各々はH37がPit.31、H40が瓦溜、他は包含層の出土。

高台付皿（H41）　器面の磨滅が著しい。器色は外面暗赤褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。口径11.0cm、器高3.2cmを測る。包含層出土。

甕（H42～45）　甕類は口縁端が跳上げ状となるH45や口縁端部が垂れ気味のH51などのように細部での相異点はあるが、基本的には胴部の膨らみが少なく肥厚する「く」の字形口縁を有する甕である。器面調整は磨滅の著しいH43・44・52等を除けば外面は縦の刷毛目調整後に口縁部のみをナデ調整し、胴部内面は斜上方或は縦の篦削り調整を行ない口縁との境は鋭い稜をなしている。またH45・46・49～51・53・54では外面に煤の付着がみられる。この為に器色は全体に暗褐～灰褐色を呈し胎土には粗砂の混入が多いが、H44・47・49・52を除き焼成は良好である。法量で

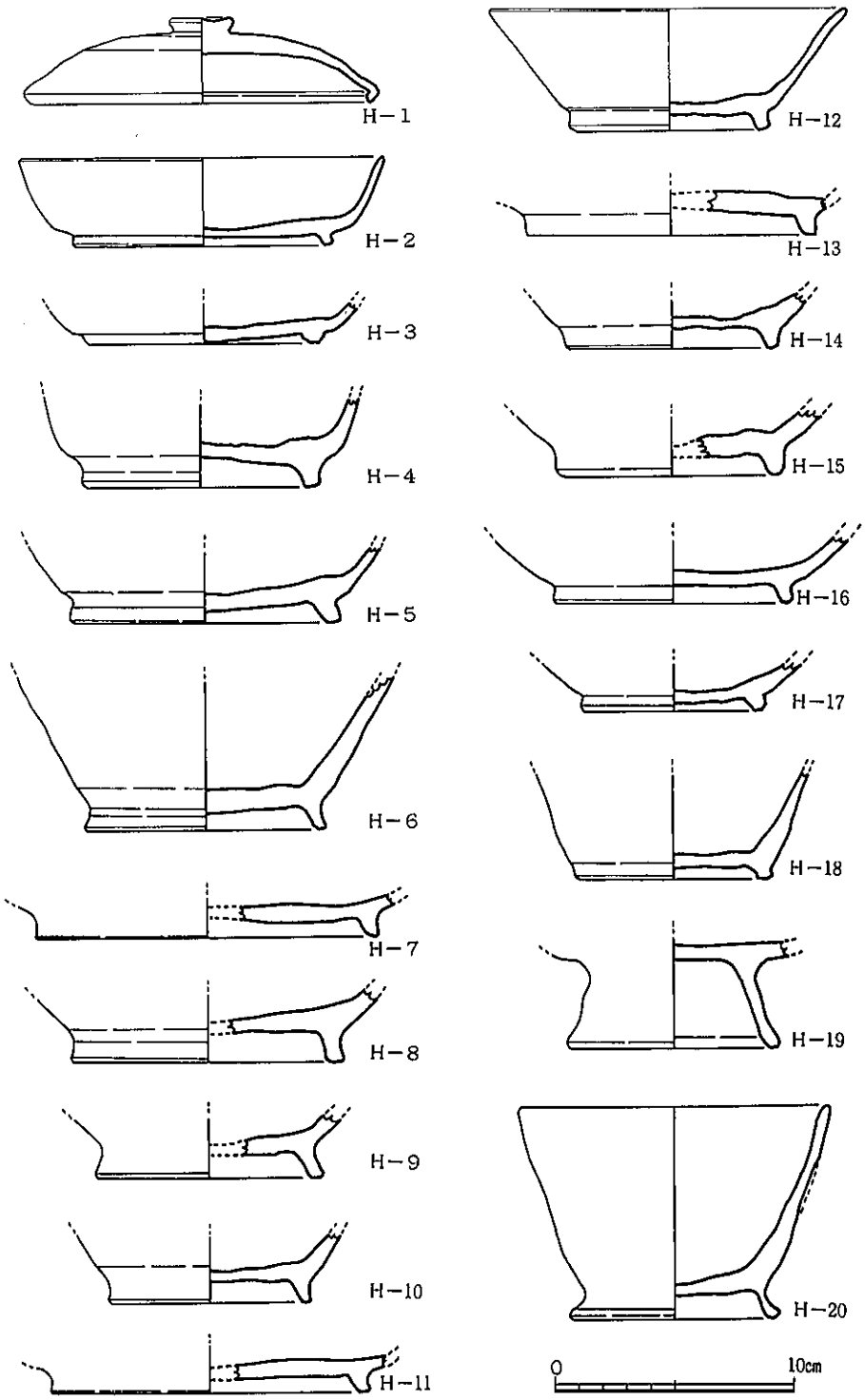


Fig.　30　　土師器実測図(1)（縮尺1/3）

2. 土　　器

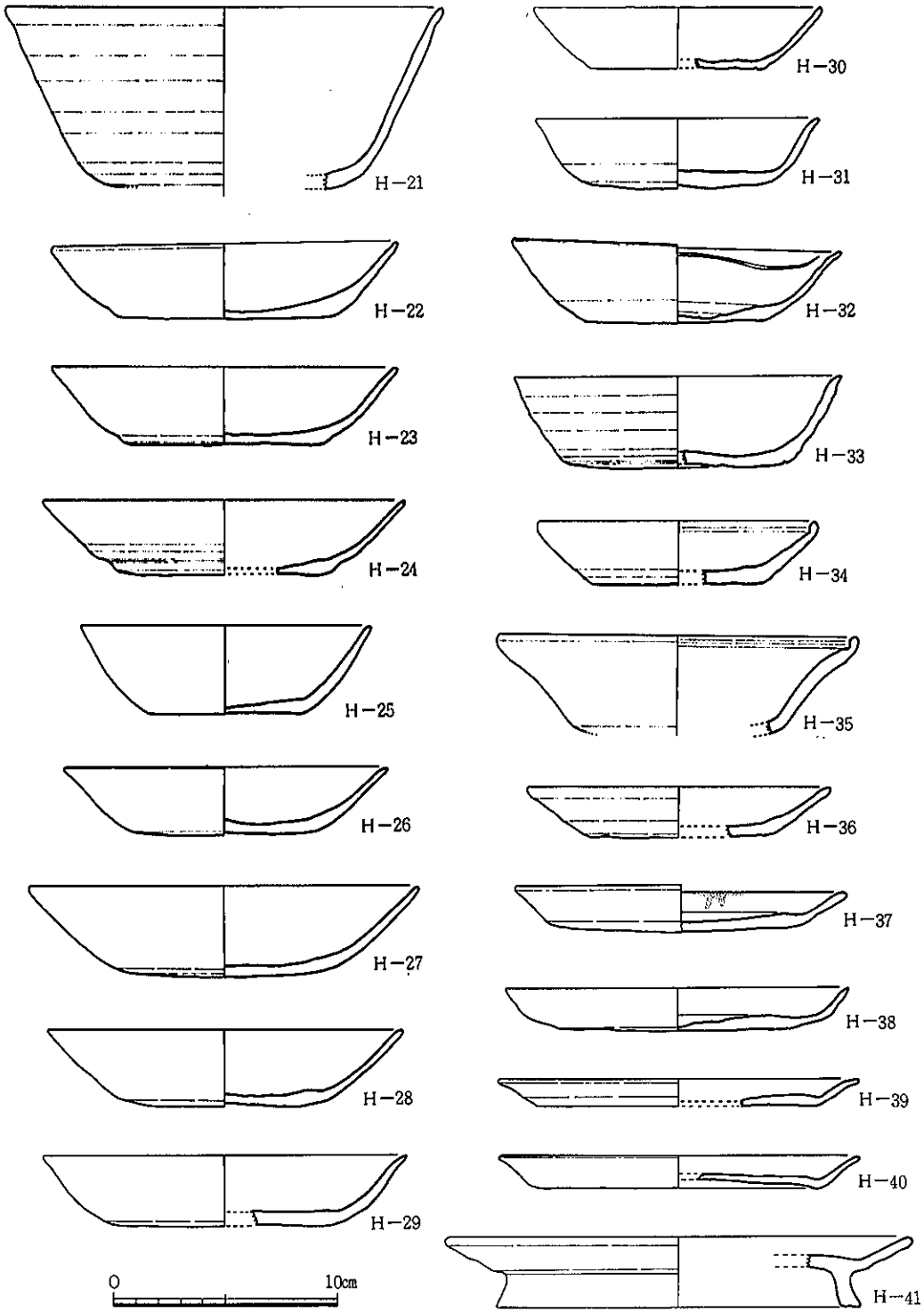


Fig. 31　土師器実測図(2)（縮尺1/3）

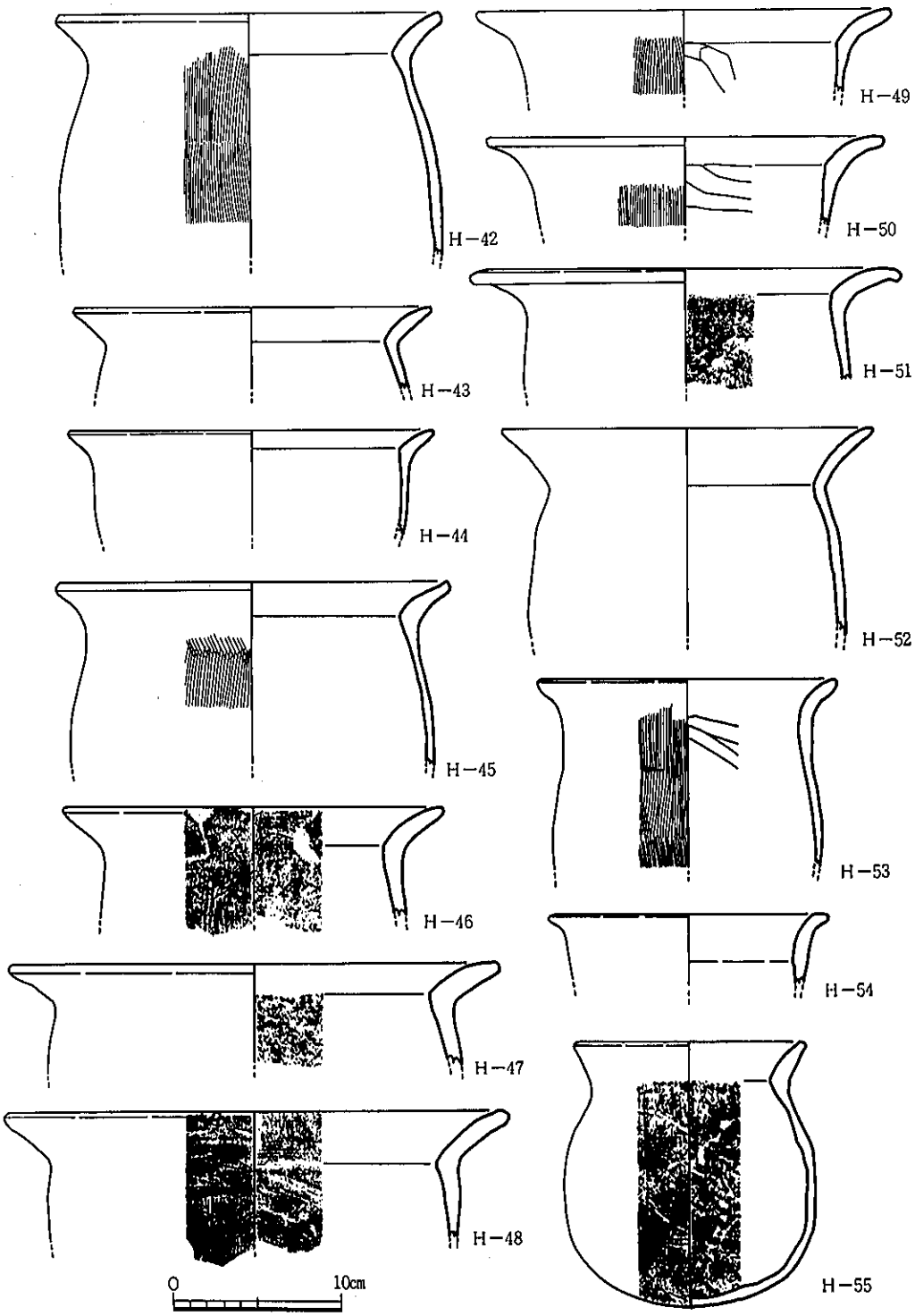


Fig. 32　土師器実測図(3)（縮尺1/4）

2．土　　器

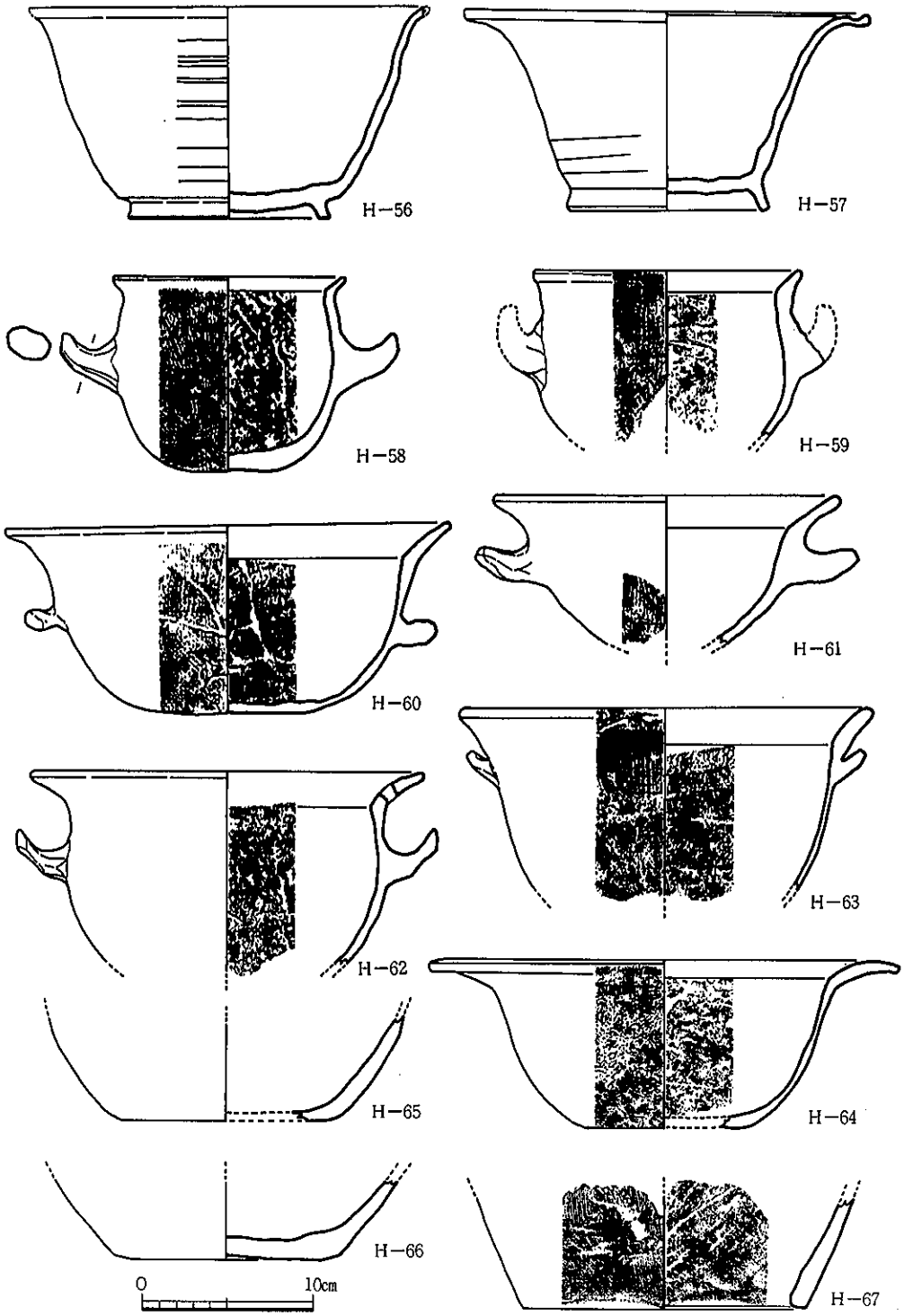


Fig.　33　　土師器実測図(４)（縮尺¼）

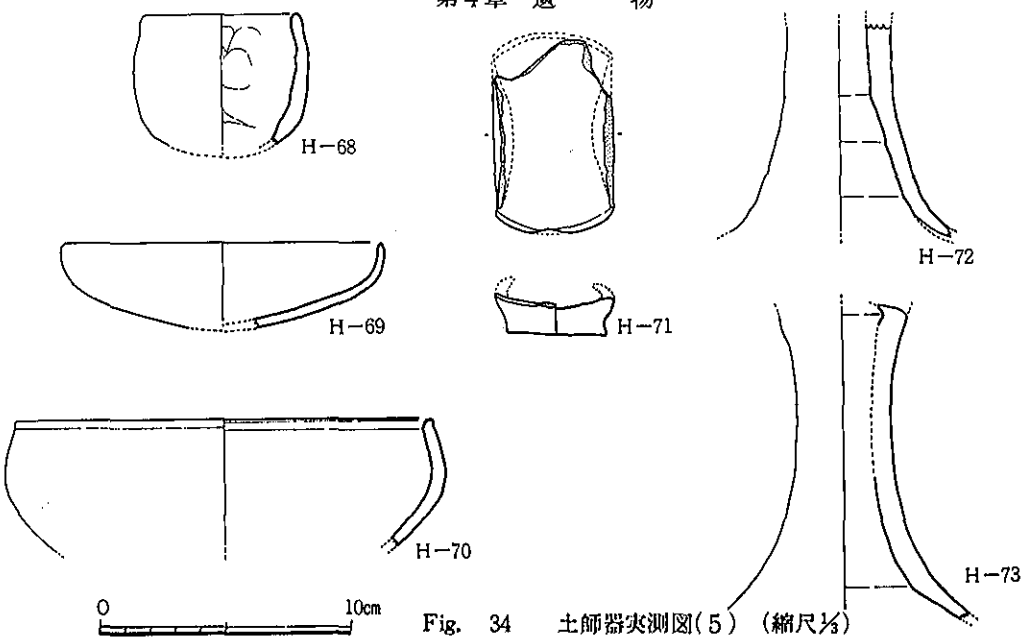


Fig. 34　土師器実測図(5)（縮尺1/3）

は大形と小形のものとが区別できそうである。最大で口縁30cm（H55）、最小で口径14cm、器高15.8cmを測る。各々はH42・43がPit.31、H45がPit.69、H46が1号掘立柱建物、H47が土坑2、H50がPit.71、H51がPit.9、H52が5号溝、H54がPit.28、他は包含層の出土である。

高台付鉢（H56・57）　各れも完器である。H56は緩く外反する口縁と底部端よりやや内側の位置に低い高台を有する鉢。外面篦横みがき、外底部に「象」の墨書があったが洗浄の際消失した。土坑1出土。H57は朝顔状に開く口縁の端部が跳上げとなり底部端に細い高台を有する鉢。外面篦ナデおよび横ナデで底部は篦切離し。Pit.33出土。

把手付甕（H58・59・62・63）　各れも把手を除けば甕の形態・成形上の特徴と変わらないがH63の様に偏平な把手が口縁下端に極端に接近するものとそうでないものとがある。また全てに煤の付着が著しく、H62では口縁に1次的穿孔痕がみられる。各々はH62が9号溝、他は包含層。

把手付鉢（H60・61）　甕形のものに較べて浅く鉢形であるが甕と成形上の作業は変わらず煤の付着が著しい。H60は完器で把手は胴部中位にあって他に比べて非常に小さくH61と対照的である。各々はH60がPit.1、H61が11号溝出土。

鉢（H64〜66）　H64は甕（H51）に類似しやや垂れ気味の口縁で、成形は甕と同様で煤が厚く付着。H65・66は器色淡褐色を呈し、胎土・焼成共に良好。H65が9号溝、他は包含層出土。

甑（H67）　器色黄褐色を呈し、外面縦刷毛目、内面篦削り調整。径17cm、包含層出土。

椀（H68〜70）　H69は手捏ね土器。各れも焼成は良好。H69の口縁13.6cm、H70の同17.6cmを測る。H68はPit.50出土。

耳皿（H71）　耳部を欠失する。器色淡褐色で焼成良好。包含層出土。

Tab. 2　土師器一覧表　(単位 cm)

No.	遺構；グリット	器種	法量	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig.	PL.
H－1	3号溝；I－10	坏蓋	口径14.2；器高 3.7	外面天井部ヘラ削り，他はヨコナデ	精良	堅緻	淡黄褐色		30（H－1～20）	32
H－2	6号溝；K－16	高台坏	口径15.2；器高 3.7		砂粒少	軟質	淡褐色			32
H－3	包含層；F－13		底径 9.6；高台高0.3	高台に削り調整	砂粒少	普通	淡黄褐色			
H－4	5号溝；C－16		底径10；高台高 0.7		粗砂多	不良	淡褐色			
H－5	包含層；C－6		底径11.6；高台高0.7		細砂多	良好	赤褐色			
H－6	包含層；H－4		底径10.2；高台高1.0		粗砂多	不良	淡褐色			32
H－7	包含層；O－11		底径14.4；高台高0.7							
H－8	包含層		底径11.4；高台高1.5		精良	良好	淡褐色			
H－9	8号溝；H－3			外面底部ナデ調整	精良	良好	淡黄褐色			
H－10	包含層；H－4				精良	良好	淡黄褐色			
H－11	10号溝；N－9			内外面ヘラ状のヨコナデ調整	精良	普通	淡褐色			
H－12	包含層；B－10			内外面ヨコナデ調整	粗砂多	良好	暗褐色			32
H－13	10号溝；N－12		底径12.2；高台高0.8	内外面ヨコナデ調整	精良	良好	淡褐色			
H－14	包含層；G－3		底径8.6；高台高0.8	内外面ヨコナデ調整	精良	良好	赤褐色			
H－15	包含層；A－12		底径9.2；高台高0.7		粗砂少	良好	淡褐色			
H－16	土坑2；K－16		底径9.8；高台高0.8	内外面ヘラ調整	砂粒少	普通	淡褐色			
H－17	包含層；I－7		底径7.4；高台高0.5	内面ナデ，外面ヨコナデ調整	砂粒少	普通	淡黄褐色			
H－18	包含層；G－1		底径8.0；高台高0.7	内外面ヨコナデ調整	精良	良好	淡灰色			
H－19	1号建物柱穴		底径8.8；高台高3.4		細砂少	良好	黄褐色			
H－20	8号溝；H－3		口径13.0；器高 9.0	外面ヨコナデ(？)	粗砂少	不良	暗赤褐色			32
H－21	1号建物柱穴	坏1類	口径19.6；器高 8.1	外面ヘラ調整	砂粒少	普通	淡褐色		31（H－21～41）	
H－22	ピット31；B－9	坏2類	口径15.0；器高 3.8	内面ナデ，外面ヘラ調整	細砂少	普通	灰褐色			
H－23	8号溝；H－3		口径15.0；器高 3.4		粗砂少	良好	赤褐色			
H－24	包含層；G－2		口径16.6；器高 3.4		粗砂少	普通	灰褐色			
H－25	包含層；E－4	坏3類	口径15.0；器高 4.0		精良	不良	橙色			32
H－26	ピット69；L－13		口径15.2；器高 3.1		精良	不良	黄褐色			
H－27	包含層；H－10		口径17.0；器高 4.1		精良	良好	赤褐色			
H－28	包含層；E－8		口径16.0；器高 3.5		精良	良好	黄褐色			
H－29	包含層；E－6	坏4類	口径17.0；器高 3.5		粗砂多	普通	赤褐色			
H－30	包含層；E－5	坏3類	口径13.0；器高 2.5		精良	普通	赤褐色			
H－31	包含層；G－2	坏4類	口径13.2；器高 3.4	底部ヘラ切り離し(？)	粗砂少	良好	赤褐色			
H－32	ピット31；B－9		口径14.6；器高 3.7	内外面ヨコナデ，内面に沈線	細砂少	良好	赤褐色	内面に煤		32
H－33	1号溝；I－4		口径15.6；器高 4.1	内外面ヨコナデ調整	細砂少	普通	暗褐色			32
H－34	包含層；B－10	坏5類	口径13.0；器高 2.7		細砂少	普通	暗褐色			
H－35	2号溝；F－6		口径14.4；器高 4.5	外底部に横ヘラ研磨	精良	良好	暗褐色			
H－36	包含層；E－4	皿	口径13.2；器高 2.5		精良	普通	淡黄褐色	内面に煤		
H－37	ピット31；B－9		口径14.8；器高 2.1	外面ヨコナデ調整	精良	良好	黄褐色	口縁に煤		32
H－38	包含層；C－5		口径15.0；器高 1.9		精良	良好	赤褐色			32
H－39	包含層；G－3		口径16.6；器高 1.4	外面ヨコナデ調整	精良	普通	赤褐色			32
H－40	瓦溜；A－12		口径16.8；器高 1.5		精良	良好	黄褐色			

第4章 遺　　物

（単位　cm）

No.	遺構；グリット	器種	法　量	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備　考	Fig.	PL.
H－41	包含層；F－5	高台皿	口径11.0；器高 3.2		粗砂少	良好	暗赤褐色		31	32
H－42	ピット31；B－9		口径23.2；	内面ヘラ削り，外面ハケ目調整	粗　砂	普通	暗褐色		32（H－56～H－67）	
H－43	ピット31；B－9		口径23.2；	内面上方へのヘラ削り調整	粗砂少	普通	褐　色			
H－44	包含層；I－3		口径22.0；		粗砂多	不良	暗赤褐色			
H－45	ピット9；L－13		口径23.0；	内面上方へのヘラ削り 外面縦ハケ目調整	細砂多	普通	暗褐色	外面煤付着		
H－46	1号建物柱穴		口径12.6；	内面上方へのヘラ削り 外面縦ハケ目調整	粗砂少	普通	灰褐色	外面煤付着		
H－47	土坑2		口径29.0；		砂粒多	不良	淡黄褐色			
H－48	包含層；B－9		口径30.0；	内面口縁ハケ目，体部ヘラ削り 外面縦ハケ目調整	細砂多	堅緻	黄褐色	外面煤付着		
H－49	包含層；I－4		口径24.4；	内面上方のヘラ削り 外面縦ハケ目調整	細砂多	不良	淡黄褐色	外面煤付着		
H－50	ピット71；K－13		口径23.6；		精　良	堅緻	暗褐色	煤付着		
H－51	ピット9；E－4		口径26.0；	内面ヘラ削り，外面ナデ調整	粗砂少	普通	暗褐色	内面煤付着		
H－52	5号溝；L－16		口径22.4；		砂粒多	不良	淡橙色			
H－53	包含層；		口径17.6；	内面斜め方向のヘラ削り 外面縦ハケ目調整	細砂多	普通	灰褐色	外面煤付着		33
H－54	ピット28；C－6		口径17.0；		砂粒多	普通	暗褐色			
H－55	包含層；O－11		口径14.0；器高15.8	内面ヘラ削り，外面ハケ目調整	砂粒少	良好	黒褐色	外面煤付着		33
H－56	土坑1；P－13		口径23.2；器高12.5	内面ヨコナデ，外面ヘラ研磨	精　良	普通	灰褐色	底部に墨書	33（H－56～67）	33
H－57	ピット33；C－10		口径24.0；器高19.0	内面ヨコナデ，外面ヘラナデ 底部ヘラ切り離し	砂　粒	軟調	黄灰色			33
H－58	包含層；		口径14.0；器高11.7	内面ヘラ削り，外面ハケ目調整	粗砂少	普通	黒褐色	外面煤付着		33
H－59	包含層；A－1		口径15.8；	内面ヘラ削り，ヨコナデ 外面ハケ目調整	精　良	良好	暗褐色	外面煤付着		
H－60	ピット1；G－1		口径26.0；器高13	内面ヘラ削り，ヨコナデ 外面細かいハケ目調整	砂　粒	良好	黄褐色	外面煤付着		33
H－61	11号溝；M－14		口径11.2；	内面ヘラ削り，ヨコナデ 外面粗いハケ目調整	粗砂粒	良好	暗褐色	外面煤付着		
H－62	9号溝；K－12	把手付製	口径23.8；	内面ヘラ削り，指押え	粗砂粒	普通	赤褐色	口縁穿孔		
H－63	包含層；J－3		口径24.0；	内面ヨコナデ，ヘラ削り 外面細かいハケ目調整	砂　粒	良好	赤褐色	外面煤付着		33
H－64	包含層；O－14	鉢	口径25.0；	内面ヘラ削り，外面ハケ目調整	粗砂粒	普通	黒褐色	外面煤付着		33
H－65	9号溝；K－12		底径12.0；		砂　粒	良好	淡褐色			
H－66	包含層；F－5		底径13.4；	内面ヨコナデ，外面底部板目	精　良	良好	淡褐色			
H－67	包含層；G－13	甑	底径17.0；	内面ヘラ削り，外面ハケ目調整	細砂粒	普通	黄褐色	端部煤付着		
H－68	包含層；F－7	椀	口径 6.0；器高 5.8	手づくね	粗砂粒	良好	灰褐色		34（H－68～73）	32
H－69	ピット50；L－9		口径13.6；器高 3.5		精　良	良好	淡褐色			32
H－70	包含層；H－4		口径17.6；		粗砂粒	堅緻	暗赤褐色			
H－71	包含層；H－13	耳皿	口径 4.8～8.1		精　良	良好	淡褐色			32
H－72	包含層；	高坏	現長 8.5；	外面下部はヨコナデ	精　良	良好	淡褐色	脚部のみ		32
H－73	瓦　溜；B－11		現長12.0；	外面下部はヨコナデ	精　良	良好	淡褐色	脚部のみ		32

2．土　　器

高坏（H72・73）　各れも脚部のみである。淡褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好、外面下部には横ナデを残す。H73は瓦溜出土。

陶・磁　器（Fig.35、PL.34・35）

陶磁器は、緑釉陶器５点、中国製青磁86点、中国製白磁10点、日本製と思われる陶器６点、同じく染付白磁３点の総数110点が出土したが、うち24点を図示した。これらのうちＴ９は８号溝から検出されたが他はすべて表土層か包含層からの出土である。

緑釉陶器（Ｔ１～３）　Ｔ１は淡灰色の精良な胎土で焼成もよく、釉は全面にかかり、釉色はやや青みのある緑色で発色も良好といえる。高台部の小破片のため全形は知りえないが、高台のつくりはシャープである。Ｔ２の胎土はうすい淡黄色の精製土で焼成もよい。うすい緑色の釉は全面に均一に施釉されているが、見込み部は発色がわるい。高台部は磨滅しているが、当初より背のひくい丸みのある高台であったものと思われる。Ｔ３はＴ２と同じような胎土と焼成であるが釉調はさらによく見込みの発色も輝きを増している。Ｔ１・２とも高台は垂直につけられ、体部と底部とは不明瞭ながら境をもつようであるが、Ｔ３の高台は外方に突出しており体部はそのまま内弯しながらのびていることなどの違いを指摘できる。

青磁　青磁にはいわゆる越州窯系、龍泉窯系、同安窯系とよばれるものなどが出土したが、そのうち越州窯系青磁が37点あり約半数を占めており13点を図示した。最近太宰府出土の中国製陶磁器の型式分類と編年について発表されているが本遺跡の越州窯系青磁もその施釉の方法により２類に分けられる。Ⅰ類（Ｔ４～10）は全面に施釉されているもので、Ⅱ類（T11～16）は体部外面下半部が施釉されず露胎となっているものである。Ｔ４は口径17cmを測る椀の口縁部で、胎土は精良で堅緻な焼成をなしており、釉色は内外面ともうすい茶緑色を呈し発色もいいことからⅠ類とした。Ｔ５・６は輪状の削り出し高台を持つもので高台径はＴ５が 8.2cm、Ｔ６が7.2cmを測る。Ｔ５・６とも見込みに重ね焼きの目跡が残っており、釉色はやや暗い黄緑色で発色のよい釉調となっている。Ｔ７～10はいわゆる蛇の目高台で、釉色はうすい茶緑色を呈しやや発色はＴ４～６に劣る。高台径は 4.6～６cmでやや小さく内外面に目跡が認められる。T11～13はうすい灰緑色の釉で焼成が完全でないのかムラが多い。T14・15は蛇の目高台というのではなくナデて上げ底状となっている。胎土は灰色で黒褐色の小砂粒を多く含んでいる。T16は輪状の削り出し高台を持つが背がかなり低くＴ５・６の輪状高台のつくりとは大きく異なる。T22は見込み内底に櫛状の施文具で文様が描かれており、釉はうすい灰黄緑色で外面下半部は露胎である。同安窯系の小椀であろう。T23は見込み内底に草花文を描いた皿で底部のみが露台である。T24は見込み内面に目跡があり、口辺部を欠くが体部より反転してのび鉢となるのであろう。釉色は黄緑色で発色わるくムラがあり高台部は施釉されない。

白磁（T17～21）　T17・18は椀の口縁部で玉縁となっている。T19は蛇の目高台で釉、胎

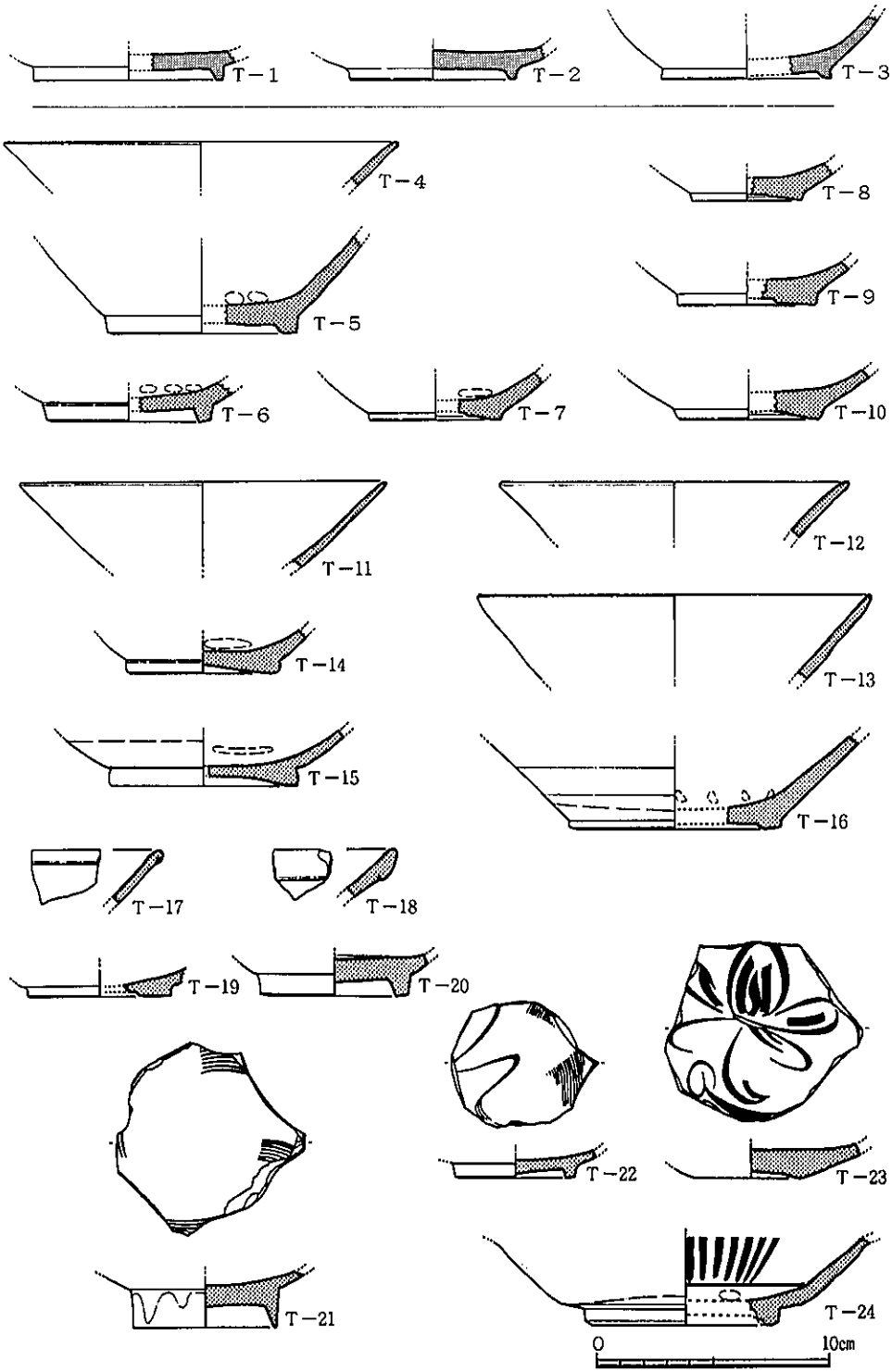


Fig.　35　　陶・磁器実測図（縮尺1/3）

土とも純白で焼成もよい。T20の見込み内底は輪状に釉を削り取られている。T21は背の高い細みの高台を削り出しており、見込み内底に櫛状の施文具で文様を描いている。

墨書土器　ヘラ書土器　（Fig.36、PL.36）

図示したのは7点であるが、他に字が判読できなかったものが数点ある。

S82　須恵器の坏蓋で直径18.8cmを測る。胎土には2～3mm大の砂粒が多く見られ、焼成ややあまく内外面とも灰色を呈している。天井部は¼程をヘラ削りしており、口縁は小さく折り曲げて嘴状となっている。坏蓋の分類ではⅠB4類に該当する。墨書はつまみ頂部に見られ「寺」と読める。全体の¼程が現存しているが、他に墨書はない。

S83　包含層から出土した須恵器坏蓋で直径15.2cm、器高2.2cmある。胎土は精良で内外ともに淡灰色を呈している。口縁部の折り曲げは小さいというよりもむしろ退化消失しS82よりも後出の特徴を持っている。坏蓋の分類ではⅠC類に該当し8世紀末の時期が考えられる。墨書は天井部に「中」の1字が見られる。

S84　瓦溜より出土した須恵器有高台坏で、口径13.2cm、器高4cmある。断面方形の高台は、底部端よりやや内側に垂直に貼付されており、体部は底部と丸みのある境を持って内弯ぎみに立ちあがっている。胎土はわずかに砂粒を含有しており、焼成普通で淡灰色を呈している。墨書は底部高台内に2字みられるが、2字とも判読しがたい。有高台坏の分類ではⅠ類に当り、7世紀後半から8世紀前半の時期が考えられる。

S85　6号溝から出土した破片で、皿底部の中心部にあたるようである。墨書は底部外面に見られ「造寺」と読める。内面は墨痕が全面に残っており硯に使われていた可能性がある。また、内面には意識的につけられたかは速断できないがわらび状のヘラ書がある。

S86　包含層からの出土で、小破片のため器種が明瞭でない。胎土は精良であるが、焼成ややあまく内外面とも灰色を呈している。墨書は1字で、上部を欠きやや不明瞭なこともあるが、「堂」と読んでいいだろう。

S87　包含層からの出土である。墨書裏面は雑なナデ調整がされており器種は皿と考えられる。墨書は現在「用」の1字が判読できるが上に字の一部が認められ少なくとも2字以上書かれていたものと考えられる。

S88　10号溝から出土した坏蓋で、天井部の小破片である。胎土は砂粒少なく精良であるが、焼成悪く内外面とも灰白色を呈している。ヘラ書は天井部にあり「東」と読める。掘りは鋭利で、その切りあいで現在の筆順と同じであることがわかる。かなり整った字体で達筆である。

H74　包含層から出土した土師器の底部で、器種は鉢と思われる。胎土・焼成とも良く、外面は淡赤褐色、内面は淡黄色である。ヘラ書の掘りは細かく鋭利ではあるが全体的に磨滅しているために断定はできないが「佛」と読める。筆順も矛盾していない。

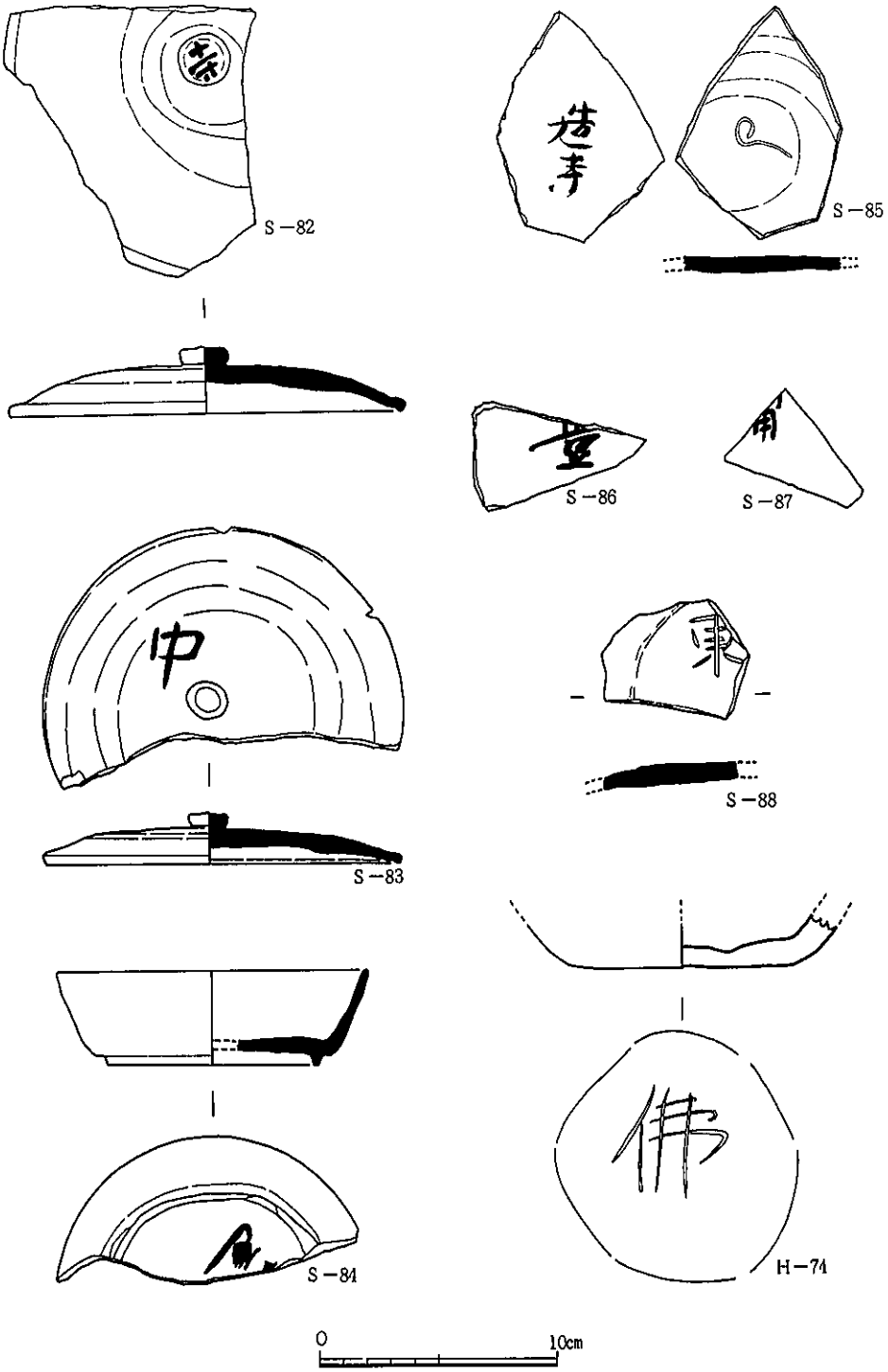


Fig.　36　　墨書土器・ヘラ書土器実測図（縮尺⅓）

3．木簡・木器（Fig.37・38、PL.39・40・41）

木簡　3点の木簡は10号溝において検出したものであるが、いずれも折損しているため原形の推定は不可能である。1には下端近くに2個の小孔があり、穿孔の状況からみて釘孔と考えられるが、その目的などは明らかでない。①は現存長12.2cm、最大幅4.1cm、厚さ0.7cmを測る。右方上半部に「═□□□－□」の4字が見えるが、全体的に墨が薄く、その判読は困難である。特に、現第2次については「師」字にきわめて近似しているが、右端にいわゆる縦棒が見え、「師」字とみなすには画数が多くなるので、現時点では推読するにとどめておきたい。2は、便宜的に二片に分けたが、本来は上下に接続し、現存長18.2cm、幅1.5cm、厚さ0.2～0.5cmを測る。3は現存長11.5cm、幅1.6cm、厚さ0.3cmを測る。この2点はいずれもわずかな墨痕が見られる程度にすぎず、その上下関係さえも判定しがたい。（倉住靖彦）

木器　加工の痕跡が判断できる木製品は30点ほど出土した。

1・2は櫛の破片である。1は約半分か3分の1残存するもので2に比べ断面でも薄く櫛自体も小型である。これに対して両側辺を欠損している2は断面が厚く櫛の歯自体も1より2の方が密で巾もある。材質鑑定は行なっていないが肉眼的には1も2もツゲと思われる。両方とも歯の上部に浅い溝を持つ。1の上面は丸みを持つように加工を加えているのに対して2は両面から頂部が三角形になるような加工を加えている。1はPit.55より、2はN－11グリットの遺構基盤となる白褐色シルト層上面より出土した。1は現存長2.5cm、横2.6cm、厚さ0.4cm、2は現存長2.6cm、横2.6cm、厚さ1.1cmを測る。3は第10号溝内より出土した木器で用途は不明である。残存部分の両方から約長さ6cm、直径0.6cm程度の穴をえぐりその先端を4回に分けて加工をほどこしている。材質不明。現存長19.0cm、直径1.4cm、穴のえぐり直径0.6cm。4は断面三角形の火箸状木器かあるいはヘラ状木器。先端部の加工部分には火を受けた痕跡を持つ。加工部分は先端部のみで他は割ったままの状態である。第10号溝から出土。現存長17.8cm、巾0.9cm、厚さ0.7cmを測る。材質不明。5は9号溝内から出土しているが5と同様な形態をしたものが9号溝から2点、4・5号溝から各1点ずつ計5点出土している。柾目の材で形態的に直方体を示し表面等には加工は認められない。現存長5.4cm、巾4.5cm、厚さ4.5cmを測り材質は不明。6は第10号溝（底面）から出土した木製品で欠損した側面をのぞいてすべて加工がある。柾目材を使用している。側面（a）に縛のような痕跡を8ケ所止めている。a・c面には削り跡が残るほど保存状態が良いのに対してb面は表面が剥離された状態である。このb面に赤い付着物が約5ケ所観察される。両側面部に薄い切込みの加工が認められる。現存長28.7cm、巾4.2cm、厚さ1.3cmを測る。材質は不明。7は第10号溝内から出土した曲物である。この他破片が同時に検出され7と接合するものと思われる。火を受けた痕跡が中央部にある。全面に削り痕が認められ現存長23.8cm、巾3.3cm、厚さ0.2cmで材質は不明である。

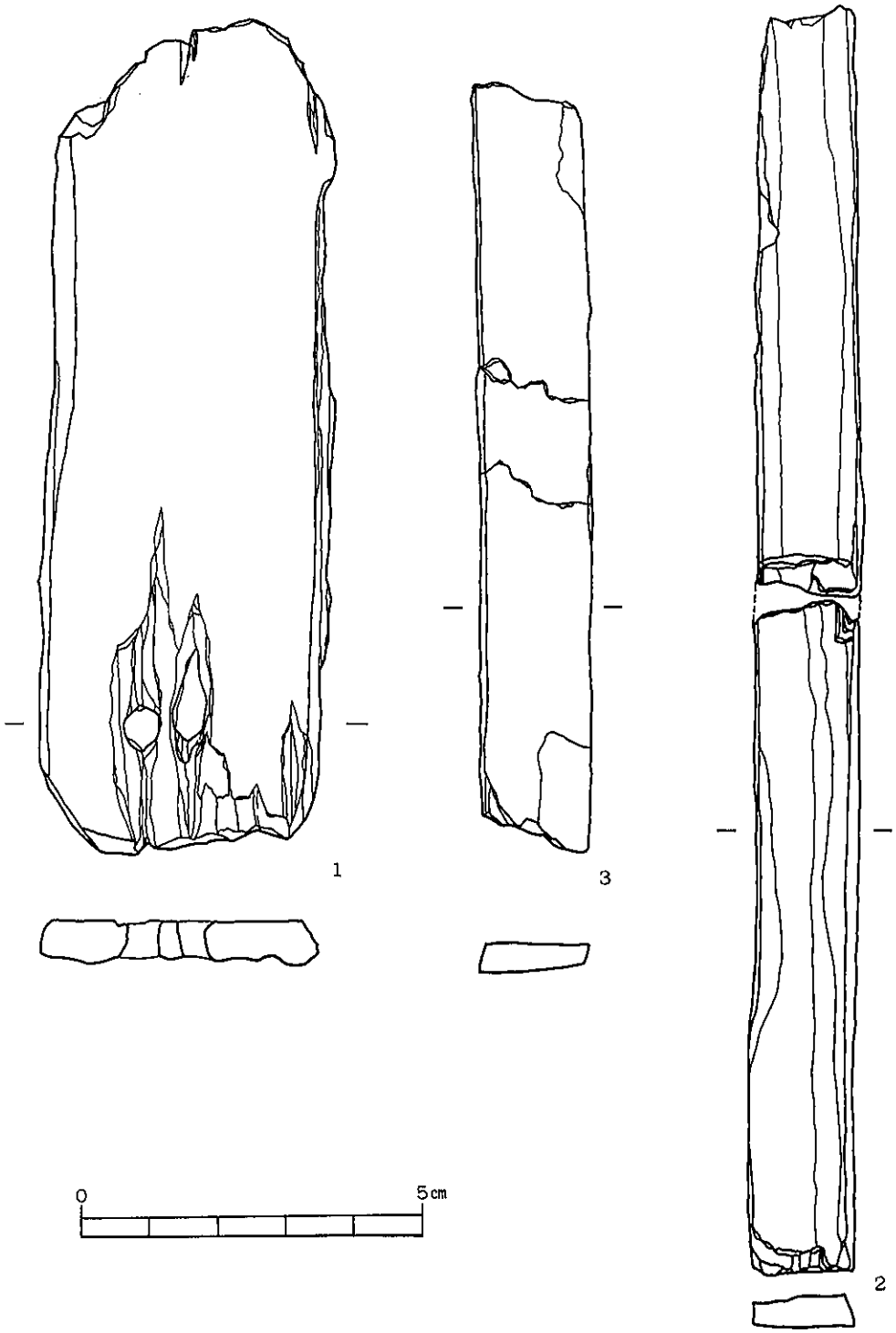


Fig.　37　　木簡実測図（縮尺1/1）

4．ガラス製品・鞴羽口

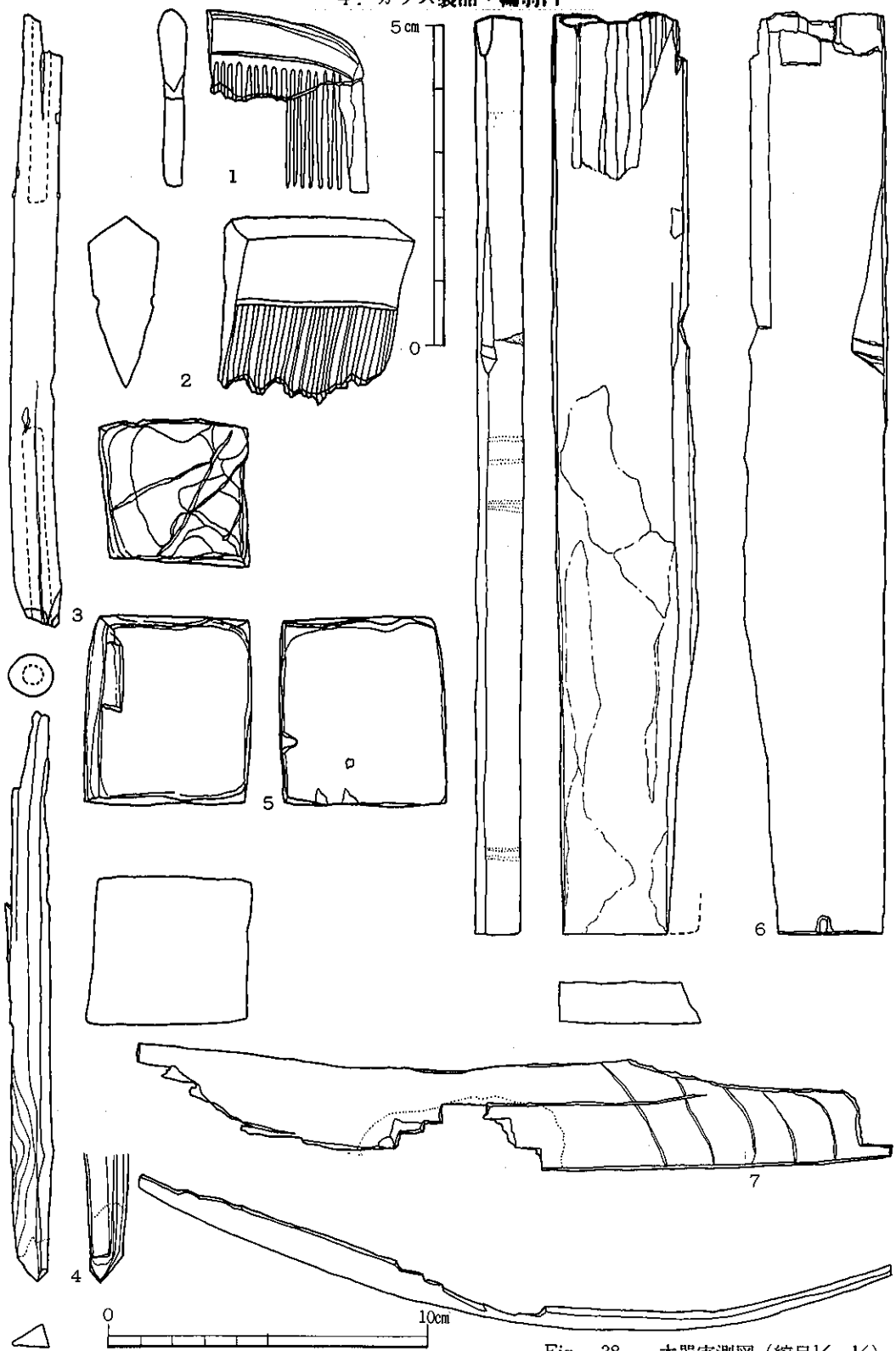


Fig. 38　木器実測図（縮尺1/1・1/2）

4．ガラス製品・鞴羽口（Fig.39・40、PL.42）

ガラス製品は1点、鞴羽口破片は14点出土した。鞴羽口片1点を除き他は包含層出土である。

ガラス製品は包含層からの検出遺物で時期的には不明としなければならない。包含層出土遺物は縄文時代の石器から12世紀の青磁まで含まれているからである。ガラス製品の表面に花文（菊花文と思われる）の押印がある。器形は口縁が波をうつ皿か鉢のたぐいであろう。色調はすき透った青色を呈する。

鞴羽口は14点の内1点（Fig.40－2）のみが第7号溝（A－8グリット）内上部から検出され他は包含層である。この1点の羽口は破損した部分に灰褐色のガラス質の付着がみられる。1は羽口の先端部のみで表面・内面とも青灰色を呈する。色調は全体的に灰色を呈し硬質に焼成されている。3は羽口の両端が欠損している。色調は1・2と同様に灰色で焼成は硬質である。

鉱滓（PL.42）30個ほど包含層と7号溝等より出土。製錬滓か鍛冶滓かは不明。

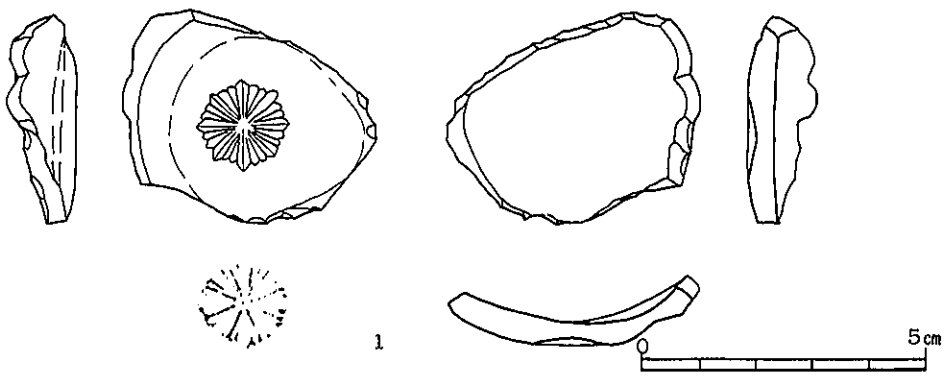


Fig.　39　　ガラス製品実測図（縮尺3/4）

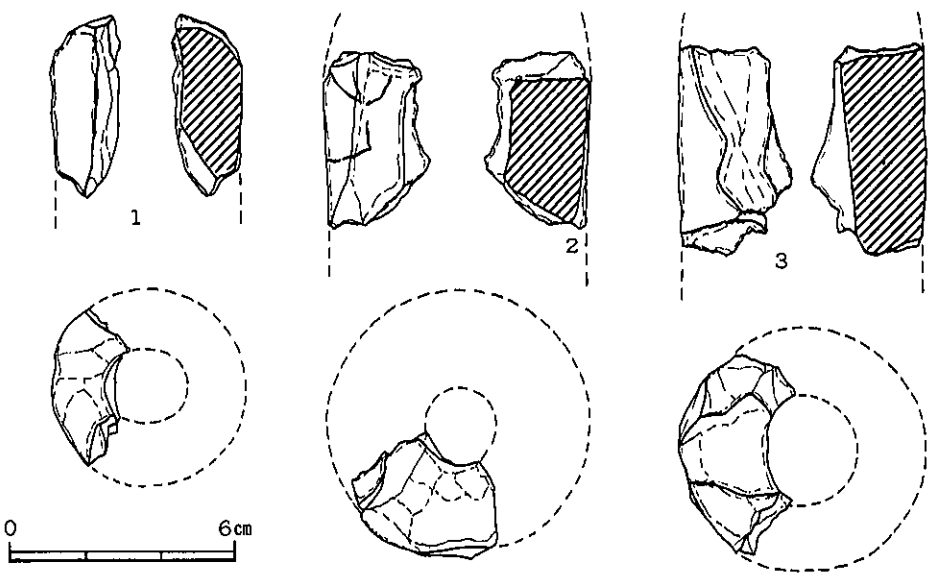


Fig.　40　　鞴羽口実測図（縮尺1/2）

5．柱　　根

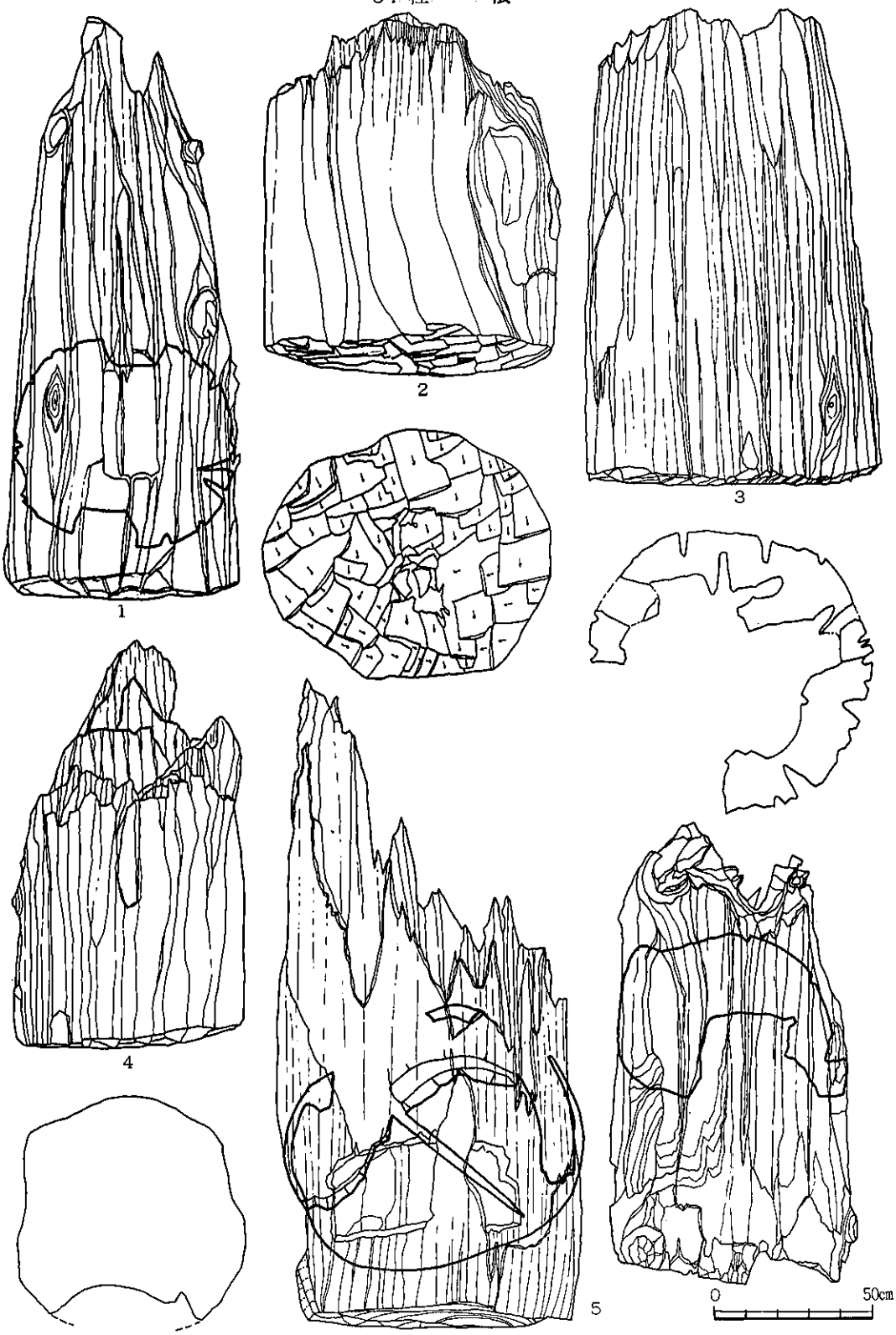


Fig.　41　　1号掘立柱建物柱根実測図（1）（縮尺1/10）

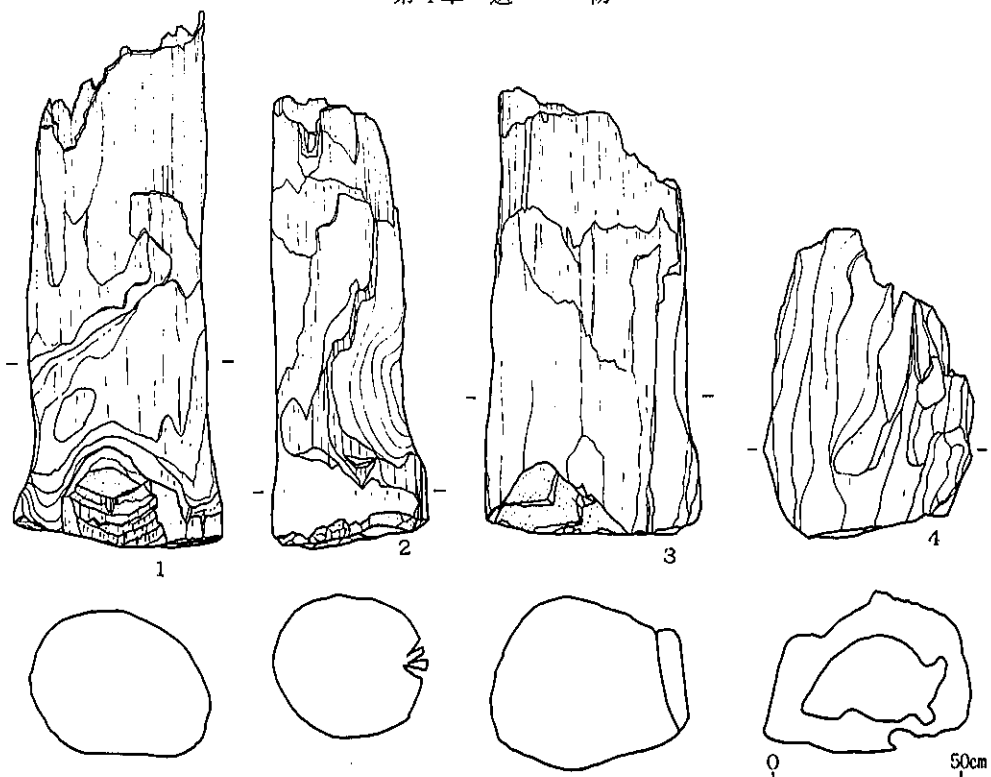


Fig. 42　2号掘立柱建物柱根実測図(2)（縮尺1/10）

5．柱根（Fig.41・42, PL.43）

第1号掘立柱・第2号掘立柱建物柱根22柱の内保存状態の良い第1号の6柱、第2号の4柱を図示した。Fig.41の1は8号柱穴より検出した柱根で現存する長さ90cm、直径34cmで表裏に凹面を持つ。2ほどではないが底面に削痕を持つ。2は5号柱穴の柱根で長さ50cm、直径45cm。底面に削痕が明確に残り使用道具の幅は7cmでその方向は上からと両側面からで下からの加工は認められない。3は4号柱穴から出土した柱根で中心部と側辺が現存していない。長さ73cm、直径45cm。左側辺部一ケ所に凹面がある。4は8号柱穴から出土し長さ62cm、直径35cm。5は7号柱穴から出土した柱根でこの一点だけが横位の状態で出土した。底部に削痕がわずかに観察でき表裏に凹面が認められる。長さ100cm、直径47cm。6は6号柱穴の柱根である。下面は腐食してない。長さ70cm、直径34cmである。Fig.42は2号建物から検出した柱根である。1は13号柱穴出土で現存する長さ70cm、径28cmを測る。底面には削根は認められないが表面下端に削痕が認められる。2は14号柱穴より出土したもので長さ59cm、直径20cmを測る。これは底面に削痕が僅かに認められる。2も1同様表面下端に削痕が認められこれは円周部の削りと節の排除によるものであろう。3は8号柱穴出土の柱根で長さ58cm、直径26cmを測る。4は4号柱穴の柱根で中央部が空洞となっている。長さ40cm、直径26cmを測る。

6．金 属 器

鉄製品２点、銅銭１点、黄銅製（金属分析鑑定は行なっていなく肉眼による）匙、箸各１点の金属器が検出された。

黄銅製匙（Fig.43－１、PL.44）

第10号溝（M－15グリット）内の底面附近より出土した。形態的には柄が曲線を描き匙の部分は1.1cmの深さを持ち周縁に面取がある。匙の先端部にわずかな突起を持つ。柄の部分には両方から面取りを施す。また柄の先端裏側にも凹面があり使用可能な匙面である。作りは精巧で匙内面はみがきがみられる。全長25cm、匙の部分7cm、巾4.3cm、深さ0.6cm、柄の部分18cm、柄の裏面の匙の長さ4.4cm、巾1.5cm、深さ0.1cm、断面1・0.1cm、2・0.3cm、3・0.3cm、4・0.1cmを測る。

黄銅製箸（Fig.43－２、PL.44、付図－１参照）

匙と箸は同一地点（第10号溝内）から検出された。（PL.16）曲がって検出されたが匙と同様の金属で作られ形態的に箸と思われる。曲がりをなおすと22cmとなり断面は丸で直径0.4cmを測る。両端は丸みを持ち一部に黒色の附着物がある。箸の長さ21.3cm、直径0.4cm。

この２つの黄銅製金属器（匙・箸）は統一新羅より買入されたとする正倉院御物の佐波理製匙・箸との類似点が認められる。正倉院御物の匙は長匙と円匙との二種類がある。この長匙の匙面長は７cm、柄長18cmを測る。[注①] これに対して今回出土の匙は匙面長７cm、柄長18cmと同一の長さを持ち、柄の反身の具合、匙面の先端部のわずかな突起状の尖がりと柄の部分には両面からの面取りなど特徴はすべて類似している。ただ柄の先端部にみられる裏面の凹面は正倉院御物の長匙に認められずこの点だけが異なりを示す。近年韓国で統一新羅時代の遺物が出土した雁鴨池から匙セットが出土し、この匙セットが正倉院御物の匙セットと同一形式または多くの類似点を持つものとして注目された。[注②] 韓国では扶余扶蘇山とか黄海道平山から出土した匙が正倉院の匙セットと同一形式のものと考えられている。[注③] これらの点から今回出土の匙が正倉院の匙セットと同一もしくは類似している所から統一新羅製の可能性を持つものであろう。[注④]

銅銭（Fig.43－３、PL.44）

皇朝十二銭の内の一つ富壽神寶の銘を持つ銅銭である。初鋳造年代は弘仁九年11月1日（818年）で和銅開珎から５番目に作られたものである。径は2.2cmで中房の方形の長さ一辺0.7cmを測り厚さ0.1cmである。裏面には銘はない。０－11グリットの包含層より検出された。

鉄製品（Fig.43－４・５、PL.44）

鉄製品として上げられるものは４・５の２点でいずれも包含層中から出土した。４は先端の一部を曲げて環を作る壺金に類似している。現存長は5.5cm、直径0.5cmを測る。５は円形の環で直径3.7cm、厚さ0.2cm、巾1.7cmを測る。時期・用途不明。

注① 鳥毛立女屏風下貼文書の研究史林57巻６号　東野治之(1974)　②韓国古代の匙李蘭暎　③注②と同一　④注①と同じ

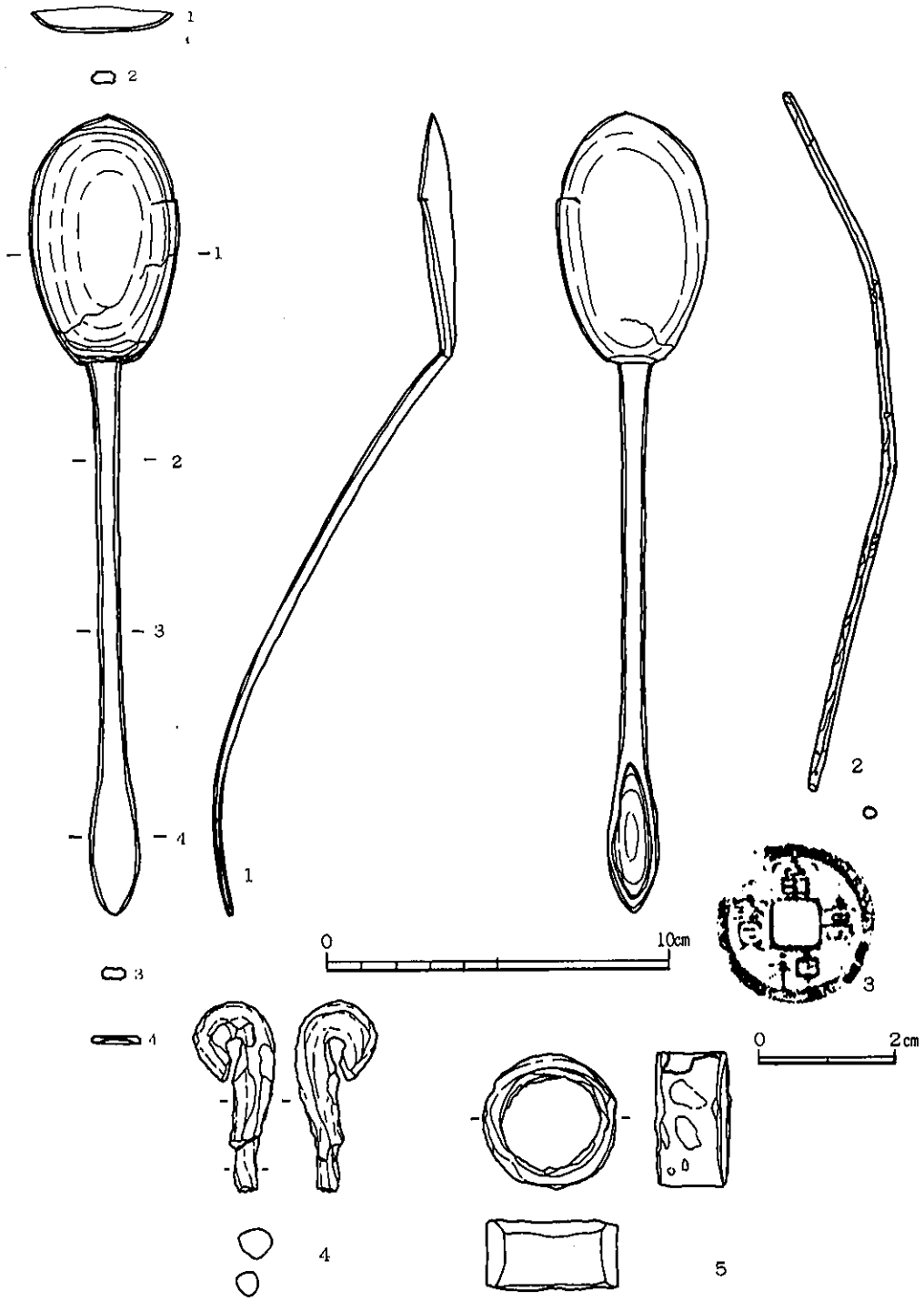


Fig. 43　金属器実測図（縮尺1/1・1/2）

7．石　　器（Fig.44・45・46、PL.42・45）

石鏃（Fig.44－1・2）　1はF－13の包含層より出土したサヌカイト製の石鏃で、基部が平坦に近く表裏面ともに二次加工が全面に及んでいる。2はPit.56より出土。先端と脚部が一部欠損しているが、素材となった黒曜石の剥片の打面側を基部とし先端部と抉入部にのみ細かな剥離を施した、いわゆる剥片鏃と称されるものである。また素材の剥離方向は一定である。

剥片（Fig.44－3）　B－7の包含層より出土した打面に自然面を持つ不定形な剥片で、側辺部には使用痕が観察されるところから素材を生かした剥片石器と考えられる。

削器・石匙（Fig.44－4・7・8）　4はH－5の包含層より出土。不定形な素材の剥片の打面側の一側辺に両面から二次加工を加え刃部を形成したもので末端部には使用痕が見られる削器である。7はE－3の包含層より出土の削器である。表面に自然面を持つ剥片の側辺部から末端部に片面からのみ二次加工が施されている。剥片の素材を生かした石器と考えられる。8はO－12の包含層より出土した石匙で、横長の剥片を素材に一側辺を片面からのみ大まかに剥離を加えている。また、つまみの部分は両面から剥離を施し形を整えている。7と同様に剥片の素材を生かした石器である。4・7・8はいずれもサヌカイト製である。

石錘（Fig.44－5、Fig.45－2）　5は非常に小形で偏平な礫の一端を両面から打欠いたものでL－16の包含層より出土しローリングにより著しく磨滅している。2は砂岩製の有溝石錘と推察されるが欠損部分が多く本来の大きさ・形状は明確でない。

尖頭器（Fig.44－6）　C－7の包含層より出土のサヌカイト製のもので、打面側を先端部とし周辺に両面から加工を施し刃部を形成している。断面は凸レンズ状を呈す、裏面の中央部には素材の剥片の剥離面が残されている。

砥石（Fig.44－9、Fig.45－3・5・6・7・8）　9は第20号溝より出土した硬質砂岩製の手持砥石と考えられる。欠損しているが比較的偏平なもので表裏面ともに使用されている。3はPit.10出土の砂岩製で表面は全面滑らかな砥石面と巾1.5cm程の溝状の擦痕を残す。火を受けたと推察される部分もあり砥石あるいは別の用途を持った石器とも考えられる。5はH－4の包含層出土の砂岩製のもので表面は平坦に研磨され、側面部には細い溝状の擦痕が見られる。一応砥石としたが別の用途も考えられる石器である。6はG－12の包含層より出土。比較的厚手の砂岩を利用したもので表面はゆるやかに凹んでいる。欠損しているため本来の形状・大きさは明確でない。7は第20号溝出土の比較的薄手の大型砥石で砂岩製。断面は長方形を呈する。砥石面は一面のみで僅かに欠損している。8はG－5の包含層より出土の硬質砂岩製の砥石で表裏面ともに使用されている。表面中央部には敲打の痕が見られ用途として石皿的な使用方法と砥石の二様が考えられる。

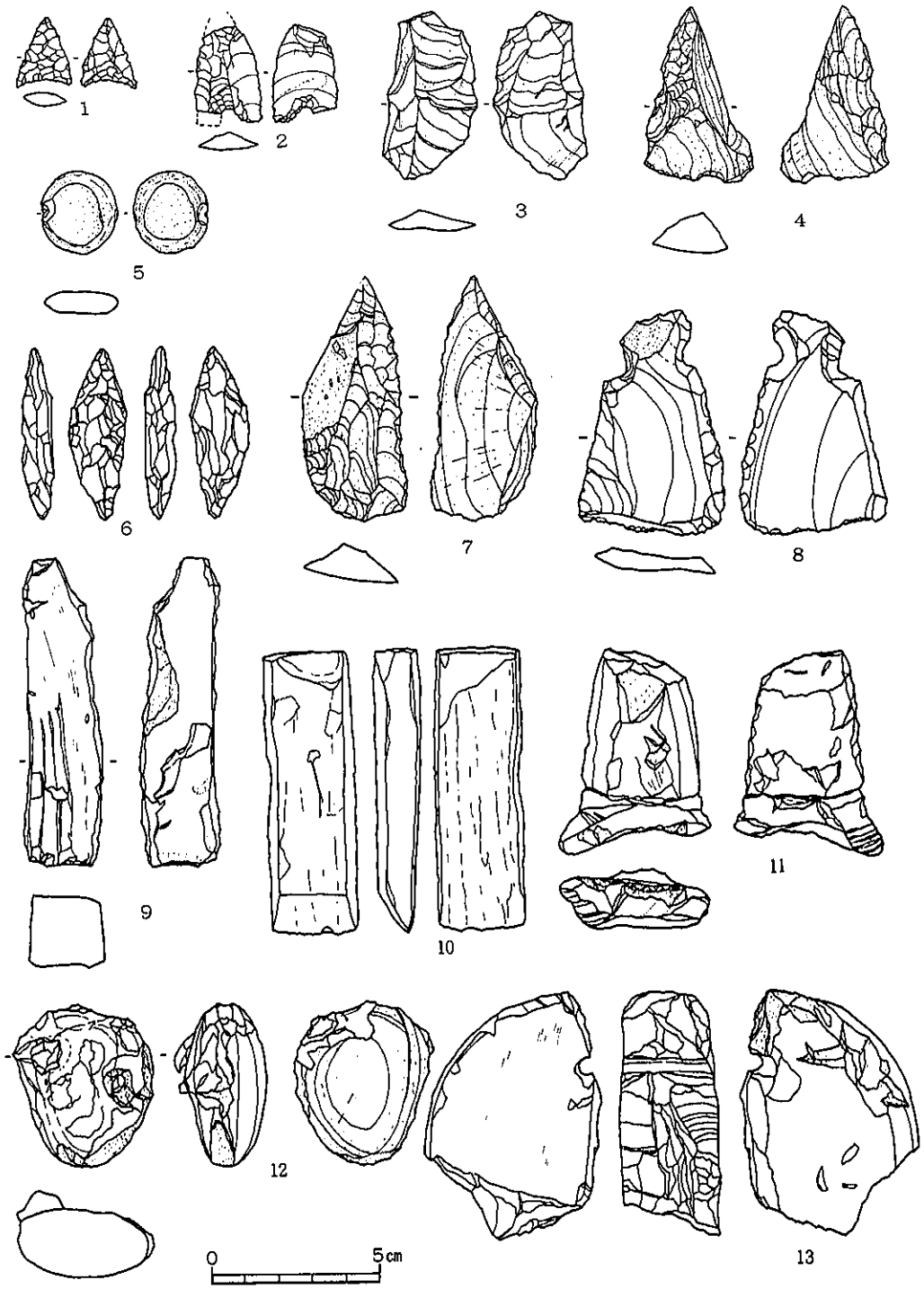


Fig. 44　石器実測図(1)（縮尺½）

7．石　　器

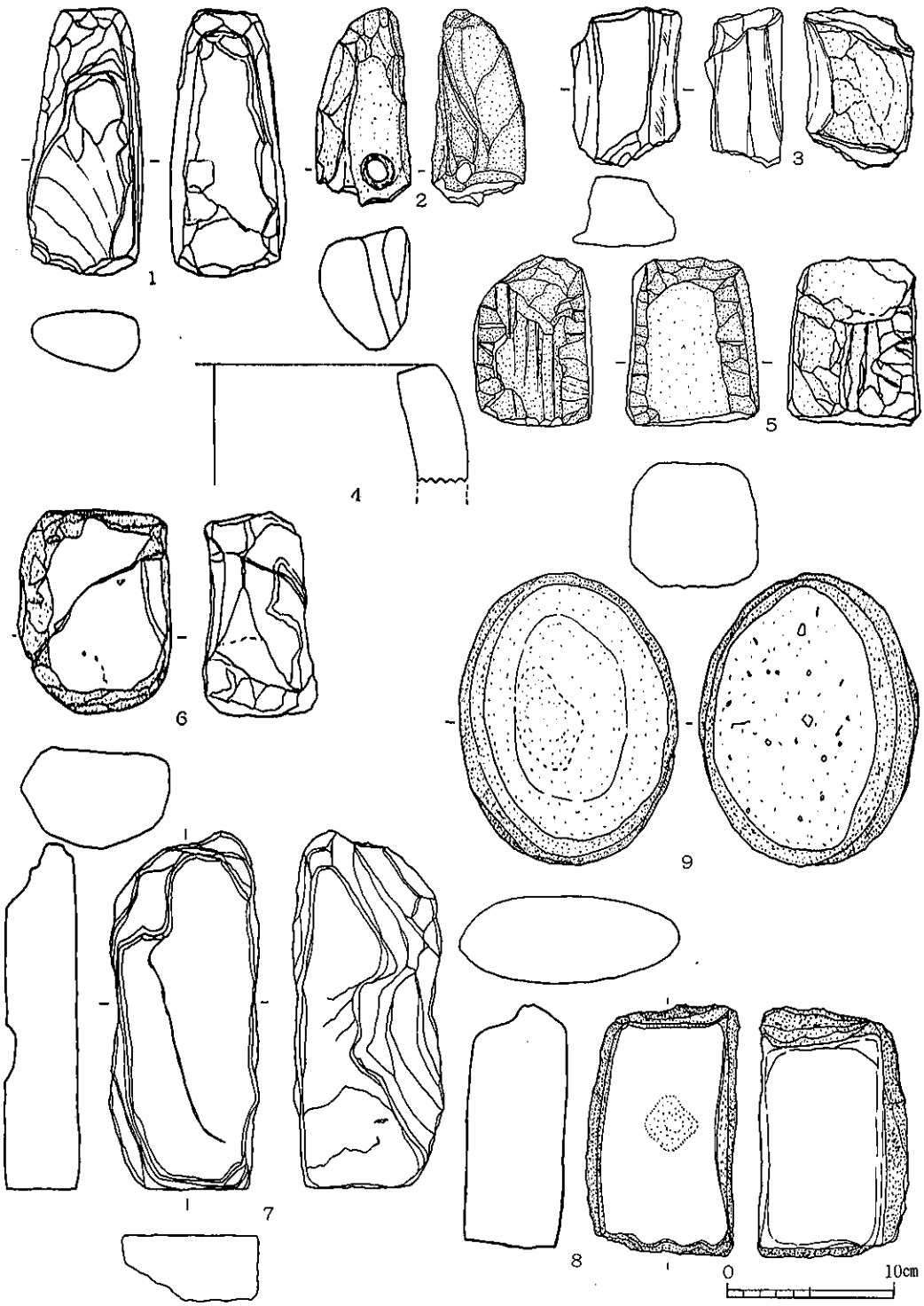


Fig. 45　石器実測図（2）（縮尺¼）

柱状片刃石斧（Fig.44－10）C－6の包含層より出土したもので強度のローリングを受けている。このため全面風化が激しく磨製部分を僅かに残すのみである。刃部の刃こぼれは使用のためか否か現状では識別は困難である。

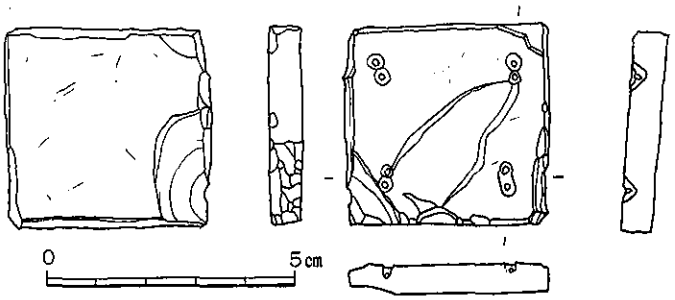


Fig.　46　　石帯実測図（⅔）

不明石器（Fig.44－11・12・13）　11はD－9の包含層より出土した滑石製品である。石鍋の肩部破片を再利用したと考えられるもので、鍔部分に浅い研磨の抉りが見られ他も全面研磨されている。この研磨が使用のためか製作上のものか現状では明らかではなく性格不明の石器である。12はB－10の包含層より出土したもので石質は不明。全体に緑色の釉がかかっていて部分的に火を受けたと考えられる形跡が認められる。また釉に附着したと思われる小石等もみられ、これらのことから土器の表面に釉をかけて焼く際に附着し火気を受けた石である。13は滑石製の性格不明の石器で半欠部分に両面から穿たれた孔が認められる。裏面は平坦に、側縁部も磨き成形されている。また表面も磨かれ中心部ほど厚みがますカマボコ状の断面を呈すると推察されるが現状では明確でない。あたかも紡錘車状製品を考えさせるが、穿孔が中央部にないため別の用途を考えるべきであろう。

磨製石器（Fig.45－1）　第2号溝より出土した。やや偏平な小形の粘板岩製の石斧である。ローリングが強度でパテナも進んでいる。表面は全体的に剝落が激しく裏面に僅かに磨製の部分が残っているだけである。刃部部分も大きく剝落している。この剝落が使用のためのものか否か現状で識別することは困難である。

石鍋（Fig.45－4）　Pit.51より出土したもので滑石製の石鍋片である。内外面ともにノミで削った後に丁寧に磨き仕上げられている。器壁は1.5cmと厚い。残存部が小さな口縁部のみで全体の形状・大きさなど明らかでない。

磨石（Fig.45－9）　第6号溝より出土。凝灰岩の偏平な礫を使用したもので周辺部は磨かれ平らに潰れたところも認められる。また表面の中央部に打痕が観察されるところからすり潰しの機能と敲石としての二様の用途を持つ石器と考えられる。

石帯（Fig.46）　包含層より出土。腰帯に用いられた銙の巡方と称される形のもので1辺が4.0cm×4.1cmとほぼ正方形に仕上げられている。表面および側面は荒削りした後丁寧に磨かれていて光沢を放っている。裏面には荒削りの部分と仕上げ前の磨きが認められ、他に面取りと帯への装着の為かがり穴が4ケ所に彫り込まれている。

第5章　ま　と　め

江戸時代末期の青柳種信以来、中山平次郎博士、昭和8年の玉泉大梁氏の調査等によって推定されていた三宅廃寺が瓦溜（雨落溝）の一劃とはいえその存在が確認できた点は今後の調査研究に大いに役立つと考えられる。また三宅廃寺がおそらく老司Ⅰ式の軒瓦によって葺かれていたと考察でき、寺院の時期もほぼ決定できるであろう。今後の調査の手助けとなる事と確信する。しかしながら寺院域と考えられる所には民家が集中しており調査の困難が予想される。三宅廃寺の姿は99%が不明確である。この段階で問題点の考察を行なうのは推定でしかありえないがあえて今回の調査で問題となった事項を取り上げてみたい。

まず問題点として、

1．遺構

①瓦溜（雨落溝）の推定線　②建物と溝との関連性について　③建物と溝の時期について

2．瓦について

①軒瓦について　②竹状模骨の丸瓦について

3．出土遺物から見た年代

①須恵器・土師器　②瓦

4．特殊遺物

①匙・箸・木簡・墨書土器の意味

5．三宅廃寺について

以上5つの大きな問題点を提出できる。

1．遺　　構

①　瓦溜（雨落溝）

青柳種信、中山平次郎博士・玉泉大梁氏の推定された三宅廃寺の位置は現在南大橋団地及び民家、遊園地[注①]附近で昭和の初年[注②]まで礎石[注③]が存在していたことが確認されている。また青柳種信の筑前国続風土記拾遺の中で若八幡宮と地緑神社に礎石を寄進（享保12年）したとの記録から礎石の存在は明らかである。かつて礎石の存在した遺跡の北東部を今回の調査は行なったことになる。調査区域の西南部域に瓦を多量に出土する溝を検出したが、この溝から老司Ⅰ式の軒丸・平瓦、丸瓦、平瓦を出土した。もしこれが三宅廃寺の瓦であるとすればこの溝は外区を囲む雨落溝の可能性が大きく、その方向も南・西へ続く様相を示している。この雨落溝から西の

台地まで約120mを測る。南は推定不可能である。

②　建物と溝との関連性

1号・2号掘立柱建物と溝の関連性を述べる前に1号・2号掘立柱建物、特に1号の総柱建物について触れる必要がある。1号は桁行2.0m、梁行2.7mの総柱であるが東西（桁行）の柱穴は溝によって結ばれている。また柱根の大きさ（平均40cm）も目を見張り仮にも総柱でありながら柱根の大きさが大きい点と溝によって柱穴が結ばれている点に注目せねばならない。溝内からは柱根と柱根を結びつけうる何ものも検出できなかった。となれば溝の意味する点は柱穴ならびに柱根の位置を自由に変更させうる現象として考えられる。次に柱根の大きさの問題である。2号掘立柱建物は3×4間にもかかわらず柱根の大きさが平均20cm程度に対して2×2間の総柱でありながら柱根の平均直径が40cmを測る点である。何をもってこのような柱が必要であったのであろうか。文献資料の入手が少ない為と勉強不足の為この建物が何を意味するか不明である。現在調査中である筑後国分寺においては桁行・梁行の柱穴が全て溝によって結ばれている例が上げられる。以上のように現段階では建物の性格は不明である。2号掘立柱建物は四方を溝（3・4・8・9号溝）に囲まれた中に桁行3間×梁行4間の建物を置する。溝との切り合いはまったく考えられず、むしろ同一時期に作られた建物と溝と考えた方が理解しやすく遺物から見ても同様の結果が上げられる。また1号建物と溝との切り合いもなく建物自体の方向も溝や2号建物と同一方向を示す点ならびに柱穴内から検出された瓦の出土状態から見て同一時期に近いものと思われる。

③　建物と溝の時期

1・2号掘立柱建物と溝の関係は述べたごとく同一時期の遺構と考えられる。時期を知る手がかりは瓦と土器の編年的位置から割り出す必要性がある。建物自体瓦葺きの可能性は非常に薄くその点瓦の年代から割り出す事が可能である。1号掘立柱建物8・9柱穴内及び2号掘立柱建物8柱穴内の瓦・土器の状態から大まかな時期の決定ができる。特に1号掘立柱建物9柱穴内の瓦の出土状態はFig.10に示したごとく老司Ⅰ式の軒平瓦と老司Ⅱ式の軒平瓦、Ⅱ式との共伴が考えられる複弁くずれの軒丸瓦の出土、ならびにFig.17の平瓦の検出状態、また2号掘立柱建物8柱穴内では柱根の両端に平瓦が検出された事実を上げることができる。瓦の時期からすると老司Ⅱ式が一番新しくそれ以後のものは出土していない。このことから1号掘立柱9柱穴内の軒丸瓦1点、軒平瓦4点、半割された平瓦2点から老司Ⅱ式以後の柱穴である。これは2号掘立柱建物8柱穴内でも同様な状態である。つまり意識的に柱根の両端におかれた状態ならびに軒丸・平瓦の破片をおいた状態としてとらえられる。決して包含層の瓦が落ち込んだ状態（土層が異なる点と深い部分から検出された点から考え合せて）は示していない。

上限は把握できるとして、下限は溝内遺物が時期を知る手がかりである。溝内遺物（2～11

号溝内から出土）はほぼ奈良後期におさまる時期を示す土器群であることから建物と溝の時期も瓦（老司Ⅱ式）以後から奈良後期におさまると考えられる。

2．瓦について

① 軒瓦について

今回の調査で２種類の軒瓦が検出された。老司Ⅰ式と老司Ⅱ式の型式名で称せられる瓦で老司Ⅰ式は瓦溜から出土、老司Ⅱ式は１号掘立柱９柱穴内と土坑１より出土した。老司Ⅰ式の軒丸瓦は複弁八弁蓮華文で内区中房に１＋５＋10の蓮子を配す。従来珠文数は32個と考えられていたが完形品で見る以上、珠文数は31個、陽起（凸面）鋸歯文数31個を持つ形式である。これが老司Ⅱ式になると内区中房に１＋５＋９の蓮子を配し、珠文・凸鋸歯文は32個を配することになる。軒平瓦も老司Ⅰ・Ⅱ式の２種に区分できる。右から左へ流れる扁行唐草文は連続波状の茎から派生した２支葉を持つ。特に今回出土の老司Ⅱ式は太宰府出土の老司Ⅱ式とは多少異なることが指摘できる。第１点は珠文の大きさ・形状の相違、第２点は支葉の唐草文の相違が上げられる。これは笵による相違と考えられ小田富士雄氏の分類によればほぼ同様の形態を示すことから老司Ⅱ式と考えてよく時期的にも八世紀前半から中葉[注④]に位置づけられる。

② 竹状模骨の丸瓦

行基葺丸瓦の製作技法には２種ある。普遍的に見られる円筒形筒状の成形台を使用したものと竹状の材料（直径約１cm、長さ約38cm程度）によって筒状に組み合せ成形台とした製作技法がある。この製作技法によって作られた丸瓦は小田富士雄氏、森田勉氏が指摘してきたように九州においては百済系単弁瓦の中で、特に豊前地方に数多く認められ時期的[注⑤]にも七世紀末から八世紀初頭にかけて製作された可能性が高く共伴遺物からも同様の結果が得られている。今回の調査で瓦溜から出土した共伴遺物として老司Ⅰ式軒丸瓦・軒平瓦が検出された。豊前地方の行基葺丸瓦（竹状模骨）と時期的にも同じである。豊前地方に見られる竹状模骨の丸瓦は百済系単弁瓦の範疇でとらえられてきた。しかし複弁瓦と共に竹状模骨丸瓦が出土したのは三宅が初めてである。豊前地方の単弁瓦の中[注⑥]でとらえられてきた丸瓦が複弁瓦の範疇でもとらえられたことは瓦作りの製作技法の伝播と共に瓦人の移動等及び移入も考え合わせなければならない。またこれらの丸瓦製作時期が七世紀後半から八世紀初頭に位置付けられることは多くの遺跡の共伴関係で明確となり軒瓦の型式と共に北部九州の瓦の編年に大いに役立つものであろう。

3．出土遺物から見た年代

① 須恵器・土師器

須恵器・土師器の示す時期は七世紀後半から九世紀前半にかけての広範囲を示すがその中で

八世紀後半に位置付けられる土器が圧倒的に多い。図示した遺物は包含層と遺構内出土に区別できる。須恵器・土師器を遺構別に表示（Tab. 3）した。この表から瓦溜出土土器の時期は八世紀前半に位置付けられ瓦の年代とほぼ同様の時期、七世紀後半から八世紀前半を考えられる。1・2号掘立柱建物の時期は、瓦の出土状態から八世紀の前半以降に位置付けられるが、土器の示す時期は八世紀後半と考えられる。溝には七世紀後半から九世紀の広範囲の遺物が出土している。特に6・8号溝には七世紀後半から九世紀にかけての遺物が検出されている。しかし量的には少数で主に八世紀後半の時期を示すものと考えられる。他の溝との関連性から考えて1・7号溝を除いて同時期に作られた可能性を持つことから溝内遺物はほぼ八世紀後半に位置付けできる。土坑・ピットに関しては八世紀後半から九世紀の時期に比定でき、溝を切って作られた2・3号土坑は出土遺物から九世紀前半に位置付けられる。この時期のものとして皇朝十二銭の5番目に作られた富寿神宝（818年鋳造）がある。

Tab. 3 遺構出土の須恵器・土師器

遺構名	須恵器(S)	土師器(H)	時期	遺構名	須恵器(S)	土師器(H)	時期
1号溝		H33	八世紀	1号掘立柱建物		H19、21、46	八世紀後半
2号溝	S40	H35	八世紀	土坑1		H56	八世紀後半
3号溝		H1	八世紀	土坑2		H16、47	
4号溝	S22		八世紀	土坑3	S47		九世紀前半
5号溝	S42	H4、52、58	八世紀	瓦　溜	S33、51、71、84	H40、73	八世紀
6号溝	S17、85	H2	八世紀後半	Pit. 1		H60	
8号溝	S6、18	H9、20、23	八世紀	Pit. 9		H51	
9号溝	S3、5	H62、65	八世紀	Pit. 28		H54	
10号溝	S10、15、19、37	H11、13	八世紀	Pit. 31		H22、32、37、42、43	
	S39、41、43、44			Pit. 33		H57	
	S45、50、56、59			Pit. 50		H69	
	S62、63、75、80			Pit. 69		H26、45	
11号溝	S14、34、49、70	H61	八世紀	Pit. 71		H50	
21号溝	S57		八世紀	Pit. 77		H74	
22号溝	S4、13、21		八世紀	Pit. 82		H69、81	

② 瓦

今回出土した瓦類で大まかな時期決定できるものは軒丸・軒平瓦と竹状模骨の丸瓦である。軒瓦には老司Ⅰ式と老司Ⅱ式の型式を持つ瓦が出土している。老司Ⅰ式は七世紀後半から八世紀前半（飛鳥～奈良前半）の時期、老司Ⅱ式は奈良の前半から中葉の時期に比定できよう。竹状模骨丸瓦は七世紀後半から八世紀前半に比定できるので老司Ⅰ式と同時期に考えられる。

4．特殊遺物について

匙・箸・木簡・墨書土器の出土について

匙・箸・木簡・墨書土器・ヘラ書土器のほとんどが9～11号溝内から検出したものである。墨書土器・ヘラ書土器の銘は「造寺」、「寺」、「衆」、「中」、「コ用」、「佛」、「堂」が解読できる。このほかにも数点出土しているが解読することは困難であった。これらの銘の意味するものは寺院の可能性が大で特に「造寺・寺・佛・堂」に関するかぎり直接的に寺院を表現し

ている。銘のある土器はほぼ奈良後期に比定できるから書かれた文字も奈良後期に比定できる。木簡の出土も大きな意味を持つ。九州では大宰府につぐ2番目の出土であるが、解読することは困難であった。しかし木簡の出土した意味は木簡を使用し文字を書き、また仮にここで書かれたものではなく他から持ち込まれたものとしてもその意味することは同じでそこに何らかの文字を解読ならびに使用する人が存在したことは明らかで、これは墨書土器・ヘラ書き土器に関しても同様である。

匙・箸に関しても同様なことが考えられる。仮に正倉院の匙セット（佐波理製）と同種でなくとも溝内から検出されたことは事実であり遺構の遺物とともに共伴[注⑦]していることから奈良後期に比定でき、黄銅製の匙・箸の使用は重要事項の際に使用されたと考えられる。

このほかに石帯の出土も上記の事実を裏付ける資料となる。

5．三宅廃寺について

以上のように遺構・遺物について論じてきた中で大きく分けて2つの時期を考えられる。1つは瓦溜の時期で老司Ⅰ式軒瓦・竹状模骨丸瓦の編年的位置から七世紀後半から八世紀前半(飛鳥後半から奈良前半）に位置付けられる。これに対して1・2号建物と溝は須恵器・土師器の編年から八世紀後半（奈良後期）に位置付けられる。三宅廃寺の築造年代は瓦溜の資料からみると七世紀後半から八世紀の前半に位置付けられる可能性が大きく、その規模は東西に100mから110mと考えられる。南北の規模は不明である。奈良後期に位置する1・2号建物・溝等の性格は特殊遺物を見るかぎり寺院址に関係あるもので三宅廃寺の存続期間が七世紀後半から八世紀前半に築造されてから九世紀前半までの可能性を持つ。

注①青柳種信　筑前国続風土記拾遺第1巻

注②中山平次郎　考古学雑誌第16巻第6号「古代の博多」

注③玉泉大梁　福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書　第8集

注④小田富士雄　九州考古学2～6「九州に於ける太宰府系古瓦の展開(一～三)」

注⑤森田勉他　『垂水廃寺』1976

注⑥小田富士雄　1975「百済系単弁軒丸瓦考・二一九州発見朝鮮系古瓦の研究(三)」『九州文化史研究所紀要』20

注⑦東京国立博物館監修「正倉院宝物展目録」日本博物館協会発行　1959

あとがき

三宅廃寺の発掘調査から1年余りを経てようやく報告書を発行することが出来ました。他の業務との中で本格的に整理が行なえたのは12月中旬からで本書を上梓することができたのは多くの人達の協力と援助によるものです。しかし期間ならびに問題意識の不足から遺跡・遺物に対する検討が不十分であったことは認めざるをえない事実です。その反省の上に立ち本書では事実のみを報告し、他の問題点は今後の課題として取り上げていきたいと思っています。

Tab. 4 平瓦・丸瓦一覧表

縄目文様　　（単位 cm）

No.	出土地点	叩板 巾×長 (cm)	縄目 長×巾 (cm) 左・右 撚り	凹面調整	凸面調整	桶1枚の巾×長 (cm)	側面調整	面取り	瓦 長×巾×厚さ(cm)	粘土 (左・右)	色	焼成	PL.	Fig.	備考
1	瓦溜P−11	2.0×—	0.5×0.2 左	縦ハケメ+横ナデ	横ナデ	2.7×—	1	1	—×25.0×1.5	紐(右)	灰	良			
2	瓦溜	2.7×—	0.5×0.2 〃	縦ヘラ	なし	2.9×—	1	1	39.5×28.5×2.2	〃 〃	白	不良			
3	瓦溜	3.0×—	0.6×0.2 〃	縦ヘラ+横ハケメ	横ナデ	3.5×—	1	1	39.7×27.0/29.5×1.7	板	灰	良			
4	瓦溜P−15	4.0×18.0	0.6×0.3 〃	縦ヘラ	縦+横ナデ	3.0×—	1	1	38.5×25.8×2.0	紐(右)	〃	〃	21	15-1	叩板は無文
5	瓦溜P−12	2.7×18.0	0.5×0.24 〃	縦+横ヘラ	〃	3.9/5.0×36.0	1	1	36.8×26.0/29.1×1.7	〃 〃	灰+赤褐	〃		16-2	
6	瓦溜P−42	—	0.5×0.2 〃	縦ハケメ+ヘラ	なし	—	1	1	39.0×—×1.6	板	白	不良			
7	瓦溜P−19	3.3×18.0	0.6×0.3 〃	縦ナデ	横ナデ	4.5×35.0	1	1	38.5×25.5/29.5×1.6	紐(右)	白灰	良	21	15-2	
8	瓦溜P−45	3.0×—	0.7×0.2 〃	横ナデ	〃	—	1	1	—×31.0×1.7	〃 〃	白	不良			
9	瓦溜P−53	4.5×17.0	0.6×0.3 〃	縦ナデ+横ヘラ	〃	2.8×35.5	1	1	39.0×26.0/31.6×2.0	〃 〃	白灰	〃			
10	瓦溜P−53	3.0×—	0.55×0.2 〃	なし	なし	—	1	1	39.6×31.5×1.8	〃 〃	白	〃			
11	22号溝	2.7×16.5	0.7×0.3 〃	縦ハケメ+横ナデ	横ナデ	—	1	2	40.0×—×2.0	板か一枚か	白灰	良			布縫い目有
12	瓦溜一括	3.5×18.0	0.8×0.2 〃	縦ハケメ	縦ナデ	4.0×37.0	1	1	39.0×30.0×2.0	紐(右)	黒	不良	22	16-1	裏面にくぼみ
13	瓦溜P−30	3.2×—	0.65×0.25 〃	なし	なし	3.0×—	1	1	—×29.0×2.0	板	灰	〃			
14	瓦溜P−23	2.35×17.5	0.6×0.25 〃	横ナデ	横ナデ	2.7×—	1	1	38.1×27.2×1.8	紐(左)	灰+赤褐	良			
15	瓦溜P−24	3.0×17.0	0.55×0.25 〃	〃	〃	2.2/3.7×34.5	1	1	36.5×—×1.8	〃 〃	灰	〃			
16	1号溝・9住穴	3.3×17.5	大0.5×0.25 小0.35×0.2 〃	縦ヘラ	横ヘラ	2.7×—	1	1	—×32.1×1.7	〃(右)	〃	〃	22	17	

格子

No.	出土地点	格子名	叩板 巾×長 (cm)	格子の大きさ (cm)	凹面調整	凸面調整	桶1枚の巾×長(cm)	側面調整	面取り	瓦 長×巾×厚さ(cm)	粘土	色	焼成	PL.	Fig.	備考
17	11号溝	斜	8.2×—	1.0×1.0	縦ヘラ	なし	—	1	1	—×30.8×1.9	板	灰	良			布縫い目有
18	10号溝	斜	5.5×—	0.7×0.8	縦ヘラ	横ナデ	—	1	1	36.3×27.3×1.5	〃	〃	〃			

丸瓦

No.	出土地点	種類	叩文(cm)・左・右撚り	凹面調整	凸面調整	桶1枚の巾×長(cm)	側面調整	面取り	瓦長×巾(cm)	高(cm)	厚(cm)	玉縁長(cm)	粘土(左・右)	色	焼成	PL.	Fig.	備考
19	瓦溜P−46	玉縁	縄(仮) 5.1×—(縄目)0.6×0.2左	横ハケメ	横ナデ	—	1	0	41.8×17.5/13.3	7.1/4.7	1.6/1.6	5.7	紐(右)	白灰	良	23	18-3	
20	瓦溜P−21	〃	〃(縄目)0.6×0.2〃	縦ヘラ+ハケメ	〃	—	1	0	39.6×18.5/12.4	7.0/5.0	1.3/1.3	6.5	〃 〃	〃	〃	23	18-1	布縫い目有
21	瓦溜	〃	〃(縄目)0.55×0.15〃	なし	〃	—	1	0	38+α×17.3/11.5	8.0/5.3	1.3/1.3	—	〃(左)	灰+赤	不良			2ケ所に布縫い目有
22	瓦溜P−25	〃	〃(縄目)0.5×0.2〃	〃	〃	—	1	0	—×17.0/12.0	7.2/5.4	1.7	5.7	〃(右)	白	〃		18-4	
23	1号溝	〃	〃(縄目)0.5×0.15右	〃	〃	2.5×—	1	0	—	—	—/1.35	6.9	—	暗灰	〃			布縫い目有
24	瓦溜	〃	〃(縄目)0.4×0.1左	〃	〃	—	1	0	—×12.1/15.7	5.5/6.9	1.3	6.1	紐(右)	灰	〃			布縫い目有
25	瓦溜	〃	〃(縄目)0.5×0.1右	〃	〃	—	1	0	—	—	1.5	6.5	〃 〃	黒	〃			
26	瓦溜	〃	〃(縄目)0.4×0.1左	〃	〃	—	1	0	—×13.0/17.5	5.5/7.4	1.3/1.7	—	〃(左)	白	〃		18-2	布縫い目有
27	瓦溜	〃	〃(縄目)0.5×0.15〃	〃	〃	—	1	0	7—×12.0	4.9/6.5	1.4/—	6.0	—	黒	〃			
28	瓦溜P−54	行基	なし	〃	〃	—	1	2	41.1×—	5.0/7.5	2.3/1.5	—	紐(左)	〃	〃	24	19-1	
29	瓦溜一括	〃	〃	縦ハケメ	〃	—	1	2	38.6×16.6/11.5	8.2/5.2	1.5/1.45	—	〃(右)	灰	良	23	19-3	布縫い目有
30	瓦溜P−55	〃	竹状模骨 〃	縦ハケメ+横ヘラ	縦ナデ	竹 1.05×37.5	1	2	39.8×17.9/12.5	7.7/4.9	1.4/1.0	—	〃 〃	〃	〃	24	20-1	
31	瓦溜	〃 〃	〃	縦ハケメ	縦+横ナデ	—	1	2	40.3×—/12.5	—/5.6	1.45/1.2	—	〃(左)	〃	〃	24	20-2	右側に分岐痕有
32	瓦溜	行基	〃	なし	横ナデ	—	1	2	—×18.8	—	2.1/—	—	〃 〃	黒	不良		19-2	布縫い目有

縄目文様

No.	出土地点	種類	叩板 巾×長 (cm)	縄目 長×巾(cm) 左・右撚り	凹面調整	凸面調整	桶1枚の巾×長(cm)	側面調整	面取り	厚さ(cm)	粘土(左・右)	色	焼成	PL.	Fig.	備考
33	瓦溜	平	3.1×—	0.6×0.2 左	横ナデ	横ナデ	—	1	2	1.3	紐(左)	白	不良			布縫い目有
34	J−15・包	〃	3.5×15.3	0.6×0.25 〃	縦ハケメ	横ハケメ	—	1	1	1.8	〃 〃	黒	〃	28	25 D-1	2ケ所に布縫い目有

Tab. 5 平瓦・丸瓦一覧表

(単位 cm)

No.	出土地点	種類	埋板 巾×長(cm)	縄目 長×巾(cm)	左・右撚り	凹面調整	凸面調整	桶1枚の巾×長(cm)	側面調整	面取り	厚さ(cm)	粘土(左・右)	色	焼成	PL.	Fig.	備考
35	I−5・包	平	3.5×—	0.7×0.2	左	縦ヘラ+ナデ	横ナデ	3.0×—	1	1	1.6	板	灰	良	28	25 D-3	布縫い目有
36	B−10・包	〃	3.0×—	0.6×0.2	〃	縦ハケメ	なし	—	1	1	1.5	—	〃	〃	28	25 D-2	
37	E−4・包	〃	2.7×—	0.8×0.2	〃	—	横ナデ	3.0×—	—	—	2.5	板	白	不良	28	25 D-9	当て布有
38	7号溝	〃	3.4×—	0.5×0.23	〃	横ナデ	〃	2.5×—	—	—	1.4	—	白	良	28	25 D-7	
39	1号溝・9住穴	〃	3.0×—	大0.75×0.25 小0.5×0.2	〃	なし	なし	2.65×—	1	1	1.6	紐(左)	赤褐	不良	28	25 D-4	2ケ所に布縫い目有
40	L−15・包	〃	3.0×—	0.5×0.1	〃	縦ヘラ	縦ナデ	—	1	1	2.3	〃 〃	〃	良			赤い付着物有
41	10号溝	〃	2.5×—	0.7×0.1	〃	〃	縦ハケメ	—	1	1	2.9	〃(右)	灰	〃	28	25 D-5	〃
42	E−4・包	〃	3.7×—	0.7×0.2	〃	縦ハケメ	縦ケズリ	—	1	1	2.0	〃 〃	〃	〃	28	25 D-6	
43	瓦溜P−10	〃	2.3×—	0.5×0.17	〃	横ナデ	横ナデ	2.8×—	1	1	1.5	〃 〃	〃	〃			
44	B・Pit−82	〃	4.3×—	0.6×0.2	〃	縦+横ナデ	〃	—	1	1	2.2	板	灰+赤	〃	28	25 D-10	板を横にずらす
45	A・8・包	〃	4.0×—	0.8×0.2	〃	縦ハケメ	なし	—	1	1	1.5	紐(右)	灰	〃			
46	瓦溜P−8	〃	2.5×—	0.5×0.25	〃	〃	横ナデ	—	1	1	2.0	〃 〃	〃	〃			
47	瓦溜	〃	3.4×—	0.6×0.25	〃	〃	縦ナデ	—	1	1	2.0	〃 〃	〃	〃			
48	瓦溜	〃	3.2×—	0.55×0.25	〃	横ナデ	横ナデ	—	1	2	2.1	〃 〃	〃	〃			
49	瓦溜	〃	2.8×—	0.55×0.23	〃	縦ヘラ+横ナデ	〃	—	1	1	2.0	〃(左)	白	〃			
50	O−11・包	〃	2.7×—	0.45×0.2	〃	縦ヘラ	〃	—	1	1	2.0	〃(右)	赤褐	〃			赤い付着物有
51	瓦溜P−8	〃	2.5×—	0.5×0.25	〃	縦ハケメ	〃	—	1	1	2.0	〃 〃	灰	〃			
52	瓦溜P−47	〃	—	0.6×0.15	〃	横ハケメ	なし	3.0×—	1	1	1.8	〃(左)	〃	〃			
53	瓦溜P−32	〃	1.8×—	0.6×0.2	〃	横ナデ	横ナデ	—	1	1	1.3	〃(右)	〃	〃			
54	O−2・包	〃	3.0×15.5	0.5×0.2	〃	〃	なし	3.5×—	1	1	3.3	〃 〃	白	不良			裏面に砂を多く付着

斜格子

No.	出土地点	種類	埋板 巾×長(cm)	格子自体の大きさ(cm)	凹面調整	凸面調整	桶1枚の巾×長(cm)	側面調整	面取り	厚さ(cm)	粘土(左・右)	色	焼成	PL.	Fig.	備考
55	J−8・包	平	—	0.7×0.7	なし	縦ナデ	—	1	1	1.6	板	赤褐	良	28	23 B-1	荒い布目使用
56	1号溝	〃	—	0.9×0.75	縦ナデ	なし	2.5×—	1	1	2.3	紐(右)	白	〃	27	24 C-9	
57	10号溝	〃	—	1.0×0.9	なし	なし	—	1	1	1.3	板	灰	〃			
58	Pit−69	〃	6.8×—	0.6×0.6	横ナデ	横ナデ	3.0×—	1	2	1.2	〃	白	〃	27	24 C-1	
59	P−9・包	〃	—	0.6×0.6	縦+横ナデ	〃	—	1	2	1.8	〃	暗灰	〃			
60	10号溝	〃	—	0.5×0.5	横ナデ	〃	3.3×—	1	1	2.3	紐(右)	灰	〃	27	24 C-2	
61	D−7・包	〃	—	0.6×0.6	〃	〃	—	1	2	1.8	板	〃	〃			
62	I−5・包	〃	5.5×—	0.5×0.5	〃	〃	3.5×—	1	1	2.0	紐(右)	〃	〃			
63	10号溝	〃	6.8×—	0.9×1.0	縦ヘラ	なし	—	1	1	1.8	板	暗灰	〃			
64	11号溝	〃	—	0.7×0.8	縦+横ナデ	横ナデ	—	1	1	2.0	紐(右)	白	不良	27	24 C-3	布縫い目有
65	Pit−75	〃	—	0.9×1.0	縦ナデ	〃	—	1	1	1.8	〃 〃	灰	良	27	24 C-5	
66	10号溝	〃	—	0.9×1.0	—	なし	3.9×—	1	1	2.0	〃 〃	白	不良	27	24 C-8	
67	G−4・包	〃	—	0.7×0.8	縦ナデ	〃	—	1	1	2.1	〃 〃	赤褐	良	27	24 C-10	赤い付着物有
68	10号溝	〃	—	1.0×1.2	縦ヘラ	縦ナデ	—	1	1	2.1	〃(左)	白	〃	27	24 C-6	
69	11号溝	〃	—	0.8×0.7	なし	横ナデ	2.5×—	—	—	1.9	板	〃	〃			
70	11号溝	〃	—	0.5×0.7	縦ナデ	なし	—	1	1	3.0	紐(左)	〃	〃			
71	10号溝	〃	—	0.55×0.8	〃	不明	—	1	1	2.2	板	〃	不良			
72	P−11・包	〃	—	0.6×0.8	〃	横ナデ	—	1	1	1.5	〃	灰	良	27	24 C-7	
73	O−12・包	〃	—	0.65×0.7	〃	〃	—	1	1	1.5	紐(右)	〃	〃			
74	6号溝	〃	—	0.6×0.7	〃	〃	—	—	—	2.2	〃(左)	白	〃			
75	N−13・M	〃	7.2×—	0.6×0.8	縦ナデ	不明	—	1	1	1.9	〃 〃	白灰	〃			

平瓦・丸瓦一覧表

（単位　cm）

No.	出土地点	種類	叩板　巾×長(cm)	格子自体の大きさ(cm)	凹面調整	凸面調整	桶1枚の巾×長(cm)	側面調整	面取り	厚さ(cm)	粘土(左・右)	色	焼成	PL.	Fig.	備考
76	J－7・包	平	——	0.7×0.8	縦ナデ	横ナデ	2.7×—	1	1	1.5	紐（左）	灰	良			
77	M－14・包	〃	——	0.7×0.8	縦＋横ナデ	〃	——	1	1	1.4	板	〃	〃			
78	H－4・包	〃	——	0.6×0.8	縦ナデ	〃	——	1	1	2.2	紐（左）	〃	〃			
79	N－13・M	〃	——	0.7×0.8	〃	〃	2.5×—	1	1	2.0	板	白	〃			
80	H－9・包	〃	——	0.85×0.9	〃	横＋縦ナデ	——	1	1	1.8	紐（右）	灰	〃			
81	1号溝	〃	——	0.6×0.8	なし	横ナデ	——	分割	なし	1.3	板	白灰	〃	28	23 B-2	
82	O－11・包	玉縁丸	——	0.5×1.0	横ナデ	なし	——	〃	〃	1.4 2.0	紐（右）	灰	〃			
83	C－11・包	平	——	大 0.8×0.9 小 0.6×0.5	なし	縦ナデ	——	〃	〃	1.7	——	〃	〃			
84	L－11	玉縁丸	——	0.6×1.0	横ナデ	なし	——	〃	〃	1.7	紐（右）	〃	〃			布縫い目有
85	E－9	丸	——	大 1.0×1.05 小 0.6×0.8	縦ナデ	縦ナデ	——	〃	〃	1.5	——	〃	〃	28	23 B-6	
86	C－10	平	——	0.35×0.5	横ナデ	横ナデ	——	—	—	1.7	——	〃	不良	28	23 B-3	
87	I－6	〃	5.7×—	0.3×0.5	なし	なし	2.5×—	—	—	1.3	紐（右）	〃	良			
88	J－7	〃	——	0.75×0.75	縦ナデ	横ナデ	3.5×—	分割	なし	1.2	——	白灰	〃			荒い布目使用
89	I－8	〃	——	0.35×0.65	横ナデ	縦ナデ	——	〃	〃	1.4	——	灰	〃			
90	D－9	〃	——	大 0.7×0.9 小 0.5×0.6	なし	横ナデ	——	〃	〃	1.2	——	〃	〃	28	23 B-4	
91	瓦溜P－63	丸	——	0.4×0.6	縦ナデ	なし	——	—	—	1.9	紐（右）	〃	〃			
92	C－11	〃	——	0.5×1.2	なし	〃	——	—	—	2.0	——	〃	〃	28	23 B-7	
93	D－14・包	平	——	0.35×0.5	縦ナデ	横ナデ	——	1	1	1.5	——	〃	〃			
94	J－7・包	〃	——	0.8×0.9	なし	〃	——	1	1	1.7	——	白灰	〃			荒い布目使用
95	17号溝	〃	——	0.7×0.9	〃	〃	——	分割	なし	1.8	紐（右）	〃	〃	28	23 B-5	
96	I－9・包	丸	——	0.5×0.75	〃	なし	——	〃	〃	2.0	——	〃	〃			布縫い目有
97	C－7・包	玉縁丸	——	0.6×0.6	横ナデ	〃	——	半分割	〃	2.4	——	〃	〃			
98	I－7・包	〃 〃	——	大 0.5×1.0 小 0.7×0.9	なし	〃	——	—	—	2.0	——	〃	〃			
99	G－9・包	丸	——	0.6×0.65	横ナデ	〃	——	—	—	1.5	——	〃	〃			
100	瓦溜B－11	〃	——	0.5×0.55	〃	〃	2.1×—	半分割	なし	1.5	——	灰	〃			

丸　瓦

No.	出土地点	種類	叩文(cm)　左・右撚り	凹面調整	凸面調整	桶竹1枚の巾×長(cm)	側面調整	面取り	高(cm)	厚(cm)	玉縁長(cm)	粘土(左・右)	色	焼成	PL.	Fig.	備考
101	H－17・包	玉縁	槌目 0.55×0.25　左	なし	横ナデ	——	1	0	—	—	—	紐（右）	灰	良			布縫い目有
102	瓦溜P－38	〃	槌目 0.5×0.15　左	〃	〃	——	1	0	—	—	7.0	〃	白灰	不良			〃
103	1号溝	〃	槌目 0.5×0.15　右	〃	〃	2.5×—	1	0	—	1.35	7.0	——	灰	良			2ケ所に布縫い目有
104	瓦溜P－77	〃	槌目 0.6×0.2　右	〃	〃	——	1	0	—	1.35	6.1	——	〃	不良			
105	Pit－6	〃	槌目 0.5×0.15　左	〃	〃	——	1	0	—	1.4	5.4	——	白	良			荒い布目使用
106	A－8・包	行基	無　文	〃	〃	——	1	1	—	1.8		紐（左）	〃	〃			
107	Pit－43	〃	〃	〃	〃	——	1	2	—	1.6		〃	灰	〃			布縫い目有
108	E－4・包	〃	〃	〃	縦ヘラ	——	1	2	—	2.0		紐（右）	〃	〃			
109	C－15・包	〃	〃	縦ハケメ	横ナデ	——	1	2	—	1.3		〃	白	不良			
110	M－11・包	〃 竹状模骨	〃	なし	〃	0.9×—	1	2	—	1.8		紐（右）	灰	良			布縫い目有 荒い布目使用
111	10号溝・M－14	〃	〃	横ナデ	〃	1.0×—	1	2	—	2.0		——	〃	〃			
112	D－10・包	〃	〃	なし	〃	0.6×—	1	1	—	1.5		紐（右）	〃	〃			
113	H－7・包	〃	〃	〃	横ナデ	0.6×—	1	2	—	1.5		——	〃	〃			
114	M－10・包	〃	〃	縦ハケメ	〃	0.75×—	1	0	—	1.6		紐（左）	白	不良			
115	2号側・8柱穴	〃	〃	なし	縦ヘラ＋ナデ	0.6×—	1	2	—	1.5		紐（右）	〃	良			竹を結ぶ紐4cm間隔
116	10号溝・M－15	〃	〃	〃	横ナデ	0.75×—	1	2	—	1.5		〃	灰	〃			

古代史文献史料

三宅に関する名称は日本書紀を初めとして人名・寺名が史料に数多く記載してある。ここで史料全般を記述する予定であったが枚数の関係上、書き下しの文章を年表的に記述することにとどめた。なお青柳種信の筑前国続風土記拾遺の記録も同様の理由で遺跡に関連する部分のみを記すにとどめた。なおこの史料に関しては川添昭二先生に多大な援助を得、また田坂大蔵・吉良国光氏にも協力をお願いした。

宣化元年(A・D・五三六)五月朔日辛、筑紫國那津の口に官家を造り、河内・尾張・伊賀及び、筑肥豐三國の屯倉の穀を運び、非常に備ふ。　大宰府史料一巻一

延暦一二年（七九三）八月　筑前国那賀郡の人三宅連真継、在京中しばしば濫行なるを以て本郷に遷送さる。　類聚国史八七

延喜一六年（九一六）八月二二日辛巳　筑前国早良郡司三宅春則宅に両頭六尺の子牛生まる。　日本紀略巻三・一四九五

寛治五年（一〇九一）一〇月一六日　醍醐寺円光院末寺筑前国三宅寺に関する領家僧円の寄文成る。　醍醐雑事記六三二

〃　〃　〃　醍醐寺円光院末寺筑前国三宅寺に関する宣旨出る。　醍醐雑事記六三二

承徳元年（一〇九七）八月二七日　宮符を大宰府に下し先符に任せ、大法師寿円をして醍醐寺円光院末寺三宅寺の寺務を執行せしむ。　醍醐雑事記　大宰府史料巻六・九〇

康治元年（一一四二）六月三〇日　大宰大弐平実親大宰府在庁官人をして醍醐寺円光院末寺筑前国三宅寺年貢運上船の門司関勘過料を免除せしむ。　醍醐雑事記　大宰府史料巻六・四〇〇

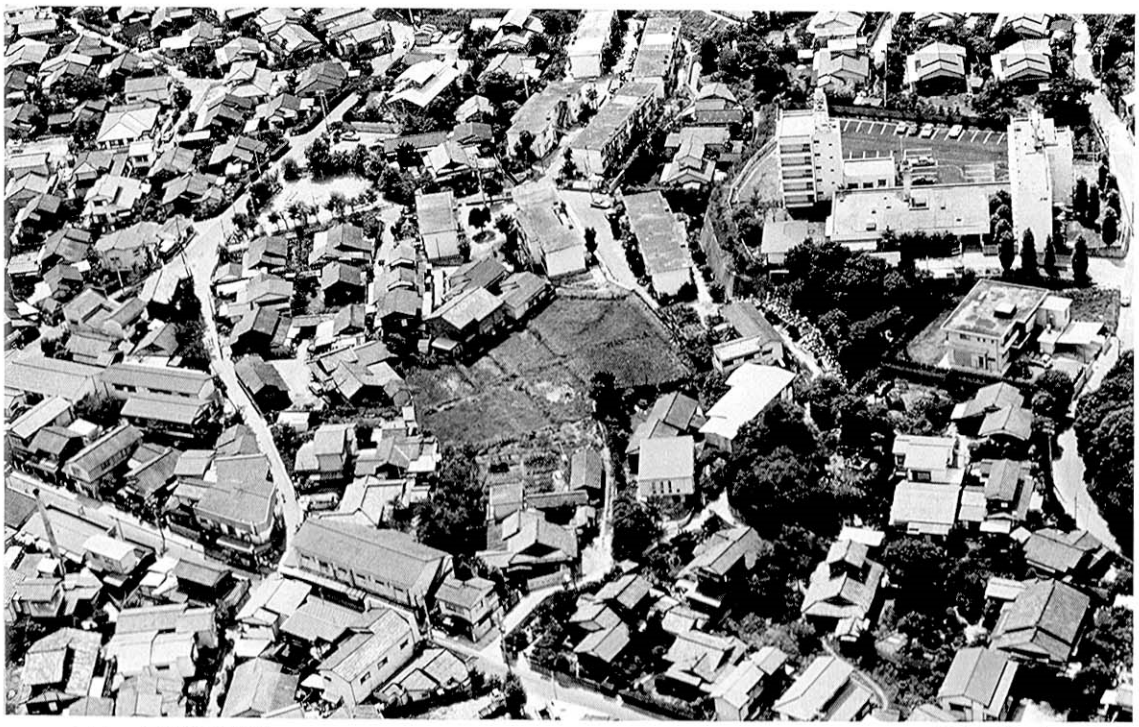
天養二年（一一四五）正月　日　醍醐寺円光院末寺筑前国三宅寺の坪付一巻三枚成る。　醍醐雑事記六三二

久安五年（一一四九）七月一二日　大宰大弐藤原清隆大宰府在庁官人をして醍醐寺円光院末寺三宅寺を免除せしむ。　醍醐雑事記　大宰府史料巻六・四三三

筑前国続風土記拾遺　第一巻　三〇八　青柳種信

屯倉址　村の西北の山際百堂の西に並べる小松山也、里民はハンゾウ石と云、此地前にいひし屯倉の址なり。礎石あまた殘りしを近年皆取て神祠佛堂の用とし又割て溝池の修理などに用ひしと云、爰には今只一つ埋もれて小松の下にあらはれ見ゆ。古瓦の破碎たるもの田圃の中に散亂せり。基製は都府樓の菅跡觀世音寺などの古瓦に異なることなし、官家も此邊に有しならん。

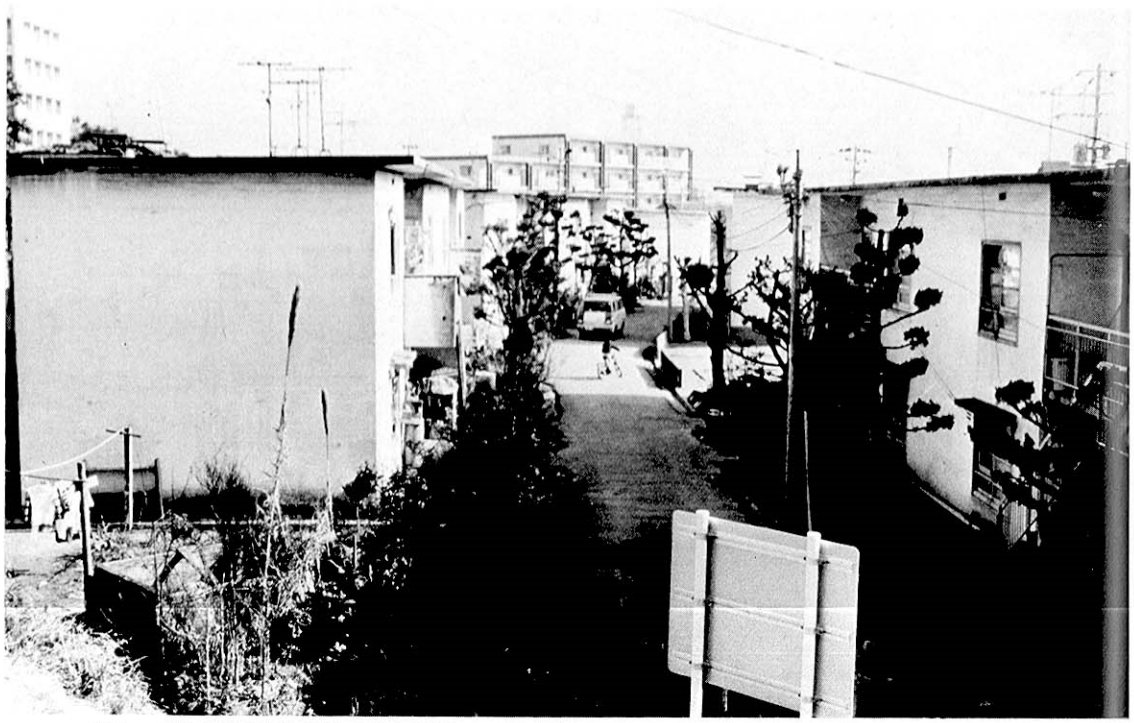
PLATES



（1） 三宅周辺遠景 （航空写真・東から望む）

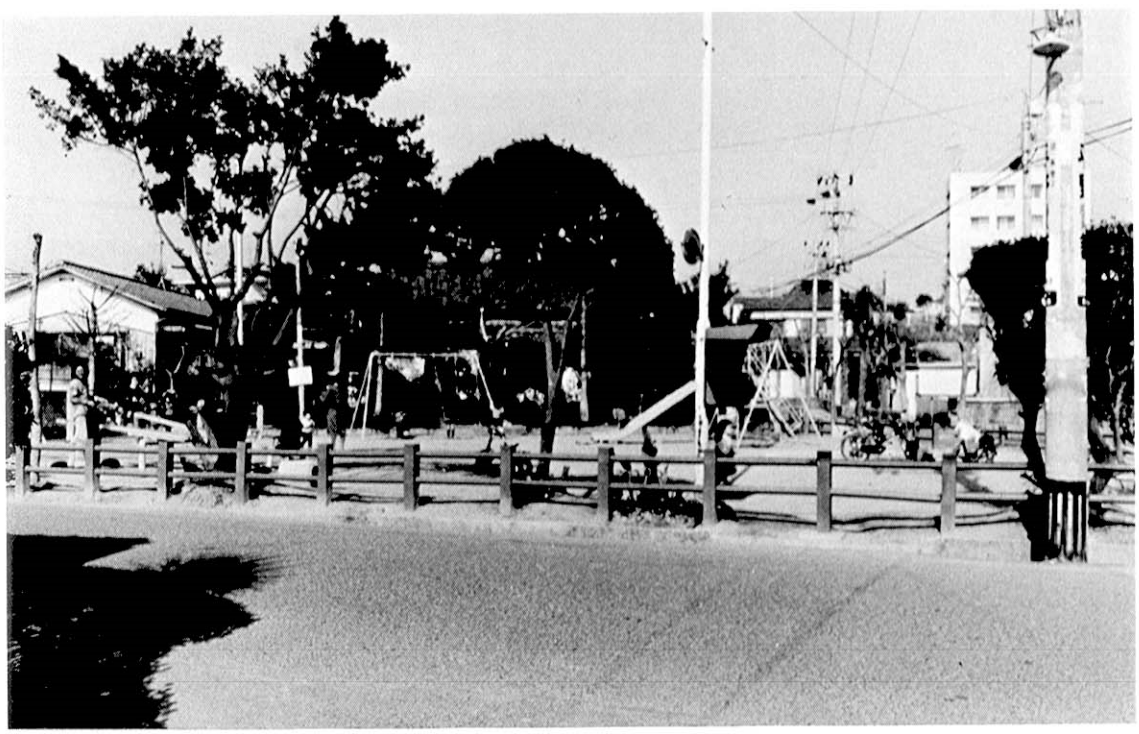
（2） 遺跡全景 （航空写真・北東から望む）

（1） 調査終了後の瓦溜（西から望む）



（2） 三宅廃寺周辺（西から東を望む）

（1） 三宅廃寺周辺（北から南西部を望む）

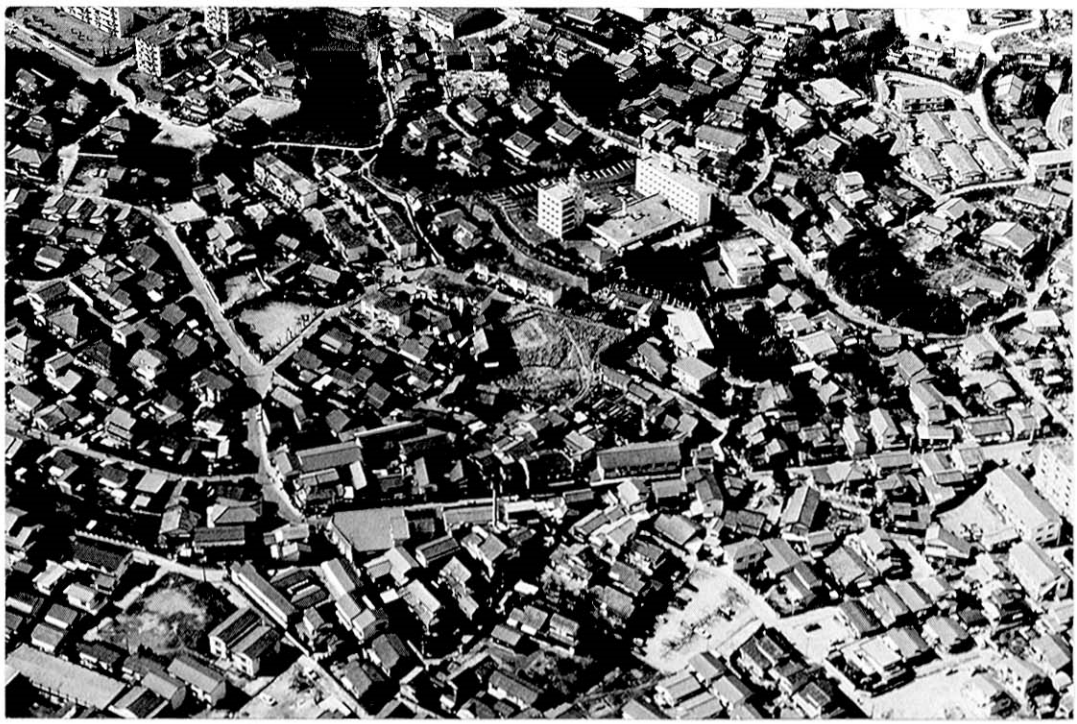


（2） 三宅廃寺中心部（南から北を望む）

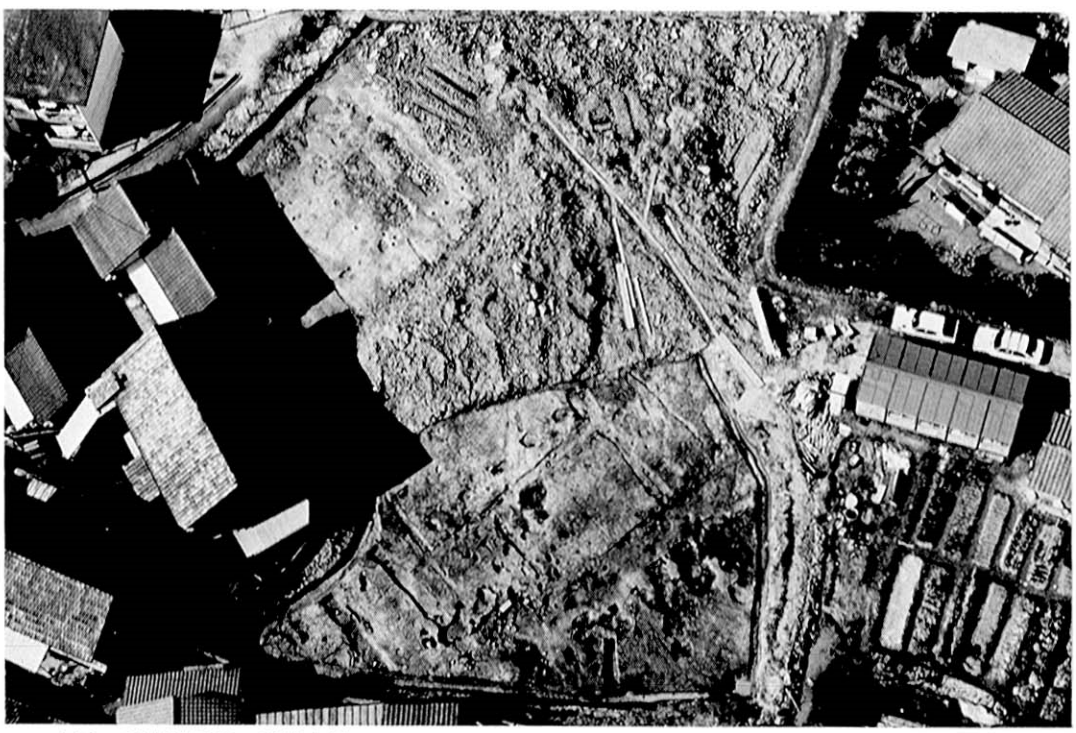
PL. 4

（1） 現存する礎石　a 若八幡神社の礎石　　b 門柱下の礎石

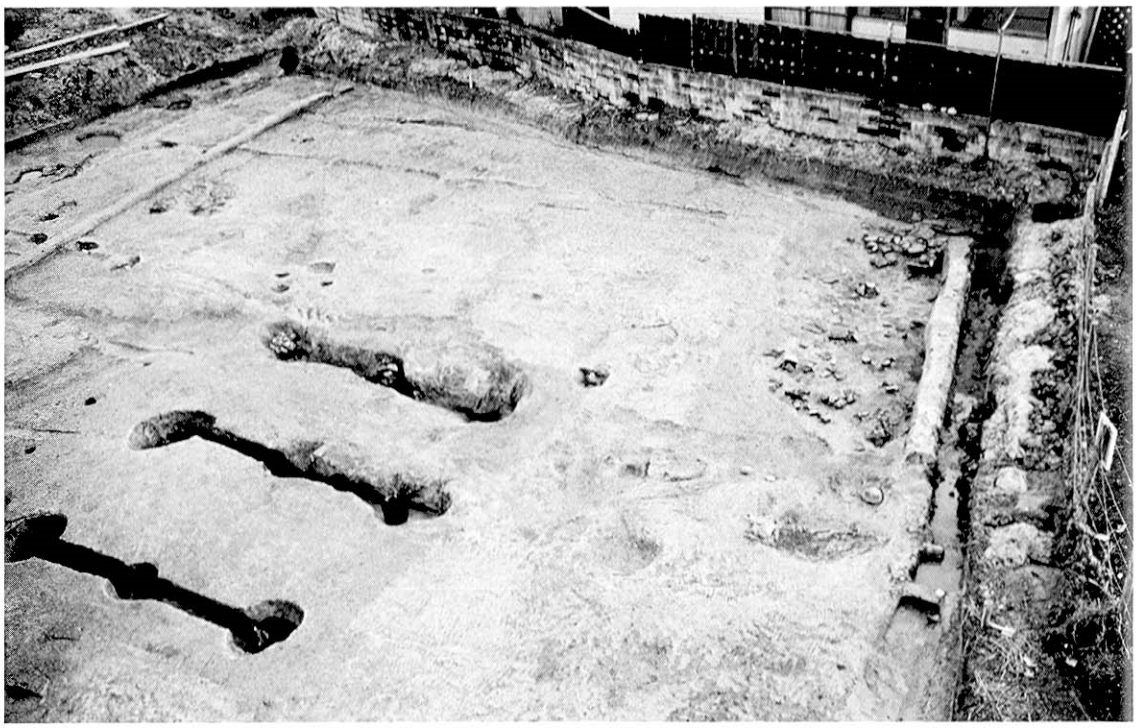
（2） 三宅瓦窯址（南から望む）



（1） 三宅周辺遠景（南東から望む・航空写真）



（2） 調査終了後の遺跡全景

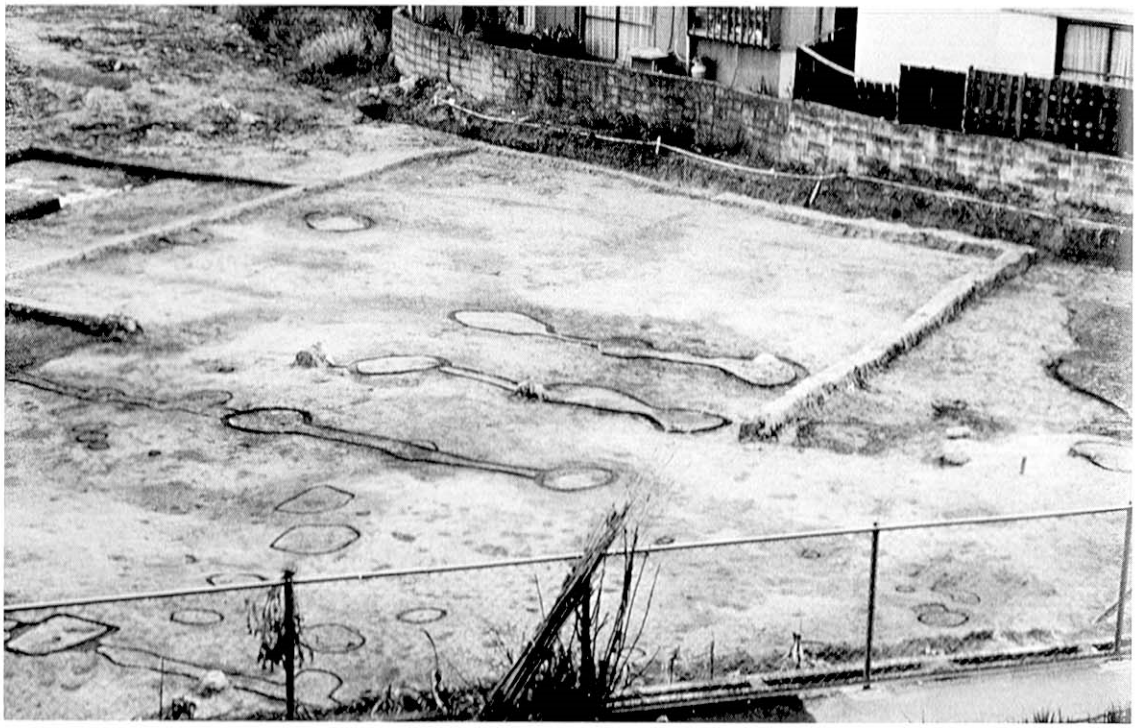


（1） 瓦溜と１号掘立柱建物（北から望む）

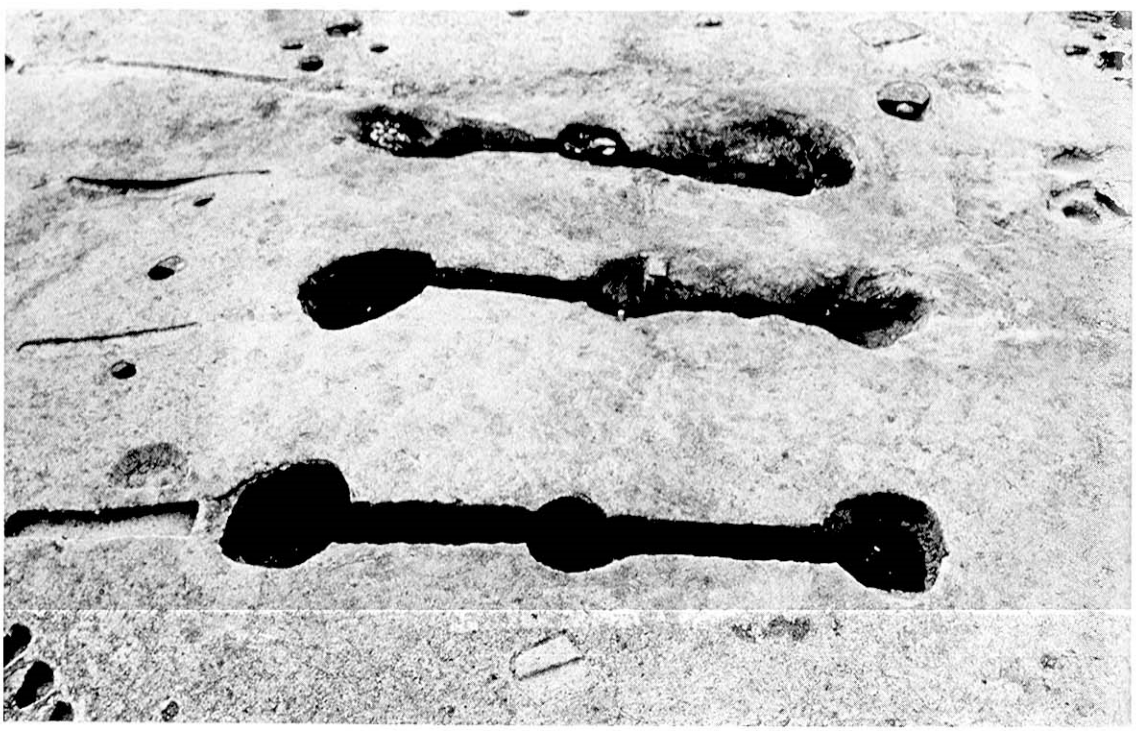
（2） 瓦溜の瓦類出土状態（北から望む）

(1) 瓦溜の土層近景（北から望む）

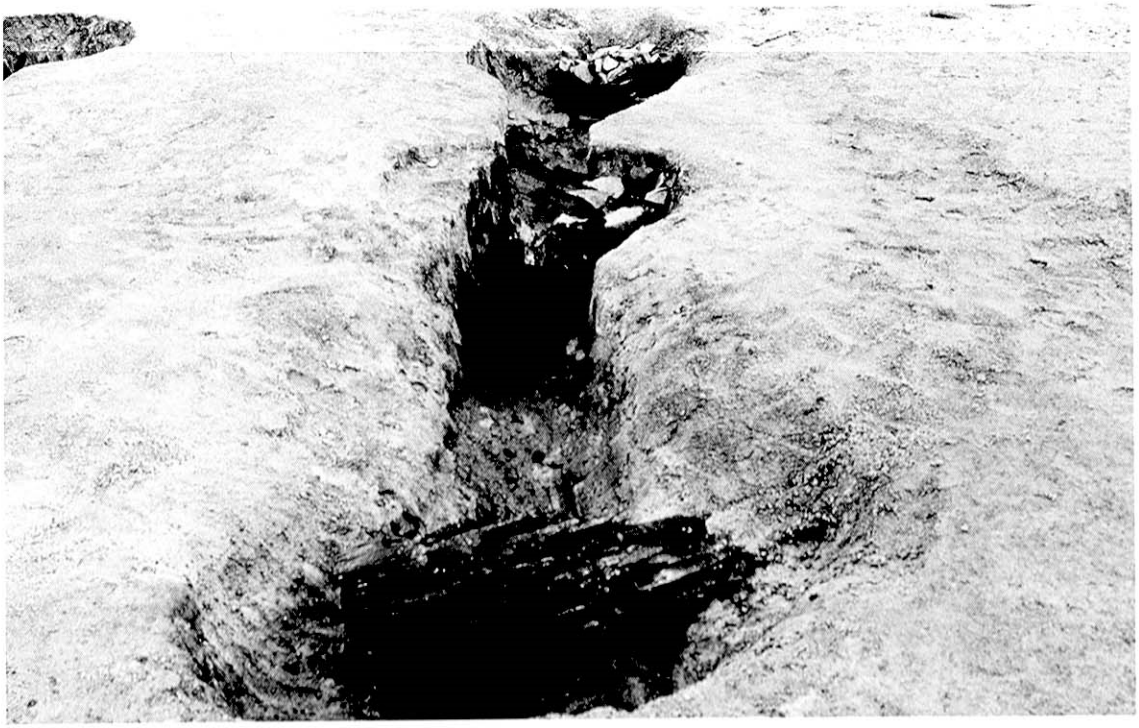
(2) 土層（東から望む）



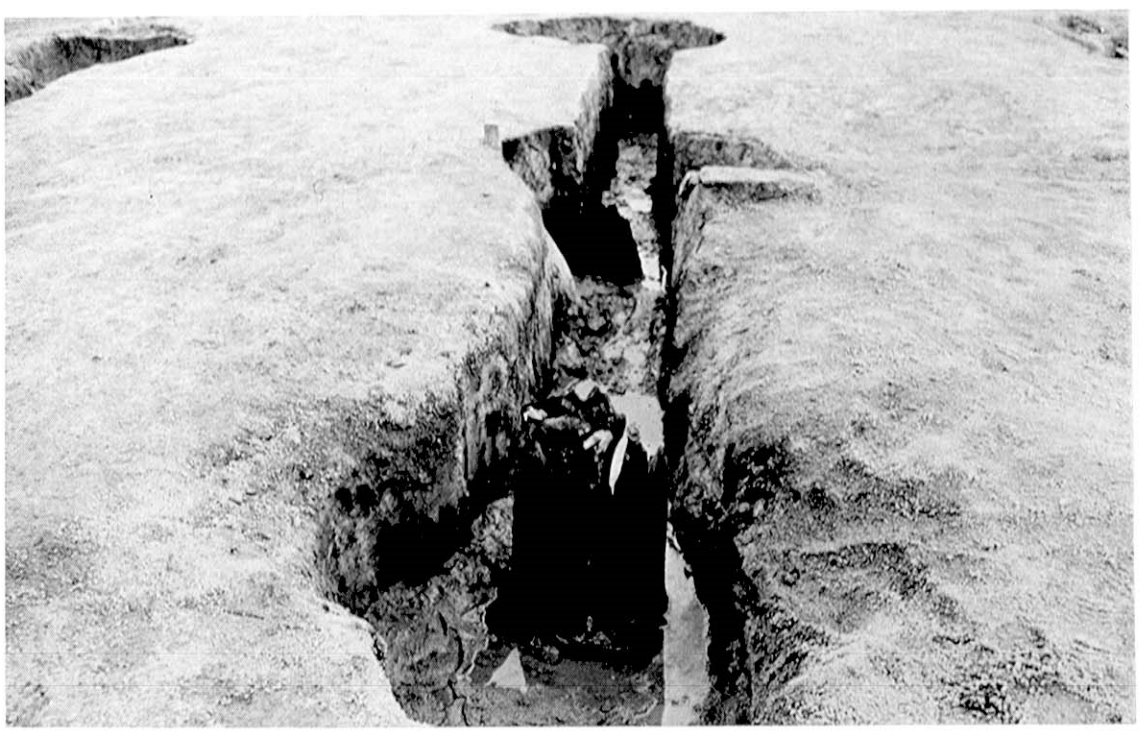
（1）　1号掘立柱建物全景（北から望む）



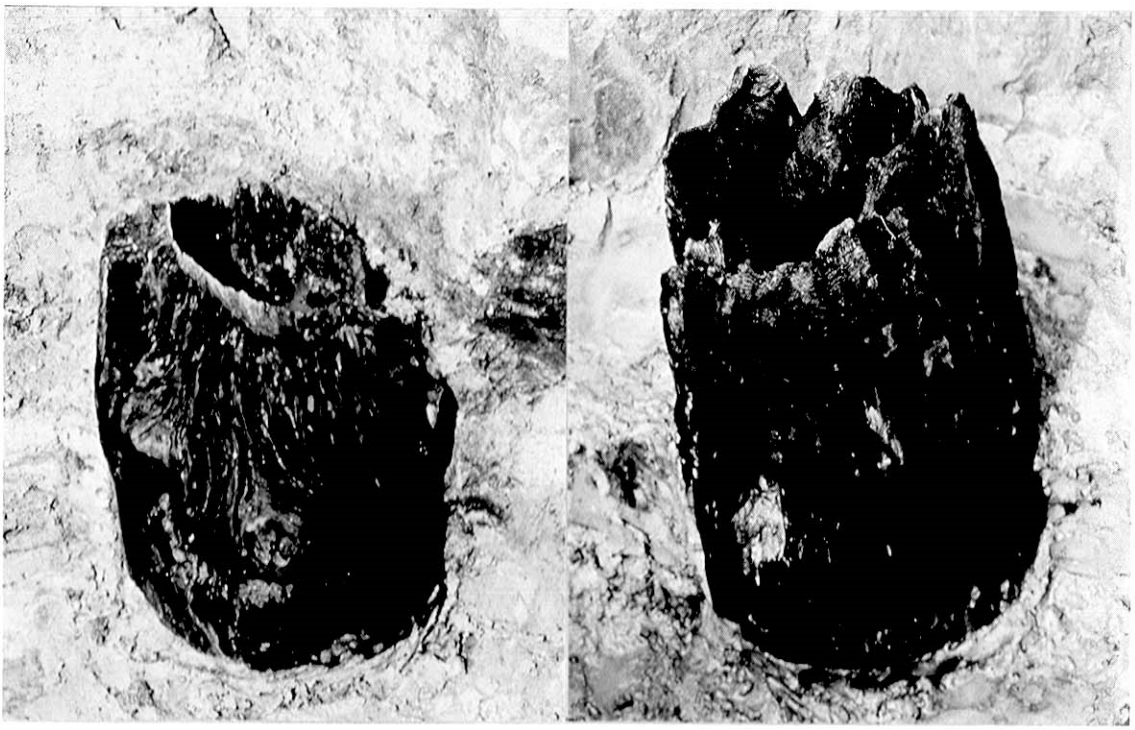
（2）　1号掘立柱建物近景（北から望む）



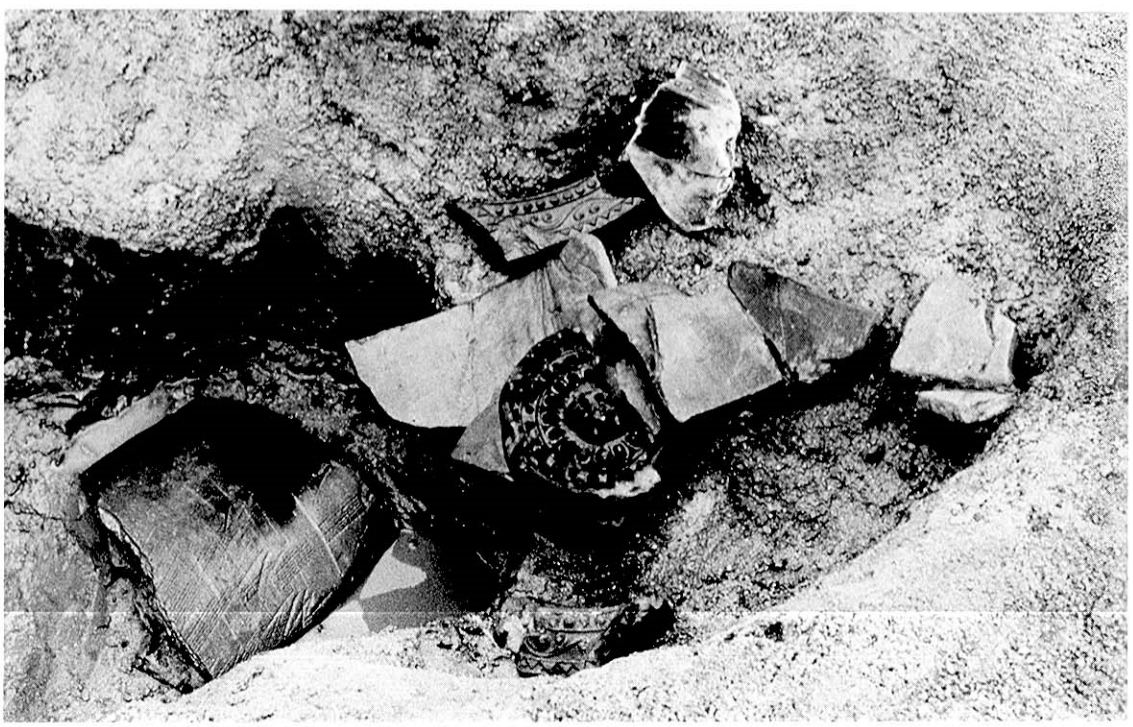
（1） 1号掘立柱建物7・8・9柱穴の柱根出土状態（西から望む）



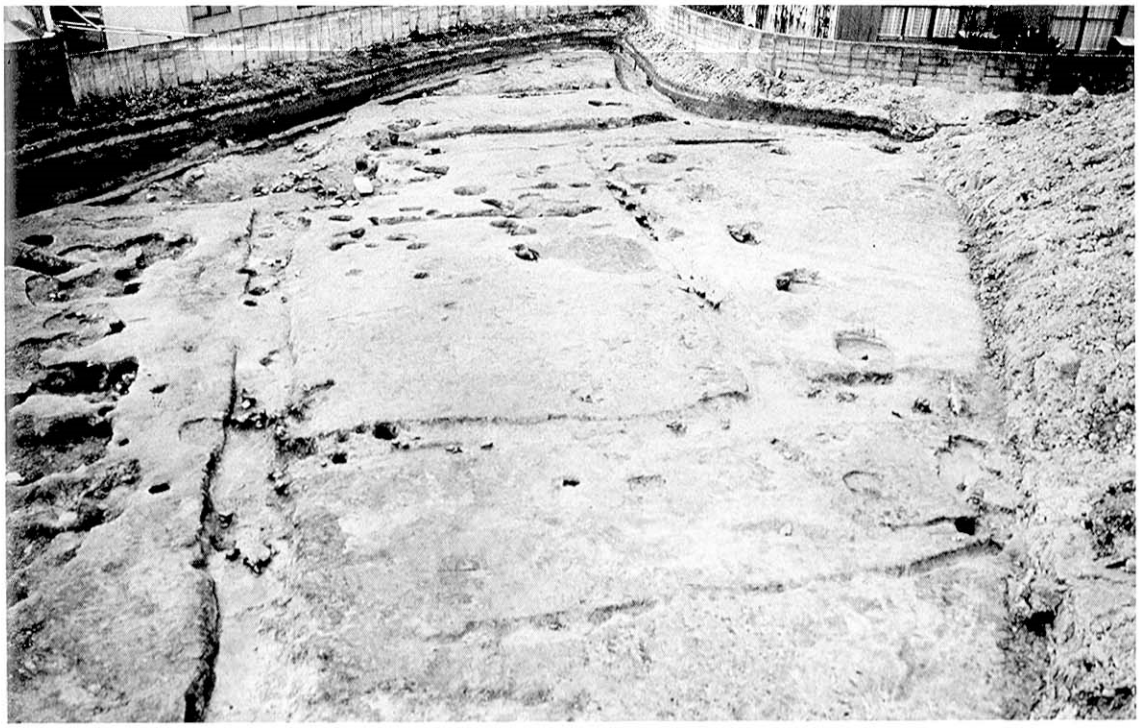
（2） 1号掘立柱建物4・5・6柱穴の柱根出土状態（西から望む）



（1） 1号掘立柱建物、柱根出土状態（南から望む）



（2） 1号掘立柱建物、9号柱穴内瓦出土状態（南から望む）

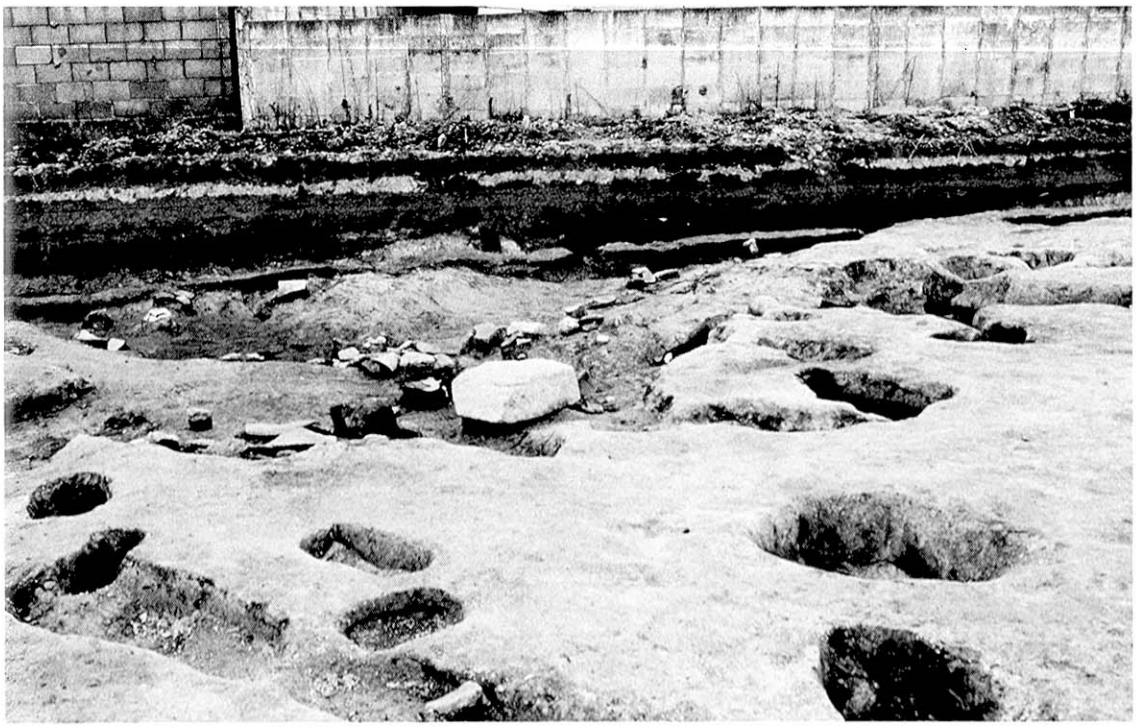


（1） 2号掘立柱建物遠景（北から望む）

（2） 溝内出土の瓦類（南から望む）

（1） 溝検出状態（北から望む）

（2） 溝内出土の土器類（南から望む）



（1） ピットと土層状態（北から望む）

（2） 溝と土層（東から望む）

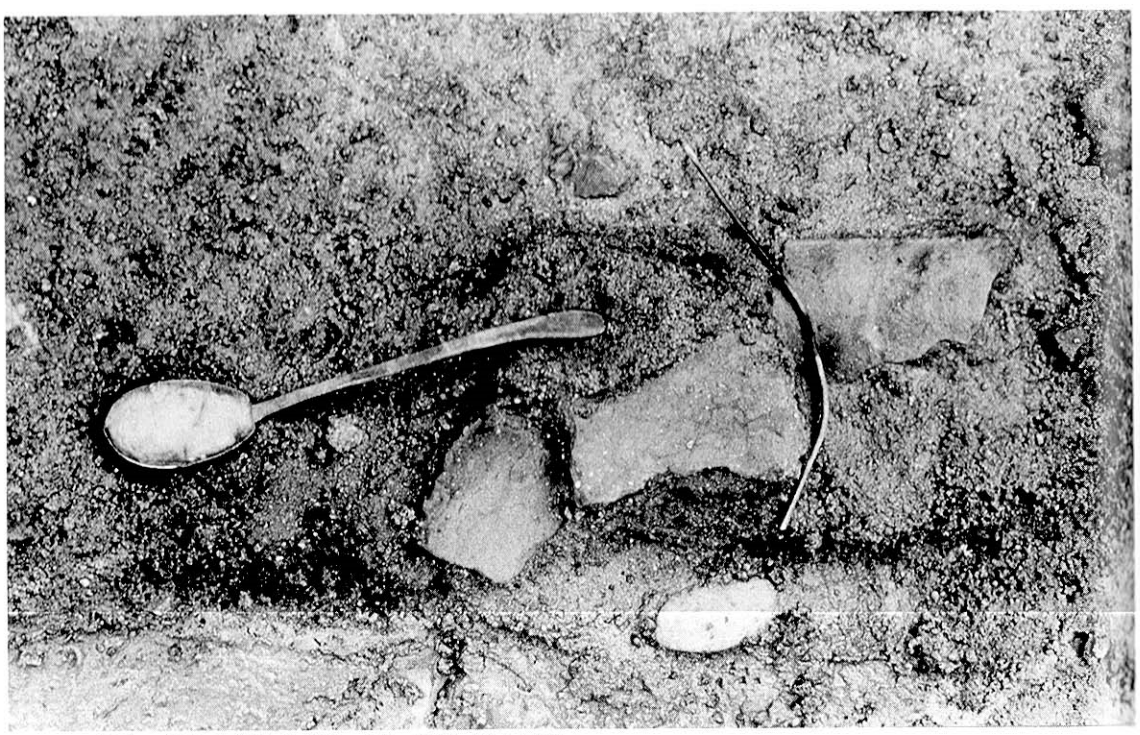
（1）　２号掘立柱建物、13柱穴内の柱根

（2）　２号掘立柱建物、８柱穴内の柱根と瓦出土状態

（1） 溝検出状態（西から望む）

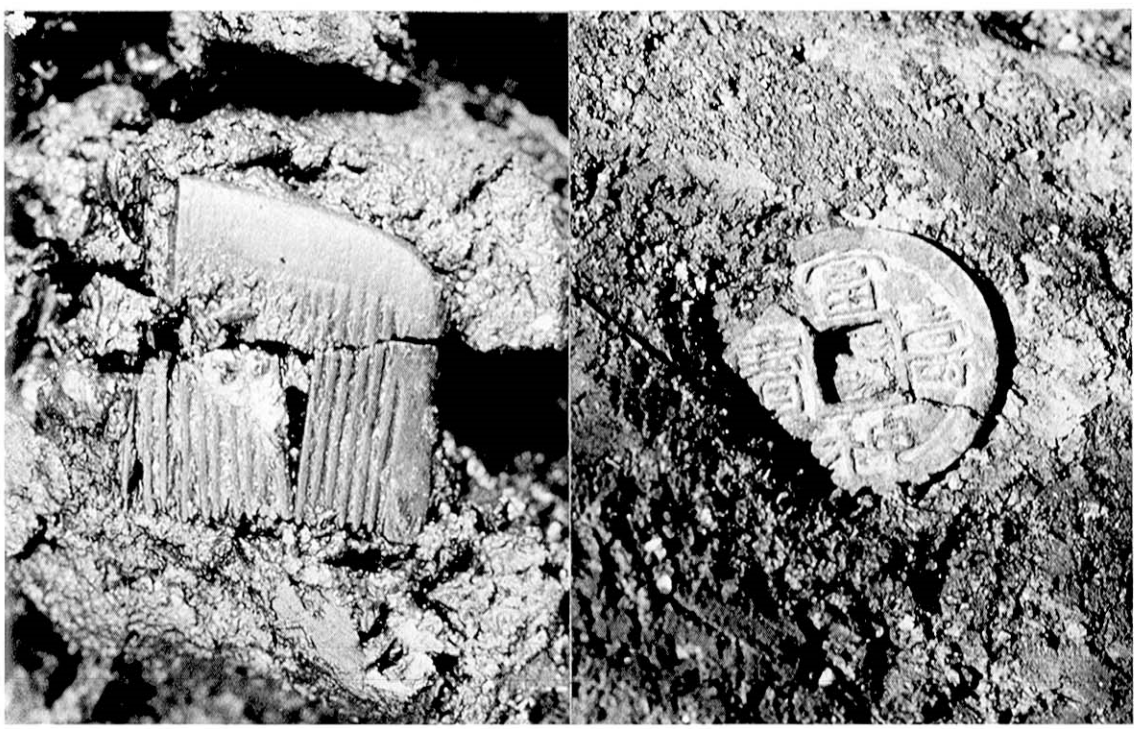
（2） 1号溝と8号溝との切合い関係（東から望む）

（1） 溝内出土の匙・箸、出土状態（西から望む）

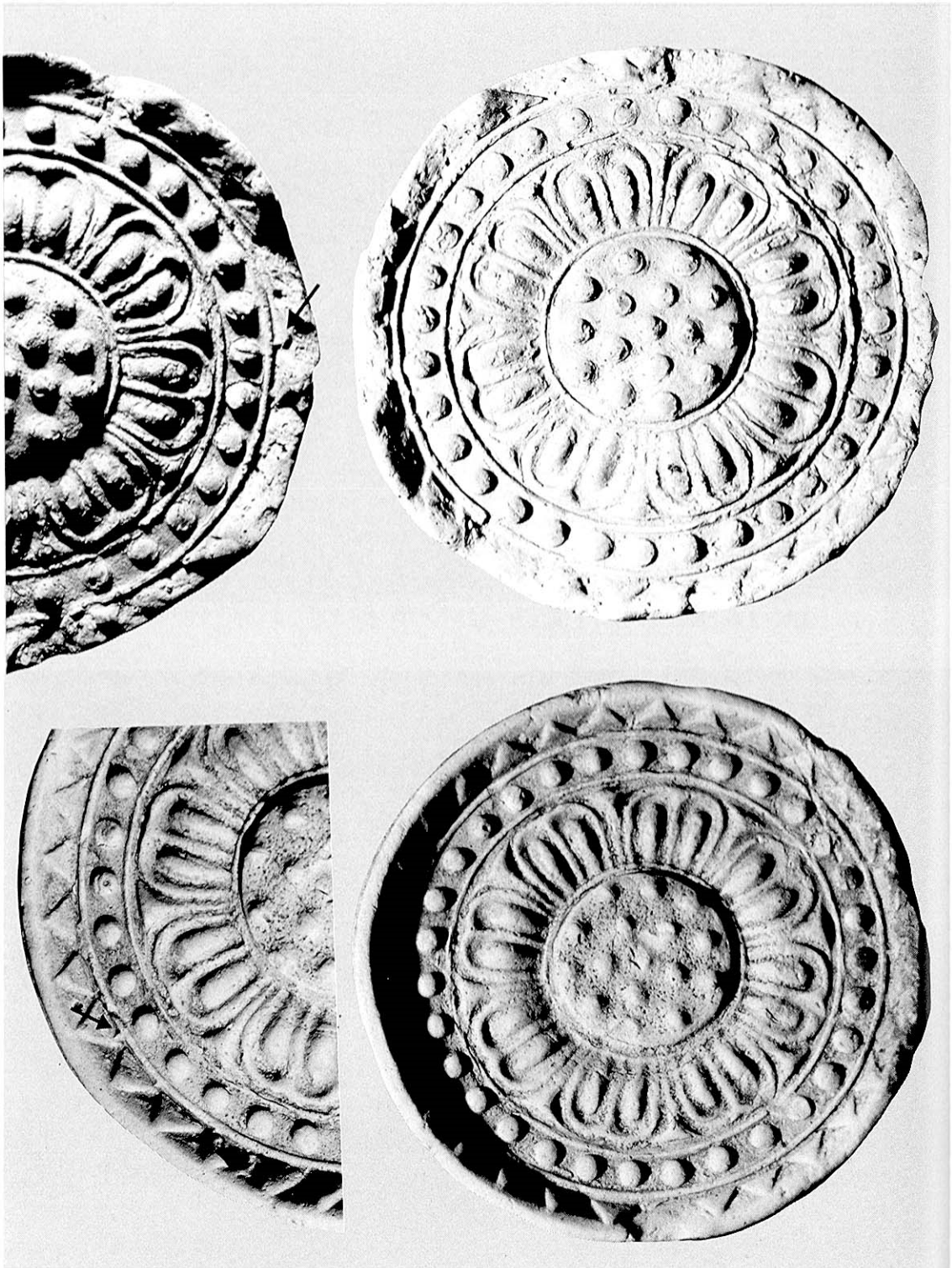


（2） 溝(10号溝)出土匙・箸、近景（北から望む）

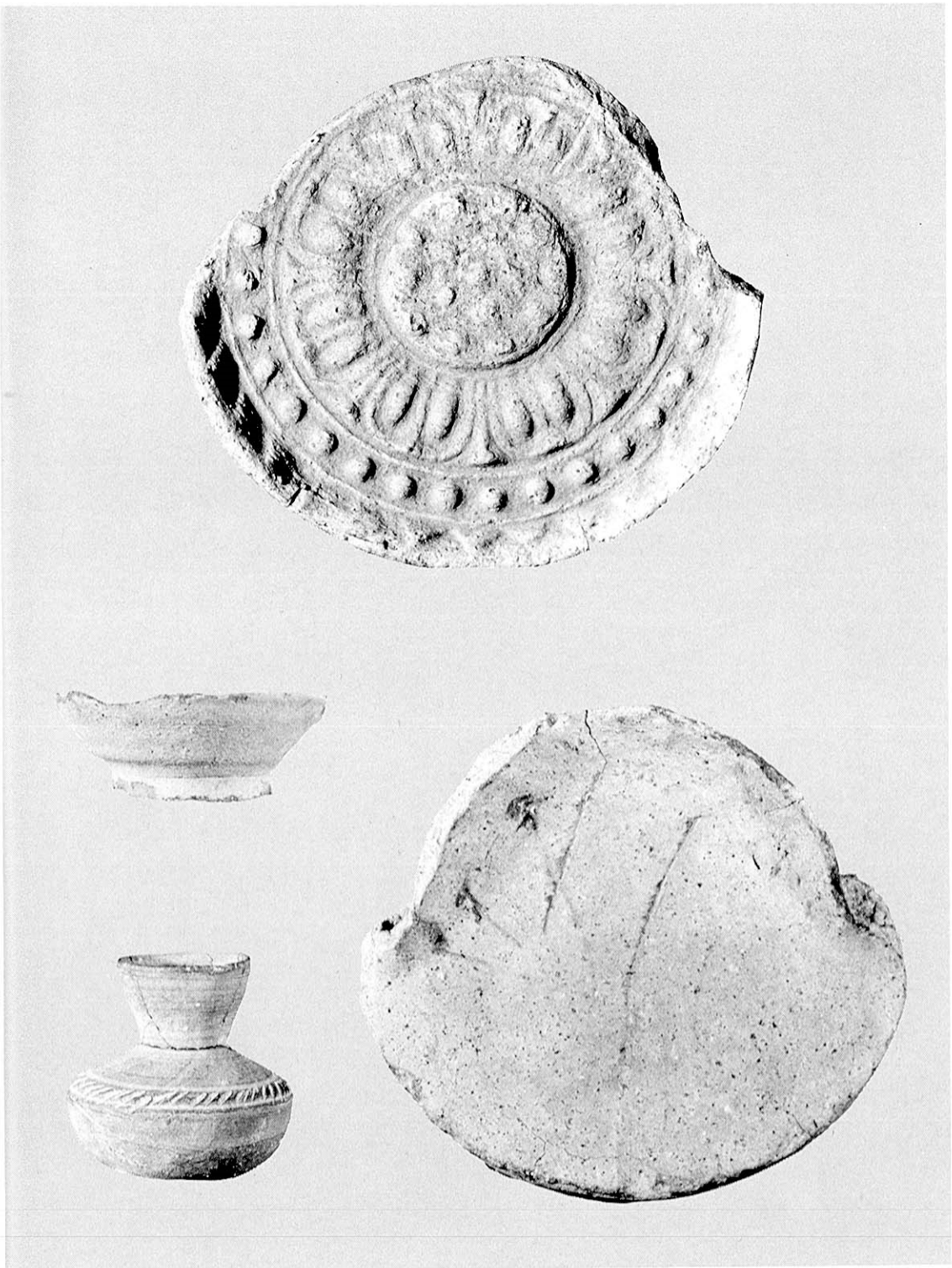
（1） 溝内出土の土師器(11号溝) Fig. 30H－12



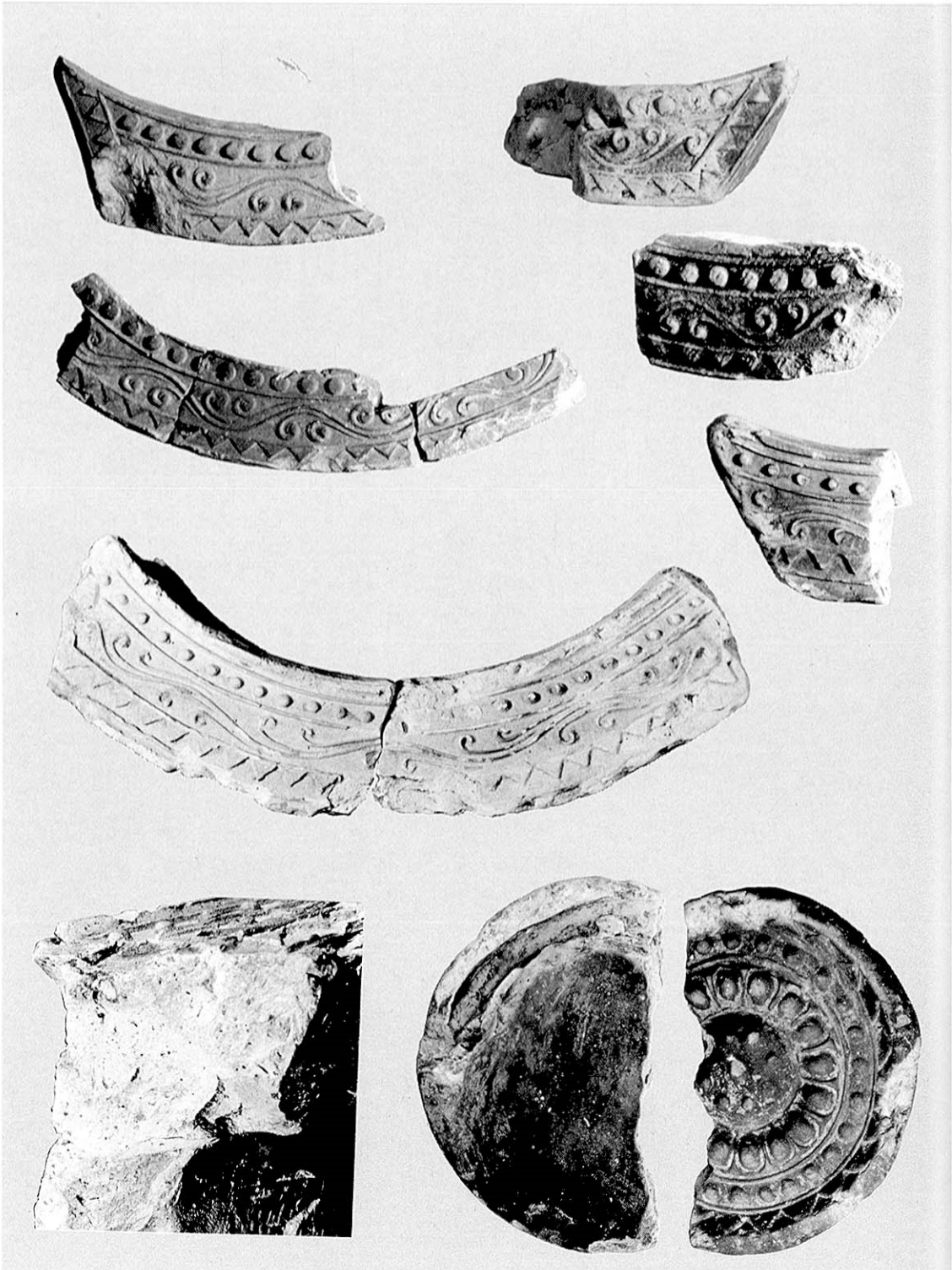
（2） 遺物出土状態 a櫛 b富寿神宝 a Fig. 38－1、b Fig. 43－3



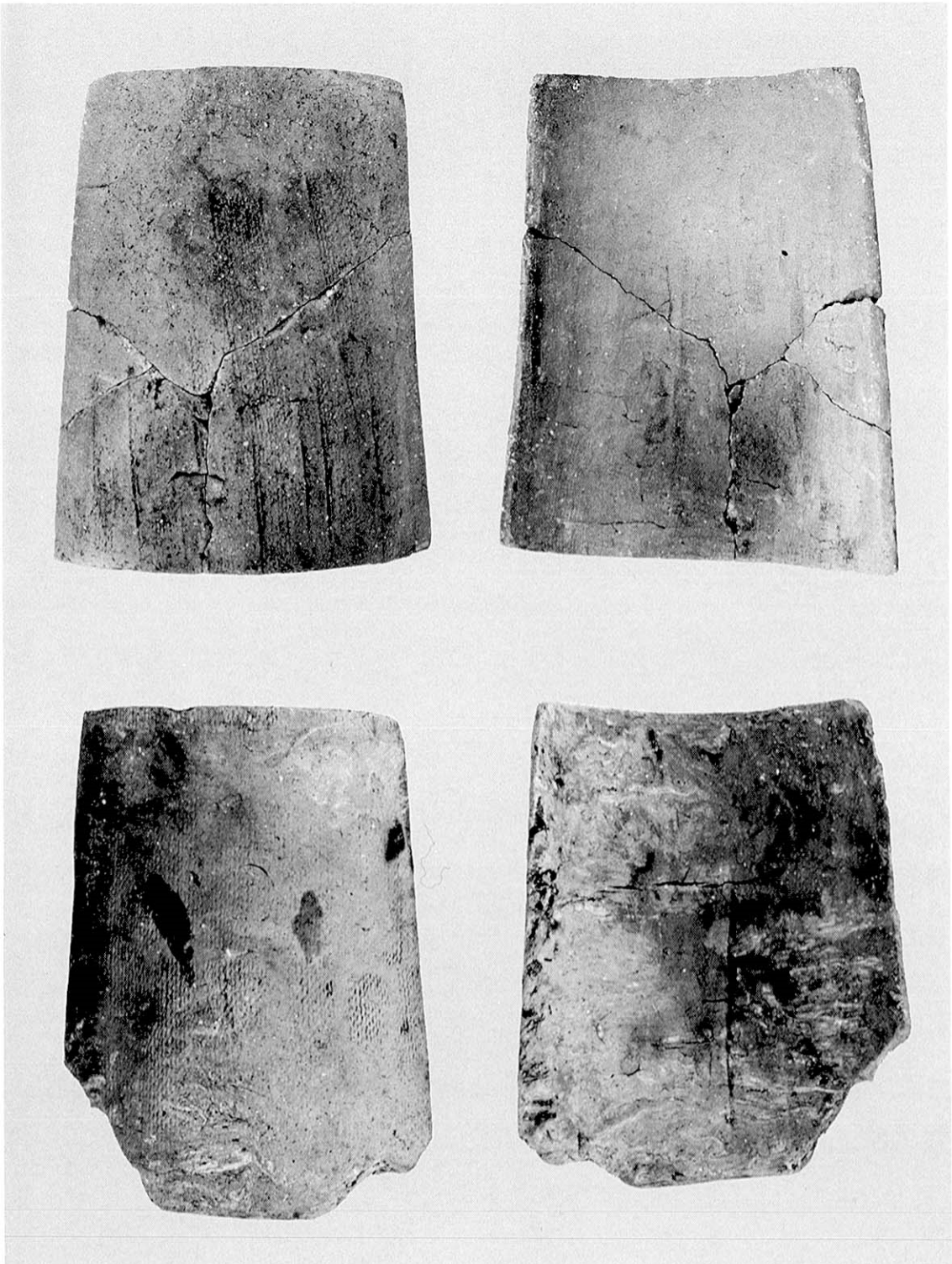
軒丸瓦、部分写真（矢印はブリッジ）　Fig. 5－1，Fig. 13－1　（縮尺½）



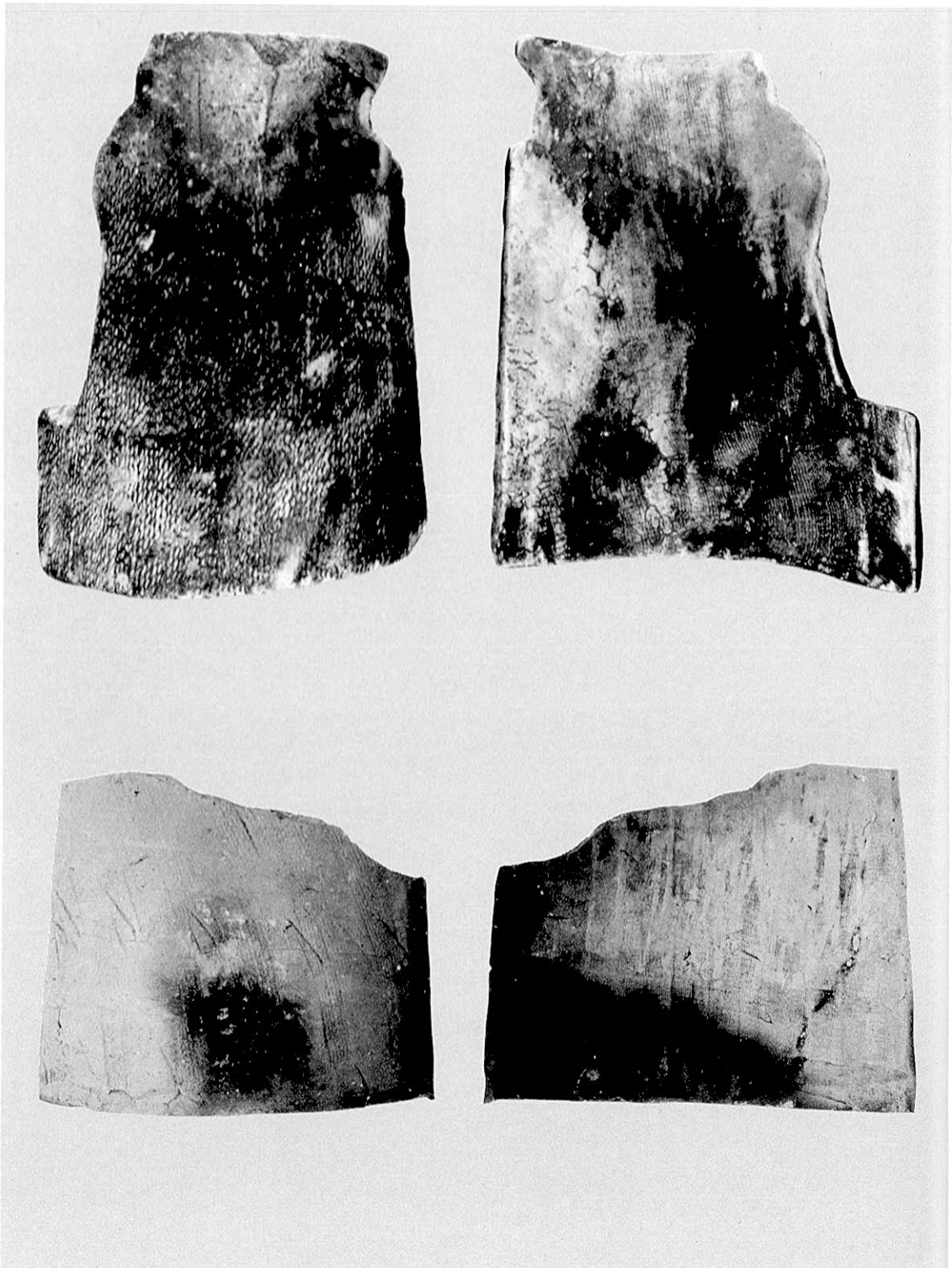
表採資料　軒丸瓦と須恵器・土師器　Fig. 5－1・2・3（縮尺½・⅓）



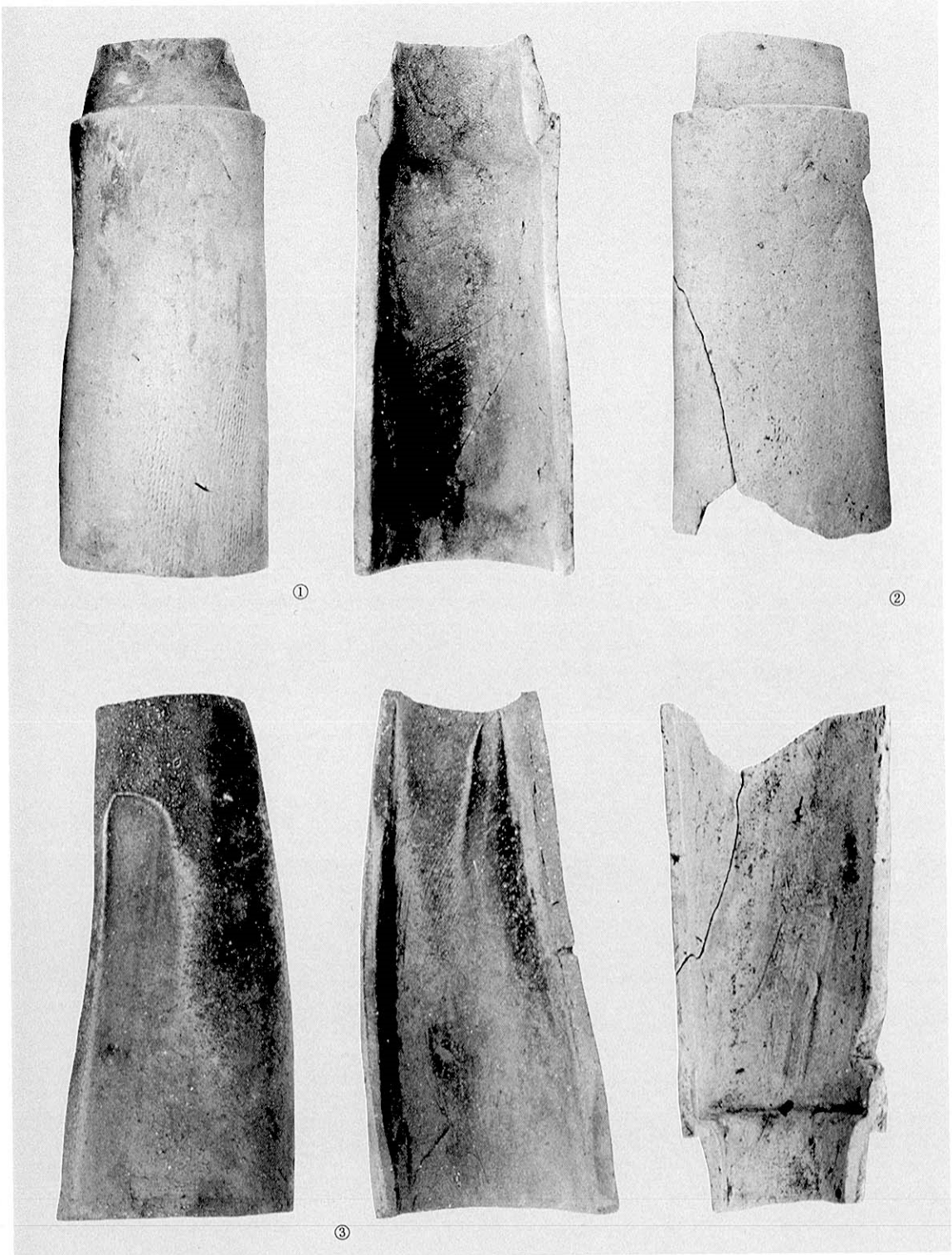
軒丸瓦・軒平瓦(Fig. 13・14) (縮尺⅓)



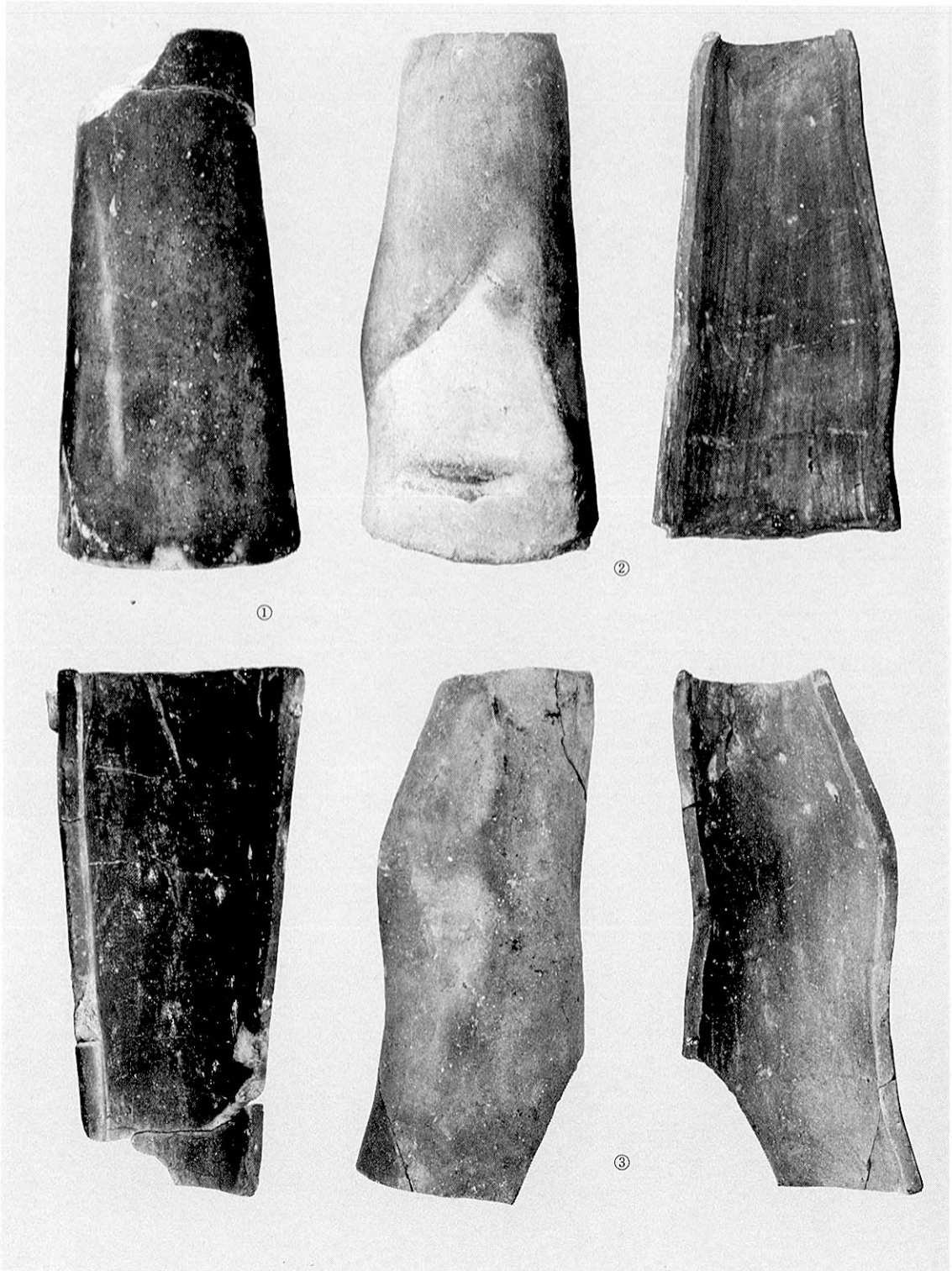
平瓦（上段Fig. 15－1、下段Fig. 15－2）（縮尺½）



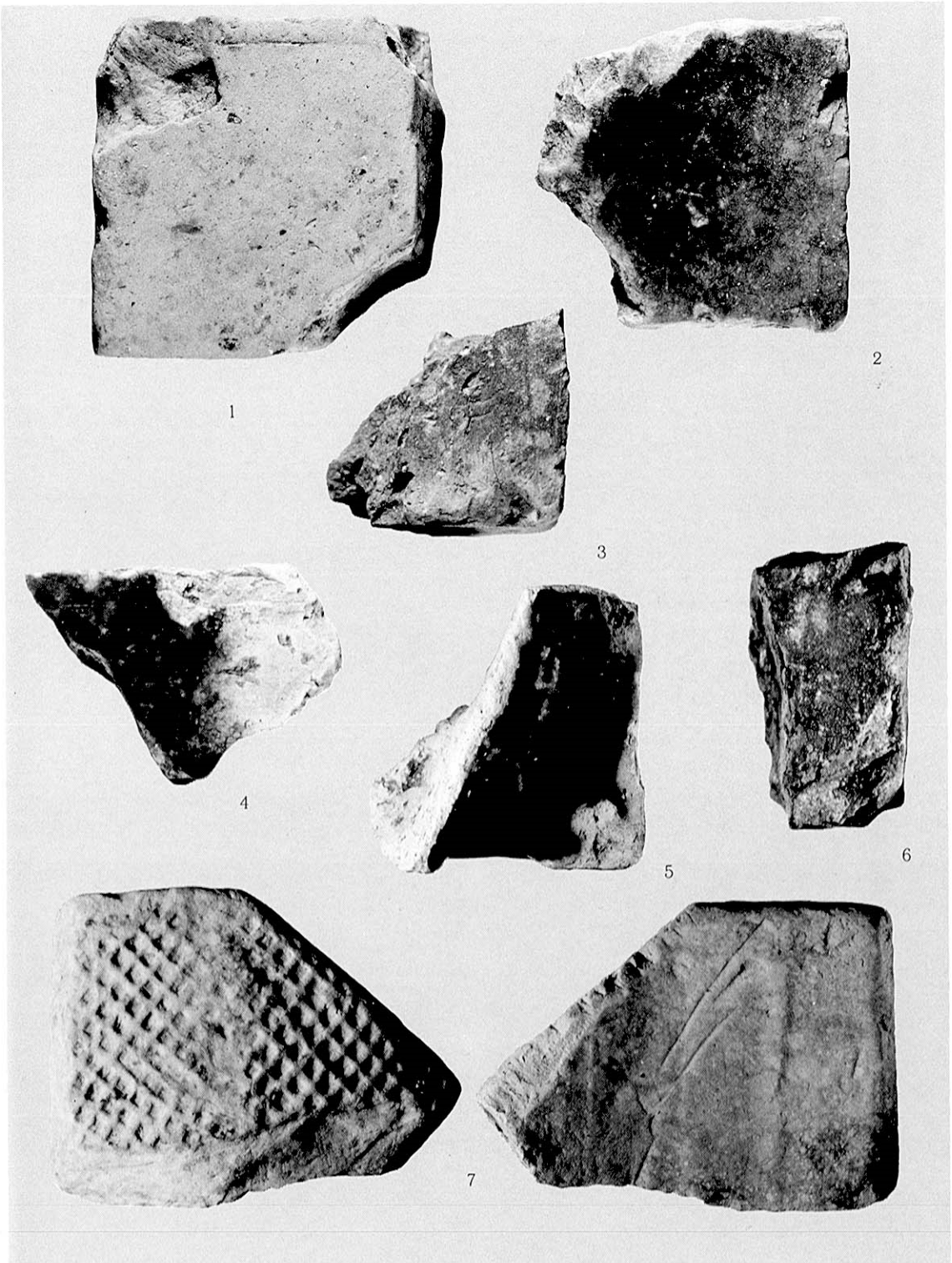
平瓦（上段Fig. 16－1、下段Fig. 17）（縮尺⅓）



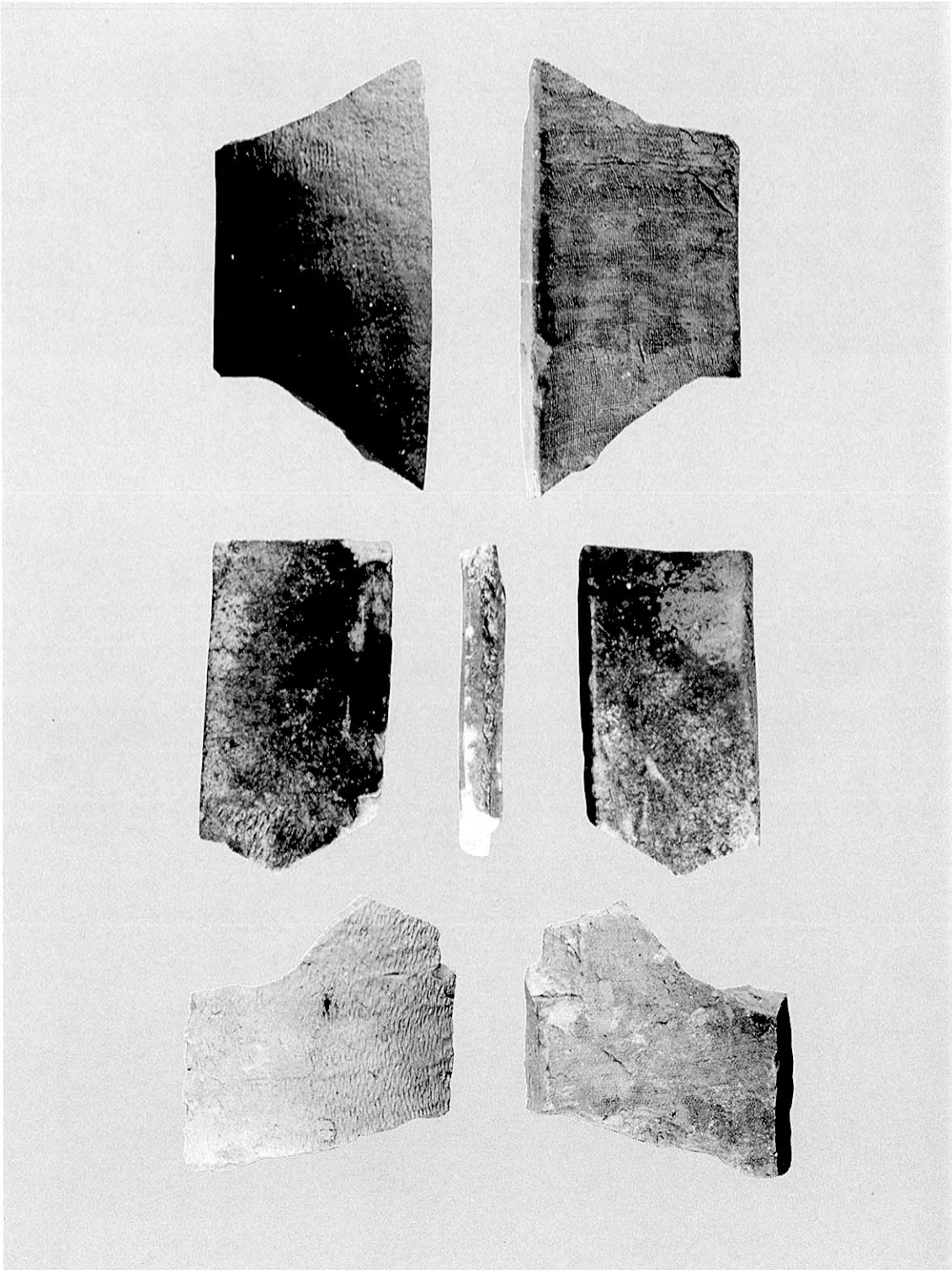
玉縁付・行基葺丸瓦（①Fig. 18－3、②Fig. 18－1、③Fig. 19－3）（縮尺⅓）



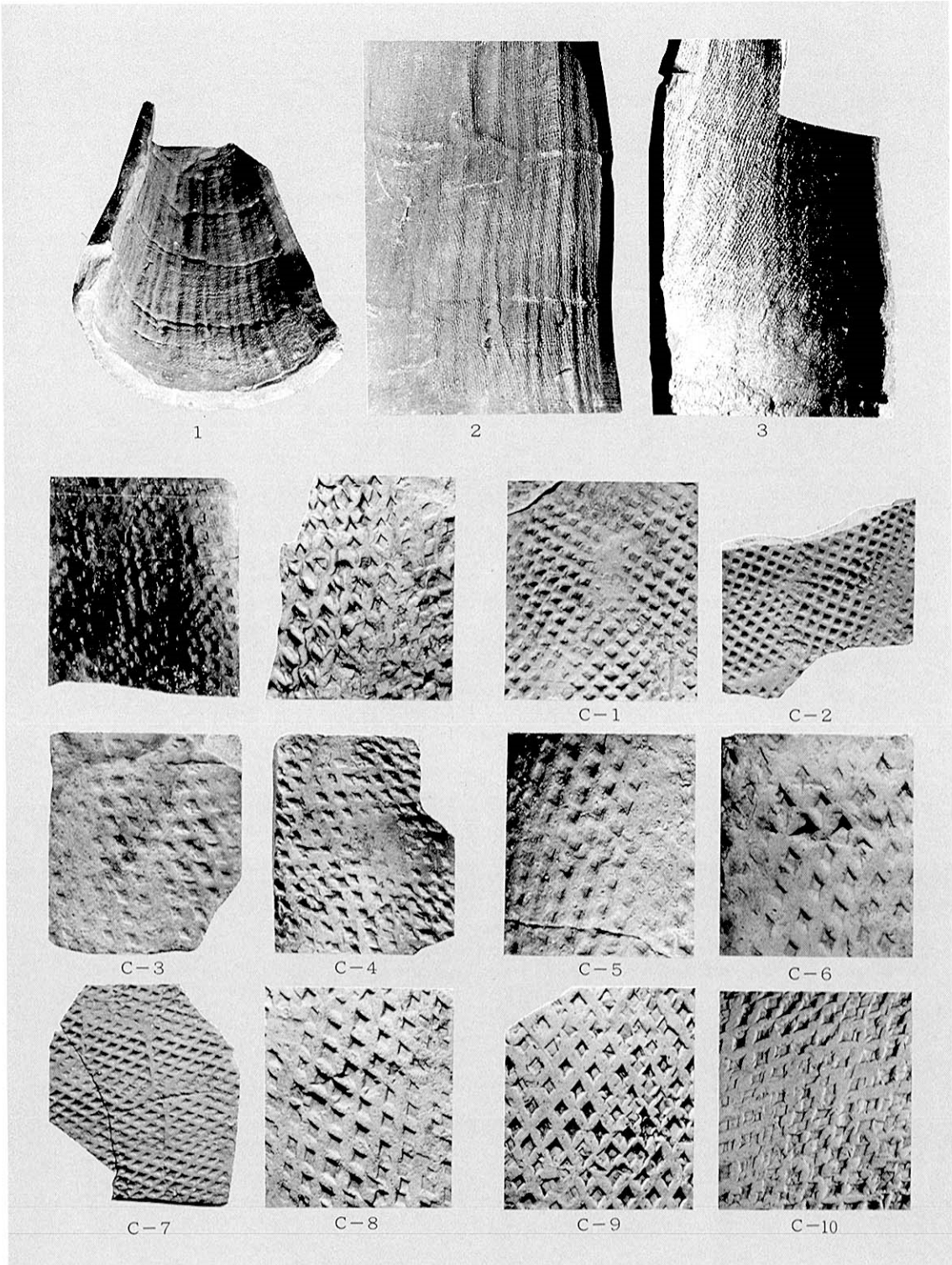
行基葺丸瓦（①Fig. 19－1、②Fig. 20－2、③Fig. 20－1）（縮尺⅓）



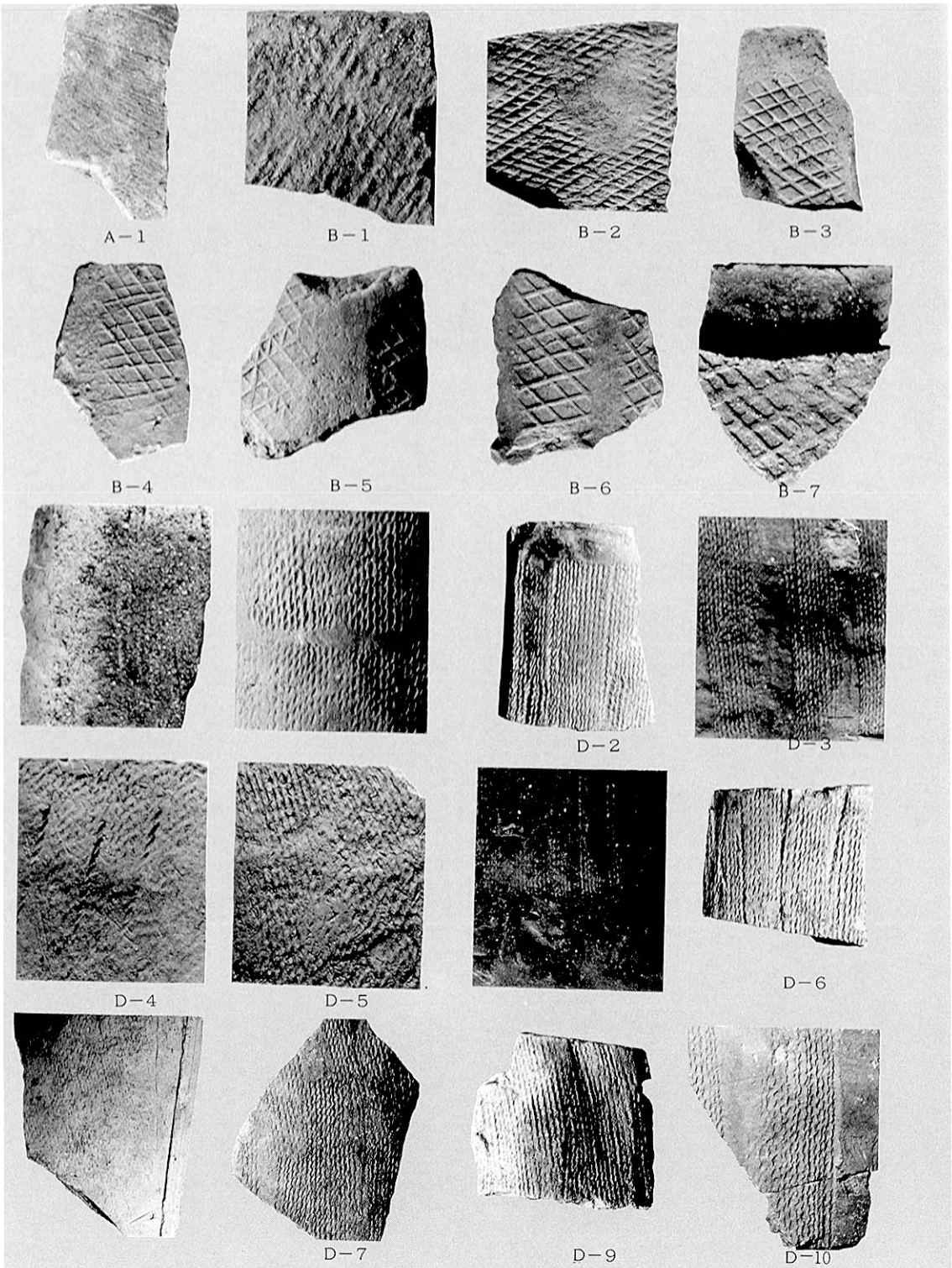
塼 (1～6) Fig.21、隅切瓦 (7) Fig.22－1 (縮尺⅔)



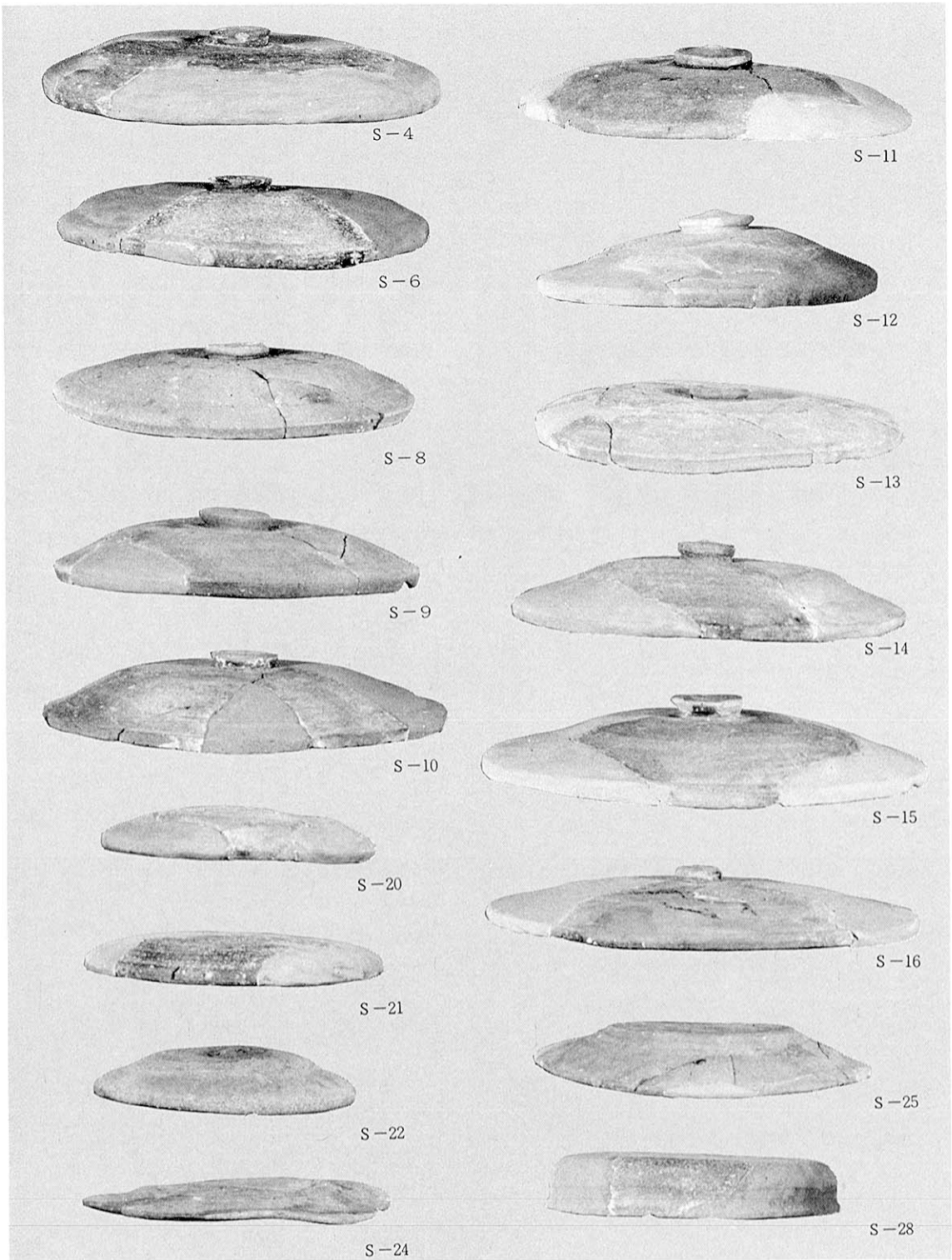
熨斗瓦　　Fig.　22



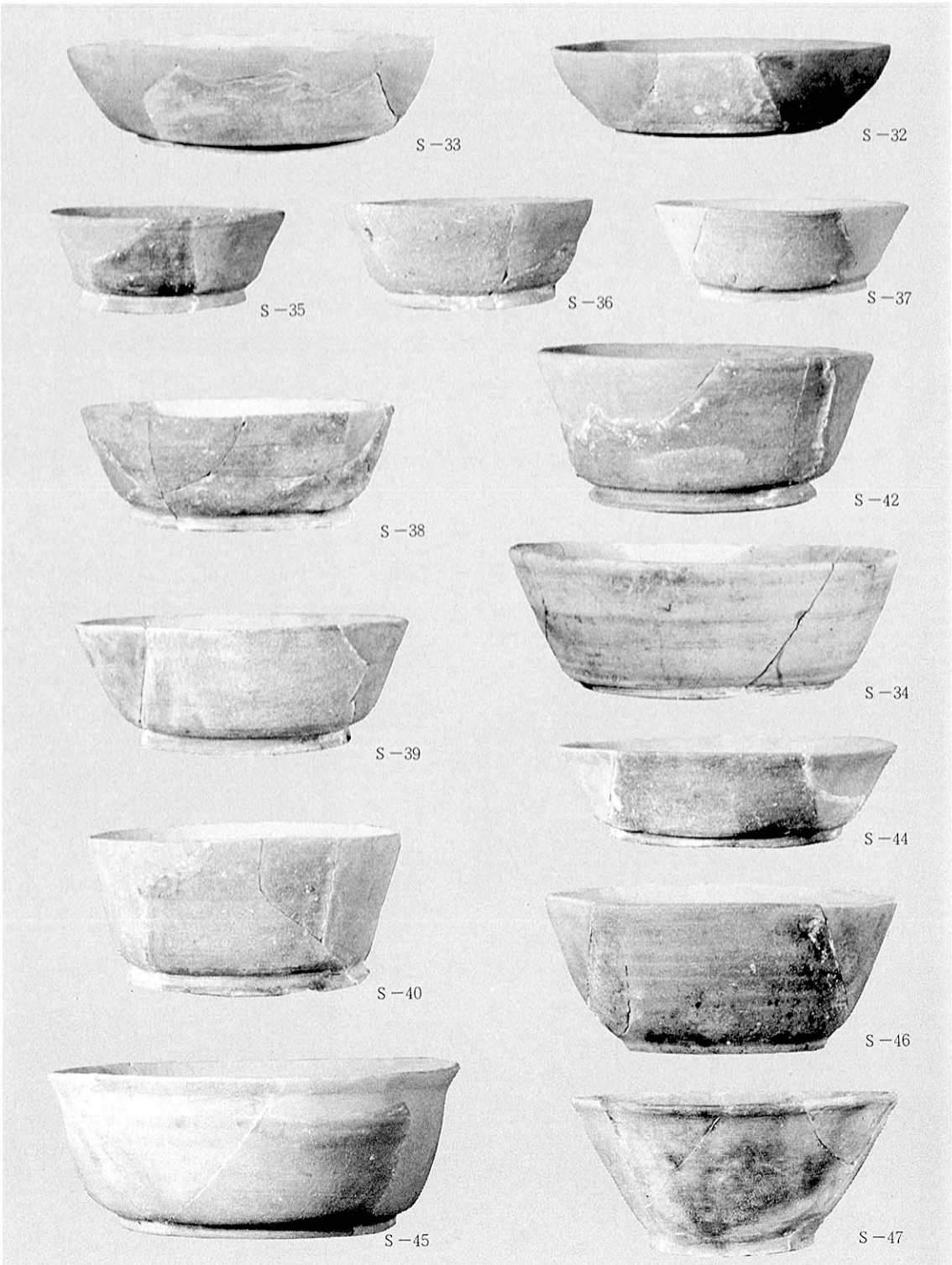
叩文集成(1～3は竹状模骨丸瓦)斜格子叩き目文（縮尺不統一）



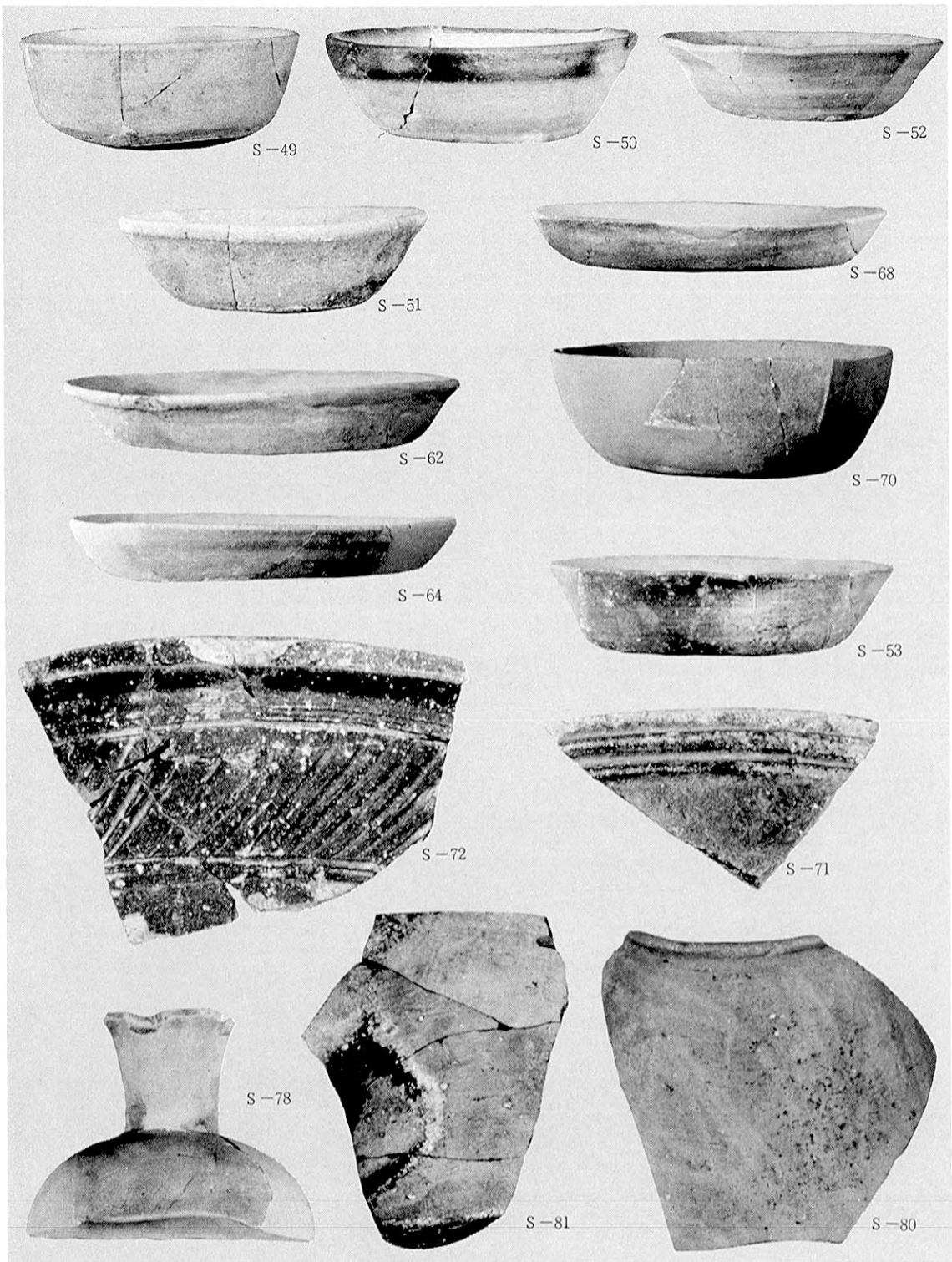
叩文集成(Fig.　23・25)斜格子・縄叩き目文（縮尺不統一）



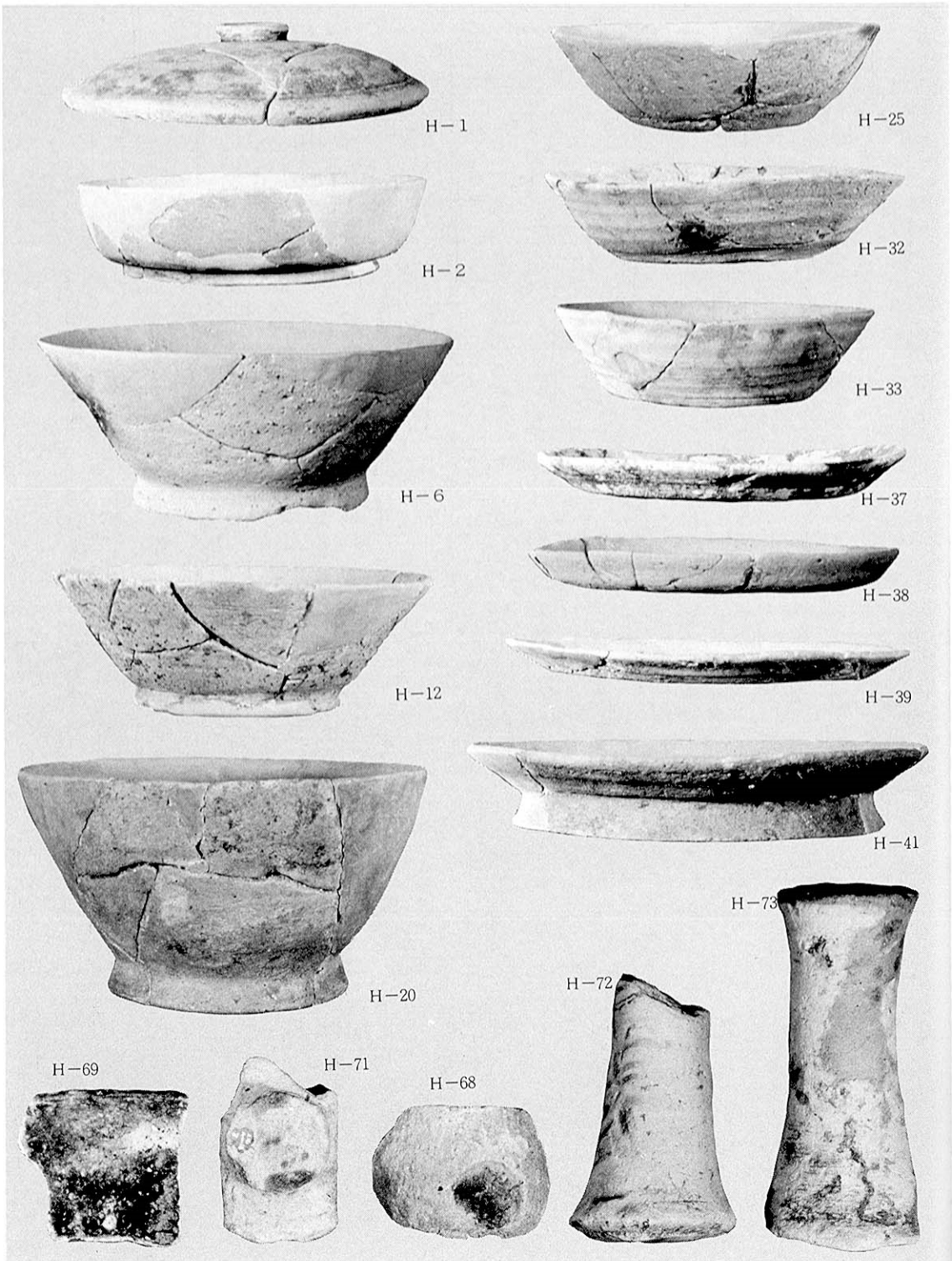
須恵器（1）（S番号はFig. 26と一致す）（縮尺⅔）



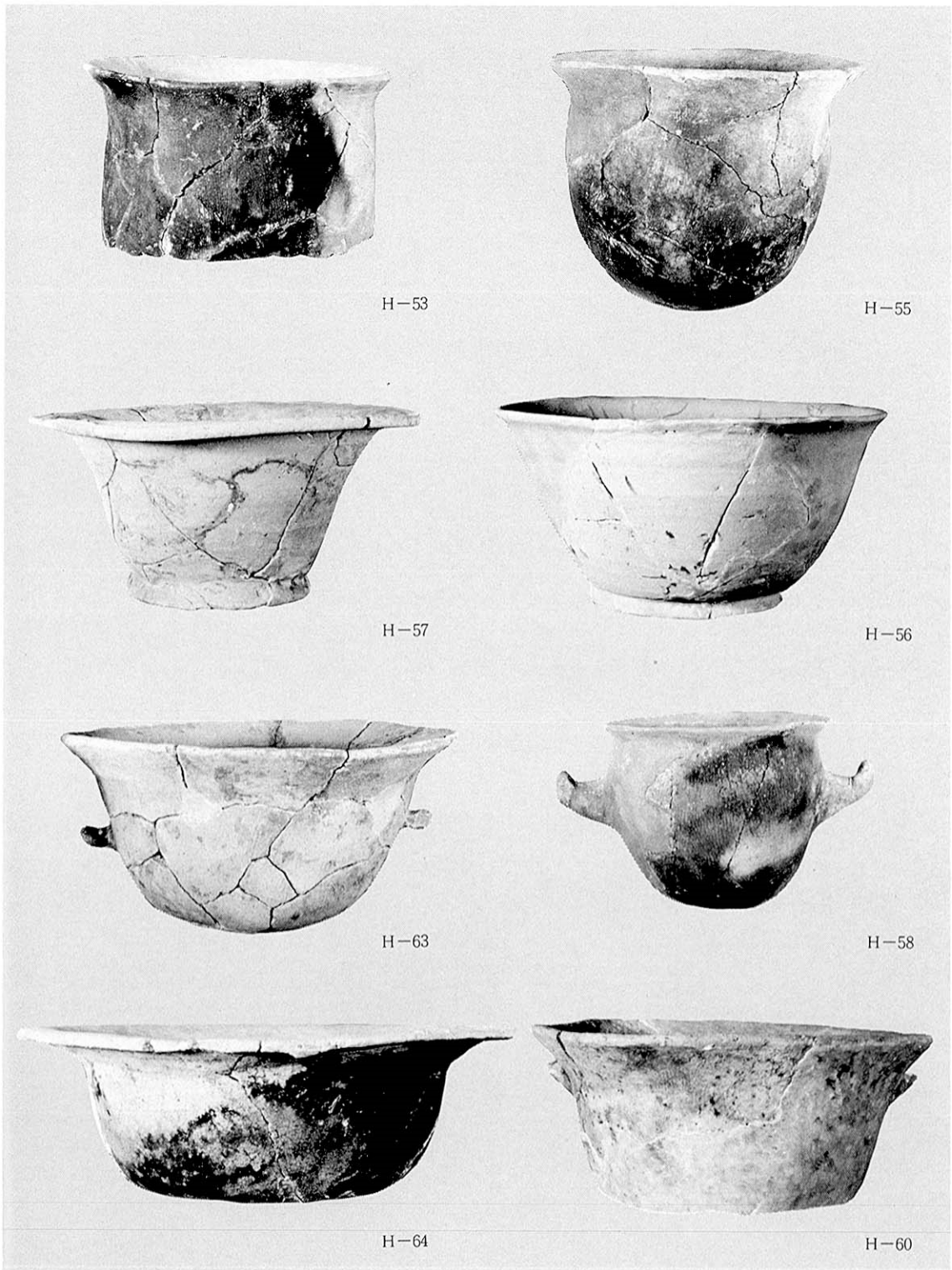
須恵器（2）（S番号はFig. 27と一致す）（縮尺⅔）



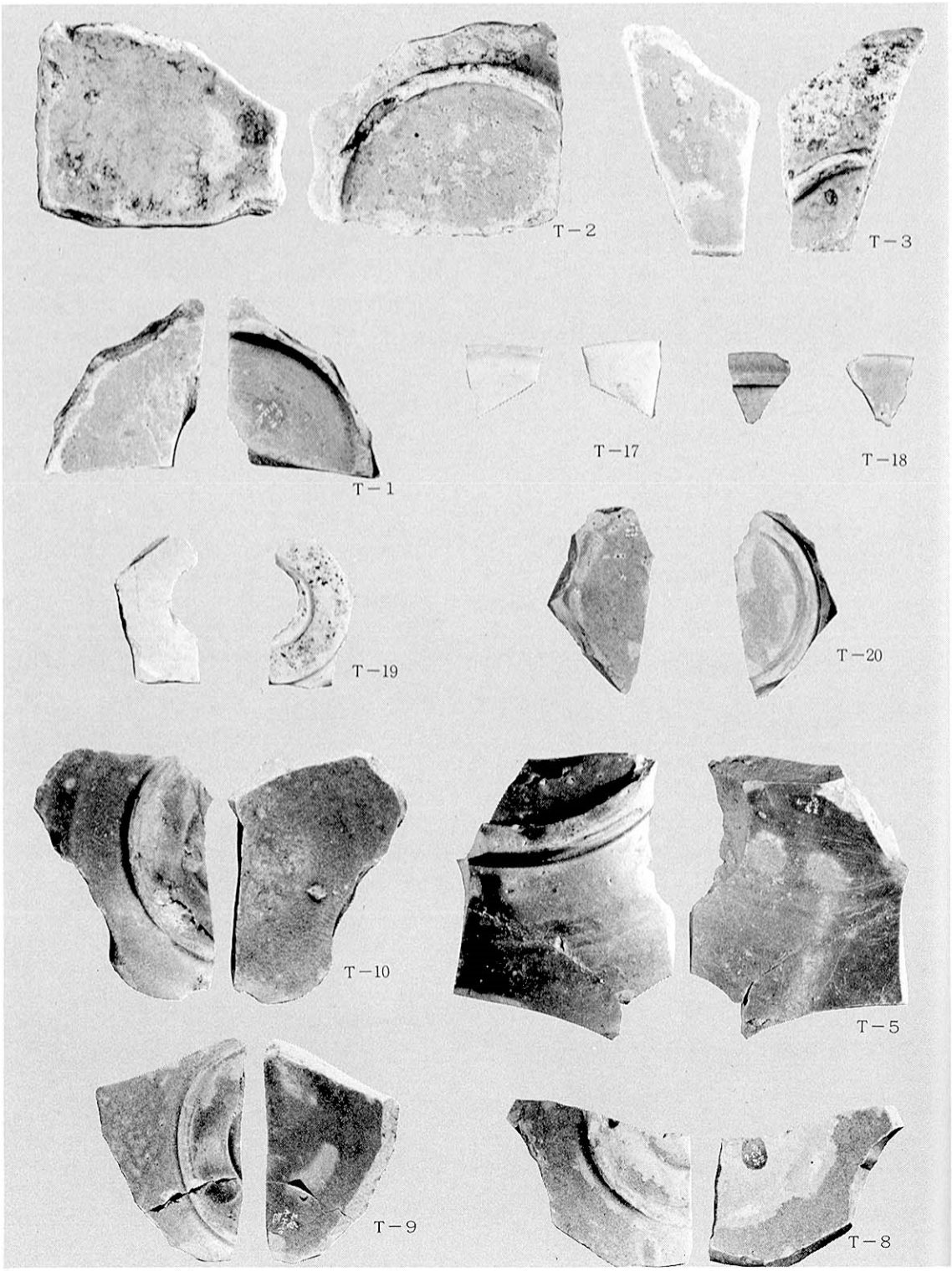
須恵器（3）（S番号はFig. 28・29と一致す）（縮尺⅔）



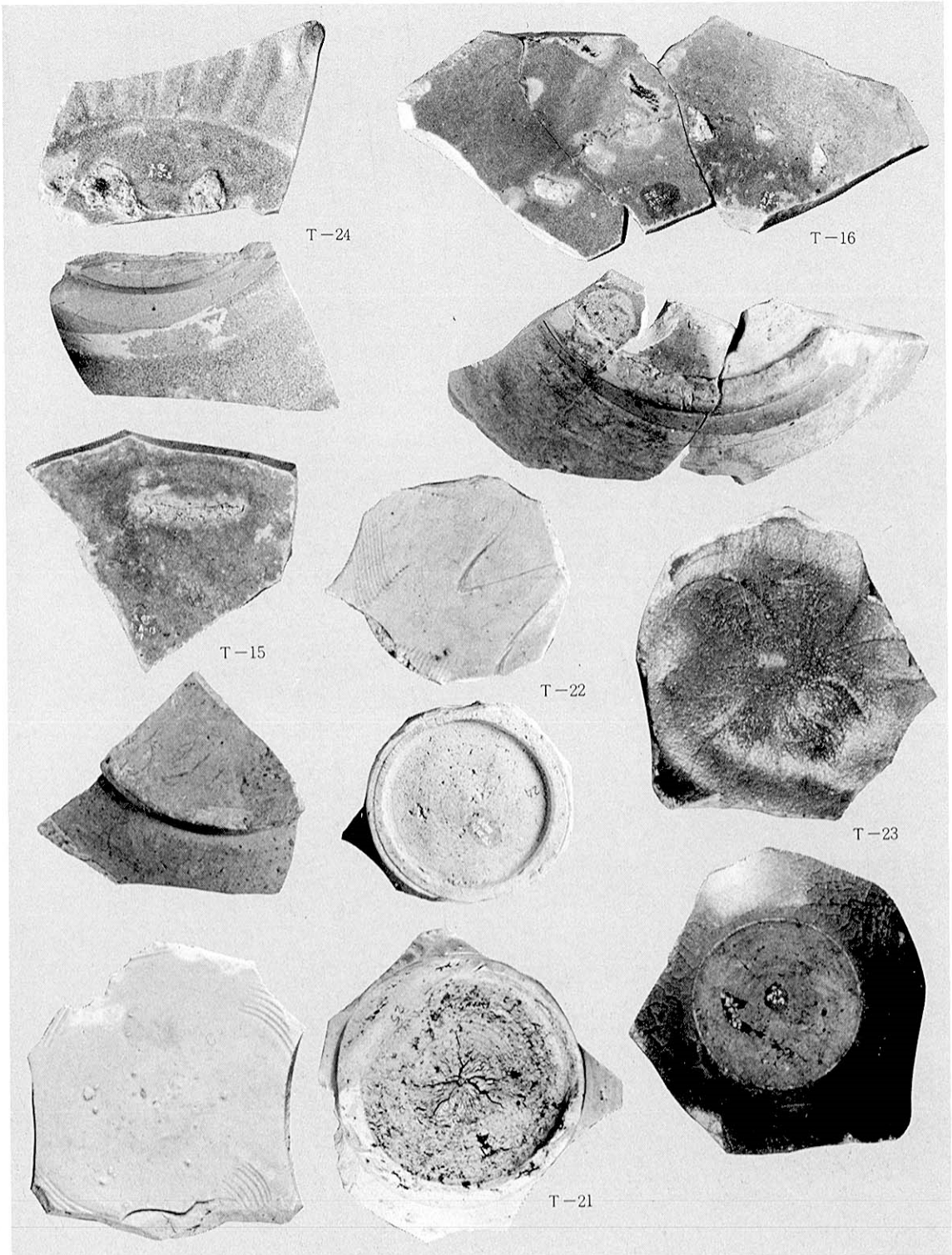
土師器（1）（Hの番号はFig. 30、31、34と一致する）（縮尺⅔）



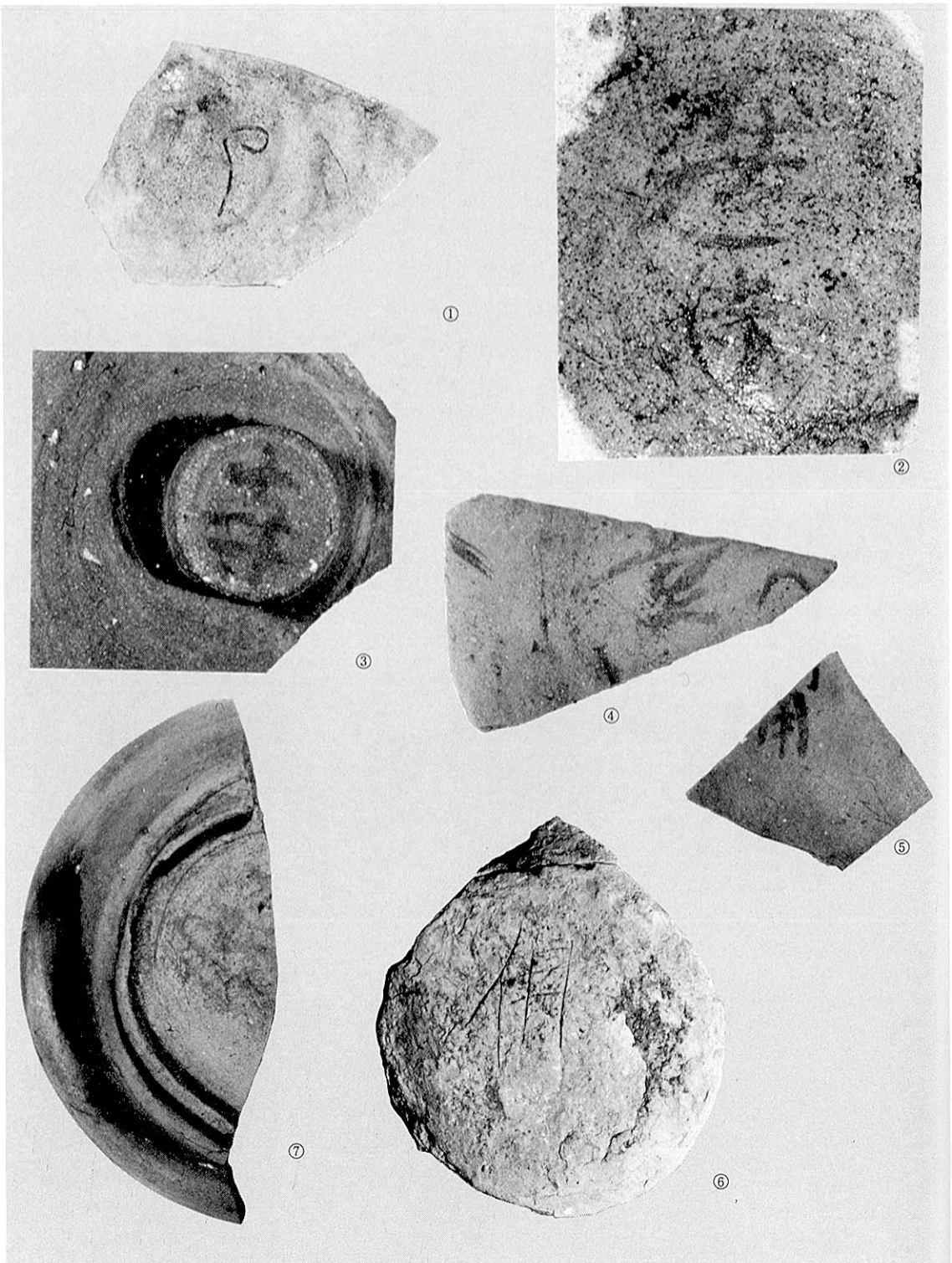
土師器（２）（Hの番号はFig.32・33と一致す）（縮尺約1/4）



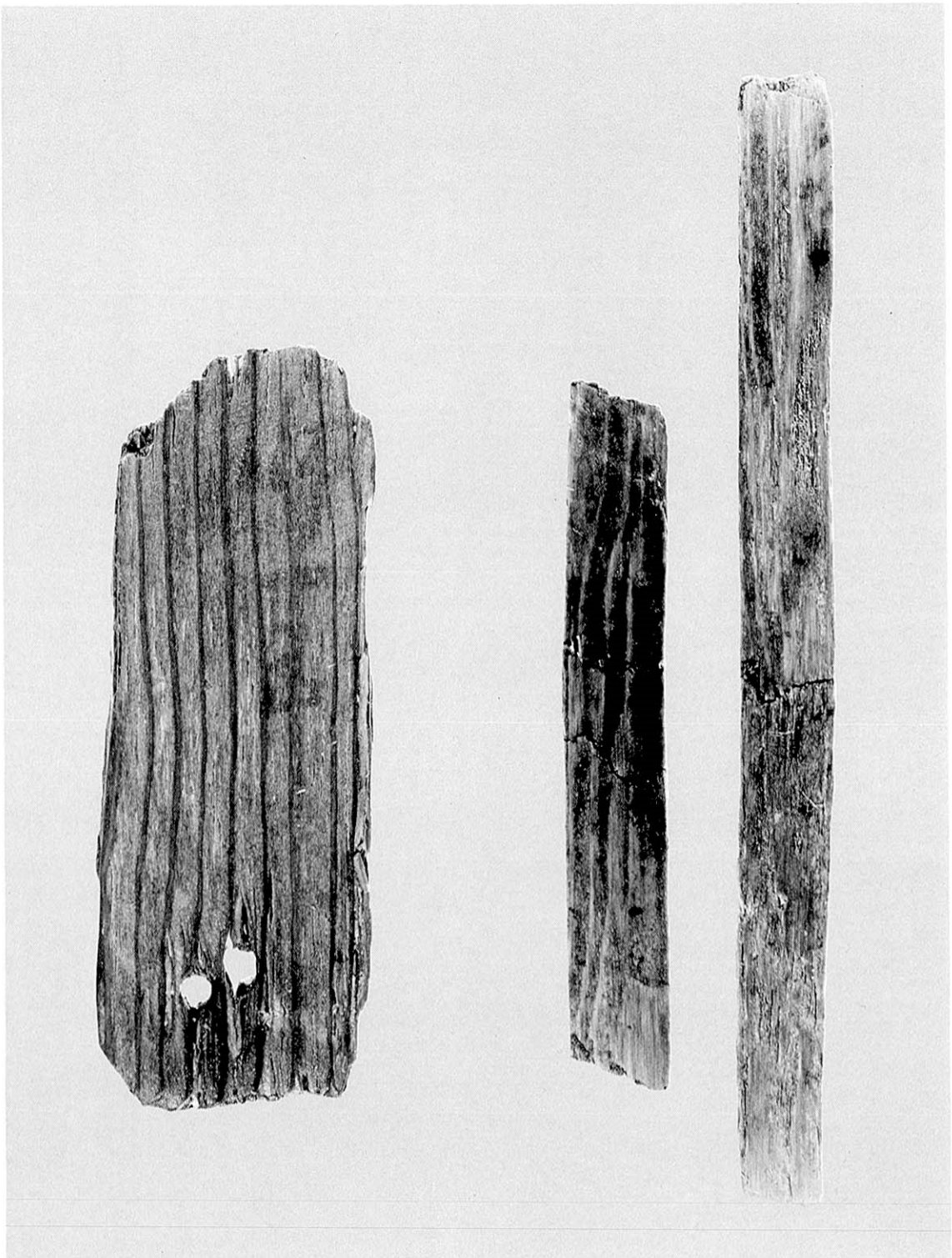
陶・磁器（番号はFig. 35と一致する）（縮尺⅔）



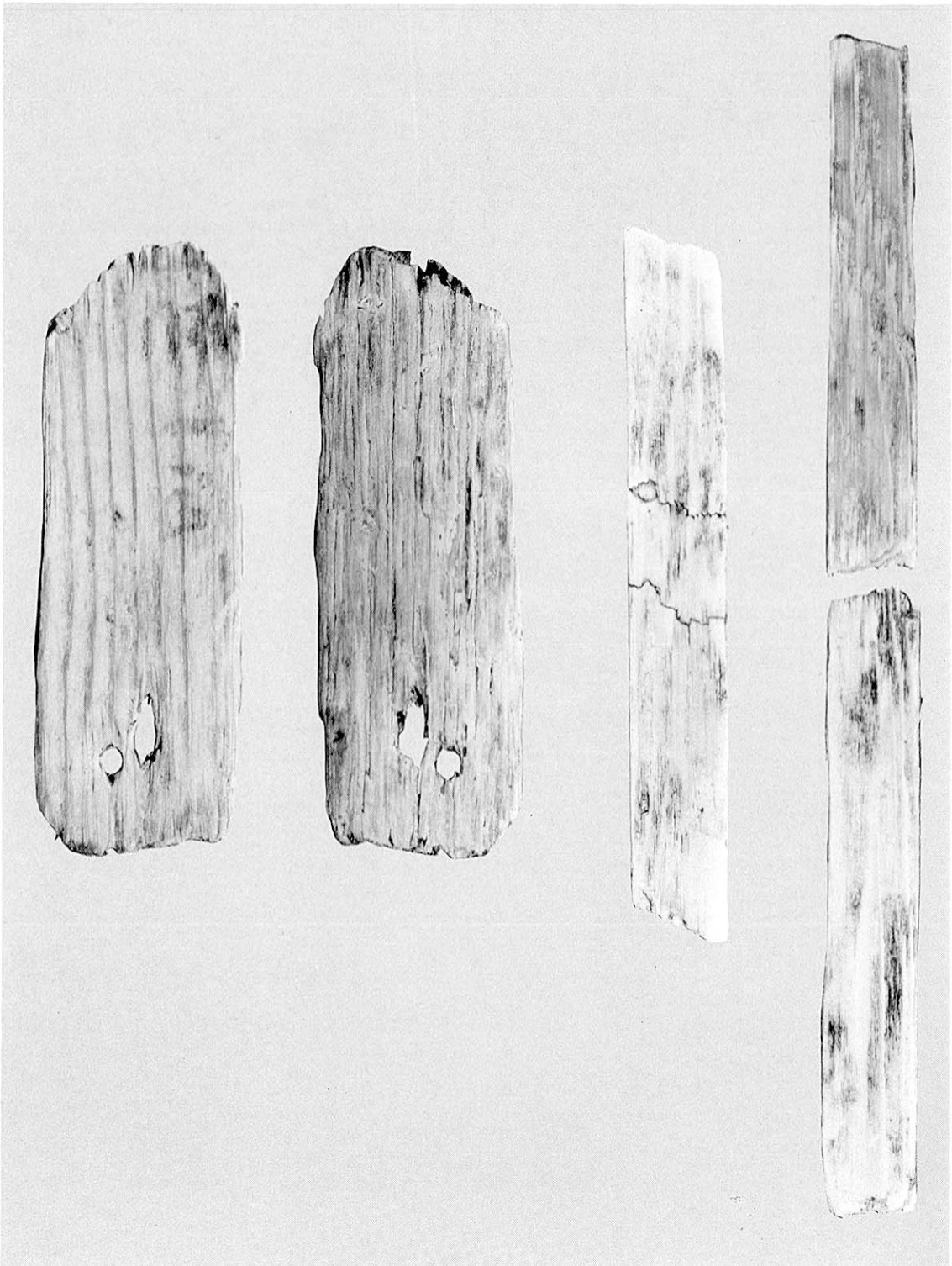
磁器（番号はFig. 35と一致する）（縮尺⅔）



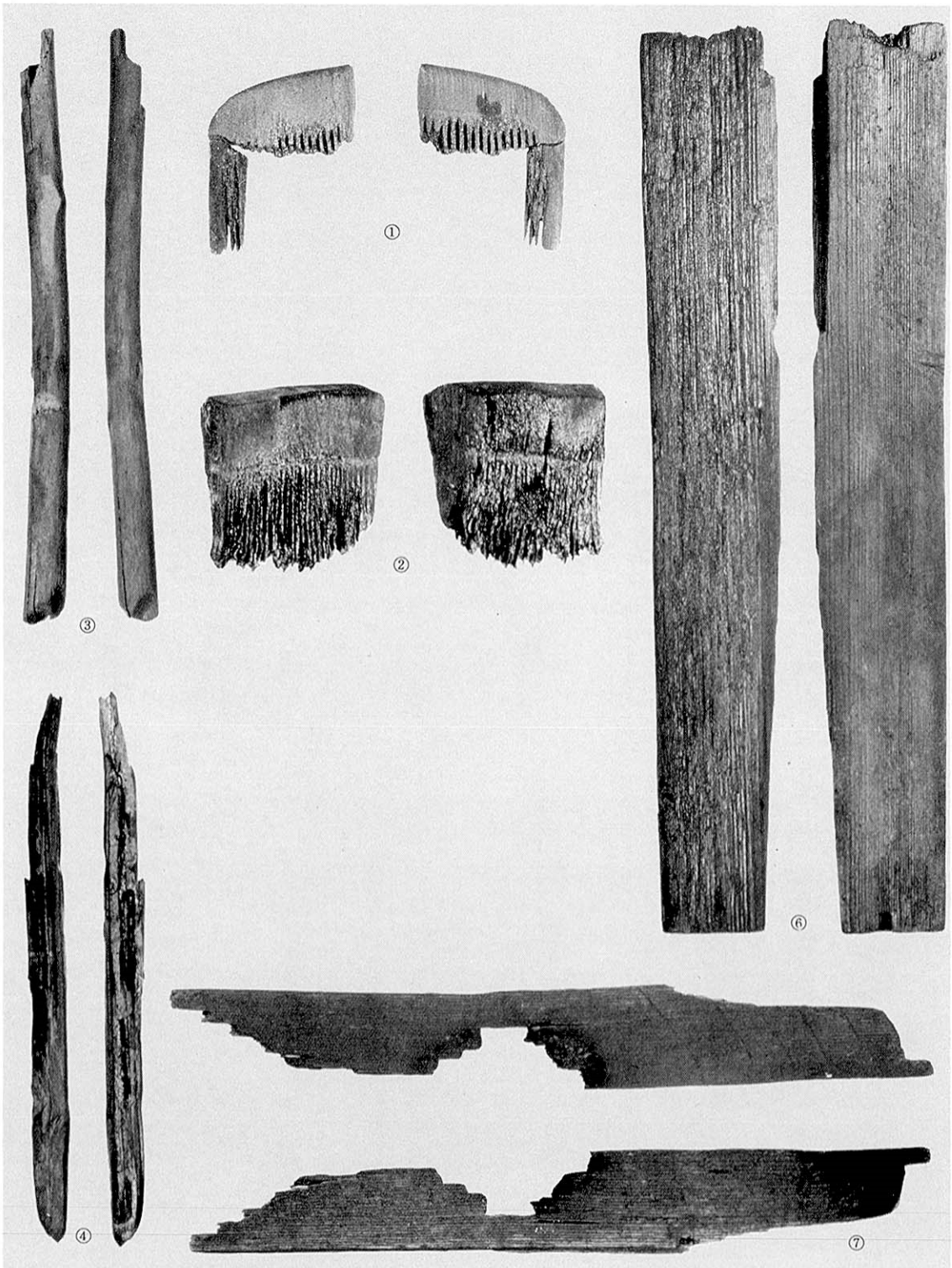
墨書土器とヘラ書文字　①は硯に転用②は①の裏面に造寺の墨書　Fig. 36（縮尺不統一）



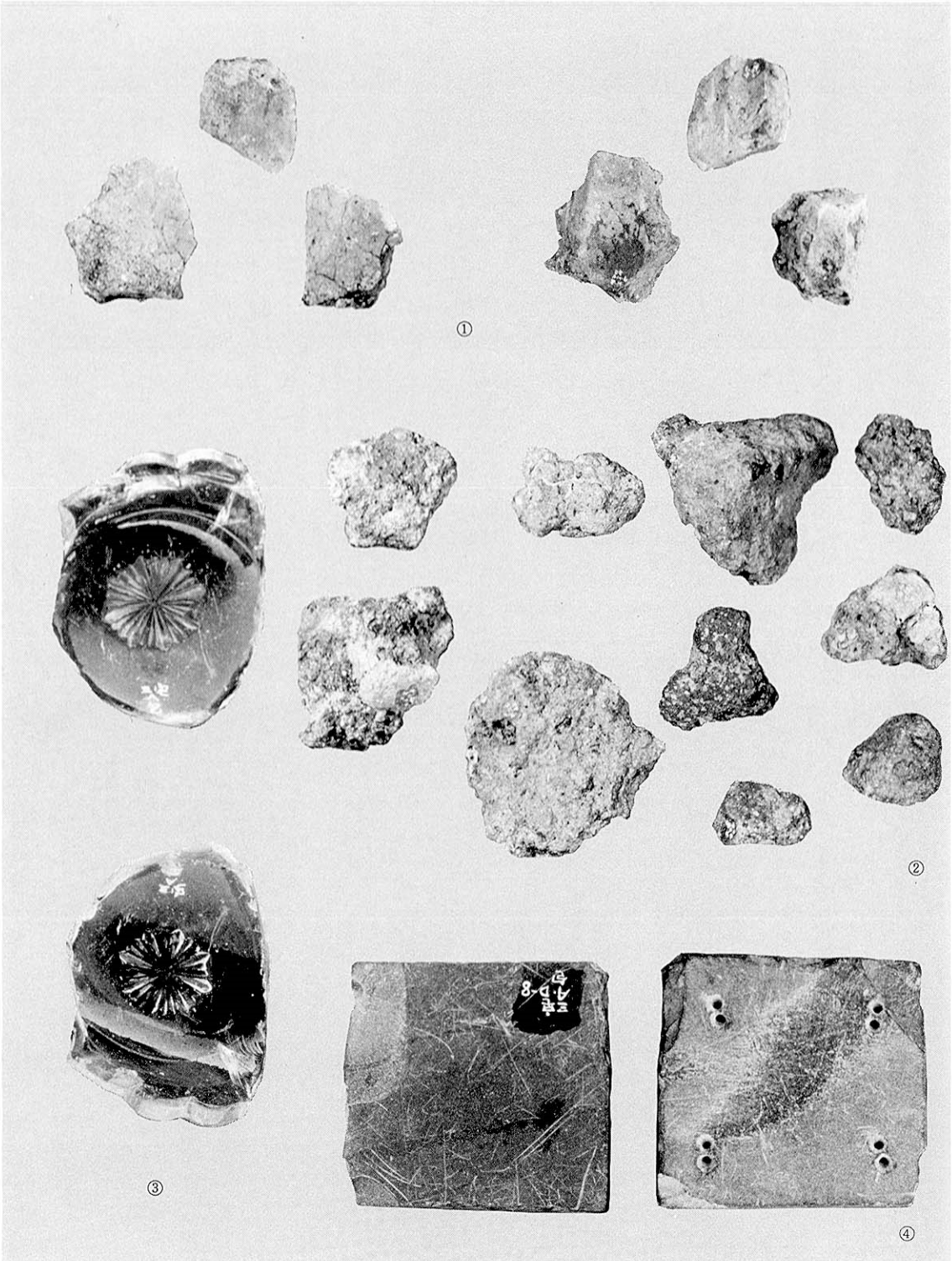
木　簡　Fig. 39（石丸洋氏撮影）（縮尺1/1）



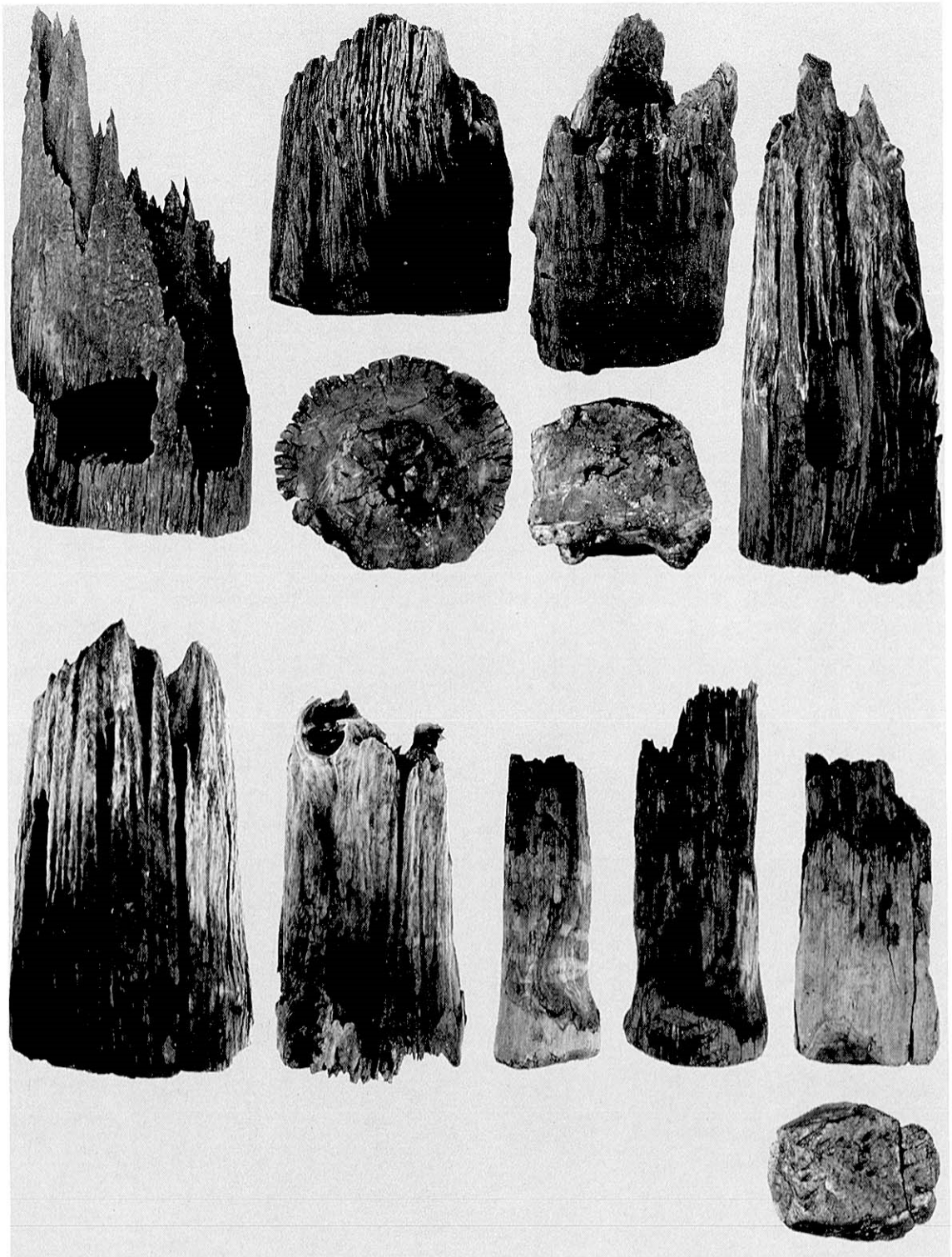
木　簡　赤外線写真（石丸洋氏撮影）（縮尺 約⅓）



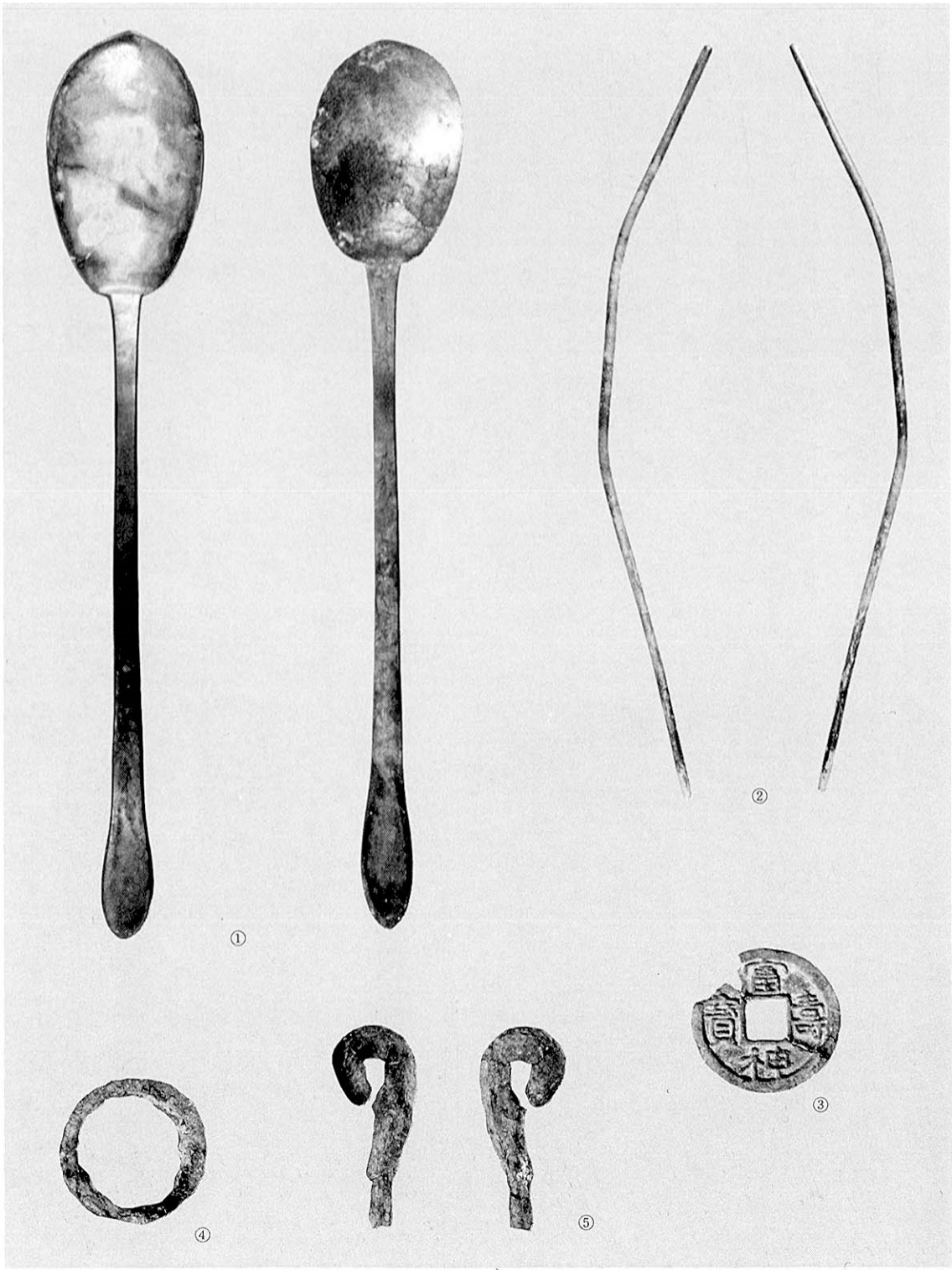
木器（櫛ほか） Fig. 38（縮尺1/4、1/2）



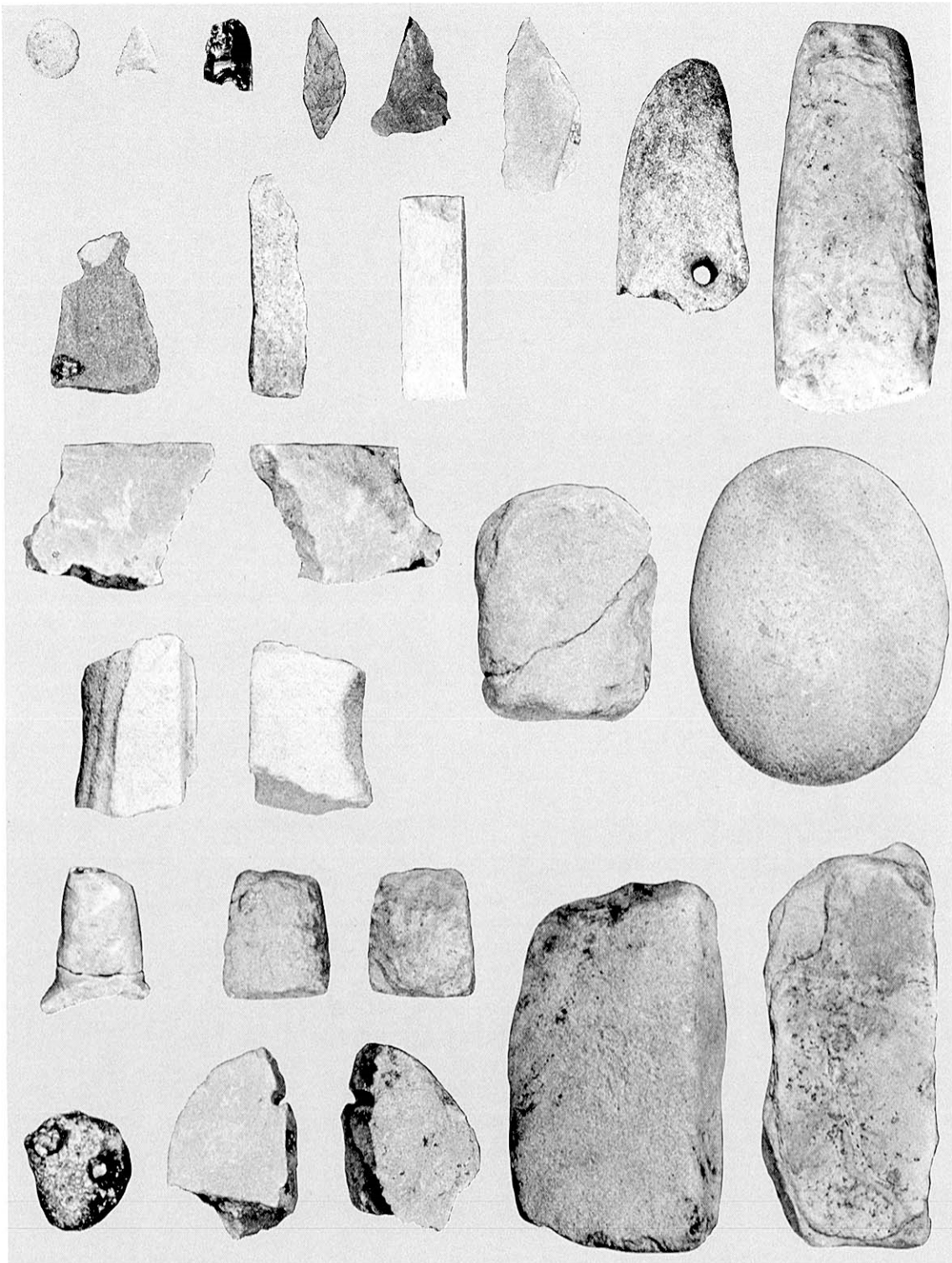
①鞴羽口Fig. 40　②スラッグ　③ガラス製品Fig. 39　④石帯Fig. 46（縮尺3、4は¼、他は⅓）



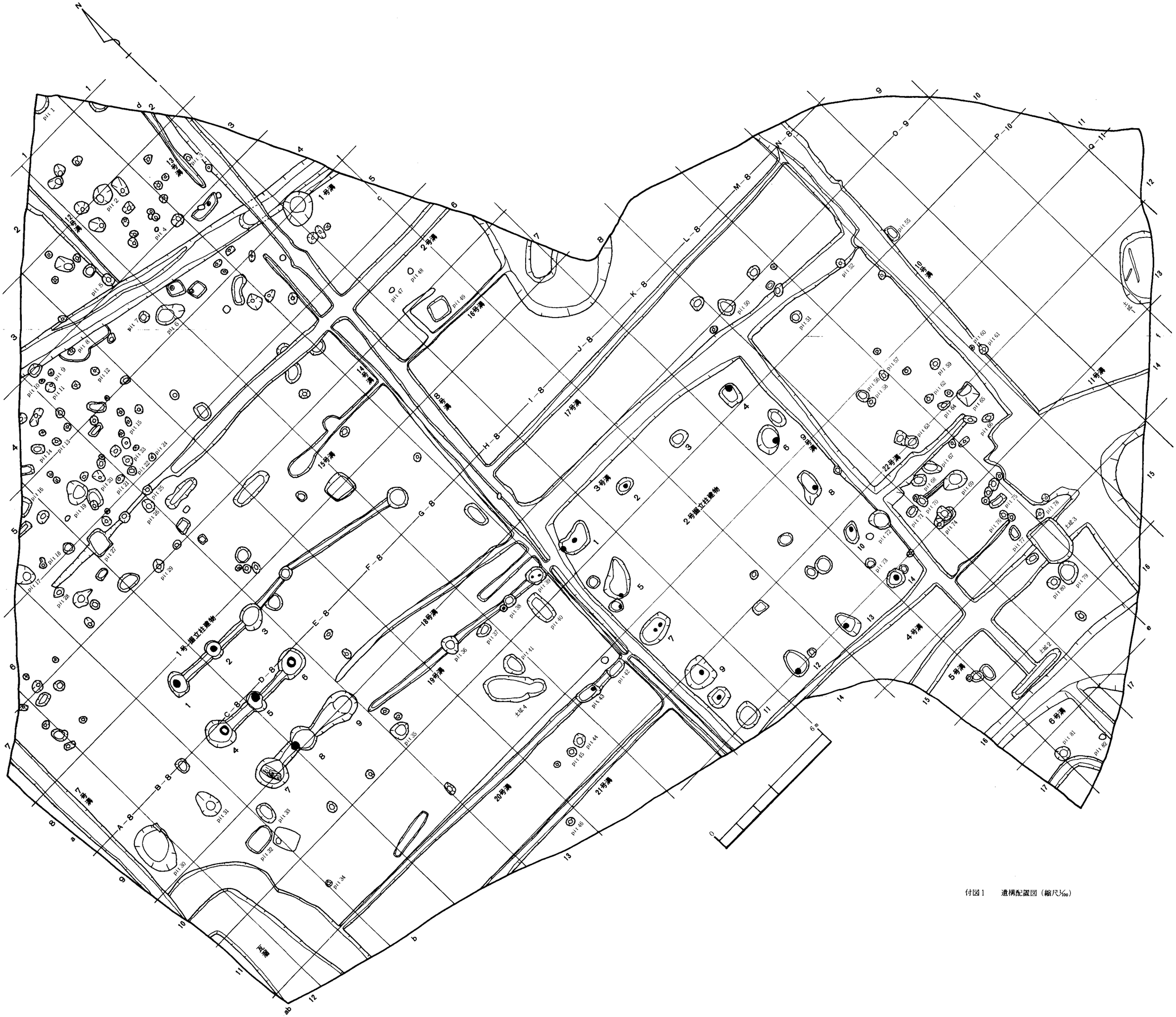
1・2掘立柱建物内柱根　Fig.　41・42（縮尺1/10）



金属器（①匙Fig.43－1、②箸・2、③富寿神宝・3(1/1)、④鉄環・4、⑤壺金・5）（縮尺1/2・1/1）



石器（Fig. 44、45）（縮尺⅔）



付図1　遺構配置図（縮尺1/100）

福岡市南区三宅

三宅廃寺

福岡市埋蔵文化財調査報告書50集

1979年（昭和54年）3月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目7－23

印刷　福博綜合印刷株式会社
福岡市博多区堅粕3丁目16－36